覇王、自由気ままに旅をする。

イチゴ俺

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世で最強は誰か。

海賊王？　白ひげ？　百獣？　ビッグマム？

これは本物の最強の男の自由気ままな旅の物語。

目次

第１話　覇王ルイン・ダイナー　1
第２話　伝説と友　6
第３話　シャボンの島　12
第４話　覇王と冥王　17
第５話　五老星の憂鬱　23
第６話　地獄での宴　29
第７話　覇王の親友　34
第８話　最悪の囚人達　40
第９話　インペルダウンの混乱　47
第１０話　進撃　54
第１１話　超弩級巨大戦艦　60
第１２話　海軍の戦略　67
第１３話　頂上戦争　73
第１４話　激突する怪物達　80
第１５話　海軍の英雄ＶＳ．鬼の跡目　89
第１６話　バギーの企み　96
第１７話　マゼラン襲来　103
第１８話　加速する戦争　110
第１９話　ルフィｖｓ．ゼファー　116
第２０話　オカマの覚悟　122
第２１話　エース奪還　128
第２２話　最悪の兄弟　134
第２３話　カイドウ襲来　139
第２４話　脱出手段　145

第２５話　白ひげの覚悟　152
第２６話　諸刃の剣　159
第２７話　怨敵赤犬　167
第２８話　長年の夢　172
第２９話　三人目の四皇　178
第３０話　解放のドラム　185
第３１話　再会と約束　194
第３２話　大き過ぎる失言　202
第３３話　男二人、交わす想い　209
第３４話　伝説の始まり　214
第３５話　幕引きの一撃　222
第３６話　伝説の再来　231
第３７話　３Ｄ２Ｙ　241
第３８話　五老星の受難　248

第1話”覇王ルイン・ダイナー”

「――おい！　ダイナー、そろそろおれの仲間になれよ！」
「ハハハッ！　なんべん言ったら分かるロジャー！　俺は誰かの下につくことはねェ!!」
「”神避(かむさり)!!”」
「”原典(アヴェスター)!!”」
黒い口髭を蓄えた大男が愛刀エースに武装色と覇王色の覇気を纏わせて斬りかかる。
相対するのは白髪に褐色の肌の大男。鍛え抜かれた肉体を武装色の覇気で黒く染め上げ、覇王色を纏った拳で迫る凶刃を迎え撃つ。
刀と拳はしかし、衝突することはなく、その触れない剣(拳)戟は空を、山を、海を吹き飛ばした。
周囲で二人の戦いを観戦していた者達は二人の覇王色により、吹き飛び、或いは気を失い、一部の強者は冷や汗を流していた。
「――覇王ダイナー。やはり彼は化け物だな」
「レイリーさん！　なんだ、あいつは!?　船長と互角にやり合ってやがる!?」
「シャンクスか。よく気を保っていたな」
「今にもバギーと同じになりそうだ……！」
「ハッハッハ！　気を失わないだけでも大したものだ」
事実、赤髪の少年は息も絶え絶えで、今にも崩れそうになっている。
「それよりレイリーさん！　あいつは一体！」
「そうか、お前とバギーは彼とは初めてか。ふむ、彼を一言で表すのなら」
金髪の男、レイリーは一瞬考えると口を開いた。
「――この世界において最強の男か」

□??□??□??□??□??□??□??
「ダイナー！　お前また覇気が強くなったんじゃねェか!?」
「誰に言ってやがる。俺は覇王だぞ！　覇気なんて息をするだけで増

えやがる」
「化け物だ」
「お前に言われたくねェよ！」
　世界最高クラスの決戦の後、文字通り消滅した島から出て、近くの島までやって来た一行は宴をしていた。
　口髭を蓄えた大男、ゴール・D・ロジャー率いるロジャー海賊団と、白髪の大男、ルイン・ダイナーは先程までの激闘が嘘のように馬鹿騒ぎをしていた。
「――ところで、あいつらは誰だ？」
　ダイナーの視線の先には赤髪の少年と赤鼻の少年がいた。
「あぁ、お前はまだ会ったことなかったな。おい！　シャンクス！　バギー！」
　喧嘩をしていた二人の少年は己の船長に呼ばれて恐る恐るやって来る。
「何ですか船長」
「船長！　シャンクスのやつがド派手にバカだ!!」
「なんだとッバギー!!!」
「テリヤキハンバーガーより、チーズハンバーガーの方がウメェだろうが!!!」
「テリヤキに決まってるだろ!!!」
　そう言って再度喧嘩し出した二人にロジャーは大爆笑。ダイナーは目を丸くして続いて笑い出した。
「なんだこいつら。バカだなぁ!!」
「なんだとッ!!!」
「まぁまぁ、落ち着け。取り敢えず自己紹介といこうじゃねェか。
　オレはルイン・ダイナー。一人で海賊をやってるただの男だ。気軽にダイナーと呼んでくれ」
　そう言って笑うダイナーにバギーは驚愕の表情を浮かべる。
「あぁ！　さっきはロジャー船長がすぐ斬りかかったから分からなかったが、こいつ覇王ダイナーだ！」
「？　バギー、お前知ってんのか？」

「知ってるも何も、知らねぇなんてやっぱりド派手にバカだなぁ!!!」
「ッ！　とりあえず、いいから教えろよ」
　イラッとしたのを抑え、シャンクスはバギーに聞く。
「いいか！　この人は覇王ダイナー。懸賞金８０億ベリーのヤバいヤツだ!!!」
「は、８０億ベリー～～～～～～!!?」
　目が飛び出る勢いで驚いたシャンクスは、いやいやと頭を振る。
「ありえないだろ８０億ベリーなんて!!　何すればそんな懸賞金になるんだよ！」
「いや～～気に入らないヤツぶっ殺してたらこんなコトになってた！」
　困ったなぁ～と言ったような頭を掻くダイナーにシャンクスは開いた口が塞がらなかった。

□??□??□??□??□??□??□??
「ダイナー!!!　今日という今日は逃さんぞ!!!」
「懲りねェなァ、ガープ」
「貴様もロジャーのヤツもおれが必ず捕まえる！　それに今日はおれ一人だけじゃないからな!!!」
　背中に正義と書かれた白いコートを着た黒髪の男、ガープがそう言うと周囲に次々と同じ白コートを着た者達が現れる。
　彼らは海軍である。それも海軍において精鋭が集まる海軍本部の、更にその中でも精鋭中の精鋭。
　海軍の特記戦力である三大将。覇気、六式を使いこなす中将。強力な悪魔の実の能力者。そして、海軍の英雄と呼ばれるモンキー・Ｄ・ガープ。
　バスターコールと呼ばれる超破壊攻撃作戦を軽く凌駕する戦力の集まりにダイナーは思わず感心の声をあげる。
「壮観だなぁ！オレを殺すためだけにここまでの戦力を集めてくれるたァ、感激だァ」
　そこに突然空から幾千の人影が降って来る。

「ウォロロロロ!!! おまえだけは絶対にぶっ殺す!!!」
「ハ～ハハママ!!! おまえを殺したいヤツは海軍だけじゃねェ!!!」
「ジハハハハ!!! 海軍と共闘とは気に食わないが、仕方ねぇ!!!」
「なっ！ カイドウにビッグマム、シキ!? それ以外にも大物海賊ッ!!!」
彼らはこの海において大きく名を挙げる凶悪な海賊達。
数年前まで最凶の海賊団に属していた海賊達だ。
「おいおい！ なんだよ！ お前らまで来たのかよ！」
嬉しそうに笑うダイナーと動揺する海軍。
「なんだ貴様ら!! 何をしに来た!!!」
海軍元帥コングが殺気を飛ばす。
「ウォロロロロ、今日はお前らに用はねェ。このクソ野郎をぶっ殺すのに共闘といこうやッ」
「海賊の貴様らと共闘だとッ!?!! ふざけるなッ!!!」
「ジハハハハ!!! じゃぁ、お前らだけであいつに勝てるのか!?!!」
「ッ!! だが、海賊の貴様らと……!!!」
「まぁまぁ、コング元帥。ロックスの奴とやるのに、おれもロジャーと共闘したんだ。ダイナーとやるのには数は多い方がいい」
暫く唸っていた元帥コングだったが、笑顔を浮かべるダイナーを見てため息を吐いた。
「ハァ……。奴を殺した後は貴様らだぞ」
「ハ～ハハママママ!!! やれるもんならやってみろ!!!」
「話はついたか？ こんな最高の戦場を用意してくれた貴様らに特大の感謝を!!!」
獰猛な笑顔を浮かべたダイナーは鍛え抜かれた肉体の細胞一つ一つに至るまで、覇気を纏う。
漆黒に染まった肉体からは肉眼で目視出来るほどの覇気を纏い、覇王色の覇気が迸っている。
彼が食らった悪魔の実は”オラオラの実”。
オーラ――覇気をエネルギー、物質化させる”覇気人間”である。
「オラオラの実。奴が食わねばここまで凶悪じゃなかったものを……

!!」
「世界最強の覇気使いですか……。三色の覇気が規格外とは正しく化け物だな」
見聞色は未来のみならず過去すらも読み、武装色は触れられるだけで致死の矛と鎧。覇王色に至っては物理法則をも塗り替える程。
これが更に悪魔の実の能力によって強化される。
しかも肉体までもが規格外の強度だ。
理不尽極まりない。同じ人間なのか怪しい程の怪物だ。
漆黒の肉体からは武装色のエネルギーと覇王色のエネルギーが際限なく溢れ出し、質量を持ち、実体を持ったそれらは幾万の姿を象った。
五十の頭と百の腕を持つ巨人。
己の尾を喰らっている長大な龍。
三つの首を持つ獰猛な犬。
黒い炎を纏う禍々しくも美しい巨鳥。
絶えず増殖、分裂する名状し難い化け物。
獰猛に唸るいずれもが神話や伝説に登場する怪物の姿。
それが幾千幾万と海軍の前へと出現した。
「〝怪々覇装〟」
覇気の万の軍団を作り出す姿は正に覇王。
「分かってはいたが、厳しい戦いになるな……」
「歴史に名を残す頂上決戦！　胸が躍るな!!」

これは覇王と呼ばれる男の好き勝手に生きる物語。

第2話”伝説と友”

「――親父！　西の方角から覇王の船が来るよい!!!」
「あァ、分かってる」
数瞬後、鯨に似た船――モビー・ディック号の上空にそれが現れた。
雲一つない青空に突如現れた漆黒の物体は、流線型をし、どのような原理か宙空にピタリと静止している。
先程声を発した男の言う通り、これは船である。
おおよそ船には見えないそれは、覇王の能力によって作り出された、世にも珍しい覇気で作られた船。
尋常ならざる覇気で作られたそれは、ただ空にあるだけでモビー・ディック号に乗っていた船員達の意識を奪っていった。
「ぐッ！　意識が飛びそうだ……！」
パイナップルのような特徴的な髪型をした男、マルコが呻いた瞬間、突如辺りを支配していた重圧が消え、また、上空に静止していた船も消え去った。
上空に目をやると、そこから降って来る影が見える。
「グララララ、来やがったな」
ドカンッと凄まじい音がして、甲板に”覇王”が降り立った。
かつての海賊王や伝説の海賊達と鎬を削ったあの頃と全く変わらぬ姿をした友を目にした白いひげの大男はニヤリと笑う。
「近くを通ったらお前の船が見えたから寄ってみた。随分老けたなニューゲート？」
「そういうお前は全く変わらねェなァ、ダイナー」
「細胞の全てを覇気で強化してるからな。老化どころか、日々成長中だ」
「化け物が」
「流石の白ひげも老いには勝てんか」
悲しいなぁとダイナーは頭を振り、未だ成長中という話を聞いていたマルコは冗談じゃないと、顔を青褪める。
”覇王”ダイナーは伝説の海賊だ。この世界にて知らない者はい

ないんじゃないかという程の傑物。
数十年前から最強と呼ばれている男が衰えるどころか、未だに成長しているとはどんな悪夢か。
かつてのダイナー対海軍海賊連合軍の頂上決戦は未だ語り継がれている。
マルコ自身、ダイナーの強さを見てきたこともあり、老いすらもないならば、どうやったらこの男は死ぬのかと頭を傾げた。
「久しいなマルコ。どうやったら俺が死ぬか――ってか？　そりゃァ、俺よりも強い奴がいたならば、死ぬだろうよ」
「バカ言うなよい。海軍の総力と四皇の連合でも殺せなかったんだ。アンタより強い奴なんて現れる訳がないよい！」
「なら、俺は永遠に生きることになるなァ」
ハハハハと笑うダイナーに顔を引き攣らせる一同。
彼らが親父と慕う白ひげーーエドワード・ニューゲートはこの海において最強の一角とされる四皇の一人だ。
悪魔の実”グラグラの実”の”地震人間”。
その力は、世界を滅ぼすとまで言われ、現在において、最も海賊王に近い男と呼ばれている。
そんな伝説の男ですら、やはり老いには勝てず、体も最盛期とは言い難い。
「――やはりティーチの奴、仲間殺しで船を降りたな？」
ダイナーの言葉に目を吊り上げ反応する白ひげ。
「未来を見通して言ってたんだ。お前が嫌いな仲間殺しだったから教えてやったのに――」
「うるせェ、アホンダラァ!!!」
瞬間、ニューゲートから覇王色の覇気が溢れ出る。
王の資質を持つ者だけが使うことの出来る特殊なこの覇気は、威圧する力を持つ。
ニューゲートから放たれる覇王色の覇気は、甲板を軋ませ、光を詰まらせ、空を歪ませた。
ドサリ、ドサリと船員が倒れていく中、目を細めたダイナーは手を

挙げる。
「分かった、分かった。悪かったって。おい、マルコ！　お前の親父と二人で話してぇから皆んな連れて中入っててくれねェか？」
　面倒臭いなぁ、といったように挙げた手をヒラヒラと動かすダイナーは、マルコにニューゲートと二人にして貰うよう伝える。
　ニューゲートに目くばせしたマルコ達は、了承をもらい気絶した船員達を引き連れて船内へと入って行った。

「んで？　誰がティーチを追ってんだ？」
「……エースだ」
「……また余計なこと言うが、恐らく負けるぞ」
「おめェも赤髪と同じようなこと言いやがんのか」
「ティーチの奴、うまく隠してるようだったが、あいつ中々強ェぞ？　エースも悪くはねェが、まだまだ未熟だな」
「んな事分かってらァ……。エースを行かせたのはおれだ。エースならティーチを必ずとっ捕まえてくれる」
　白ひげ海賊団に乗っていた男――マーシャル・D・ティーチは仲間を殺し、逃走した。
　古株の男だった彼のいきなりの凶行に海賊団は一時荒れ、船長である白ひげは怒り狂った。
　”仲間殺し”という己が最も嫌いな罪をもって船を降りたティーチに必ず罰を与える、と。
「だが、あれだな？　ロジャーの息子がティーチとやり合うってのも面白い話だな！」
「あん？　どういう意味だ？」
「どういう意味も何も、ティーチは――――」
　ダイナーの言葉にニューゲートは目を見開き、驚愕する。
「――なるほどなァ。因縁はある訳か」
「まぁ、いずれにせよ、俺は手を出さねェよ？　ティーチの奴の事も気に入ってるしな？」
「あァ、それで問題ねェ。逆に手ェ出すっつうならお前から先にヤル

所だったぜ」
「ハハハハッ！　管をたくさん付けてる白ひげなんか、なんも怖くねェなァ!!!」
その一言が合図にお互いが覇気を纏い、拳(薙刀)を振り抜いた。
新世界のとある島、余波にて爆散ッ!!!

□??□??□??□??□??□??

東の海の片隅に浮かぶレストラン――海上レストラン”バラティエ”。
元海賊であるオーナーが、かつて海で食糧難になった時に、「海上にもレストランがあれば」という願いから生まれた、世にも珍しい海上レストランである。
絶品と評判のこの店には、連日、世界中の美食家や腹をすかせた海賊達が通っているという。
「――ゼフ！　やっぱりおまえのメシが一番ウメェ!!!」
テーブルに所狭しと置かれた大量の料理を食べ続ける褐色肌の大男――覇王ダイナーは歓喜の声を上げる。
自身の体の大きさ程の肉に食らいつくダイナーを見た口髭を三つ編みにした男――この店のオーナーゼフはニヤリと笑う。
「ありがとよ。そんだけ食ってもらえれば俺としても本望だ」
「この日のために世界中の食材を集めてきたんだ！　うまいメシを頼むぜ!!」
「中々見ねェ食材に、ウチのバカどもが興奮してたぜ？」
「そりゃァいい！　ありとあらゆる場所の食材だ！　”怪々覇装”の船一杯に詰めてあるからなァ！」
ダイナーの食事量は規格外だ。バラティエに積んでいる食材程なら容易く平らげる程。
そのため、ダイナーがバラティエに来る時は食材の持ち込みが常だった。
今回もダイナーの能力で形作った覇気の巨大な船一杯に食材を詰

め込み、バラティエの横に停泊させていた。
「ところでサンジの奴はどうしたんだ？　姿が見えねェが」
「チビナスなら船を降りた。居心地のいい別の船を見つけたようだぜ？」
「あん？　別の船ってことは海賊でもやってんのか？」
「あぁ。客で来た海賊の船にほいほい付いて行きやがった」
言葉は悪いが、しかし、ゼフにしては珍しく柔らかな笑顔を浮かべているのを見たダイナーは「ふむ」と店内に特殊な見聞色を使う。
相手の感情や気配を強く感じることができる力が見聞色の覇気というが、極めた見聞色は少し先の未来をも見通すことが出来る。
世界最強の覇気使いであるダイナーは未来のみならず過去すらも見通す力を持つ。
過去を見たダイナーは嬉しそうに笑う。
「――良い仲間を見つけたみたいだな」
「今やあいつも立派な賞金首だ。どこで死ぬかも分からねェ」
「あんな小さかったクソガキが海賊にねェ。時間が経つのは早ェな……」
「フン！　天下の覇王もジジイ臭え事言うようになったか」
「うるせェよ。お前とサンジが店を始めてすぐからの付き合いだぜ？　懐かしくもなる」
ダイナーからレディの口説き方を真剣に聞いていた少年は、いつの間にか大人の男になっていたらしい。
「そうだなァ。次は久しぶりにあいつに会いに行ってくるか」
「あぁ。そうしろ。あいつもおまえに挨拶出来ないことを気にしていた」
「そうか。ならたくさん土産を持って行かねェとな！」
「持っていきすぎるなよ。船が沈む」
フンッと笑うゼフと、何を持っていくか、と考えるダイナー。
美味いメシを食い、仲の良い友人と語らう時間は何よりも大切なものである。
麦わらの一味の料理人、黒足のサンジ、古くからの友人と再会する

日は近い。
そして、彼の仲間達がこの特級の化け物と見える日も近い……。

第3話”シャボンの島”

「――海軍大将もそうだけど、ここにあの覇王が来ているってついさっき情報が入ったわよ」

”偉大なる航路”前半の海、最後の島――シャボンディ諸島13番GRにある酒場”シャッキー’S ぼったくりBAR”にて、女店主シャクヤクがそう声を発する。

「ほう。ダイナーがこの島に来ているのか」

白髪で丸眼鏡をかけた老年の男が面白げに笑う。

老齢の男だが、服から覗く肉体は鋭く引き締まり、また、強者特有の圧を放っている。

彼は、シルバーズ・レイリー。海賊王ゴールド・ロジャーの右腕として名を馳せた伝説の海賊である。

現在は引退し、この島で船のコーティング職人をしている。

シャクヤクの一言に現在海、そして現在進行形でこの島を騒がせる問題児海賊団、麦わらの一味の面々が目を飛び出すほど驚く。

「なんだ、覇王って？」

「バカ！ ルフィ、お前あの覇王ダイナーを知らねェのか!!?」

「ああ、知らねェ」

黒髪の男、ルフィの言葉にカビーンッと驚きで固まる長鼻の男、ウソップ。

「あんた本当に何も知らないのね。いい！ ”覇王”っていうのはこの海で最も恐れられる名前なの」

呆れながらも説明するオレンジ色の髪の女、ナミと、大きく頷くウソップと人型のトナカイ、チョッパー。

「大海賊時代以前から現在まで活動する伝説の海賊――”覇王”ルイン・ダイナー。あまりの強さから世界政府からも”触れるべからず”と発令される程の海賊よ」

「ヨホホホホ！ 彼は未だ現役でしたか」

「ブルックも知ってんのか？」

アフロ頭のガイコツ、ブルックが過去を思い出す。

「直接お会いしたことはありませんが、偶然にも彼の戦う姿を一度見たことがあります。どう足掻こうとも殺されてしまうであろうあの強さ、今思い出しても心臓が震えます!! ガイコツだから心臓ないんですけど!! ヨホホホホ～～!!」
「へぇ、そんなに昔から活動していたのね」
黒髪おかっぱヘアの女、ロビンはそう驚く。
「ルフィ、お前の今の懸賞金は3億ベリー。覇王の懸賞金は――８０億ベリーだ」
「は、８０億ベリー～～～～!!?」
己の数十倍の懸賞金に驚き、椅子から転げ落ちるルフィ。
世界で最も高額であるこの懸賞金だが、ダイナーの手配書には特例として、『懸賞金は言い値で良いものとする』の一文が書かれている。
海軍も世界政府も、そのトップである五老星、そしてその更に上の者からも諦められているダイナーの討伐だが、もしそれが為された場合、政府及びそれ以上の権力者達は下手人を英雄と讃え、無限の財を与えるという。
「び、ビックリしたぁ！ で、そんなヤツがなんでここに来たんだ?」
「それが、私にも分からないのよね。取り敢えず、ついさっきこの島に上陸したってことは分かっているんだけど」
「まぁ、何にしても彼には気をつけることだ。ロジャーと私が組んでも歯牙にも掛けぬヤツだ。今の君たちでは勝ち目はないだろう」
海賊王とその副船長二人が相手でも敵わないということに驚く一同だったが、そこで思わぬ者が意外なことを言う。
「あ、ダイナーなら俺の友達だ」
瞬間、空気が凍った。
ぐるぐる眉毛の金髪の男、サンジのあり得ない言葉に一同は固まってしまう。
そして一拍後。
『えぇぇ～～～～～!!!?』
サンジとは犬猿の中である緑頭のゾロまでもが大声で驚きの声を上げた。

「ほう。珍しいな。あのダイナーに友人か！」
「俺のいた店によく来てたんだ。小さい頃からの付き合いだけど、あいつはまじで化け物だよ」
「そうか、そうか！　彼も少しは丸くなったようだな」
昔のダイナーの気性の荒さを知っているだけに、大いに驚くレイリー。
かつての覇王はそれはもう手がつけられなかった。
大きい子供とも言われる彼は、気に入らないものは全て薙ぎ倒し、欲しいものは奪ってでも己のものにしていた。
自分たちもよく苦労した、とはレイリー談である。
「敵になれば恐ろしい男だが、味方となるとあれ程頼もしい男もいない。これからも良い関係を続けることだ、サンジ君」
「ああ、店を出た時も挨拶出来なかったからな。次会った時には美味いメシをたらふく食わせてやる」
「ふふ。さあ！　大将達ももう島に上陸しているだろう。予定通りに行動しよう。運が良ければダイナーにも会えるかもしれんぞ？」
「おれも会ってみてェな！」
そうしてサニー号のコーティングを行うためにレイリーが出発し、それと別れてルフィ一行も海軍の追手を撹乱するため出発した。

□??□??□??□??□??□??

シャボンディ諸島４４番ＧＲにあるとある娼館。
この島において最も高級なこの娼館には世界中の名だたる著名人達や大物海賊が足を運ぶという。
そして、この店を利用している一人の男がいた。
一糸纏わぬその肉体はダイヤモンドの如く鍛え上げられ、黄金に輝く瞳は強大な意思を感じる。
世界中から恐れられる”覇王”ルイン・ダイナーが巨大なベッドの上で美女と寝ていた。
かの海賊女帝に肩を並べる程の美女は一才の衣服を纏わず、その豊

満な肉体をダイナーに押し付けている。
「ダイナー様ぁ……。もうくれないんですかぁ？」
情気した顔で甘い声を出す美女の頭を撫で、ダイナーはニヤリと笑う。
「この島には友人に会いに来たんだ。そのついでにこの店に寄ったんだ。外も騒がしくなってきたし、ワガママ言うんじゃねェよ」
「もう！　ダイナー様ったら意地悪なんだから。いつもはもっと長く遊んでくれるのに！」
気配からこの島が騒がしくなってきているのが分かっていた。
何をやらかしたのか、海軍の大将、中将達がこの島へと上陸し、大規模な戦闘となっているようである。
ダイナーが会いに来た友人の気配もあり、何故か古い知人二人も共にいるようである。
「ところで、最近天竜人のバカどもは来てねェのか？」
「ダイナー様がこの店を縄張りって言ってくれてから来てないわ！おかげで連れて行かれる女の子もいなくなって、ダイナー様には感謝しかないわ!!」
「そうか。あのバカどもでも学習するんだな」
天竜人とはこの世界において頂点に立つ者たちのことだ。
世界貴族と呼ばれ、世界で最も誇り高く気高い血族として、絶大な権力をもつ。
天竜人にとって天竜人以外の人間は人権はないものとされ、前を通ったからという理由で簡単に殺されたり、見目麗しい女は気まぐれに連れ去られることもある。
ダイナーは過去に幾度も天竜人を殺し、犯し、奪い、しかし、どうやっても殺せないことから天竜人からも恐れられている。
そんな経緯から政府より”触れるべからず”の発令が出たのである。
「あいつら、弱えくせに態度ばっかりデカいからなァ」
「……なんでダイナー様は天竜人を滅ぼさないの？」
海兵に聞かれたら一発処刑の発言をする娼婦だが、その顔は憎悪を

堪えている顔をしている。
「あん？　あァ、お前もヤツらに人生を狂わされた口か」
この娼館の一番人気である彼女だが、彼女もまた天竜人によって人生を狂わされた一人である。
シャボンディ諸島においてはよくある話だが、幼い頃に両親を天竜人によって殺された彼女は女であることを唯一の武器として、生きるために娼館へと入ったのである。
あの日の悲しみはいつまでも忘れない。あの日の怒りはいつまでも忘れない。そして、あの日の憎しみも、また、いつまでも忘れない。
「まァ、お前らの気持ちも分かるが、俺は時代の担い手じゃないからな。今の時代のことは今のヤツらにやらせるさ」
含みのある言葉に娼婦は疑問を浮かべるが、言葉にする前にダイナーに覆い被さられ口を塞がれる。
深い、熱いキスを交わした瞬間には先程までの疑問など消え去っていた。
「あと少しくらいは時間もある。それまではなにも気にしねェで、楽しもうや」
世界最強と謳われる覇王ダイナーだが、彼は無類の女好きである。
かつて麦わらの一味のコックに教え込んだ、女を悦ばせる極意を遺憾無く発揮した結果、この島一番の娼婦は人生最高の時間を過ごしたという。

第４話”覇王と冥王”

「――もう二度と会う事はない……。さらばだ」

”シャボンディ諸島”１２番ＧＲにて熊の耳を付けた大男、王下七武海の一人、バーソロミュー・くまの手により海を騒がせる海賊――”麦わらのルフィ”が姿を消した。

前代未聞の天竜人傷害事件により派遣された、海軍大将”黄猿”及び”冥王”レイリーの眼前にて行われた麦わらの一味崩壊の瞬間に周囲は異様な静かさになる。

「――どこに飛ばしたんだいィ？　説明はあるんだろうねェ？」

「貴様に説明する必要はない」

「戻ったら覚悟することだねェ」

世界貴族である天竜人二名を傷付けた大罪にて麦わらの一味の抹殺に来ていた黄猿は、邪魔をした張本人であるくまを睨みつける。

「では、私も帰るとするよ」

先程まで黄猿と剣を交わしていたレイリーだったが、目の前でルフィが飛ばされたのを見て剣を下ろす。

そして、帰投しようとしたところ、尋常ならざる圧力が周囲を包み込んだ。

数百万人に一人しか持ち得ないとされる”覇王色の覇気”がレイリー、黄猿、くま、そして同じく居合わせた鉞を担いだ戦桃丸のみならず、シャボンディ諸島一帯を威圧した。

ビリビリと肌を刺激するのみならず、雲を消し去り、ヤルキマンマングローブを軋ませる。

「この覇気は……」

「なんだ、この覇気は……!!」

「ん～～これはまずいねェ……！」

「……」

四人の眼前に一人の男が現れる。

「――おい、どういう状況だ？」

世界最強の男”覇王”ダイナーが額に青筋を浮かべ低い声で問い

ただす。
政府からも手を出すことを厳禁とされた男が明らかな怒りを放っており、黄猿は冷や汗を流す。
「友達に会いに来てみたら、気配が突然遠ざかっていきやがった。くま、お前の仕業かァ？」
「……貴様には関係ない」
瞬間、ダイナーの姿が消え、同時にくまの巨体が遥か彼方へ吹き飛んでいく。
一連の動作を見聞色の覇気でなんとか知覚出来た戦桃丸は驚愕する。
「〝クマ公〟が瞬殺……ッ!? 何故、ヤツがこんなところに!!?」
「おい、誰か説明しろよ」
「……ダイナー、久しいな。こんな状況で再会とは思わなかったが」
「レイリー、お前は何故こんなところにいる？ 隠居してるんじゃなかったのか？」
「少しばかりやることができてな」
大海賊時代以前からの顔馴染みである彼らの幾年ぶりの再会は最悪の状況だった。
彼がここまで怒るのを見るのはいつぶりだろうか。
怒れる覇王の覇気は島のあらゆる生命を気絶させていく。
「おい、レイリー。どういう状況だ？」
「ふむ、君の友人のサンジ君の一味が天竜人を傷付け、先程まで海軍に追われていた――といったところか」
「ほう、サンジのところの船長は中々気概がありそうだな？」
「あぁ、ロジャーに似て実に精悍な男だったよ」
レイリーの言葉に黄猿と戦桃丸は驚愕する。
「覇王と黒足が友人だってェ？」
これが真実であれば厄介なことになる。
ダイナーに〝触れるべからず〟と厳命されているのは、単純な強さ故だ。
この世界において打倒出来るものがいないからだ。それは、海軍の

最高戦力である大将がでもだ。
　覇王と麦わらの一味の船員が友人関係にあるとして、それに手を出す事で覇王の怒りを買うとしたら、海軍も容易に捕まえる事が出来なくなる。
　まぁ、それは船長が嫌がるだろうが、とレイリーは考えクスリと笑う。
「飛ばされたモンは仕方ねェ。くまはぶっ飛ばしちまったし、このクソみてェなイライラはお前で晴らすしかねェな？　黄猿」
「お～～怖いねェ～～。わっしはあんたとやりたくなんかないんだけどねェ」
　そう言いながら先手必勝とばかりに光の速度でダイナーに詰め寄り、光の剣で斬りかかる。
　黄猿が食らった悪魔の実は”ピカピカの実”。
　悪魔の実の中でも最強種と呼ばれる自然系であり、その中でも更に強力な”光”そのものになる能力者だ。
　”光人間”である黄猿は文字通り光速で攻撃する事が可能である。
　高度な見聞色を持たねば知覚すら出来ないその一撃を武装色の覇気を纏った掌で受け止めるダイナー。
「おいおい。能力ばかりで覇気がなってねェなァ」
「まったく、いやになるねェ。ゼファー先生と同じことを言われるとはねェ」
「最後には覇気だけがモノを言うんだ。これに懲りたら一度鍛え直せェ！」
　一瞬の内にダイナーの全身が武装色の覇気により黒く染め上がり、規格外の膂力で黄猿を殴り飛ばす。
　回避も出来ず食らった一撃に全身の骨はズタボロになり、意識は一瞬遠のく。
　あまりの武装色の濃度と強さに肉体を回復することさえ出来ず、息も絶え絶えでダイナーから遠ざかる。
「……やっぱり、覇王となんて戦うもんじゃないねェ～～」
「おい！　大丈夫かオジキ!!」

「とてもじゃないが、勝てそうもないね～～。”触れるべからず”は伊達じゃないよォ」
「これが覇王ダイナーか！　化け物みてェな覇気だッ!!」
「俺もお前らを殺すつもりはねェけどよォ。もう一発ずつ殴らねえと気ィすまねェからさ」
――殴るついでに送ってやるよ。
その一言の後、並んでいる黄猿と戦桃丸を覇王色を纏った拳が襲った。
一撃で山河を崩壊させる一撃は黄猿、戦桃丸両名を吹き飛ばし、意識を失った二人は同じ方向へと一直線に吹き飛んでいく。
「大将を赤子扱いか。流石だなダイナー」
「ふん。あんな能力頼りのヤツとまだまだヒヨッコの覇気使いなんて楽勝だろう。海軍本部まで飛ばしてやったから、着いたら本部のヤツら、ビックリするんじゃねェか？」
ハハハハと大笑いするダイナーを見て笑うレイリー。
「くまにも何か事情があったようだ。私も詳しくは聞いてはいないが、とりあえず、久しぶりの再会だ。落ち着いた所で話そうじゃないか。サンジ君も無事なようだしな」

□??□??□??□??□??□??

「――ダイナーさん、本当に久しぶりね」
「お前が店をやってるってのは知ってたけどな。レイリーとも上手くやってるようじゃねェか」
「レイさんったら他所に女作ってちっとも帰ってこないのよ？」
「ハハハハ！　男なんてそんなモンだ。ましてや元海賊。帰ってくるだけいい方だろ」
「ま、気にしてないけどね」
居た堪れない思いをするレイリーはポリポリと頬を掻き、それを見たダイナーは爆笑する。
「天下の冥王も女には勝てんか！」

「惚れた弱みだな……」
「ところでよォ、この人魚と魚人たちは何だ？　陸にいるのは珍しいなァ」
　あの後レイリーと共に１３番ＧＲにある酒場”シャッキー，Ｓぼったくり ＢＡＲ”へとやって来たダイナーは、古い知り合いとの再会を果たし酒を飲んでいた。
　上等なダークラムの瓶を傾けるダイナーは、包帯に包まれたタコの魚人、若い女の人魚、喋るヒトデを興味深げに見る。
　目を向けられた三人は緊張に身を固まらせる。
「彼らはサンジ君たちの友人だよ」
「ほ～ん。他の島ならまだしも、この島に上がるたァ、度胸あるじゃねェか」
　かつて魚人、人魚は魚類として世界中で迫害されてきた過去があり、このシャボンディ諸島では、その悪習が未だに続いている。
　それ故、魚人、人魚たちはこの島に足を踏み入れる事は滅多にないのである。
「ニュ～～でもそのせいであいつらが……」
「あん？　どういうことだ？」
　そしてタコの魚人、はっちゃんが事情を説明する。
　友達である人魚のケイミーが人攫い屋に捕まってしまったこと。
　人間屋（ヒューマンショップ）の競売（オークション）で天竜人に落札されたこと。
　天竜人にはっちゃんが銃撃されたこと。
　麦わらのルフィが天竜人を殴り飛ばしたこと。
　一連の流れを聞いたダイナーはニヤリと笑う。
「軽くは聞いていたが、サンジの所の船長は良い男みたいだなァ」
　今は亡き戦友を彷彿させる人物像に興味を持つ。
「それで、モンキーちゃんたち、くまに飛ばされたの？」
「あぁ。ヤツはルフィ君たちを逃がしたいと言っていたよ」
「……くまの野郎にゃ悪いことしちまったなァ」
　サンジと先程覚えた仲間たちの気配を探ってみると、それぞれが別の方向へと遠ざかっていく。

「まァ、ヤツらも立派な海賊だ。どのみち、この程度のことで躓くようじゃ、この先の海ではやっていけねェ」
「フフ、一体どうなることか」
「サンジに会えなかったのは残念だが、あいつが着陸した後にでも会いに行けば問題ねェだろ」
「ところで、ダイナーさん。あなた、この島に入って今まで一体何していたの？　もう少し早ければモンキーちゃんたちも飛ばされることはなかったでしょうに」
　店主のシャクヤクが単純な疑問を問いかける。
　単純な質問だが、それを受けたダイナーは顔からダラダラと汗を流す。
「……さては、お前、また娼館にでも行っていたな？」
「え？　いやぁ……、まぁ、え～～、い、イッテないけどなぁ……!!?」
『ウソつけェ!!!』
　分かりやすすぎるダイナーの顔に総ツッコミする一同。
　蔑んだ目で見つめるケイミーと呆れて笑うシャクヤク。爆笑するレイリーと顔を覆うはっちゃんとヒトデのパッパグ。
　そんな彼らの目から逃げるために酒瓶を呷った。
　ダークラムの甘みと強い香りを鼻から逃がし、一気に飲み干したダイナーは二本目の瓶へと手を伸ばす。
「も、もうこの話は終わりだ！　久しぶりなんだからお前らももっと飲め！　今日は俺の奢りだ。人魚の嬢ちゃんたちも何でも飲めやァ」
　世界中から恐れられる最強の男も、一度宴を共にすれば、血の通った同じ人間だと分かる。
　天竜人以上に手が付けられなく、魚人以上に化け物じみた男だが、酒を飲んで話を紛らわせる姿は常人と変わるものは何もない。
　魚人と人間を別つ差別も、一度偏見の目をなくしたのなら、もしかしたらお互い歩み寄れるのかもしれない。
　そんなことを、タコの魚人はっちゃんは、覇王から手渡されたジュースを飲みながら思うのだった。

第5話”五老星の憂鬱”

”海軍”にとって”覇王”とは恐怖の象徴である。
大海賊時代以前よりこの世界を荒らす規格外の化け物は海軍の最大の敵である。
海軍の新兵はまず”覇王”ルイン・ダイナーについて教育される事になる。肉体改造、戦闘訓練、戦術を学ぶよりも先ず教育される理由は、単に覇王に手を出す事のないようにだ。
覇王の懸賞金額等の基礎情報。
覇王のこれまで行って来た悪行の数々。
そして、覇王の戦闘力。
世界政府及び海軍から”触れるべからず”を発令された男の”触れるべからず”の理由の全てを教育される。
絶対に触れてはいけない。絶対に怒らせるような事をしてはいけない、と教育されてきた新兵達からは”覇王”を恐怖の象徴として頭に刷り込まれる。
歴戦の海兵達は、絶対に触れてはいけないと、身を持って恐怖を知っている。
海軍の中でもエリートが揃う海軍本部の若き海兵、額に十字の傷がある少年、コビーもまた、覇王の恐怖を教育された一人である。
「”剃”!」
眼前でニヤリと笑う老海兵へと高速で迫り、拳を突き出すコビー。
未だ超人体技である六式の全てを扱う事が出来ないコビーにとって、剃の勢いを乗せた拳が最も威力を持つ技となる。
新兵とは思えない速く鋭い一撃だったが、己に届く前に頭に拳骨を落とす老海兵。
「わっはっは! まだまだ甘いのう!」
「っぶぁ!!!」
余りの衝撃に白目を剥くコビーに大笑いする老海兵は海軍の英雄――モンキー・D・ガープである。
かつて海賊王や大海賊達と激闘を繰り広げて来た伝説の男だ。

老いた現在においても身に纏う覇気は強靭であり、隆々とした肉体は激闘の歴史を感じさせる。
「――いてて」
「今日もカスリもしなかったな……」
頭の巨大なたんこぶをさすりながら座るコビーに金髪長髪の男、ヘルメッポが同じくたんこぶをさすりながら声をかける。
同時期に海軍へと入隊した彼らは良き友人、ライバルとなり切磋琢磨していた。
「お前ら、筋は良いが、まだまだじゃの！　もっとメシを食って運動せんかい！」
「ガープ中将、僕頑張ります!!!」
「これ以上やったら死んじまうぜ……」
「休んでる暇はないぞ！　これからみっちりシゴいてやるからのう」
拳を鳴らしながらニヤリと笑うガープに冷や汗を流すコビーとヘルメッポ。
二人が気合を入れようとした瞬間、海軍本部訓練場へと何かが飛来した。
空気を切り裂くような音の後、ズドンッ！　という衝撃音と共に地面へと墜落したそれは、バスターコールでシャボンディ諸島に任務へ出ていた二名であった。
「大将”黄猿”!?!」
海軍が誇る最強戦力の一人、海軍大将”黄猿”と共に任務に出ていた部下の戦桃丸は、全身がひしゃげた無残な状態で横たわっていた。
墜落した衝撃で出来たクレーターの中で横たわる二人を見たコビーは驚愕の声を上げる。
「至急！　至急！　大将”黄猿”と他一名が第二訓練場に重傷で飛来！　深刻な傷を負っている！　衛生兵は至急第二訓練場へ来られたし！　繰り返す――」
ヘルメッポは訓練場に設置されている電伝虫で本部中に緊急事態発生の放送をする。
そんな中、黄猿達が飛ばされてきた方向を睨みつけるガープは溜息

を吐く。
「……ダイナーか」

□??□??□??□??□??□??

「”覇王”により黄猿が重傷を負った」
荘厳な建物の中、五人の老人達が話し合いをしていた。
「”触れるべからず”の覇王に手を出したのか……」
「目を覚ました黄猿の話だと、例の麦わらの一味絡みらしい」
「またあの一味か」
「あの男が何かに影響されるというのも珍しい話だな」
彼らはこの世界で最も権力を持つ天竜人達の中において最高位の五人。
世界政府の頂点に立つ五人の天竜人――五老星である。
この世界の歴史の全てを知り、世界を操る五人にとって、世界最強の男、覇王ルイン・ダイナーは最悪の相手だった。
どのような手を打っても対処できない彼に、彼らはとうとう手を出す事をやめ、触れるべからずとした。
「なんでも、麦わらの一味の中に友人がいるらしい」
「……覇王に友人だと?」
「長い歴史の中でも聞いたことがないぞ。しかし、それが事実ならば面倒な事になる」
「左様。麦わらの一味に手を出した時、手に負えぬ化け物が真に敵になる」
「だが、奴は前時代の覇者。本人もこの時代の事には直接手を出すことはないと言っている」
「事態が拗れぬよう祈るしかないな……」
世界最高の権力者達は一様に深いため息を吐く。
最強無敵の化け物は何者にも縛られることはない。化け物の考えを読むことも出来ない。彼がどう動くかなど、誰にも分かりはしないのだ。

□??□??□??□??□??□??

「――エースの処刑が決まったか……」

シャボンディ諸島、多くの荒くれ者が集まる大衆酒場にて新聞を読んだダイナーは呟く。

「こりゃァ、久しぶりの大戦争になるなァ」

古い知人の顔を思い出しダイナーは酒を呷った。

白ひげ海賊団2番隊隊長、ポートガス・D・エース。

”火拳のエース”の名で知られる男は先日海軍に囚われた

白ひげ海賊団にて絶対の禁忌とされる『仲間殺し』を行ったマーシャル・D・ティーチを制裁すべく追跡したエースは、バナロ島でのティーチとの戦闘の末敗れ、海軍へと引き渡された。

監獄に投獄されて直ぐに処刑が決定し、その知らせは世界中に駆け巡った。

当然、息子の処刑の知らせを白ひげが知らぬ訳もなく、又、息子の処刑を絶対に許す訳もない。

海賊王亡き後、最も”ひとつなぎの大秘宝（ワンピース）”に近いとされる伝説の海賊と、海軍の戦争が起きることは明白だった。

「……白ひげ。お前の死に場所はそこになるのか？」

かつての白ひげは強かった。海賊王ゴール・D・ロジャーと鎬を削っていたあの頃は正に強さの権化だっただろう。

今よりも凶悪、強靭な海賊達が多かったあの時代においても頂点に位置していた男だが、やはり老いには勝てず、今ではあの頃とは比べようもない。

今回の戦争、白ひげの勝ちの目はかなり低いだろう。

海軍、そして王下七武海が相手では、老いた白ひげではエースの救出は難しかろう。

「時代が進む時が来た。約束の男が現れるのはいつになるか」

その時、酒場の入り口の扉を乱雑に蹴り開け、複数の男達が入ってきた。

体中に刺青を入れた禿頭の大男とその後ろで下品に笑う男達は、客がいるテーブルを蹴り飛ばしながらカウンターまでやって来る。
「おい、マスター。命が惜しけりゃ酒を全て寄越せ。あァ、今客どもが飲んでるのはいらねェぞ？」
リーダーと思われる禿頭の大男がそう言うと、後ろの男達は耳障りの悪い笑い声を上げる。
「なぁ、兄ちゃん。いいヤツ飲んでんじゃねぇか。おれにも飲ませてくれよ」
ダイナーの前に置かれている上等なダークラムの酒瓶を見た男は、ダイナーの肩に腕を回して笑う。
「あいつ、懸賞金９６００万ベリーの”血墨のグール”だ！　殺した相手の血を混ぜた塗料で相手の名前を体に入れる、って噂の……」
「なんだよ、おれも有名になったもんだな！　昨日まで海軍大将が来てたっていうから、大将の名前を彫れるって楽しみにしてたが仕方ねぇ。それは新世界に取っておくぜェ」
「――おい。いつまで手ェ置いてるつもりだァ？」
心の芯から凍えるような低い声が周囲に響いた。
店内の温度が数度下がったかのように錯覚する程に、男達は恐怖を覚えてしまっていた。
未だ”覇気”を知らないグール達にはこれが、極々少量出た覇王色の覇気だとは分からなかった。
「今、俺ァ機嫌悪ィんだ。さっさと失せろ、馬鹿共」
「なんだと、クソ野郎ッ!!　ぶっ殺してやるッ」
「白髪頭にその面……ッ！　せ、船長！　そ、そいつ、”覇王”ダイナーですぜ!!!」
『は、覇王!!?』
海賊一同と他の客達もが揃って驚愕の声を上げる。
確かに、誰もが一度は見たことがある手配者の顔にそっくりだ。
端正な美貌には、苛立ちから青筋が浮き上がり、世にも恐ろしい魔性のそれだ。
「忠告はしたからなァ。自業自得だ」

その言葉の一瞬後、海賊達の頭と胴とが別たれた。
総勢三十人の頭が宙に飛び、遅れて残された胴が倒れ込む。
首からは鮮血が勢いよく吹き出し、酒場の床は血の海へと変貌する。
余りの惨状に悲鳴を上げる客達と店員。
全く動いた様子のない、カウンター席に座ったままのダイナーは酒瓶の残りを一気に呷り、席を立つ。
ダイナーから黒い武装色の覇気のエネルギーが溢れ出し、質量を持ち、十数の人型となる。
「お代だ。騒がせちまって悪かったなァ。後片付けはこいつらがやる」
多めのベリーをカウンターに置いたダイナーは、そう言うと店を後にした。
店内には呆然とする客と店員、斬首された死体が三十とそれを片付ける十数の黒い人型が残された。
覇王には誰も”触れるべからず”。
彼、彼女らはこの日、頭の固い政府が出したその意味を初めて知ることになった。
まるで災厄。手を出したら最後の、絶対に触れてはならない災い。
自然災害と同じく、過ぎ去るのを祈り待つしかないのだ。

第6話”地獄での宴”

世界政府の三大機関、”インペルダウン”。
ここは、弩級の海洋生物、”海王類”がひしめく”凪の帯”の深海に存在する「世界一の大監獄」である。
深海という逃げ場のない環境、鉄壁とまで称される程の警備から、侵入、脱獄共に不可能の監獄と呼ばれている。
そんな鉄壁の監獄に史上類を見ない侵入者が発生した。
「――さっさと開けろォ。開けねェと、この扉ぶっ壊しちまうぞ」
正義の門を通る事なく上空から侵入した下手人、”覇王”ダイナーは到着早々そんな恐ろしいことを言う。
早く開門しろ、という不可能な事を騒ぎ立てるダイナーに、警備の男達は頭を抱えてしまっていた。
”触れるべからず”。世界政府から討伐を諦められた世界最強の男が目の前にいる。
少しでも選択を誤れば命の保証がない状況に男達は冷や汗を流し、内一人が緊張で手が震える中、監獄署長へと電伝虫を繋げた。
プルプルプルという鳴き声が鳴り、数秒後低い声が出る。
『どうした』
「し、署長!! 緊急事態発生です!! 正面入り口扉前に”覇王”ルイン・ダイナーが侵入しました!! 死刑囚、ポートガス・D・エースに会わせろと要求しています!!!」
「――分かっている」
警備の男が緊張と焦りから早口で報告した時、一人の大男が扉を開け、現れた。
『マゼラン署長!!!』
悪魔のような角と翼を持つ大男、インペルダウンの監獄署長、マゼラン。
超人系悪魔の実、”ドクドクの実”を食らった”毒人間”である彼は、世界一の大監獄において、最強の看守と呼ばれている。
そんな男が緊張に顔を引き攣らせながらダイナーへと問いかける。

「話は聞いていた。何故ポートガス・Ｄ・エースに会いに行く」
「処刑される知り合いと、最後の話しをしに行くだけだが」
「……ここは、世界の悪党共を閉じ込めておくための地獄の大砦。庶民の皆の安心安全のため、絶対に脱獄者を出す訳にはいかない」
緊張に冷や汗をかきながら、しかし、それでも確固たる意思をもって断言する。
「――会うだけだ。ヘタな事をした場合、全力で足掻かせてもらう。貴様が相手でもだ……!!」
「……フッ。安心しろ。本当に話しをしに来ただけだ。お前の覚悟に免じて、何があってもここでは騒がねェ」
民衆を守るため、己の責務を遂げるため、政府の厳命に逆らってまで覚悟を見せたマゼランに、ニヤリと笑うダイナー。
いつからか、”触れるべからず”のダイナーに真っ向から覚悟を示す者はいなくなった。
強大過ぎる力に震え上がり、己の正義を貫き通す者がいなくなった現在、マゼランが見せた覚悟は、かつての自分を思い浮かばせた。
「良い男だ。これからも励むといい」
そう言ったダイナーは、マゼランの横を通りインペルダウン内部へと入って行く。
この日、インペルダウンの侵入者ゼロの歴史が終わりを迎えた。
しかし、”覇王”相手に一滴の血も流さない偉業は、未来永劫破られることはないだろう。

□??□??□??□??□??

「――久しいな、エース」
”インペルダウン”最下層。ＬＥＶＥＬ６、〝無限地獄〟。
伝説級の海賊や犯罪者達が数多く幽閉されている地獄の底。
そんな地獄の最下層に一人の男が幽閉されていた。
「……ダイナーさん……。何故、あんたがここに……」
全身血だらけで鎖に縛られる男の名は、ポートガス・Ｄ・エース。

白ひげ海賊団２番隊隊長。”火拳のエース”の名で知られる彼は、息も絶え絶えでダイナーに問いかける。
「忠告を無視して、無様にとっ捕まったバカの顔を見に来た」
ニヤリと笑うダイナーに、溜息を吐いてから力なく笑うエース。
「……うるせェ。あんたの忠告があろうが無かろうが、おれはティーチを追っていた……」
「お前もニューゲートも頑固だな」
「……おれは白ひげの息子だ。似たんじゃねェか？」
「……ふっ。お前がそう言うなら、ニューゲートがお前の親父だわなァ」
エースは白ひげを親父と慕い、白ひげもまたエースを息子と愛した。
かつて幾度も刃を交えた仇敵の実の息子でありながら、息子と呼んでくれた白ひげは、エースにとって唯一の父親だった。
己の血を呪い、世界最悪の父親を憎んだエースは、しかし、白ひげという親父に救われた。
「ーーニューゲートはお前を助けるために動くだろうよ」
「……ッ！」
白ひげを海賊王にする、と常日頃口にしていたエースにとって、己の未熟さによって足を引っ張っている事に悔し気に口を噛む。
エースもまた、白ひげなら、己を助けるために動くという事は理解していた。
助けに来ないでくれ、という願いは、叶わないだろうという予感。
「俺がお前を助けるわけにはいかねェ。ニューゲートの奴にも怒られるだろうしなァ」
――だから。
「最後の晩餐に酒と飯をたらふく持ってきた。今、俺がいる時だけは、自由にさせてやる」
そう言うと、ダイナーの後ろに控える黒い箱形が消え、そこに大量の酒と食料が現れた。
ＬＥＶＥＬ６の囚人達にとって長く飲んでいない酒と美味そうな

料理達。
最低限の食事と、無限の退屈によって体力を失っていた彼らにとって、喉から手が出るほど欲しいものだった。
皆が一様に涎をダラダラと流す中、突如彼らを縛る海楼石の鎖や手錠が一斉に外れ、牢屋の鍵が開く。
「――お前らの分もある。今日一日は自由にしていいが、マゼランと男の約束をしたからな。明日、日が昇ったらまた縛るからなァ」
その瞬間、巨大な歓声と共に全ての牢屋が開き、全囚人が酒と料理に群がる。
エースを縛る鎖も外れ、その隣で縛られていた元七武海の一人、”海侠のジンベエ”が感嘆の声を挙げる。
「海楼石の鎖がこうも簡単に……！　流石は覇王か……ッ！」
「お前はタイガーのところの、ジンベエ……だったか？」
「お頭の事を知っておるのか!!?」
「あいつが冒険に出たての頃と、海賊になる少し前の、二度しか会ってねェがなァ。それよりも、お前も飲め。久しぶりの酒だろう」
「……有り難く頂こう。この恩は必ず返す……！」
そう言うや、清酒の瓶を一気に呷り、久しぶりの海獣のステーキを食らう。
エースも遅れて、ブドウ酒を呷り、海獣の骨つき肉にかぶりつく。
極限の空腹と疲労。怪我の痛みと永遠の退屈。家族への心配。それらから一時的に解放されたエースは、涙を流しながら次々に酒を、料理を口へと運ぶ。
「うめェ……。うめェよ……」
ダイナーが周囲を見渡せば、見知った顔が数多く集まっている。
かつて、海賊王や白ひげと、一人で競り合っていた孤高の海賊。
海賊王の船に乗っていた、国家戦力級とまで言われる戦闘力を持つ男。
その他にも、元王下七武海や異常に巨大な肉体を持つ男等、伝説級の海賊達が、一心不乱に酒と飯に食いついていた。
「よォ、バレット。久しぶりだなァ。体は衰えてないみてェで何より

だ」
「……フン。貴様も相変わらずの化け物ぶりだな」
金髪の大男、ダグラス・バレット。
かつて海賊王の船に乗っていた最強クラスの男だ。
樽ごと酒を飲み、肉を平らげる彼は、ダイナーを睨みつけて言葉を返す。
「世界最強は諦めてねェのか」
「当たり前だ。貴様を殺しておれが最強になる」
「そりゃァ、一生かかっても無理だなァ。まァ、頑張ってくれ」
「フンッ」
「あァ、そういえば。おい、バレット。そいつ、ロジャーの息子だぞ」
エースを指差して何気なく言ったダイナーにバレットは呆けた。
「ロジャーに息子だと？」
「おれの親父は白ひげだ!!!」
疑問を浮かべるバレットと、違う、と怒るエース。
「血筋的には間違いなく、エースはロジャーの息子だ。違うと否定しようともな」
「ほう。ロジャーにも息子がいたのか……」
「結局、最後までロジャーに勝てなかったからなァ。バレット」
「黙れ!!!」
「ハハハハ！　お前達が並んでる姿、ロジャーが見たら何て言うだろうなァ」
肉を奪い合う二人を眺めながら、お気に入りの酒を飲んで愉快に笑うダイナーは、かつての馴染みを思い出す。
どこまでも自由で、いつも楽しそうにしていた男は、時代を確かに動かし逝った。
新時代を作るため、意思を繋ぐために行った数々をダイナーは忘れることはないだろう。
また、時代が進もうとしている。
――新時代が訪れる未来も近い。

第7話”覇王の親友”

「――サンジ。お前何やってんだ？」

”偉大なる航路”前半の海にあるハート型の山がある島、モモイロ島の海辺で”覇王”ダイナーは己の目を疑っていた。

カマバッカ王国と呼ばれるこの国には、ニューカマー拳法を使うオカマ達がおり、日々美しさと強さを研鑽している。

ブレない意思と美しい心を持つ彼女達をダイナーは好ましく思ってはいるが、自身の影響もあり、大変な女好きになったサンジにとって、ここは地獄のような場所だろうと思っていた。

いた、のだが。

「あら、ダイナーきゅん！　久しぶりねん！」

ウェーブのかかったロングのウィッグに華やかな化粧。

指先の爪を鮮やかに彩るマニキュア。

純白のスイーツドレス。

乙女のような仕草と表情。

女性を愛し、女性を愛するために産まれたと豪語していた男は、しばらく見ない間に乙女になっていた。

「……何があった、お前。正気か？」

「あぁん！　ダイナーきゅん、お口がわ・る・い！　お下品よ！」

「……正気じゃねェなァ」

頭が痛くなってきたダイナー。

海賊になり、海へ出た友人との再会。久しぶりの再会を楽しみにしていたダイナーにとって、サンジがオカマになっていた現実は衝撃が強すぎた。

イヤン、イヤンと体をくねらせるサンジの過去を見通すと、”カマバッカ王国女王代理”のニューカマー拳法の技により、こんな状態になっている事が分かった。

カマバッカ王国に飛ばされ、女王代理と決闘してからの数日、乙女が目覚めた状態で過ごしてきたらしい。

「おい、サンジ。お前こんな所で馬鹿やってていいのか？」

「馬鹿だなんて、ダイナーきゅんひどーい！　あなたも可愛くなれば分かるわよ!!」
そう言いながら、自身のものと色違いのピンク色のドレスを手に持ち迫り来るサンジ。
悍ましい笑顔で迫るサンジに青筋を浮かべたダイナーは拳を一閃。
「馬鹿が！　いい加減、目を覚ませ！」
サンジの頭へと強烈なゲンコツを落としたダイナー。
あまりの衝撃にサンジは意識を飛ばし、ゲンコツが落ちた頭頂部には巨大なタンコブが生まれた。
周囲でダイナーとサンジのやり取りを見守っていたオカマ達は、ゲンコツの轟音に驚き、サンジの心配をする。
「ダイナー様ったら容赦ない～！」
「すごい音したけどサンジきゅん大丈夫かしら？」
「でも、ワイルドなダイナー様もすてき～～！」
皆が一様に語尾にハートが付いているような甘い声を出し、集まってくる。
「お前達も久しぶりだなァ。変わらず美しいままで何よりだ」
「美しいだなんて、ダイナー様、分かってるんだから～！」
「キャロ様もお会いしたがってたわよん！」
「ハハハハ！　後で会いに行ってくるかァ」
鍛え抜かれたダイナーの肉体をまさぐるオカマ達と、それを受け入れるダイナー。
わいわいと騒ぐオカマ達を見る慈愛の視線は、覇王と恐れられる男のそれとは思えないものだ。
「……んん」
「サンジきゅんが起きたわよ！」
「……痛ッ。おれは……どうしたんだ……？」
意識を取り戻したサンジとそれを喜ぶオカマ達。
覚えのない頭痛に困惑しているサンジは、先程までの様子とは違うように見られる。
「目を覚ましたか、サンジ」

「ダイナー!!?　なんでお前がここに!!?　って、なんだこの格好は〜〜!!」
「いや、お前俺にも着させようとしてたじゃねェか」
「はぁ!!?」
　頭部へのあまりの衝撃に一時的に記憶が曖昧になっていたサンジだが、程なく全てを思い出し、後悔と屈辱を覚える。
　涙と鼻水を垂れ流し、砂浜を叩くサンジにダイナーは大笑いし、小馬鹿にしていた。
「女好きのお前があんなになっちまうとはなァ。キャロラインの奴、上手くなってんじゃねェか」
「そうだ。あの野郎のせいでこんな事になったんだ！　そうじゃないと、俺があんなんになる訳ねぇ！　あいつ、タダじゃおかねぇ!!!」
　全身から怒りの炎を上げるサンジにダイナーは、それよりも、と話をする。
「安心させるために言っとくが、お前の仲間はそれぞれ別の場所に飛ばされている。くまの野郎、お前達を助けるために飛ばしたみたいだぜェ」
「そうか！　あいつら無事だったのか！」
　安心に胸をほっと撫で下ろすサンジ。
「シャボンディでは助けてやれなくて悪かったなァ。ちょっと野暮用で遅れちまった」
「それはいいんだけどよ、ダイナー、お前まさかまた娼館にでも行ってたのか」
「ぎ、ギクッ」
「ギクッって口で言う奴がいるか！　って、やっぱり行ったのかよ！」
　レイリーに見抜かれた時と同様に冷や汗を流すダイナーと、おれも行ってみたいのに！　と怒るサンジ。
「悪かったって。海賊になった餞別に、願いを3回まで聞いてやるから、許してくれやァ」
「願いだと？」
「あァ。何でもいいぞ。”ひとつなぎの大秘宝（ワンピース）”を持ってこい、でも

いいぞォ」
「……うちの船長が絶対怒るからな。”ひとつなぎの大秘宝”は自分たちで見つけるぜ」
「ふっ。まァ、考えとけや。何でも叶えてやるから」
”覇王”への無条件の依頼権利。
世界中の誰もが欲しがる特級の権利。四皇も、海軍も、世界政府さえも欲しがるこの権利を手に入れたサンジは、あまり実感が湧いていないようだった。
「それよりも、サンジ。食材たんまり持ってきたから、久しぶりにメシ作ってくれよ」
「あぁ。バラティエを出る時、挨拶できなくて悪かったな。腹一杯食わせてやるから城に行こうぜ」
「楽しみだ」
ニヤリと笑うダイナーとサンジ。
並んで歩く二人は確かに仲の良い友人のものだった。
そんな二人の様子にオカマ達は驚きつつも、温かい目で見守り、確かな覇王の変化に穏やかな笑顔を浮かべていた。
「何やってんだ。食材なら腐るほどあんだから、お前らも行くぞォ」
穏やかなダイナーの声に、百戦錬磨のオカマ達は歓喜し、追いかけるのだった。
□??□??□??□??□??□??

「――それにしても、本当に久しぶりだな」
カマバッカ王国の王城食堂にて、膨大な料理を作り終えたサンジがダイナーに話しかける。
カップを傾け紅茶を飲むサンジの横では、料理を食べ終わったダイナーが大きなゲップをして酒を飲んでいる。
「ゼフからお前が海賊になったって聞いて驚いだぜ」
「自分でも驚いてるけどな」
「”オールブルー”を探してるんだってな。ゼフの奴、仏頂面だったが、嬉しそうにしてたぜ?」

「へへ！　クソジジイと俺の昔からの夢だからな。未来の海賊王の船に乗ったんだ。見つかるだろうぜ」
「ふっ。応援してるぜェ」
ダイナーはかつてサンジが嬉しそうに夢を語っていた事を思い出す。
世界中のあらゆる魚が生息する特殊な海、”オールブルー”。
伝説とされるその海を見つける事が夢というサンジに、頑張れ！と笑っていたダイナーは、サンジがその夢に向かって突き進んでいると知り、微笑む。
「ダイナーこそ最近は何してたんだ？」
「あァ、世界中の女共と遊んでたぜ」
「死ね」
表情のない顔で一言。
「ハハハハ！　俺にそんな事言う奴はお前くらいだ、サンジ！」
「お前がどれだけ凄かろうと、俺にとっちゃただの友達だからな」
「五老星あたりが聞いたら、ひっくり返るだろうぜェ？」
ハハハハ！　と上機嫌で大笑いするダイナーと、彼の為に新たな酒瓶を開けるサンジ。
己の気に入らないものは全て薙ぎ倒してきて、それで恐れられてきた彼にとって、そう言われるのは新鮮だった。
遥か彼方の過去より、弱者だろうが、格上だろうが、気に入らないものは全て薙ぎ倒し、己の道を進んできた。
もはや、彼と並ぶ者はおらず、かつて”救世の英雄”と呼ばれた男は、”覇王”と恐れられるだけの怪物へとなった。
そんな自分を友達と呼び、自分自身もまた彼を友達と思っている。
ダイナー自身もそんな己の心の変化に驚きながらも、心地いいものを感じていた。
――だから。
「ハッ！　俺のたった二人の友人だ！　本気で困ったら何でも言えやァ。お前の未来は保証してやる」
かつて数々の試練を踏破した旧時代の覇者は、穏やかな笑みを浮か

べ、新時代の子の肩を叩く。
　そんな彼の言葉に照れ臭そうに笑いながらサンジは感謝するのだった。
「そうだ！　ダイナー、おれをシャボンディ諸島まで連れてってくれよ！　仲間とあそこで集合する約束なんだ！」
「あァ、レイリーのとこに集まるんだってなァ」
「ああ！　だから頼むよ」
　手を合わせて頼み込むサンジ。
　そんな彼を見てダイナーはニヤリと笑い提案をする。
「未来を見たが、お前の仲間達は二年間それぞれで修行するようだぜェ。だからよ」
　――おれが直々におまえを鍛えてやるよ。

第８話”最悪の囚人達”

「おれ行くよ!!!」
兄、ポートガス・Ｄ・エースを救うため、世界一の大監獄、”インペルダウン”の最下層へと到達したモンキー・Ｄ・ルフィ。
しかし、時僅かに遅く、エースの身柄は海軍へと引き渡された。
諦められないルフィは共に行動する、革命軍幹部、エンポリオ・イワンコフとイナズマに海軍本部へ行くと宣言する。
「ヴァカおっしゃい!!!　この世界の頂点の戦キャブルよ!!!?　”白ひげ”の実力知ってんの!?　迎え撃つ海軍の大将、中将、七武海の実力知ってんの!!?　ヴァナタ、命いくつ持ってんの!!?」
巨体のオカマ、イワンコフが怒声を上げる。
覇気も知らないルーキーが世界の頂点達の戦いに参戦すると言い、怒りながら諭した。
「もし諦めたら、悔いが残る!!!」
おれは行く、と言うルフィにイワンコフは、己のリーダーを相手にしているような感覚を覚える。
事実、革命軍のリーダー、ドラゴンの息子だというルフィに驚愕したのは覚えに新しいが、ここまで無茶を言うとは思わなかった。
「行くも何も……!　まず、この階から抜け出せないんだぞ」
額から目にかけ稲妻形の傷がある男、イナズマが言う通り、インペルダウンの看守達の作戦により、ルフィ達はこの階、ＬＥＶＥＬ６に閉じ込められていた。
エースが搬送されたリフトは鉄杭の罠で潰され、降りてきた階段は巨大な柵と睡眠ガスにより、インペルダウンからの脱出すら困難になった中、囚人の一人が声を発する。
「ここを抜けたきゃ、おれを解放しろ……!!」
自分なら天井に穴を開けられる、という男はかつてルフィが死闘を交わした相手だった。
「クロコダイル!!!」
かつて、アラバスタ王国で人々を苦しめていた張本人であり、元王

下七武海の一人である〝砂漠の王〟サー・クロコダイルである。
当時のルフィが激闘の末、倒した相手が協力すると自ら買って出た。
「ここを出るつもりはなかったが、やる事が出来た。安心しろ。お前らに手は出さねェ」
「フざけんな!! お前はビビの国をめちゃくちゃにした奴だ! 信じられるか!!!」
「昔の話だ。あの国にもう興味はねェ」
船を降りた仲間の事を思い、怒声を上げるルフィと面倒臭げに話すクロコダイル。
「解放しましょう、麦わらボーイ。確かにコイツがいれば相当な戦力になる。海軍本部に行くなら尚更よ」
「えェ〜〜! イワちゃん! あのなコイツは!」
「……! イワンコフ……」
「お久しぶりだわねェ、クロコボーイ……」
クロコダイルとの関係を話したイワンコフは、彼が言った言葉に疑問を浮かべる。
「ところで、やる事ってのは何っチャブル? ヴァナタがやる事なんて、碌でもないに決まってる」
「……フンッ。大した事じゃねェ。お前の兄貴に一飯の恩がある、麦わら。海賊は受けた恩を忘れねェ。火拳を助けに行くってんなら、俺も付いて行こうじゃねェか」
「エースに恩だって……?」
「あぁ。数日前、火拳の元にある男が来た。お前らも知っている男だ……」
クロコダイルの口から彼らしくない言葉を聞き、信じられないものを見たという顔のイワンコフと、自分の兄に対する恩と聞いて疑問を浮かべるルフィ。
そして、クロコダイルの口から世界一のビッグネームが飛び出る。
「〝覇王〟ダイナー。世界最強の男がここに来た……!」
『は、覇王!!?』

イワンコフとイナズマが驚愕し、冷や汗を流す。
「覇王って言ったら、レイリーのおっさんが言ってた……」
「ダイナーがどうして、エースボーイの元へ来たの!!?」
「詳しくは知らねェが、奴のためにメシをたらふく持ってきてやがった」
「メシ持ってきてくれるなんて、覇王っておっさん、良い奴だな!!」
目を輝かせるルフィと冷や汗が止まらないイワンコフとイナズマ。
ダイナーが関わるとなるとこの一件、自分達が思っているよりも大事になりそうだ。
悪い方に少しでも傾けば、一瞬で自分達の命は失われる。
彼は知り合いだとしても、気に食わない事があれば一才の容赦がない。
そんな事を考え、イワンコフはルフィを見る。
「麦わらボーイ。この一件、本格的に諦めた方がいいかも。覇王が関わってるなら、どのみち、彼次第で全てが決まる……!」
「それなら心配する必要はない。奴いわく、今回の一件に関わる気はないそうだ」
その言葉にイワンコフは一先ず安心するが、そこでクロコダイルの恩という言葉の意味について疑問を浮かべた。
「――それで、ヴァナタの恩っていうのは何なの?」
「火拳のおこぼれで、俺達もメシと酒をたらふく食った。間接的にだが、火拳の奴には、恩を受けた事になる。一度だけ、力を貸してやる」
そこで他の檻からも声が上がる。
「――ならば、おれも連れて行け」
巨大な鎖に繋がれた金髪の大男は、そう言いながらルフィ達を睨み付ける。
「ン〜〜! 何という大物! こんな化け物まで捕まってたなんて……!」
「なんだ、イワちゃん。知ってんのか?」
「彼はダグラス・バレット。あの海賊王の船に乗っていた、伝説の海賊よ……!!!」

「海賊王の～～!!?　レイリーのおっさんと一緒か!!?」
「なんだ小僧。レイリーの奴を知っているのか」
「シャボンディで知り合ったんだ」
「フンッ。奴もまだ生きていたか」
　かつての副船長の顔を思い出し、口の端を上げ、自分を出せと再度言う。
「気に食わないが、そこの男の言う通りだ。だがダイナーの野郎に恩を返すのは気に食わねェ。だからお前の兄を助けてやる。それに、そろそろ出ようと思っていたところだ」
「”鬼の跡目”が力になってくれるなら、もしかしたらやれるかもしれない……!」
「ありがとう!　助かる!!」
　そこから次々に協力するという囚人達。
　海賊王や白ひげ達と個人で渡り合った伯爵。
　世界の破壊者と恐れられる大海賊。
　世界中の美女達の首をコレクションする怪女。
　武力で制した王国で悪政の限りを尽くした愚帝。
　能力で巨大化する超弩級の巨人。
　他にも世界中に悪名を轟かせる凶悪な大罪人達が声を上げた。
「ムルンフフフ!　ルイン・ダイナーを必ず私のモノにする……!
その為なら、アンタのお兄さんを助けるの、手伝ってあげる!!」
「覇王を見たからには、ぐずぐずしてる暇はないニャー!」
「トプトプトプ……!　酒の恩は忘れねェ!!　おれも手伝ってやる!」
　あらゆる場所から脱獄したい理由と恩を口に出す中、そんな彼らを見るイワンコフの顔は厳しい。
「麦わらボーイ!　クロコボーイはヴァターシが抑え込められるからいいけど、コイツらは無理っチャブル!　いずれも政府に存在を消された大悪党!　大人しく力を貸す保証はないわ。ヴァターシは反対よ」
「……おれ、難しいことは分からねェ。でも、コイツらがいればエース

を助けられるかもしれねェ！　力を借りてェ!!!」
「……コイツらが解放されれば、必ず海は荒れる！　それでもいいっチャブルの!!!　ヴァナタ、兄の為に罪なき一般市民を犠牲にするって言うの!!?」
　間違いなくそうなるという確信を持ってイワンコフはルフィに声を荒げる。
　革命軍として、民衆の命を脅かす芽は絶対に潰さなければいけない。
　絶対に連れて行くべきではないというイワンコフにルフィは目を伏せ、覚悟する。
「……おれが責任を持つ！　コイツらに絶対悪さはさせねェ!!!」
　ルフィから放たれた無意識の覇王の圧力に、イワンコフは驚愕する。
　ビリビリと肌を刺激する圧力にイワンコフだけでなく、クロコダイルやバレット、他の囚人達も反応する。
　口角を上げるバレットや舌なめずりをする怪女、カタリーナ・デボン。
「安心したまえ。我々には共通の意思がある。各々、向かう方向は違うようだが、君の兄を助けるという第一の意思は同じ。君の兄を助ける事は約束しよう……！」
「わしからも頼みたい!!　エースさんとは……、彼が白ひげ海賊団に入った時からの付き合いじゃ。エースさんを救いたい！　後生の頼みじゃ、連れていってくれ!!!」
「イワちゃん！　戦争が終わった後の事は何とかする！　だから、頼むよ!!!」
「ン～～！　仕方なっチャブル！　ヴァナタはどうせ止まらない！　なら、後は進むのみ……!!!」
「イワちゃん、ありがとう!!!」
　必ず協力するという貴族然とした老人、パトリック・レッドフィールドと、友を助けたいと言う魚人、ジンベエ。
　そんな彼らの声と、ルフィの覚悟のある目を見たイワンコフは仕方

なく諦める。
インペルダウン、ＬＥＶＥＬ６。
世界を震撼させる凶悪な囚人達がこの日解放された。
兄を救う為、最悪の戦争へ参戦する為、ルフィは特大の爆弾達を抱える事になる。
己よりも遥か格上の彼等の手綱を握れるのかは分からない。
だが、未来の海賊王を支える者はこれから加速度的に増えることになるだろう。
一人の”王”がまたこの世に産声を上げた。
強者の中で磨かれる王はより高みへと上る。
「おめェは出ねェのかよ～～！　シリュウ看守長!!!」
「……お前らと一緒にすんじゃねェよ。覇王のメシも食ってねェ」
「じゃァ、永遠にここにいろや！　馬鹿が～～!!!」
ゲラゲラと笑う囚人達と檻の中、睨みつける看守服の男、シリュウ。
インペルダウンの看守長であるが、素行故に投獄されているこの男は、唯一檻から出なかった。
「――さァて！　こうなったら時間がナッサブル……!!!　力技でこの監獄を突破するわよォオ!!!　ヒーハー!!!」
「野郎共、行くぞ～～!!!」

□??□??□??□??□??□??

「ハハハハ！　これで決定していた未来はなくなった。後は、お前ら次第だぜェ！　時代はどう動く……!!!」
モモイロ島、カマバッカ王国の城内。サンジに”覇気”について教えていたダイナーは、突如笑い出した。
海を越えた遠い先の監獄の様子を見ていたダイナーは、愉快、愉快と笑う。
「おい、ダイナー。何いきなり笑ってんだ。気持ち悪りぃな」
「うるせェなァ、サンジ。少しばかり、愉快な事があった」
「そうかよ。んで、この覇気ってのを今から修行するのか？」

ホワイトボードに書かれた覇気のイメージ図と内容。それらを見たサンジはダイナーに質問する。

その質問にダイナーは、サンジにとって予想外かつ最悪の答えを出す。

「――いや、まずはお前の”血統因子”を覚醒させる。自分の血を受け入れろ、サンジ」

第9話”インペルダウンの混乱”

『侵入者です!!!”王下七武海”マーシャル・D・ティーチ、”黒ひげ”とその一味!!! 明らかな敵意をもって獄内へ侵入!!! 目的は不明!!!』

正面入り口の警備からの報告に、猫のような被り物を被った男、インペルダウン副署長、ハンニャバルは口から泡を出して震える。

現在進行形で脱獄を企てる、最悪の世代の一人、”麦わらのルフィ”と”オカマ王”イワンコフ、”革命家”イナズマ。そして彼等によって解放されたＬＥＶＥＬ６の全囚人。

インペルダウンの歴史が始まって以来、最大最悪の状況。

最下層から各階の囚人達を全て巻き込み、怒涛の勢いで上る一騎当千の化け物達に加え、ＬＥＶＥＬ２では”道化のバギー”が囚人を解放し、脱獄を企てる始末。

そんな最悪の状況にトドメを刺すように、正面入口から七武海の一人、”黒ひげ”が目的不明のまま侵入した。

「こんなもの……!!! 何からどう手をつければいいのだ……!!! ＬＥＶＥＬ６の囚人達全てなど、署長の手にも負えん……ッ」

最早、己の責任など言ってる場合ですらない、と言うハンニャバルはかつてない程の絶望感と焦りを覚えていた。

ＬＥＶＥＬ６に収容されていた囚人達は、いずれもが世界でも指折りの強者達。

覇気や強力な悪魔の実の能力者である彼等が相手では、インペルダウンが誇る最強戦力、マゼラン署長でも一人では厳しいものがある。

そんな絶望的な状況にハンニャバルは気を失いそうになる中、電伝虫から希望の声が聞こえてくる。

『ハンニャバル!! 聞こえるか』

「あ!! ……マ……マゼラン署長ですか!! 今どこに!?」

『今、ＬＥＶＥＬ２だ。暴れ出したバカ共の処置を終えた。この階は出口も塞ぎ、直全員が動けなくなる』

マゼランの言葉に驚くハンニャバル達。

迅速な対応と頼もしさに、安心感を覚えるが、続くマゼランの言葉に気を引き締める。
『黒ひげの襲撃の意味は全くわからんが、それよりもＬＥＶＥＬ６のバカ共の処理が優先だ。流石におれ一人で奴等の相手は難しい。不本意ながら……シリュウを解放した。おれとシリュウで挟み討つ……！』
「……!!」
『今こそ我らが愛する民衆の為に戦う時だ……!!　全身全霊を賭してそ（LEVEL4）こを死守しろ！　直ぐに行く……!!!』
マゼランの言葉に涙ぐむハンニャバルは気合を入れ直し、愛する民衆の平和を守るため、己の職務を全うするため、気合の咆哮を上げる。
世界一の大監獄、インペルダウン。
唯二つの例外を除き、鉄壁の歴史を誇った大監獄は未曾有の非常事態に陥る。
たった一人のルーキーの侵入を許した事で、世界から存在を消された大悪党が全て解放され、今尚、解放者は増すばかり。
協力する事などあり得ぬはずの囚人達が、謎に協力し合い、殺せるはずの囚人を、一人たりとも殺す事が出来ない。
インペルダウンの全職員。この日、命を賭した戦いに臨む。

□??□??□??□??□??

メリケンサックを着けた巨大なコアラ、ミノコアラ。
棍棒を両手に持つ巨大な人型のサイ、ミノリノケロス。
モーニングスターを持つ巨大な人型のシマウマ、ミノゼブラ。
インペルダウンが誇る強靭な戦力、獄卒獣三人が、バレット一人に一瞬で倒される。
周囲では看守達が成す術なく倒されていき、恐ろしい速度で囚人が増え、突き進んで行く。
「――みんな、めちゃくちゃ強ェな！　手出す暇もねェ！」
「ヒーハー！　流石っタブルね！　ヴァターシ達の出番がまるでナッ

シブル!!!」
　ＬＥＶＥＬ６の天井に穴を開け脱出した一行は、ＬＥＶＥＬ５、ＬＥＶＥＬ４と囚人達を解放しながら進み続けていた。
　先頭を前に、前に進むルフィを先行するのはダグラス・バレット。海賊王の船に乗っていた異次元の強さを誇る怪物である。
　眼前に敵が現れた瞬間、目にも留まらぬ速さで接近し、拳の一振りで全てが薙ぎ倒されていく。
　ここに至るまで一切戦闘を行っていないルフィは、ＬＥＶＥＬ６の囚人達の強さに驚く。
「フン。この程度じゃ肩慣らしにもならねェ」
「久しぶりの自由だ！　てめェら、さんざん好き勝手やってくれやがった看守共をぶち殺してシャバに出るぞォ!!!」
「囚人全て解放して困らせてやろうぜ!!!　海楼石の鎖が無ければ、こんな奴ら怖かねェ!!!」
　久しぶりの闘いに物足りなさを覚えるバレットとゲラゲラと笑い暴れ回る囚人達。
「そういえば、ダイナーがインペルダウンにやって来た時、どうして分からなかったのかしら？」
「イワさん、数日前電伝虫の映像が途絶えた時がありました。その時かと」
「そんな事もあったわねェ。彼の覇気で電伝虫が気絶したっていうことタブルね」
「あとは、〝触れるべからず〟に従い、職員達の方で彼の映像のみ映さなかったのでは？」
「なるほどねェ。通りで私達が知らなかったわけね」
　イワンコフ達はＬＥＶＥＬ５とＬＥＶＥＬ６の間に、ＬＥＶＥＬ５．５、ニューカマーランドという地獄の楽園を作り、潜んでいた。
　各地の電伝虫から獄内の情報の全てを知り、また、看守のゴミの新聞から外の情勢も把握している。
　それにも関わらず、〝覇王〟ダイナーが〝火拳のエース〟の元へ来たどころか、インペルダウンに侵入したことすら知らなかった。

なるほど、ヒーハー！　と納得するイワンコフとグラスの中のワインに口を付けるイナズマ。
しかし、ダイナーの行動のおかげでここまでの戦力が味方に付いてくれたことに、イワンコフはニヤリと笑う。
「最悪な状況!!　攻めるなんて、ん～～♡　言ってられない!!!　署長が来るまで持ち堪えるのよ!!!」
「ここを出たら、政府の奴らには地獄を見せてやる。署長が来るまで持ち堪える？　お前らにおれが止められるかァ!!?」
己の心情を曲げてまで、インペルダウンを守り抜こうとする扇情的な格好をした女、獄卒長サディちゃんと、それに言葉を返す頭頂部から左目上までに傷がある男、バーンディ・ワールド。
世界の破壊者と呼ばれるワールドは能力で、己のスピードを１００倍にして一瞬の内にサディちゃんに迫る。
「ッ!!?」
「歯ァ、食いしばれェ！」
ドガンッ、という轟音と共に殴り飛ばされたサディちゃんは、気絶した獄卒獣へと衝突し、倒れ伏す。
全身の骨が折れ、己の部下の巨体に押し潰されたサディちゃんは苦痛の声を上げる。
「ん～～♡　屈辱的!!!　覇王といい、最近いいことないわ～～！」
数日前、非番の日にダイナーと出会った時の事を思い出し、顔を赤らめたサディちゃんは叫ぶ。
「――ここが地獄の大砦!!!　何人たりとも通さんぞォ～～～～!!!」
インペルダウン副署長、ハンニャバルが両側に刃が付いた薙刀、”血吸”を振り回し、ルフィ一行の前にーーＬＥＶＥＬ３への階段の前に、立ち塞がる。
「か弱い庶民の明るい未来を守る為!!　前代未聞の海賊”麦わら”!!
私が貴様らに敵わぬのは百も承知！　だが!!!　ここから先へは、死んでも通らせん!!!」
「けよく言った。後は任せろ……！」
『し、署長!!!』

「まただ……！　あのドクのやつ……!!!」
　現れたインペルダウン署長、マゼランに、ハンニャバルや看守達が歓喜の声を上げる中、ルフィは己を死の一歩まで追い込んだ下手人を警戒する。
「よくもやってくれたな、〝麦わらのルフィ〟……！　どうやって生き延びたのか知らんが、あの時、確実に息の根を止めるべきだった」
「お前に構ってる暇ねェんだ！　おれはエースを助けに行く!!!」
「何をふざけた事を……！　それによって、罪なき民衆が恐怖を覚える。解き放たれたクズ共によって、命を失う！　脱獄など、絶対に許さん!!!」
「……なら、今度こそお前をぶっ飛ばして、おれは行く!!!」
　全身の血流を上げ、身体能力を底上げするルフィ。
　かつてマゼランの毒にまるで歯が立たなかったルフィは、なんとかマゼランを倒そうと考えを巡らせる。
　すると、ルフィ達の後方から更なる敵が現れる。
「お前ら、さっきはよくもおれをコケにしてくれたなァ。ぶった斬ってやる」
　看守服に身を包み、葉巻を咥えた男、看守長シリュウが額に青筋を浮かべ、後方を塞ぐ。
「インペルダウン史上最大の一大事だ。頼むぞ、シリュウ」
「大失態だなァ、マゼラン。おれがいればこんな事にはならなかったはずだ」
「これが終わればどのみち、俺の首は飛ぶ。無駄口叩かないで、やるぞシリュウ……！」
「ハッ！　お前との共闘たァ、久しぶりだ!!」
　そう言って一気に駆け出す二人。
　迫り来るマゼランにルフィが攻撃を仕掛けようとしたところーー。
「お前じゃまだ勝てねェよ、小僧」
「バレットのおっさん！」
「後ろは、我が行こう」
　バレットが前方のマゼランを迎え撃ち、拳を放つ。

かつて同じように拳を叩き付け、毒に侵されたルフィは、声を上げようとしたところ、予想外の光景に目を剥く。
「ガファァァッ!!!」
黒く染まり、黒い稲妻が迸るバレットの拳はマゼランに触れる事なく、凄まじい轟音を響かせながら彼を吹き飛ばした。
「なんだ!!?」
「凄まじい覇気……!!! これが噂に聞く、触れない攻撃……!!!」
「イワちゃん! 知ってんのか!!?」
「この世界にはヴァナタが知らない”力”がまだまだある……! あれはその中でも最高峰の”力!!!”」
ルフィの理解の及ばない戦いは後方でも行われており、愛刀を手に持つシリュウと、看守の刀を奪ったレッドフィールドは目にも止まらぬ斬撃合戦を繰り広げている。
未来を見ているのではないかという読みに、レッドフィールドが一気に捲し立て、針の穴程しかない隙にシリュウの体を斬り裂いた。
「すげェ……」
「いい、麦わらボーイ。ヴァナタがこれから行こうとする戦争は、この化け物達と鎬を削った”白ひげ”がいる。半端な覚悟じゃ、舞台にすら上がれない!!!」
「……覚悟なんて、ここに来た時から出来てる。それに今は、みんながいる! 必ず、エースを助け出す!!!」
「フフ。いいわ! ヴァターシ達が必ずエースボーイを助けられるようにしてあげる!! だから今はこの戦いを見届けましょう。どのみち、ヴァターシ達が加勢したところで彼らの邪魔になるだけっタブル」
「あぁ!! バレットのおっさん! レッドのおっさん! 頑張れ〜〜!!!」
普段は一味の船長として先陣を切り敵のボス達と戦って来たルフィだが、この日初めて応援する側に回る。
一人の男として、一味のリーダーとして、強敵を倒して来た男は、兄を助けるために自分の心情すら捻じ曲げた。

強烈な殴打を食らって尚立ち上がる毒の怪物を見ると、かつての苦痛が脳裏に浮かぶ。
背後から感じるプレッシャーは、到底今の自分が勝てるものではないだろう。
しかし、そんな怪物達を薙ぎ倒す味方が心強いと感じる。
生死の淵を彷徨い、恐怖を知り、そして特級の強者達の戦いの中に身を置いたルフィに一つの変化が生まれる。
「なんだ、これ……？　誰がどこにいるのかが、分かる……」
ルフィに生じた一つの変化。
気配を感じる”力”、”見聞色の覇気”。
バレットの目にも止まらぬスピードが、凄まじい勢いで倒れていく看守達の気配が、不思議なくらいに感じるようになった。
全てが極まった極限状態の中、バレットやレッドフィールド達の覇気に影響されたルフィは、不完全ながら覇気を覚醒させた。
戦いの中で成長する覇気は、極限のストレスと極まった強者達により、少しずつ、だが確かに成長していくことになる。
”麦わらのルフィ”。後に”四皇”の一人となる男の見聞色の目覚めである。

第１０話”進撃”

「王の毒竜（キングヒドラ）……!!」

武装色の覇気で強化された三首の毒竜が鎌首をもたげる。

絶えず流動する致死の毒が漆黒に染まり、硬度と威力を極大に増したそれは、かつてルフィを瀕死に追いやったそれとは大きさも、強度も次元が違うものだった。

マゼランは全身の痛みに息を切らしながらバレットを睨みつける。

「あいつ……、あの時本気じゃなかったのか……ッ」

「……死んでも、ここは通らせん！」

「フン。心意気はいいが、そんな覇気でおれを止められるか!!?」

毒の三首が大顎を開きバレットへと迫る。

触れれば一瞬で体の自由を奪い、死に至る毒竜を前に、己の拳を黒く染め上げ、覇王色の覇気を纏うバレット。

覇王色を身に纏う事が出来る一握りの強者。

その溢れ出す覇王色の覇気で看守達は次々と意識を失う。

「生ぬるいなァ！」

覇気を纏った触れない一撃は迫る三首を全て消滅させ、その衝撃がマゼランへ襲い掛かる。

「グゥッ……!!!」

覇気を身に纏い耐えるマゼランへ、バレットは拳を叩き込む。

先程の巻き戻しかのように同じように吹き飛ぶマゼランに、ハンニャバルやサディちゃんは声を失う。

自分達が絶対的な信頼を寄せるインペルダウンの最強戦力が成す術なくやられている。

そんな事実に心が折れそうになる。

性格に難あれどマゼランに匹敵する実力をもつシリュウも、ＬＥＶＥＬ６の脱獄囚、パトリック・レッドフィールドに一方的にやられている。

「マゼラン署長とシリュウ看守長がここまで一方的に……!!?」

「ん～～♡　なんて悪夢……！」

「ムルンフフフ！　流石は〝鬼の跡目〟ねェ。凄まじい覇気……！」
「相変わらず強ェな」
「……すげェ。バレットのおっさんもレッドのおっさんもめちゃくちゃ強え」
　かつて己を瀕死にまで追いやったマゼランを、一方的に余裕すらもちながら打ちのめすバレットに感嘆の声を漏らすルフィ。
　見聞色の覇気を覚醒させた今、彼らの強さ、凄さが以前よりも強く感じた。
　黒く染まった〝毒竜〟など、今の自分では手も足も出ないと言う事が分かってしまう。
「おれにもあの黒いヤツ出来るかな……？」
「ヴァナタはこの極限の状況と規格外の化け物達に当てられて、見聞色の覇気を覚醒したばかり。本来、覇気の習得には多大な時間が必要っチャブル。黒いヤツ――〟武装色の覇気〟を習得するには時間が足りなすぎるわ。今はその気配を感じる感覚を忘れないことね」
「イワちゃん……。おれがもっと強くなれば、皆を守ることができる。あいつらみてぇに強くなりてェ!!!」
「フフ。それならエースボーイを助け出してから修行することね！　案外、バレットも手伝ってくれるかもしれないわよ？」
「……あぁ！　絶対助け出して、もっと強くなるよ!!!」
　決意を固めたルフィは目前の戦いに目をやる。
「バレット！　処刑までそう時間もあるまい。さっさと片付けて先に行くぞ」
「おれに指図するんじゃねェ。だが、そうだな。そろそろ片付けよう」
「……おいおい、そう簡単に行かせると思うけガッ!!?」
　全身血塗れで刀を握るシリュウを一瞬で切り刻むレッドフィールド。
　強い覚悟と怒りで睨み付けていたシリュウだが、手足を、胴を、顔を、全てに斬撃を受け、己の血の池に沈んだ。
「シリュウ！」
「他所に構ってる隙はねェよ」

そう言うなり、バレットの全身が黒く染め上がる。
今まで以上の強靭な覇気が全身を包み込み、凄まじい覇王色の覇気が黒い稲妻となり渦巻く。
その姿はまるで”覇王”のようで、レッドフィールドはニヤリと笑う。
「……恐ろしいな。あの時、”麦わらのルフィ”の息の根を止めなかったことを後悔している」
「カハハハ！　今まで世話になったな！」
その瞬間、凄まじい轟音と共にバレットの姿が消え、マゼランを殴り飛ばす。
血反吐を吐きながら吹き飛んでいくマゼランは、何層も壁を破壊していく。
既に意識はなく、インペルダウン最強の男は、伝説の海賊、”鬼の跡目”ダグラス・バレットに敗れた。
「先へ進むぞ小僧共」

□??□??□??□??□??□??

「ギャハハハ!!　このままド派手に脱獄じゃァ!!」
「……やけに警備が手薄だガネ」
インペルダウン、ＬＥＶＥＬ１、”紅蓮地獄”まで登ってきた赤鼻の男、バギーは脱獄への希望に笑い声を上げ、共に行動する眼鏡の男、Ｍｒ．３、ギャルディーノは警備の手薄さと、追手の少なさに疑問を抱く。
囚人達を解放し、インペルダウンを混乱に陥れ脱獄を計る自分達を放置するだろうか、とＭｒ．３は考える。
「おい、バギー。なにかおかしいガネ」
「あァン？　今さらビビってんじゃねェよ、３!!!　ここまで来たんだ、あとは脱獄するだけだぜェ!!?」
「そうだぜ３兄さん!!　あとは出るだけじゃねェか!!」
「いや、あまりにも追手が少なすぎるガネ。私達が生きていることな

んてマゼランも知っているはず……！　マゼランが来ないってことは、何かヤバイ事が起こっているということだガネ」
「それならそれで、好都合じゃねェか！　その混乱に乗じておれ様達は、ここことはおさらばだ!!」
「うぅん……。確かに、ここまで来たら行くしかないガネ」
そう言って納得のいかないままにバギーや解放された囚人達と走り出すＭｒ．３。
その瞬間、背後からバギーへと看守が吹き飛んできた。
「ぶへぁッ！」
『キャプテン・バギー!!!?』
「なんだガネ!!?」
凄まじい勢いで吹き飛んできた看守が背中に衝突したバギーは、地面に顔を勢いよくぶつけ、汚い声を上げる。
「誰だゴルァ～～!!!　ぶっ殺して――」
「あ、お前ら無事だったのか!!　よかった!!」
「え～～～～!!　麦わらァ～～～～!!?」
死んだと思っていたルフィが現れたことに目を飛び出して驚くバギーとＭｒ．３。
「てめぇ、生きてやがったのか!!」
「あぁ！　なんとか生きてた！　お前らも無事でよかった！」
『ゲフッ!!』
ルフィのあまりにも純粋な言葉に心を痛めるバギーとＭｒ．３。
胸を押さえるバギーはルフィから視線を逸らし、横に目をやると、先程以上の衝撃を覚える。
「げッッ!!?　!!　ば、バレット……さん……!!!?」
「ア？　おぉ、久しぶりだな。なんだ、お前もここにいたのか、バギー」
厳つい顔でそう声をかけるバレットにバギーは冷や汗を流す。
「おい、バギー！　こいつ、あの”鬼の跡目”じゃないガネ!!?」
「バレットのおっさん、バギーのこと知ってんのか？」
バレットに生意気な口を聞くルフィに目を見開いてダラダラと汗を垂れ流すバギー。

Ｍｒ．３はルフィ達と共に来たかつてのボス、クロコダイルを見て驚愕している。
「あァ。コイツとおれは昔同じ船――〝海賊王〟ゴールド・ロジャーの船に乗っていた」
『えェ～～～～!!!?』
一同騒然。
Ｍｒ．３一行、ルフィ一行、全員が声を揃えて驚愕した。
かつて世界の海を制覇した海賊の王の船。
その元船員（クルー）となれば、それだけで特級の賞金首となる。
そんな衝撃の事実にクロコダイルは驚き、しかし、あまりのバギーの弱さにため息を吐く。
「おまえ、あれから何も鍛えていなかったみたいだな。シャンクスの奴は四皇にまでなったみてぇじゃねェか。てっきり、おまえとシャンクスは同じ船に乗るもんだと思ってたがな」
「い、イヤだなぁバレットさん。おれがシャンクスと同じ船に乗るわけねェじゃねェすか！」
「ハッ！　あれだけバカみてェに仲良く喧嘩しまくってた奴がよく言うな」
そんなバギーとバレットのやり取りを聞いた一行は更に驚愕し、バギーに助けられた囚人達は感動と尊敬に涙すら流す。
「まぁ、いい。話は後だ。急がねぇと時間がねェ」
「そういえば、マゼランが現れないが、もしや倒したのか？」
「バレットのおっさんが倒してくれたぞ！　あとシリュウって強ェおっさんもレッドのおっさんが倒してくれた」
「レッドのおっさん――って、〝孤高の赤〟!!?　他にもヤバイ奴ばっかだガネ～～！」
かつて恐ろしい事件を起こした規格外の怪物達。
そんな囚人達が共に行動していることに戦慄し、イヤな予感はこれだったガネ、と歯をカチカチと震わせるＭｒ．３。
しかし、マゼランと看守長シリュウが倒された今、もはや自分達を止められる者はいない。

あとは外の海軍の艦隊のみ。
Ｍｒ．３は眼前の恐ろしい面子から視線を外し、脱獄後の生活に夢を馳せるのだった。

□??□??□??□??□??□??

「ゼハハハハ！　おいおい、警備がやけに手薄だな。まァ、いい！　野郎共、このままリフトでＬＥＶＥＬ６まで一気に行くぞ!!」
ルフィ一行がＬＥＶＥＬ４にてマゼラン、シリュウと相対している頃、何も知らない粗暴な男、王下七武海の一人、”黒ひげ”マーシャル・Ｄ・ティーチは自身の野望のため、インペルダウンに侵入し、手薄な警備を薙ぎ倒しリフトで一気に降りる。
「これを成功させればおれの計画は一気に進む……！　ゼハハハハ!!」
仲間達も一緒に笑う中、これより数分後、彼らはかつてない困惑と怒りを覚えることになる。
”黒ひげ”危機一髪ッ！

第11話”超弩級巨大戦艦”

「――”火の神（アータル）”」

世界最強の男、”覇王”ダイナーの指先から漆黒の極光が射出される。

濃密な武装色の覇気と覇王色の覇気のエネルギーがサンジを撃ち抜かんと迫る。

「し、死ぬッ！　おわっ！」

「ハハハハ！　死ぬ気で避けろ。マジで死ぬぞ！」

「ふ、ふざけんな!!!」

漆黒の極光が縦横無尽に暴れ回る。

直撃すれば簡単に命を奪うであろう規格外の攻撃を、冷や汗を流しながら必死に避けるサンジ。

サンジはこんな恐ろしい状況になった経緯を思い出す。

□??□??□??□??□??□??

「――いや、まずはお前の”血統因子”を覚醒させる。自分の血を受け入れろ、サンジ」

これからの修行内容を聞いたサンジは、ダイナーの口から発せられた予想外かつ最悪な返答に驚愕する。

「な……ッ！　な、なんでお前、その事を……！」

「少し調べさせてもらった。お前もなかなか大変な人生だったみてェだなァ」

サンジを鍛え上げるために血縁関係を調べたダイナーは、彼のこれまでの人生の壮絶さに口笛を鳴らしていた。

武力で北の海を制圧した武力国家の王子。

強靭な兵士にすべく生まれる前から改造を施された子供達。

改造による超人的な力を持たずに生まれた唯一の子供。

失敗作として父親からも兄弟からも虐げられ、”死亡した”事にされ幽閉された過去。

この残酷な世界においても相当な境遇。
「……ッ」
「まァ、今は過去の事はどうでもいい。お前も家族は捨てたんだろう？」
「……あぁ、俺はもうヴィンスモークじゃねェ。ただのサンジだ」
「なら、それでいい。俺は、友としてお前を鍛える。そこに過去は一切関係ねェ」
――だが。
「強くなるために、お前の中の血を受け入れてもらう」
「……なんだと？」
「お前の父親――ヴィンスモーク・ジャッジの研究、血統因子による強化は確かにお前の体にも眠っている」
「ふざけんじゃねェ!! あいつは俺の父親じゃねぇし、おれには、あいつらみてぇな力はねェ！ おれは……おれは、あんな感情が欠落している化け物じゃねェ!!!」
サンジの生家、ヴィンスモーク家は闇の世界において知らぬ者はいない悪の軍団”ジェルマ６６”を保有するジェルマ王国の王族だ。
王、ヴィンスモーク・ジャッジによる改造により、兄弟達は超人的な才能と引き換えに、相手を思う気持ちや己の死を恐れる気持ちを持たずに生まれた。
そんな中に生まれた超人的な才能を持たず、感情もあるサンジ。
兄弟と比べ、明らかに弱いサンジは、肉体的にも精神的にも暴力を受けた。
「ただ眠っているだけだ。失敗作と呼ばれていたようだが、”外骨格”も”固有能力”も、確かにお前の中にある。人体のスペ俺シャリストが言うんだ、間違いない」
「……仮に、おれにもそれがあるとして、そんな力、おれはいらねェ。あんなクズ共と同じになんか、なりたくねェ！」
人を人とも思わない父親、兄弟を思い出し怒り叫ぶサンジ。
そんなサンジにダイナーはゲンコツを頭に落とす。
「甘ったれんじゃねェ。力に貴賤はねェんだ。強くなりてェんなら、

なんでもやれ」
「いやだ！　あんな力、おれは絶対使わねェ!!!」
「――お前の固有能力、”透過能力”だぞ」
「……何……だと……」
透過能力――サンジが夢に見ていた能力。
かつて、”スケスケの実”の能力者相手に咽び泣く程思い焦がれていた能力が己にあるという言葉を聞き、言葉をなくすサンジ。
女好きである彼が抱いていた男の夢を実現する能力。
そんな長年思い描いていた能力が手に入るかもしれないとダイナーは言う。
「い、いや、だからって、おれは――」
「――サンジ、いや、心の友よ。おれと一緒に女風呂、覗かねェか？」
「師匠、よろしくお願いします」
過去の家族への憎悪、血統因子による力への恐怖、最低の夢への罪悪感。
それら全てを一瞬で忘れてサンジはダイナーへと土下座するのだった。

□??□??□??□??□??

見渡す限りピンク色の砂浜。
数日前、ダイナーとサンジが再会した場所に二人は立っていた。
「早速、お前の血統因子を発現させようぜェ」
「……発現させるってのは、もういいけどよ。どうやってやんだよ？」
「ハンッ。任せとけ」
そう言うなり、ダイナーはサンジの頭に手を乗せる。
乗せたダイナーの手から武装色のエネルギーが溢れ、サンジへと纏わりつく。
「おわっ。ダイナー、なんだよこれ！」
「黙って待ってろ」
気味が悪い状況にサンジは反抗するが、ダイナーは力で抑えつけ、

纏わりついた武装色のエネルギーは徐々にサンジの肉体へと浸透していく。
異物が入り、体が熱を帯びる。
全身の燃えるような熱さにサンジは苦痛に顔を歪め、体内で何かが蠢く感覚に恐怖を覚える。
「お、おい、これ本当に大丈夫なのか!!?」
「……」
いつになく真剣な表情のダイナーにサンジは口を噤む。
それから数分、熱さと痛みと気味が悪い感覚を耐え切り、とうとうダイナーの手が離れる。
「――よし。これで眠っていたお前の血統因子は覚醒した」
「……はぁ……はぁ、何にも感覚は変わらないが、ほ……本当に成功したのか……?」
息も絶え絶えにサンジは疑問を浮かべる。
凄まじい苦痛を乗り越え、晴れやかな気持ちではあるが、己の体に何か変わったような感覚はない。
「ハハハハ！　お前の血統因子は確かに覚醒した。だが、本番はこれから。オラ、歯ァ食い縛れェ！」
突然ダイナーはサンジを殴り飛ばす。
無抵抗のまま強烈な拳を受けたサンジは凄まじい勢いで吹き飛び、砂浜に頭から突き刺さった。
先程までの苦痛による疲労と今の強烈な拳により、ピクピクと生まれたての子鹿のように足を震わせながら立ったサンジは怒りに叫ぶ。
「だ、ダイナー！　テメェ、なにしやがる!!」
「血統因子は覚醒したがァ、それを真に覚醒させるには、命懸けの戦闘あるのみ。気張らねェと、死ぬぞォ！」
凄絶な笑みを浮かべたダイナーの指先から漆黒の極光が迸る。
命を容易く奪うだろう黒き光が一直線にサンジへと向かい、そんな恐ろしい光景に目を飛び出し驚きながら必死に避ける。
「オラオラ、気張れやァ！」
「テメェ、覚えてろよ!!」

□??□??□??□??□??□??

「とうとうここまで来た!!」

世界最高の監獄、〝インペルダウン〟の全囚人を解放し、引き連れたルフィはとうとうＬＥＶＥＬ１から海上、正面入口へと上がった。

ＬＥＶＥＬ６の特級戦力が前代未聞で手を取り合い各層の囚人達を解放し進んだ結果、囚人側の被害は数少なく、数千人規模の勢力となり、海上へと到達した。

「あとは、軍艦を奪い脱獄するのみじゃのう」

「ヒーハー!!! これだけの戦力、マゼランもいない中失敗する方がおかしいっタブル！」

「うまくいきすぎて、何かありそうだ」

ジンベエ、イワンコフ、クロコダイルがそれぞれ口を開き、正面入口の扉を開く。

この先には海軍の艦隊が待ち受けている。

１０隻はいるであろう海軍の軍艦、海兵は実に８千人程。

その軍艦を奪い、エースの処刑場であるマリンフォードへ向かうのが、今回の計画だった。

――しかし。

「な……ッ」

「船がねェ!!?」

見渡す限りの凪いだ海。そこにあるはずの軍艦が一隻もなかった。

「どういうこった……」

「成る程。敵も思った程バカじゃなかったようだな……。海底には大型の海王類達。確かにこの凪の帯こそがインペルダウン最大の防御壁だ」

頭を抱えるバギーと納得したような顔のクロコダイル。

解放された囚人達が口々に諦めの声を発する中、一人の巨人が声を発する。

「みんな、おれに乗れー。歩いてマリンフォードまで向かう」

巨人――サンファン・ウルフがそう言うと海上へと飛び立ち、その瞬間、彼の体が巨大化した。
元々規格外の大きさだった巨体が十倍に膨れ上がり、海に沈んだ彼は海面へと顔を出す。
『な、なんじゃこりゃぁ～～～～!!!?』
見たことも聞いたこともない巨体。
かつて国を引いたという規格外の巨人のゾンビと戦ったことのあるルフィだが、目の前にいるウルフの大きさは比べようもなく、口を大きく開け驚く。
「みんな、早く乗れー。おれ、あんま足早くないから急がないとー！体に力も入らねーし」
「お前、大丈夫なのか!?」
同じ悪魔の実を食べた者として、ルフィは思わず問いかける。
海に入れば体から力が抜け、成すすべなく沈んでしまう体質である悪魔の実の能力者にとって、海は天敵だ。
「足つくし息もできるから大丈夫だー。いいから早く乗れー！」
皆が驚く中、早くしろと言うウルフに一人の男――バーンディ・ワールドがニヤリと笑い、声をかける。
「バロロロロロ！　おい、デカイの。面白ェこと考えたぜ。試させろよ」
「ん？　なんだ？」
「おれの食った悪魔の実は”モアモアの実”。触れたものの大きさを最大１００倍まで倍化させる事が出来る。お前を１００倍にしたらどうなるんだろうなァ？」
「……面白そうだな、それ！　やってくれ！」
「バロロロロロ、そうこなくちゃな!!　そら、いくぞ！」
ウルフが差し出した指にワールドが触れた瞬間、ウルフの肉体が爆発的に膨れ上がる。
ただでさえ深い海底に足がつくほどに巨大だったウルフは、最早ルフィ達からは足しか見えず、頭は雲をついている。
身長１８，０００メートル。
小国であれば一踏みで破壊できるほどに巨大化した。

「バロロロロ!!　これはスゲェ!!!」
「これが人間の大きさか……!?」
「ブォエェェ!!?　じょーダンじゃァないわよーう!!　あちし、ビックリ!!!」
「す、スゲェ～～!!!」
『こりゃ、すごい！　これなら早くつきそうだっつ！　皆早く乗り込めー！』
ルフィ達があまりの巨体に驚く中、遠くから聞こえるウルフの声と共にルフィ達の前に巨大な手が移動してくる。
「ビックリしたけど、これなら行ける！　野郎共、マリンフォードに乗り込むぞ～～!!!」
この日、前代未聞のインペルダウン全囚人脱獄の大事件が起きる。
強靭な看守達を次々薙ぎ倒し、周到な彼らの作戦を打ち砕き、驚愕の方法で逃亡した。
インペルダウンの被害は甚大。
マリンフォードへと向かう戦力は絶大。
世界政府の心労は計り知れない。
”最悪の世代”、”麦わらのルフィ”。最悪の悪人達を脱獄させる！

第12話”海軍の戦略”

「――間に合わなかったか……！　あの巨体では”正義の門”も何の意味もない……！」

バレットから受けたダメージを押して、脱獄を防ぐべく駆けつけたマゼランはインペルダウンを閉じ込める正義の門を跨ぐ”巨大戦艦”、サンファン・ウルフを呆然と眺め、吐き捨てる。

インペルダウンの歴史が始まって以来、前代未聞の大事件。

最早、この監獄にただ一人の囚人もおらず、看守の被害は甚大だ。

閉じ込め、抑えつけておくべき囚人がいない中、マゼランは一つの決断を下す。

「――我々もマリンフォードへ駆け付ける。職員総員戦闘用意を整え、迅速に向かうぞ。この失態は高くつく……!!!」

失うものが何もなくなったインペルダウン全職員は、全ての戦力を最悪の大事件の首謀者、”麦わらのルフィ”及び脱獄囚を捕縛、始末するため、マリンフォードへと進軍する。

世界政府側戦力、マゼラン率いるインペルダウン職員参戦！

□??□??□??□??□??

「――なに？　インペルダウンの囚人達が脱獄しただと!!?」

『”最悪の世代”の一人、”麦わらのルフィ”の手により、LEVEL6以下全ての囚人達が脱獄し、マリンフォードへ向かっています!!!目的は、”火拳のエース”です!!!』

海軍元帥センゴクは、インペルダウンの警護の任務に当たっていた海兵からの報告に頭を抱え、吐き気すら覚える。

前代未聞の大事件。

それも、LEVEL6の囚人ともなれば、伝説級の海賊や罪人ばかり。

かつて、自分達を苦しめた海賊王ゴールド・ロジャーの船員、”鬼の跡目”ダグラス・バレットまでいるということ。

”火拳のエース”の処刑により、四皇の一人、”白ひげ”との全面戦争は避けられないこの度にこの報告。正に悪夢のようだった。
「おい!!! ガープ!!! 貴様の孫がとんでもないことやらかしたぞ!!! どうしてくれるんだ!!!」
「ぶぁっはっはっは!!! いや、これは笑えんのう!」
「おい、どうするんだ! 白ひげだけならまだしも、インペルダウンの全囚人、ましてや、”鬼の跡目”やそれ以外のヤツらの相手なんてしてられんぞ!!!」
「これは、ワシらも本腰入れて臨まねばならんようじゃのう。ルフィのヤツ、何したらこんなことになるんじゃ……」
「ハァ……。私はもう胃が痛くなってきたぞ……」
またお前の孫が、と怒り狂うセンゴクと流石に深刻な表情を見せるガープ。
最近よく話題に挙がる”麦わらのルフィ”に海軍は勿論、世界政府まで手を焼いており、つい先日起きた、”触れるべからず”、”覇王”ダイナーによる黄猿の瀕死事件の真相により、一味への警戒は最大にまで膨れ上がっていた。
「ダイナーの件といい、貴様の孫の一味は手が負えん……」
「ルフィのヤツも大物になってきおったのう!」
「喜んでる場合か!!!」
「そうじゃのう……。実際、今の戦力では白ひげもルフィ達も止められん。どれ、戦力を増強するか」
「……仕方あるまい。私たちも一肌脱がねばな」
センゴクは電伝虫でとある人物に連絡を入れる。
「――ゼファー、私だ。報告は聞いたな。現状の戦力ではヤツらの相手は出来ん。貴様の部下の”モドモドの実”の能力で、私たちを若返らせろ。総員、全盛期の力で臨む。我々の戦力を最大化させるぞ!!!」
海軍元帥”仏のセンゴク”、”海軍の英雄”ガープ。以下、歴戦の海兵達。
全盛期を過ぎ、かつての力を失った海兵達が、力を取り戻す。
肉体は最盛を取り戻し、洗練された技はそのままに、地獄を乗り越

えた覇気は力を増す。
来たる四皇と最悪の罪人達を迎え撃つべく、海軍が誇る智将はあらゆる手を打つ。
世界最大の頂上戦争まで残り４時間！

□??□??□??□??□??□??

「フフフッ！　こりゃァ、とんでもないことになってきたな……！」
頂上戦争前、王下七武海達は緊急会議により再招集を受けていた。
その場で知らされたインペルダウンからの全囚人脱獄とマリンフォードへの進行。
元より想定していた四皇の一人、”白ひげ”のみならず、伝説の囚人達も敵に回るという知らせに、”天夜叉”ドンキホーテ・ドフラミンゴは冷や汗を流しながら笑う。
「……」
「……!?
!!」
世界最強の剣士、”鷹の目”ジュラキュール・ミホークは目を伏せ、世界一の美女”海賊女帝”ボア・ハンコックは人知れず驚く。
「キシシシシ！　わざわざそれを報告するためにおれ達を集めたのか？　どのみち来るんだ！　集めたって仕方がないだろう……！」
「再招集をかけたのは提案があるからだ。元帥センゴクより、この度の緊急事態につき、全盛期を過ぎた海兵――元帥センゴク、英雄ガープ、黒腕のゼファー、以下海兵がとある悪魔の実の能力でかつての力を取り戻す手筈となっている！　貴様等七武海の中で同じく受ける者はいるか!!」
伝令役の海兵の口から出たのは驚愕の言葉だった。
かつて最悪の海賊を倒したことで英雄と呼ばれたガープや、時期同じく凄まじい功績を残したセンゴク。
かつて、海賊王がいた時代に活躍した歴戦の猛者達が力を取り戻す、というのであれば、海賊側からすれば悪夢であろう。
もし、自分がその立場であれば、その戦力を相手に勝ちの目は流石

にない、とゲッコー・モリアは考える。
更に、王下七武海として政府側に立ち、この度の戦争において共に戦うものとはいえ、自分達は所詮海賊。
そんな海賊に最盛期の力を与えるなど、よほど切羽詰まっているのだと再確認する。
「……驚きじゃが、わらわはいらぬ。わらわは今が最盛期じゃ」
「……おれも遠慮しておく」
「キシシシシ！　おれは受けるぞ！　昔の力があれば、白ひげ相手にも負けねェ」
「フフフッ！　面白ェ！　受けてみようじゃねェか!!」
「……フン。海軍の手を借りるのは気に食わないが、かつての肉体に今の剣術、試してみるのも悪くない」
拒否をしたハンコックと”暴君”くま。
申し出を受けたモリア、ドフラミンゴ、ミホーク。
「よし！　ならば、受ける者は第一訓練場へ来い！　そこで能力者が待つ!!!」
招集され、戦争に参加する王下七武海、計五名。
皆が最高の心身で戦争へ臨む。
世界最強の剣士が、かつて”百獣のカイドウ”と渡り合った影の王”が、知略巡らし政府すら操る墜ちた天竜が、皆一様に強大な敵を迎え撃つ。
「ルフィ……。気をつけるのじゃぞ……」
□??□??□??□??□??
「――オラオラ！　まだまだ増えるぞ!!」
「こ、こなくそォ!!」
ダイナーが放つ漆黒の極光を必死に避けるサンジ。
初めは数本の光だったものが、今では数十まで増え、極限の死の気配に、見聞色の覇気は早々に目覚め、加速度的に力を増し続けている。
「はぁ、はぁ……！　そこだ！　食らえ、クソ野郎!!」
「よくあれを避けてここまで来た。が、まだまだだなァ！」

「ゴペッ!!?」
驚異の成長を見せる見聞色の覇気で数十の黒き光”火の神(アータル)”を避け、ダイナーへと蹴りを放つサンジだが、蹴りが届く前にダイナーに殴り飛ばされ、曲線状に吹き飛ばされる。
「見聞色の覇気の成長は目覚しいが、そんな程度じゃァ、外骨格も――透過能力も発現しないぜェ？」
「透過能力……！　おれは、女風呂を覗く!!!」
「……俺が言うのもナンだが、随分スケベに育ったなァ」
スケベ心に蓄積された疲労とダメージを忘れ、全身から炎を上げて突撃してくるサンジに、呆れた声を出すダイナー。
「いいか、サンジ。覇気とは、己を疑わない心だ。最強の自分を思い描け。敵を抵抗なくブチ殺す力を！」
「ブォハァ～～ッ!!!?」
気炎を上げて迫るが、その勢い虚しく殴り飛ばされるサンジ。
「……強過ぎんだろ、お前!!」
「おいおい、今更かよ。数千年鍛え続けた男だぜェ？　たかだか二十生きた位のケツの青いガキが勝てるわけねェだろ」
「なめやがって……！”悪魔風脚(ディアブル・ジャンブ)!!!”」
脚を熱く燃え上げたサンジは一気にダイナーへと迫る。
「死ねクソったれ!!!」
「お？　少しだけ武装色」
「ホゲァ～～!!!?」
今日何度目か分からない程の吹き飛び。
蓄積された疲労とダメージが限界を超え、とうとう気を失うサンジ。
全身ボロボロ、折れていない骨を探す方が早い程の重体に、全身を痙攣させるサンジにダイナーは近づき、武装色のエネルギーを流し、治療する。
「中々成長が早い。2年でどこまでいくかァ、楽しみだ」
ニヤリと笑うダイナーはサンジを肩に担ぎ、城へと歩き出すのだった。

世界情勢が激しく動く中、”覇王”のみ通常運転！

第13話”頂上戦争”

3大勢力の一角、海軍本部。
その海軍本部が存在するマリンフォードでは、前例を見ない程の厳戒態勢が敷かれていた。
白ひげ海賊団の2番隊隊長、”火拳のエース”の処刑に伴い、予想される”白ひげ”、及び予想外の戦力である”麦わらのルフィ”率いるインペルダウン脱獄囚との戦争に、海軍に取れる最高、最大の戦力がこの場に集まっていた。
世界中から招集された名のある海兵、十万。
政府から公認された強靭な海賊、七武海の五人。
そして、かつての比類なき強さを取り戻した伝説の海兵達。
四皇の海賊団を相手にしても勝利を納められるであろう程の戦力に、この度の戦争の原因――”火拳のエース”は冷や汗を流していた。
「なんだ、この戦力……！　なんでジジイが若返ってやがる……!!」
広場の最後尾。高くそびえ立つ処刑台にて己の刑を待つエースは目の前に広がる、恐ろしい程の戦力と、かつて己を何度も叩きのめした恐怖の象徴たる”海軍の英雄”ガープ。
兄弟盃を交わした義兄弟であるルフィの祖父であるガープには、幼い頃から何度も殺されかけた。
忌まわしき実の父親と何度も死闘を繰り広げたというガープは、エースや、義兄弟であるルフィやもう一人の義兄弟にとって、”強さ”という点において、人生で一二を争う存在だった。
そんな男が、自分が知るあの頃よりも、更に若返り、肉体はより強靭に、覇気は更に鮮烈に変貌していた。
更に、若返っているのはガープのみならず、同時期に活躍したセンゴク、ゼファー、つる、他伝説の海兵達がかつての肉体、覇気を取り戻していた。
「どうなってんだ……」
「――万全の態勢で臨むため、我々も若返った」

「センゴク……!」
「少しさがっていろ」
「はっ」
処刑台へ上がってきたセンゴクの言葉にエースは驚き、睨み付ける。
そんなエースに視線も向けないセンゴクは電伝虫を取り、マリンフォード中に放送をかける。
ざわざわと困惑する海兵達と内心を隠し気丈に振る舞うガープ。
『――諸君らに話しておくことがある。ポートガス・D・エース……この男が今日ここで死ぬことの大きな意味についてだ……!!』
困惑する声が大きくなる。
『エース。お前の父親の名を言ってみろ!!!』
「……!! おれの親父は”白ひげ”だ!!」
『違う!!!』
「違わねェ!! 白ひげだけだ!!! 他にはいねェ!!!」
そこからセンゴクによって語られたエースの来歴は全世界にとって、衝撃的なものだった。
決死の覚悟で生まれてくる子を守った母の愛。
そして、父親の名前。
「お前の父親は!!! ”海賊王”ゴールド・ロジャーだ!!!」
マリンフォードの海兵や七武海が、映像電伝虫で様子を見ていたシャボンディ諸島の記者達が、言葉を失い驚愕する。
かつて、世界中を恐怖に陥れ、現在の”大海賊時代”を作り上げた男。
血族、ロジャーとの関わりのあった全ての者が処刑された今、まだ血が生きていたという事実。
エースが苦悶の表情を浮かべ俯く中、センゴクはエースを処刑する意味を話す。
次代の海賊王を作らないために、四皇”白ひげ”との全面戦争になろうとも、必ずエースの首を落とす、と。
センゴクの覚悟を決めた言葉に、海兵達が気合の雄叫びを上がる

中、一人の海兵が報告を上げる。
「”正義の門”が誰の指示もなく開いています!!! 動力室とは連絡もつかず……!!!」
「何だと!?」
すると海の向こうから総数４３隻の大艦隊が現れる。
乗る者達はいずれもが新世界で名を轟かせる”白ひげ海賊団”傘下の海賊達。
凄まじい戦力。しかし、本命の”白ひげ海賊団”本艦は見当たらなかった。
「お前らまで……!!!」
白ひげ海賊団のみならず、その傘下の者達まで助けに来たことに苦しい顔を浮かべるエース。
「攻撃しますか!?!!」
「まだ待て！ 白ひげは必ず近くにいる！ 何かを狙っているはずだ！」
「インペルダウンの脱獄囚も間も無く着く頃だ！ ネズミ一匹の動向すら気を配れ!! 総員、心せよ!!!」
来たる白ひげに備え、最大限の警戒をする海兵と愉快気に笑う七武海達。
「フッフッフッフッフ！ 凄ェことになってきた!!!」
「ゾクゾクしてきたぜ!! 早くこの体を試してェ！ 早く来い！」
すると、センゴク達の見聞色で気配が感じ取られる。
「まさか……！ 総員、湾内――海底から現れるぞォ!!!」
瞬間、三日月型のマリンフォード、湾内に盛大な水飛沫を立てて巨大な船が現れる。
巨大な白鯨を象った船と、次いで現れる鯨を象った3隻の船。
「し、”白ひげ海賊団”が現れたぞォ!!!」
白ひげ海賊団の船、モビーディック号がシャボンコーティングをして海底から現れた。
当然、乗るのは――。
「”白ひげ”……！」

「グララララ！　何十年ぶり、だが随分若い姿だなァ、センゴク！」
立派な白ひげを蓄えた大男――白ひげもまたエース同様にセンゴク、そしてそれ以外のかつて死闘を繰り広げた海兵達が若返っている姿に驚く。
かつて若き日の己と渡り合った海兵達が若返り、肉体も覇気も最盛期にある事を感じ、冷や汗が流れるが、しかしニヤリと笑い、雄叫びを上げる。
「待ってろよエース!!!」
『ウォォォォォ!!!』
”白ひげ海賊団”傘下含め、総数４６隻の大艦隊。
人数にして約５万人。
そんな新世界に名を轟かせる強者達が仲間を助けるべく雄叫びを上げる。
白ひげが両腕に力を込め、左右に振り抜く。
白ひげが食らった悪魔の実は”グラグラの実”。振動を操る”振動人間”にして、白ひげ自身の規格外な力から、”地震人間”とも呼ばれる。
そんな地震のエネルギーが大気にヒビを入れ、空間が爆発し、そのエネルギーが海面を大きく歪ませる。
海面は止まる事なく上昇し続ける。
「海震……!!」
センゴクが上昇した海面を見て呟く。
「オヤジ……みんな……、おれはみんなの忠告を……！　それを無視して飛び出したのに、何で見捨ててくれなかったんだよォ!!!　おれの身勝手でこうなっちまったのに……!!!」
「いや、おれは行けと言ったはずだぜ、息子よ」
「ウソつけ……!!」
「あの時、忠告してきたダイナーの言葉を無視して、おれはお前に行けと言ったはずだ。お前ならやれる、とな」
「……ダイナーさんの忠告を無視したのはおれだ！　ウソつくんじゃねェ……!!!」

「おれは確かにあの日言ったぜ。――いいか海軍!!! おれは、家族に手を出したヤツを絶対に許さねェ。覚悟しろやァ、海軍!!!」

口々にエースを想い、嘘の言葉を紡ぐ仲間達の姿にエースを涙を堪え、唇を噛む。

「巨大な津波が来るぞォ!!!?」

”世界を滅ぼす力”。

そう称される白ひげの力。

先程の海震で上昇した海面が限界を迎え、巨大な津波となり戻ってくる。

海軍の艦隊、マリンフォードを飲み込んでしまう程巨大な津波を目に、白ひげは己を鼓舞するように大きく笑う。

数は海軍に劣り。

若返った伝説の海兵達と比べ老いた己。

かつての腕力も覇気もなく、持病によりいつ倒れてもおかしくない最悪のコンディション。

――しかし。

「グララララ!!! おれは”白ひげ”だァ!!! 野郎共、エースを救い出せェ!!!」

□??□??□??□??□??□??

「――そう言やァ、小僧。”火拳のエース”が兄と言っていたが、お前ら、種違いの兄弟か? 時期的にお前はロジャーの息子ではないだろう?」

「いや、おれ達は義兄弟の盃を交わしたんだ! おれとエースの父ちゃんは違ェし母ちゃんも違ェ。おれの父ちゃんはドラゴンってヤツみたいだぞ。この前じいちゃんから聞いた」

巨大なウルフの掌の上でルフィに問うバレットの言葉と、ルフィの返答に全員が驚愕する。

エースが海賊王ゴールド・ロジャーの息子だという事にイワンコフやバギー達が驚き、ルフィが革命家ドラゴンの息子だということにバ

ギーやＬＥＶＥＬ６の面々が驚く。
どちらも特級の大犯罪者。
片や、この海を制し、大海賊時代を作り上げた大海賊。
片や、世界を変えようと目論む最悪の組織”革命軍”のリーダー。
皆が驚く中、バギーが騒ぎ立てる。
「ろ、ロジャー船長の息子ォ!?!!　エースがロジャー船長の息子だとォ!!?　息子がいるなんて、そんな話聞いたことねェぞ!!?」
「エースに父ちゃんのこと聞いたら怒るからな。何かあったんじゃねェか？」
「マジか……！」
先日共に宴を行い、友人となったエースがまさかの、かつて乗っていた船の船長の息子だったという衝撃の事実にバギーは愕然とする。
「お前、モンキー・Ｄといったな。ならば、お前のジジイは……」
「じいちゃんはモンキー・Ｄ・ガープ。海兵だ！」
「……凄ェ血筋だ」
再度皆が驚愕する。
伝説の海兵”海軍の英雄”ガープの孫にして、最悪の犯罪者”革命家”ドラゴンの息子。
それならば、確かに覇王色の覇気を持っていてもおかしくない、とバレットは考えニヤリと笑う。
「カ……カハハハ！　こりゃァ、面白ェ！　あの怪物ジジイの孫か！　お前ら兄弟のこれからの強さに期待だな……!!」
「……ロジャー船長の息子を部下に加えれりゃァ、おれ様の箔も上がる……！　野郎ども！　マリンフォードに行くのは反対だったが、戦場で華を上げるのも悪かねェ！　おれ様の威厳を見せつけにいこうぜェ!!」
楽し気に大きく笑うバレットと、かつての船長の息子を部下に加えた未来を思い描き、企み自身が解放した囚人達を焚き付けるバギー。
バギーを神のように崇拝する囚人達が雄叫びを上げる様子をバレットやクロコダイル、レッドフィールド達が白けた目で見る中、ルフィの目にマリンフォードが入る。

「もう少しで着くぞ！　めちゃくちゃ船が来てる!!」
「ヒーハー！　白ひげ海賊団も既に来ているようねェ。このまま処刑台側まで行きましょう!!!」
「了解だー！　海軍本部をぶっ潰してやるー！」
「待ってろよー！　エース!!!」
　遥か下方に見えるのは凍った海で激闘を繰り広げる海軍と白ひげ海賊団。
　覚醒したばかりのルフィの見聞色の覇気で感じられる、彼らの強さは相当なもの。
　頂上戦争に相応しい、頂点同士の戦争だった。
「カハハハ！　久しぶりの戦争、待ち侘びたぞ!!」
「火拳のエースはあそこか……！　海軍の野郎どもの絶望する顔が楽しみだ」
「バロロロロ！　ウルフ！　奴ら諸共沈めてやれ!!!」
「ムルンフフフ！　海軍の美女の首は私のものよ！」
「ここでおれ様が目立てば、海賊王の未来への大きな第一歩だ!!!」
　三者三様、意志や渇望は違えど目的は一つ。
「エース！　絶対に助けるからなァ!!!」
　海賊側戦力、〝麦わらのルフィ〟率いるインペルダウン脱獄囚参戦！

第14話”激突する怪物達”

「――センゴク元帥、報告致します!!! 左方向から何か巨大なものがこちらへ向かってきます! 例の麦わらのルフィ率いるインペルダウン脱獄囚ではないかと!!!」
「来たか……!」
処刑台にて戦況を分析していたセンゴクは、海兵からの報告の方向を睨み付ける。
「ルフィだと……!!?」
「なんじゃい、エース、お前知らんかったのか」
「ジジイ、どういうことだ!」
エースは後々であるルフィがこちらに向かっているという報告を聞き、動揺する。
インペルダウンに侵入し、自分を助け出そうとしていると”海賊女帝”から話は聞いていた。
己の身柄の搬送に間に合わずインペルダウンに残されてきたのが、何故そんな状況になってきているのか。
エースは悔しさと困惑、ルフィへの心配で声を荒げる。
「……ルフィはインペルダウンの囚人達全てを解放し、お前を救うため、ここへ向かっておる。インペルダウンはもはやもぬけの空。最悪の大事件じゃ」
「ルフィ……ッ」
「兄弟揃ってお前ら、なんて事をやらかしておるんじゃ……。ルフィのお陰でわしまで能力に頼ってしまったわい」
がっくりと項垂れるガープと口を噛み締め震えるエース。
最悪の血筋を持って生まれた二人の男。
そんな二人を己の功績と立場で守ろうとしたガープは、最早己の全てを投げ打っても守れない程の悪事を行った家族に心を乱す。
海軍の英雄と呼ばれ、数々の海賊を討ち取った男は、家族への情と己の責務との間で揺れ動く。
「貴様ら……わしの言う通りに生きていれば、こんなことには……!!」

「ジジイ……」
「今更後悔したって遅いわい。そら、来たぞ」
怒りと後悔と悲しみから震えるガープは、頭を振り、眼下で戦う海兵、海賊達を越え、海の海の方向へ視線を向ける。
距離は未だある。
だが、この離れた距離からでも分かる程に巨大。
雲をつく程に巨大なそれは、人間だった。
”巨大戦艦”サンファン・ウルフ。
規格外の大きさの巨人が能力で更に巨大になる故の異名。
だが、見える大きさは、海軍の情報にあるウルフの大きさとはまるで異なる。
まるで一つの山。
数多の山々で文字通り鍛えたガープをして、見たことの無い程巨大なものだった。
「な、なんだ、あれ……！」
「ルフィが解放したＬＥＶＥＬ６の脱獄囚。おそらく、同じＬＥＶＥＬ６の脱獄囚の能力で更に巨大になったんじゃろう」
「何やってんだ、あのバカ……！」
山が動く。
巨体を支える脚の大きさも凄まじく、一歩ごとに巨大な津波が出来る様は、動く天災。
津波が起こる。凄まじい面積による空気抵抗により、乱気流が起こる。
そんな凄まじい怪物が軍艦よりも速い速度で迫ってきた。
「な、なんだあれは!!!」
「や、山が動いている……!!?」
「巨大な人間!!!　報告のインペルダウンＬＥＶＥＬ６の脱獄囚、”巨大戦艦”サンファン・ウルフだァ!!!」
「なんだァ、あんなんおれら聞いてねェぞ!!?」
海兵も海賊も阿鼻叫喚。
大将”青雉”により、凍りついた巨大な津波の壁からでも目視出来

るほどの巨大生物の姿に、両陣営共に驚愕する。
「フッフッフ！　来やがったな……！」
「麦わらァ!!!　あいつはおれが必ずぶっ殺してやる!!!!」
「ルフィ、そなたよくぞ無事で……」
「……！」
楽しげに笑うドフラミンゴとかつての屈辱を思い出し怒り狂うモリア。
乙女の表情でルフィの無事を喜ぶハンコックと無言で視線をやるミホーク。
「なんだァ、ありゃァ。センゴクの作戦か？　いや、海兵も驚いているってこたァ、それはねェな……」
「オヤジ、あのデケェのの掌の上に凄ェメンツが揃っているよい!!!」
「なに？」
「七武海”海侠のジンベエ”、元七武海”砂漠の王”クロコダイル、その他にも恐ろしいメンツが乗ってるよい！　何より、海賊王のとこの怪物、”鬼の跡目”ダグラス・バレット！　あの男がいる……!!!」
「どういうことだ……」
かつて鎬を削った”海賊王”ゴールド・ロジャーの船に乗っていた男、ダグラス・バレット。
”強さ”だけならば、この世界においても最上位に位置していた男が、この戦場に現れた。
インペルダウンに長く囚われているという話は聞いていたが、何故奴がここに来たというのか。
白ひげは頭を傾げ、彼方の巨大な人間を見やる。
「……あとは、エースが言ってた弟、今話題のルーキー”麦わらのルフィ”も一緒に乗ってるよい!!!」
「……なるほどなァ。野郎ども！　あのデカブツは気にするな！　敵じゃねェ!!!」
「いいのかよい！　あれには、オヤジに敵対するような奴等ばかり乗ってるが……」
「気にすんな。今この場にエースの弟が現れたんだ。目的はただ一

つ。あとは、奴等の手綱をあのハナッタレが握れるのかどうか、見てみようじゃねェか……！」
「……あのバレットの手綱を握るなんて、オヤジも中々無理言うよい！」
「グララララ!!　一つ試してみようじゃねェか！」
白ひげはあの巨人を含む強烈なメンツを率いるのが、エースの弟、”麦わらのルフィ”だと睨み、現状の海軍との戦力差を鑑みて一つの賭けに出る。
「奴等が戦力に加わりゃァ、大分楽にならァな……」
恐ろしいスピードで迫る巨大な人間を見て白ひげはニヤリと笑う。

□??□??□??□??□??□??

「このまま行くぞー！　みんな掴まれー!!!」
海水により力が入らない中、気合を入れて走り出すウルフ。
規格外の巨体により海が大きく荒れ、大規模な高波が発生する。
それは近隣の島まで届き、大きな津波となり襲う。
そんなことは知らぬルフィ一行はウルフの掌にしがみつき、強烈な暴風と揺れに耐える。
「ん？　なんか来た」
「――オラァ!!!」
海を走り、とうとう海軍本部を踏み潰すべく飛び蹴りの姿勢で飛んだところ、一つの影がウルフの前に現れる。
黒い短い頭髪。スーツの上からはっきり隆起が見える肉体。
海軍の英雄ガープが本部へ迫る巨大な足を拳で迎撃した。
「じ、じいちゃん……!?!!」
「……ぬぅん!!!!」
漆黒に染まったガープの拳がウルフの足を弾き飛ばす。
バランスを崩したウルフは海へと尻を付き、その衝撃で白ひげが海震で作り出した津波より更に巨大な津波がマリンフォードを襲う。
「氷河時代(アイスエイジ)!!!」

海軍本部大将”青雉”の能力により、マリンフォードを襲った巨大津波が一瞬で凍り付く。
「おいおい、聞いてはいたが、こりゃぁ凄いメンツだ」
「青雉!!」
「麦わら～、また会ったな。これまでの事件に加え、こんな悪事。上はカンカンだぞ」
「うるせェ！　おれはエースを助けに来た！」
「んなこたァ、分かってんだよ。こんな恐ろしいメンツよくも脱獄させてくれたな～」
青雉はルフィ同様にウルフの掌にいる脱獄囚の面々を見て話す。
「ルフィ!!!　お前、何ちゅうことしてくれたんじゃ!!!」
「じいちゃん！　なんで若返ってんだ!!?」
「愛する孫にゲンコツを落とすために、地獄から若さを取り戻したわい!!!」
「じいちゃん、退いてくれ！　おれはエースを助ける!!」
「ならん！　わしは海軍本部中将！　エースを救いたくば、わしを超えていけ!!!」
恐ろしい速度で空を駆け迫り来るガープ。
かつて海賊王と激闘を繰り広げた伝説の海兵の尋常ではない圧力にルフィはおろか、バギーやイワンコフ達も怯む。
「――久しぶりだな、怪物ジジイ!!」
迫るガープを殴り飛ばすバレット。
勢いよく吹き飛ばされるガープは凍った海に衝突し、高速で追ってきたバレットの拳を受け止める。
「バレット……久しぶりじゃな。何故、貴様が今更出てきた……！」
「んなこたァ、一つしかねェだろ。おれらは共通の目的で来ているんだぜェ」
「仲間を嫌っていたお前が、協力し合うとはな……！」
「仲間じゃねェ。ただ、同じ目的のために共に行動しているだけだ!!」
衝突し合う拳と拳。
恐ろしい強度の武装色の覇気と覇王色の覇気により、大気は歪み、

雲は消え去る。
　衝突した覇王色の覇気により、マリンフォード全土の弱者達が次々と気絶していく。
「シャバに出て初の相手が、若返ったお前とは、ツイているなァ!!!」
「ぬかせェ、バレット!!!」
　比類なき二人の強者がぶつかり合う。
「お～、おっかねェなァ。じゃあ、おれはこっちか……」
「貴様の相手は我だ、青雉」
「”赤の伯爵”パトリック・レッドフィールド……！　老いたお前に何ができるよォ！」
「ふん……。貴様を殺す程度ならできる。それに、老いを克服する目当ても付いている！」
　ウルフの掌から飛び立ち、空中の青雉に向けて武装色の覇気を纏った蹴りを繰り出すレッドフィールド。
　未来視により互いの手を読み合い凄まじい速度で攻撃し合う二人は、ガープとバレットから離れていく。
「あいたぞ！　デカウルフ！　行けェ!!!」
「うぉー!!!」
　二人の特大戦力の海兵を遠ざけたバレットとレッドフィールドを置いて、ウルフは一気に抜ける。
　特大の質量で氷を砕きながら進むウルフだが、突如飛来した斬撃を避けるために、急遽飛び上がる。
「うわ～～!!?」
「派手バカが～～!!?」
「なんだァ!!?」
　着水し、更に巨大な高波が巻き起こる。
　マリンフォード全土を沈ませるに余りある大津波が襲い掛かるが、その前に先と同じ飛ぶ斬撃が津波を一瞬で切り刻む。
「来たか、麦わら……！」
「”鷹の目”！　あいつも若返ってんのか!!!」
　彼方に見えるのは巨大な黒刀を手に持つ男、”鷹の目”ジュラ

キュール・ミホーク。
ミホークが放った飛ぶ斬撃により津波は形を失い、水飛沫を立てる。
「麦わらァァ!!! てめェだけはおれの手でぶっ殺す!!! 影もいらねェから、さっさと死ねェ!!!」
「お前も若返ってんのか、モリア!!!」
かつて、現在仲間になった死んで骨だけ、ブルックを助けるべく死闘を繰り広げた相手、七武海の一人、ゲッコー・モリアが影を使い迫り来る。
ルフィが知るモリアの姿とは異なり、だらしなく膨らんだ腹は脂肪を落とし、隆々とした筋肉が見える。
そして、何より先日は見られなかった、圧倒的強者の覇気がある。
「てめェをぶち殺すために、昔の体を取り戻したぞ麦わらァ!!!」
「お前に構ってる暇ねェのに……!」
「バロロロロ! 麦わらァ、ウルフ! 先に行け! こいつとは少し因縁がある!!」
「ワールド、わしも共に戦わせてもらうぞ。ヤツの能力は海水と相性最悪じゃ」
「フンッ。足引っ張んじゃねェぞ……!」
「ワールドのおっさん! サメのおっさん! 分かった! 頼む!!!」
「分かったっつ! 皆掴まれ、行くぞー!!」
ワールドがそう言い、石礫を放つ。放たれた石礫は１００倍に大きさを増し、モリアへと飛来する。
その隙にウルフは海軍本部へと動き出す。
ミホークの斬撃を警戒し、全身に武装色の覇気を纏い、巨大な体全てを硬化させる。
「一気に行くぞー!!!」
「ウォォォォォ!!!」
海軍本部に一直線に突き進むウルフはミホークの斬撃を薄皮一枚で防ぎ、とうとうマリンフォードへと足をかける。
轟音を立てて崩壊するマリンフォードの町。地面ごと町を踏み抜

いたウルフは構わず突き進む。
死守するべく懸命に立ち向かった海兵達だが、武装硬化されたウルフの脚に傷一つ付けることすら叶わず、歩みの衝撃で巨人族ですら吹き飛ばされる。
「このまま、エースの所に行けェ!!」
「――あまり、好き勝手にするなッ!!!」
「ゴブァ……!!?」
残り一歩、手を伸ばせば処刑台に届く頃、突如現れた漆黒の巨大な大仏がウルフを吹き飛ばす。
海兵や海賊を巻き込んで倒れ込んだウルフの巨体は、町を破壊し、マリンフォードの四分の一が沈む。
「要塞も島も新たに築けばいい！　だが、この戦争は必ず、我々海軍が勝利する!!」
漆黒な巨大な大仏――海軍元帥センゴクが食った悪魔の実は”ヒトヒトの実幻獣種モデル大仏”。
自然系悪魔の実より更に希少な動物系悪魔の実”幻獣種”。
センゴクは大仏になる強力な能力者だ。
全身に武装色の覇気を纏ったセンゴクは、覇王色の覇気を纏い強烈な衝撃をウルフへ放つ。
「アバァ!!?」
「デカウルフ!!!」
武装色の覇気を纏っていても穿つダメージにウルフは血反吐を吐き、堪らず能力を解除してしまう。
身長1，800メートル。
それでも規格外だが、掌に収まっていたルフィ達は空中へと投げ出され地面へと墜落する。
「……流石に手強いな。おい、麦わら！　仕方ねェから、おれがこいつらのを相手してやる！　他連れて先へ行け！」
「クロコダイル……！　頼む!!!」
「……フン。おい、デカブツ、動けるなァ？」
「余裕だ！　ここじゃ戦いにくいから、あの大仏連れて海に行ってく

る！」
「あァ、ここらは任せろ」
激突した両陣営。
白ひげ海賊団と海軍の頂上戦争へと、インペルダウン脱獄囚と大問題ルーキーが加わり、戦況は凄まじい勢いで変わっていく。
規模を増し続ける戦い。
覇王色の覇気が至る所で迸り、強さに欠いた者達は次々に脱落していく。
正に地獄。
この世の終わりだとシャボンディ諸島の記者は天を仰いだ。
戦争は始まったばかり。
強者が強者を倒し、その強者をまた強者が食い破る。
頂上戦争、人類史上最大規模の戦争が始まった。

第15話”海軍の英雄VS・鬼の跡目”

「はぁ……はぁ……、敵がいちいち強ェ……！」
「止まっちゃダメよ、麦わらボーイ！　敵はヴァターシ達が引き受けるから、ヴァナタは前に進むことだけ考えるッチャブルよ!!」
「トプトプトプ！　酒が飲みて～！　これが終わったら皆で宴会せんとな～！」
「宴会！　いいな、やろう!!」
「そんな事言ってる場合じゃなッシブル!!」
エースがいる処刑台まで走るルフィ一行。
次々と現れる海兵達を薙ぎ倒しながら進むルフィは、海兵のレベルの高さに舌を巻く。
至る所で放たれる覇王色の覇気により、弱い者達は脱落し、立つ者全てが百戦錬磨の強者達だけ。
至る所で血が流れ、海兵、海賊両者が死んでゆく光景はまるで地獄だ。
そんな中でも呑気に酒が飲みたいと叫ぶバスコ・ショットと宴会という言葉に目を輝かせるルフィ。
そんな二人に怒鳴るイワンコフは、眼前に現れた海兵を強烈な瞬きで吹き飛ばす。
「まるでこの世の地獄ねェ。こんなに覇王色の覇気を感じられる戦場初めて……！」
「デボンのおばちゃん……！　なんだ、その覇王色の覇気って？」
「せめてお姉さんって呼びなさい、小僧!!　……まァ、そうねェ……、数百万人に一人のみが持つ特殊な覇気。生まれながらの”王の資質”を持つ者だけが有する”覇王の力”。あなたが覚醒させた見聞色の覇気と似たものよ」
「”王の資質”……」
「まだあなたには早いわよ。今はお兄さんを助ける事だけ考えなさい」
「世の中にはまだ知らねェ力があるんだな……」

世界の広さを知り、この戦場の凄まじさを再確認したルフィにデボンはムルンフフフと笑う。
「焦らなくてもあなたにもその資質はある。まァ、頑張りなさいや」
「デボンのおばちゃん……！　おれ、やるよ!!」
「だから、お姉さんと呼べ!!」
怒ったデボンは手に持つ刀を振るい、飛ぶ斬撃で前方の海兵海賊構わず薙ぎ倒す。
”若月狩り”カタリーナ・デボン。
世界中の美女の首を狩り、コレクションをする異常な女だが、その戦闘力は折り紙付き。
古今東西、ありとあらゆる武器を使いこなす武芸百般の怪女。
インペルダウンではサディちゃんから奪った鞭を使い、今は海兵から奪った刀を使い、一騎当千の活躍をしている。
処刑台まで距離はまだある。
眼前に待ち受ける海兵の数は果てしない。
エースを助けるべく一直線に走るルフィの頭上に突如一つの影が現れる。
「うわっ!!?　危ねェ!!」
ルフィの見聞色の覇気に捉えきれない速度で降ってきたそれは、一振りの長大な黒刀と一人の男。
世界に12振りしか存在しない最上大業物、世界最強の黒刀”夜”と世界最強の剣士、ジュラキュール・ミホークがルフィを刺し貫くべく降りかかってきた。
「”鷹の目”!!　また、こいつか!!」
「世界最強の剣士……！　いい男ねェ！」
「トプトプトプ！　こいつから良い葡萄酒の匂いがするんのん!!」
「大した男だ、麦わら。兄を救うため、ここまで来ようとは……」
「鷹の目!!　そいつらを絶対に行かせるな!!　ここで息の根を止める!!」
凄まじい速度で迫ったモヒカンの海兵がルフィを斬りつける。
「海軍本部中将モモンガ!!」

「麦わらボーイ!!!」
「痛ェ!!　斬られた!!」
浅くだが斬られたルフィが声を上げる。
相手は海軍本部中将モモンガ。
刀を扱う百戦錬磨の海兵がミホークと並ぶ。
ルフィ率いる最悪の脱獄囚達を睨みつけ、再び斬りかかろうとした瞬間、どこからともなく怒気が纏った蹴りがモモンガへと飛んでくる。
「そなた……！　よくも、わらわの愛しき人を傷つけたな!!　生かしてはおかぬ!!　こんなに怒りを覚えた事はない!!　そなたを切りキザんで獣のエサにしてくれる!!」
「ボア・ハンコックッ!!　貴様、何をしている!!!　海軍の邪魔をして後でどうなるか分かっているのか!!」
「怒りで何も聞こえぬ！」
「ハンコック……!!!」
「”海賊女帝”ボア・ハンコック……！　美しい顔ねェ！　コレクションにしたいわァ!!!」
「やめろ、デボンのおばちゃん！　悪ィことはもうすんな!!!」
「だから、おばちゃんって言うんじゃないよ!!!」
「ひゃー！　ええ女だのん!!!」
恋焦がれる男、ルフィを傷つけられた事に怒り狂うハンコックと、それに怒鳴りつけるモモンガ。
デボンは特上の美女にコレクション欲を高め、ルフィに再三のおばちゃん呼ばわりされ、怒鳴り散らかす。
「そなた、絶対に許さぬぞ!!」
そう言うなり、強靭な脚力に覇気を纏ってモモンガに蹴りかかるハンコックに、モモンガは迎撃する。
「貴様、どうなっても知らんぞ!!!」
「構わぬ！　まずはそなたの息の根だけは止めねば、気が済まぬ!!!」
「ふん、下らんな。さて、首を置いていけ、麦わら」
「トプトプトプ！　おれが相手になるぞ、鷹の目～！　海賊女帝にえ

えとこ見せるんの～！」
「ムルンフフフ!!　麦わらの坊や、ここは私達に任せて先に行きなさい！」
「ハンコックに手出すんじゃねェぞ!!!」
「安心しなさい、私から手出すことは火拳の坊やの恩に免じてしないわ。勝手に死んでたら、首コレクションさせてもらうけどねェ」
「それなら大丈夫だ！　ハンコック強ェからな!!!」
「……ルフィ！　わらわの事信じてくれてるなんて……！　これが相思相愛……！」
　ショットとデボンがミホークの相手にこの場に残る。
　ショットはハンコックにカッコいいところを見せるため、デボンはハンコックがモモンガに殺される可能性を考え、ミホークとの闘争を選んだ。
「ルフィ！　海軍は予定を早め、そなたの兄の処刑を時間関係なく行おうとしておる！　これは兄の手錠のカギじゃ！　急ぐのじゃ!!!」
「ハンコック……、お前ってヤツは！　ありがとう!!!　この礼は必ずする!!!」
「で、では、終わったら一つお願いがあるのじゃ。必ずじゃぞ!!!」
「あぁ！　行ってくる!!!」
「まるで夫婦のような会話！　夢のようじゃ……！」
「貴様……！　”海賊女帝”!!　貴様、七武海を辞めるという事でいいんだな!!!」
「好きに解釈するがよい！　今のわらわは喜びで何も見えぬ!!!」
　”海賊女帝”ボア・ハンコック対海軍本部中将モモンガ。
　”鷹の目”ジュラキュール・ミホーク対”若月狩り”カタリーナ・デボン&”大酒のバスコ・ショット”。
　邪あるいはピンクな思いを浮かべる者達対、硬派な男達の戦いが開幕する。
　”海賊女帝”ボア・ハンコック、最早後先考えず、ハリケーンな恋に振り回される！

□??□??□??□??□??□??

海軍本部大将”青雉”により凍結された強固な氷の上、果てしない轟音と覇王色の覇気が迸る激闘が繰り広げられていた。

黒く染まる拳と拳。

覇王色の覇気が纏った拳は、しかし触れる事はなく、触れない拳戟は雲を、海を、氷を割り、余波は海賊や海兵を吹き飛ばしていく。

「おい、クソジジイ！　楽しいなァ！　もっとやり合おうぜェ!!」

「わしゃァ、楽しくないわい！　インペルダウンで大人しくしておればいいものを！　ルフィのヤツに付いてきおって！」

「お前の孫は中々面白ェヤツだ。それよりも、ロジャーの息子をお前が匿っていたなんてなァ……！」

「生まれてくる子に罪はない……！　じゃが、奴らは最早親も関係ない程の大悪党。悪党に慈悲はない……!!」

「……ふん！　その面で言っても仕方ねェなァ」

何かを必死に堪えるような顔のガープにやれやれと顔を振るバレット。

かつてロジャーと死闘を繰り広げた化け物のような男が見せた親の顔。

只々強かった男は己の責務と家族への情の間で揺れ動き、放つ言葉とは裏腹に覇気は弱まってしまう。

「迷いがある状態でおれに勝てるかァ!!?　お前の孫達も一人の男だ。男っつうのは、誰かに守られるような生き方はァ、しねェんだよ!!!お前も男なら、やれる事だけやって、結末を見届けろやァ!!!」

「ッ!!　ふん、貴様にそんな言葉を貰うとはな……！　いいじゃろう、あ奴らも一人の男。わしは海軍本部中将として貴様らを打ち破る!!!

せいぜい、生き残る事だ!!!」

「カハハハ！　そう来なくてはなァ!!!」

そう言うなり、両腕に纏っていた覇気を右の拳に集中させるガープ。

全身を守るための防御のための覇気も全て集め、漆黒と化した拳は

恐ろしい濃度の武装色の覇気と、空間を捻じ曲げる程の覇王色の覇気により、けたたましい音を発する。
防御は捨てる。回避もしない。
ロジャーと渡り合ったあの頃と同じスタイルでバレットを睨みつける。
「”拳骨のガープ”か……。だが、おれもあの頃のままだと思っては困る。ダイナーを超えるべく新たに編み出した技……！　鎧合体（ユニオン・アルマード）”!!!」
バレットが凍り付いた海へと触れる。
触れた瞬間、青い光が放たれ、黒き波がマリンフォード全土へと広がっていく。
「”ガシャガシャの実”の覚醒か……！」
「ダイナーを倒すため、巨大な合体を捨てた。必要なのはヤツを打ち砕く強固な鎧……！」
マリンフォード全土へと広がった波が、街を軍艦を、海軍本部を飲み込み、バレットへと吸収される。
残るは大地のみになったマリンフォード。
街もなく、海軍本部もなく、エースがいた処刑台すらも消失し、そこにいた人間のみが残される。
「――これが”最強”だ！」
「……インペルダウンにいながら、そんな事を考えていたとはのうッ」
光が収まった後に見えるのは、バレットを一回り大きくしただけの黒き鎧。
バレットが食らった悪魔の実は”ガシャガシャの実”。
無機物を融合し、自在に変形させる事ができる能力。
覚醒した能力とバレット自身の力により、規模は規格外に膨れ上がり、マリンフォード全土を効果範囲と成した。
見える黒き鎧はマリンフォード全土、全ての無機物を鎧へと融合させたもの。
その質量は計り知れず。
膨大なそれを無理矢理圧縮させた鎧の密度もまた計り知れない。

「これが、〝覇王〟を超えるために編み出した、おれだけの〝最強〟！
全てを破壊するための最強の力!!!」
「……今でもダイナーを目指そうとはなァ」
「アイツこそが真の最強。ダイナーを超えねば、おれは最強にはなれねェ！　さァ、楽しみはこれからだァ!!!」
激突した二人の拳は凍り付く大地を海を破壊し、尋常ではない被害を出していく。
周辺の海は未曾有の大荒れ。
マリンフォードは建物を失い、平らな大地のみが新たな戦場となる。
海賊、海兵共に大混乱。
頂上戦争は未だ始まったばかり！

第16話”バギーの企み”

「んがっ……!!?　おれ様はいつの間に寝てた――って、なんじゃこりゃァ!!?」
　バレットとガープの覇王色の覇気の衝突により吹き飛ばされ、気を失っていたバギーは意識を取り戻し、擦った目で周囲を見渡すと、先程まで存在していた建物や兵器、軍艦全てが見当たらない、平らな大地のみが広がっていた、
　最初から存在していなかったような、瓦礫すらない大地にバギーは己の目を疑う。
「ど、どうなってんだこりゃァ……!　おれ様は夢でも見ているのか!!?」
「キャプテン・バギー、おれ達も今目覚めたところだが、起きたらこんな事になっていやがりました!」
「どうなってやがる……?」
　周囲を見渡すと同じように困惑する海兵な海賊達が目に入る。
　海軍と海賊、両陣営の軍艦も消失しており、皆がマリンフォードの大地、凍った海へと移っている。
「この能力は、バレットの野郎だなァ!　派手にやりやがる!」
　遥か遠方で凄まじい激闘を繰り広げるバレットとガープを見やり、バギーは震える。
　かつてロジャー海賊団の船員時代に見たバレットの強さ。
　ロジャーに幾度となく向かっていったあの頃の強さより、更に強くなっている。
　感じる覇王色の覇気にバギーは戦慄した。
「ヤベェな……。あんな化け物どもの近くになんか行ってられっか!
　野郎ども!　今の覇王色の覇気で電伝虫も気絶してるハズだ!
探して叩き起こして、おれ様のハデで偉大な姿を放送するぞォ!!!」
『ウォォォォ!!!　流石キャプテン・バギー!!　こんな異常な状況にも、全く冷静さを欠いていねェ!!!』
「都合の良い奴らだガネ……」

覇王色の覇気により吹き飛ばされていたバギー一行は己らの目的のため、戦闘せず電伝虫を探す。
全てはバギーの偉大な姿を世間に知らしめるため。
未来の海賊王となるべきキャプテンの威光を知らしめるために行動する。
「電伝虫を手に入れたらエースの野郎を助け出しに行くぞ！　ド派手に気張りやがれェ!!　ギャ～ハハハハ!!!」
「本当に大丈夫なのカネ……」
将来の輝かしい未来を想像し高笑いするバギーと不安に惑うＭｒ．３。
バギー一行もまた、頂上戦争において、特殊な活躍をし始める。

□??□??□??□??□??□??

「――あの小僧、覚醒の範囲が広くなってやがんな」
「オヤジ！　モビー・ディック号まで飲み込まれたよい!!」
「あァ、仕方ねェ。今まで世話になった。これで退路はなくなった。海軍を絶滅させるしかあるめェ」
「傘下含めて全員、大地に降り立ったよい！」
「随分見晴らしが良くなった！　おれが出る……！」
バレットの能力により、長年旅を共にした船、モビー・ディック号、他全ての船を失い退路をなくした白ひげは前線へと進み出る。
巨大な薙刀、最上大業物の一振り、”むら雲切”を大きく振りかぶり、地震のエネルギーを込める。
「ふんッ!!!」
規格外の膂力で振り抜かれ、前方に凄まじい振動するエネルギーを内包した飛ぶ斬撃が放たれる。
空間を軋ませながら突き進む斬撃は扇型に海兵を斬り飛ばしながらどこまでも進んでいく。
すると、範囲外から必死で逃げようとする海兵達の前に大柄な男が現れ、岩石のような漆黒の腕で斬撃を受け止めた。

「”赤犬”か!!! お前も若返ったんだなァ、若造！」
「貴様ら船を失ったんじゃろう。諦めてその首置いていったらどうじゃ、ゴミども……！」
「グララララ！ 抜かせ、マグマ小僧。お前らこそ、海軍本部が跡形もねェじゃねェか！ 諦めてエースを渡したらどうだ？」
「舐めるな、白ひげェ!!!」
売り言葉に買い言葉。
大柄な男、海軍本部大将”赤犬”。
食らった自然系悪魔の実”マグマグの実”のマグマ人間らしくすぐ熱くなる赤犬は、白ひげの言葉に激怒し、腕をマグマに変化させ放つ。
「冥狗(めいごう)!!!」
「グララララ!!!」
覇気が乗ったマグマの拳と地震のエネルギーが乗った薙刀が衝突する。
周囲に莫大な熱気と恐ろしい振動が広がり、海賊も海兵も吹き飛ばされる。
「フッフッフ!! 馬鹿げた戦闘力だ!!」
「お前の相手はおれだよい!!」
白ひげと赤犬の凄まじい強さに笑っていた桃色のファーコートを着た長身の男。
七武海の一人であり、闇の世界の大物、”天夜叉”ドンキホーテ・ドフラミンゴへと白ひげ海賊団1番隊隊長”不死鳥”マルコが足蹴りを繰り出した。
「”不死鳥”マルコか！ フッフッフ！ なァ、戦いなんてしないで、アイツらの殺し合いを一緒に見ねェか？ 見ものだぞ!!」
「バカ言うなよい！ お前ら全員、どうやって若返ってるのか知らねェが、お前はあんまりその恩恵を受けているようには見えねェよい！」
「フッフッフ！ おれは昔から完成されてんだ。若返ろうが、年老いようが、おれは強ェ。お前ら人間と一緒にするんじゃねェよ」

「気味の悪い男だよい！　誰一人仲間は操らせねェからそのつもりで来いよ!!!」
マルコは肉体を青い炎を纏う怪鳥へと変化させ、ドフラミンゴへと肉薄する。
動物系悪魔の実幻獣種”トリトリの実モデル不死鳥（フェニックス）”を食らったマルコは、自身の肉体を不死鳥へと変化させる事が出来る。
青い炎を纏い、凄まじい速度で空を飛び、衝撃波を伴った蹴りをドフラミンゴへと繰り出す。
「”鳳凰印（ほうおういん）!!!」
「”五色糸（ゴシキート）!!!」
強靭な鉤爪による蹴りと五色の糸による斬撃が衝突する。
四皇からも一目置かれる男同士の激突に、雑兵は為す術なく吹き飛ばされ、離れていく。
伝説の大海賊、四皇”白ひげ”対”徹底的な正義”を掲げる大将”赤犬”。
白ひげ海賊団1番隊隊長、白ひげの右腕である”不死鳥”対世界の闇を取り仕切る男、悪のカリスマ”天夜叉”。
二つの巨大な戦いが勃発する。
「おれ達は先に進むぞ！　ジョズ！　オヤジとマルコが大物を引き受けてくれたんだ！　この先はおれ達が切り開かなくてはな!!!」
海軍側の特級戦力二人を相手にする己のリーダー達を置いて、ビスタ達白ひげ海賊団は先へ進む。
処刑台が消失した事でエースの姿は見えない。
感じられる弱々しいエースの覇気を頼りに進軍する彼らの士気は高い。
”白ひげ海賊団”、エースを救出するべく特攻をかける！

□??□??□??□??□??□??

「――どうなってんだ、これ!!?」
建物や建造物が消失した戦場を見てルフィは目を飛び出して驚く。

”鷹の目”ミホークと海軍本部中将モモンガから、仲間と恩人であるハンコックの手助けにより抜け出し、海兵達を倒しながら突き進んでいた頃の出来事だった。
黒い波が恐ろしい速度で広がっていき、人間以外の全てを飲み込んでいった。
残ったのは平らに広がる大地とその上に呆然と立つ海兵、海賊達のみ。
「こんなの見た事なァいわよーう!! 街が消えちゃったわァ!!?」
「こりゃァ凄エニャーー!! なんちゅう規模の能力だ……!!」
「バレットの”ガシャガシャの実”の覚醒ねェ……! 島全土を飲み込むなんて、馬鹿げた範囲っタブル!!!」
「バレットのおっさんの能力なのか……! 何にも無くなっちまったぞ!!」
「麦わらボーイ! さっきボア・ハンコックが言ってた言葉忘れたの!! エースボーイの処刑を早めるって言ってタブルけど、こんな状況になった今、執行人が刑を執行するとも思えない! 急がないと手遅れになっタブルよ!!!」
「そうだった……! 急がねェと!!!」
バレットの能力により海軍本部も処刑台すらも消失した今、海軍が大人しく通常通りの処刑を行うとは思えない。
ましてや、想像以上に戦場が混乱し、海軍側の戦力の殆どが各海賊の強者に当たり、海軍の被害が恐ろしい速度で増え続ける今、せめてエースの首だけは、と考えているだろうとイワンコフはルフィに教える。
エースの気配を頼りにルフィが走り出そうとしたところ、またしても強大な気配が現れる。
「お〜お〜、麦わら〜。こんなにまた早く会えるとはねェ〜。君達のせいで、酷い目に遭っちゃったよォ」
「”黄猿!!”」
眩い光と共に現れたストライプのスーツに身を包んだ男は海軍本部大将”黄猿”。

先日、シャボンディ諸島でルフィ達、麦わらの一味を壊滅に追い込んだ因縁の相手だ。
だが、ルフィがシャボンディ諸島で相対した時の黄猿の様子と異なり、見るも痛々しい傷が至る所に見られる。
「腹いせじゃないが～、君は絶対にここで殺させてもらうよォ！」
「なんであんな大怪我してるっチャブル!!? ヴァターシ達が来る前に白ひげにやられたのかしら……？」
「ニャハハハ!! 怪我をしてるなんて好都合だ！ おれが奴を殺してやるニャー！」
こめかみから二本の角が生えている男、アバロ・ピサロが海兵から奪った銃を手で遊ばせる。
「君はァ、インペルダウンＬＥＶＥＬ６の脱獄囚、〝悪政王〟アバロ・ピサロだねェ？ 君一人でわっしを相手に出来ると思っているのかァい？」
「必死に隠しているようだが、今にも倒れそうなダメージを感じるニャー。どこのどいつにやられたんだ？」
「ん～、〝覇王〟に少しばかりねェ。でも、わっしは君じゃなくて、〝麦わらのルフィ〟に用があるんだよねェ～！」
そう言うなり、光の速度でルフィに迫り蹴りを放つ。
しかし、凄まじい速度で飛来してきた覇気が込められた銃弾に、覇王ダイナーに付けられた傷を撃ち抜かれてしまう。
「ニャーハッハッハ!!! 〝覇王〟にやられたのか!!? それなら、尚更お前の相手はおれだニャー、海の黄色いお猿さん!!!」
「お～、やってくれるねェ、アバロ・ピサロ……！」
「楽しくなってきたニャー！ 麦わら坊主、おれの獲物は渡さないニャー！ 早く行け!!!」
「ありがとう!! そいつには、前酷い目にあったんだ！ 助かる!!」
「麦わらァ、行かせないよォ～!!」
「ニャハハハ！ お前の相手はおれだろ。逃げんじゃねェよ……!!」
走り出すルフィ一行とそれを追おうとする黄猿。
そして、そんな黄猿を未来を見た狙撃で撃ち抜かんと覇気の銃弾を

放つピサロ。
光速である己を簡単に狙撃するピサロの腕と、込められている武装色の覇気の強さに歯噛みする黄猿は、痛む体に顔を歪めながらピサロを睨みつけた。
「絶対に許さないからァ、覚悟することだねェ……！」
「上等だニャー!! お前こそ小便漏らさねェように気ィ付けるんだニャー！」
最強の悪魔の実とも称される”ピカピカの実”の”光人間”、海軍本部大将”黄猿”。
一国を武力で制圧し、暴虐の限りを尽くした暴政の愚帝、”悪政王”アバロ・ピサロ。
どちらも”覇王”に縁ありし者達。
片や、つい先日瀕死状態までに叩きのめされ、今も満身創痍の体で戦争に臨む海軍の最高戦力。
片や、真の世界の頂点に魅せられ、王の立場を捨て、あらゆる強者に殺し合いを仕掛けた頂きへの登攀者。
二人の強者がぶつかり合い、戦場は更なる混沌に包まれる！

第１７話”マゼラン襲来”

「うおー！　潰れてしまえー!!」
「こんッ……！　ふんッ!!!」
身長１８，０００メートルの巨体を支える足が頭上より降ってくる。
大地が堕ちてきたかと錯覚する程巨大な足が恐ろしい速度で迫ってくる様子はセンゴクの感覚を鈍らせる。
遅いようで速い。
あまりの大きさ故に迫ってきているかも分からなくなる。
そんなセンゴクをして未知の一撃に見聞色の覇気を総動員させながら反撃する。
「こんな相手は初めてだ……！」
「これ楽しいなー！　ワールドの能力と相性抜群だっつ!!」
「舐めおって……!!」
漆黒の大仏であるセンゴクは掌に武装色と覇王色の覇気を纏い、再度迫り来る巨大な足へ衝撃を放つ。
衝突する巨大な足と衝撃波。
想像を絶する質量と覇王色の乗った衝撃が衝突し、轟音が辺りに響き、海が大爆発を起こす。
ウルフとセンゴクとの戦闘により海は荒れ果て、大気は崩れ、異常気象が絶えない”偉大なる航路”においても、険しい気候に変貌する。
並大抵の海賊ならば一撃で粉砕するセンゴクの攻撃も、あまりの質量とそれに伴う武装色の覇気により、決定打にならず、常時月歩により跳び続けているために、体力を消費する一方。
「ぐッ……！　あちらに戻っても詰み。ここでも決定打に欠けるか……！」
あまりの状況に歯噛みするセンゴクと、かつてない巨体での戦いに上機嫌なウルフ。
先程から状況は同じ。

遥か頭上から攻撃を繰り出すウルフとそれを迎撃するセンゴク。
有効打を与えられるであろう頭部へと、空を足場とする”月歩”と高速の移動術”剃”の合わせ技、”剃刀”で迫ろうと試みるが、巨大な拳で叩き落とされる。
あまりの大きさとスピードに避けて進むのも不可能なため、何度か試みてはみた結果、センゴクは不可能と判断した。
相手の一挙手一投足が一撃必殺。
対して、己の攻撃は有効打にならず有効打になり得る頭部への移動も難しい。その上、戦闘が長引くにつれて己の敗北が近付いてくる。
八方塞がり。
「せめて、もう一人戦力がおれば……!!」
”海軍の英雄”ガープと共に、激闘の時代を生き抜いてきた伝説の海兵は、あまりの状況に苦い顔をしてしまう。
”智将”と称される頭脳をフル回転させ、勝利の選択を捨て、時間稼ぎへと行動を変更しようとしたところ、マリンフォードから離れた自分達より更に彼方より艦隊が見えた。
「あれは……、インペルダウンの艦隊……！　わっはっは！　天は我々をまだ見捨てていないようだな……!!」
「何一人でぶつぶつ喋ってんだー？　そら、いくぞー!!」
「貴様の面にこの拳をめり込ませるまでは倒れられん！　ぬぅんッ!!」
再度激突する巨大な足と覇王色の乗った衝撃波。
轟音と共に爆散する海水に紛れて、センゴクはインペルダウンの艦隊へと高速で向かう。
漆黒の大仏”智将”センゴク対規格外の巨人”巨大戦艦”ウルフのサシでの勝者はウルフに軍配が上がった。
しかし、これは戦争。センゴクの目的は海軍、ひいては世界政府の勝利。
単独での勝利を捨て、インペルダウンの強者へと助力を得るため、センゴクは行動を開始した。
ウルフ対センゴクの決着は未だ着かず。

新たな戦力の追加で戦争もまた戦況を変える。

□??□??□??□??□??□??

「”芳香脚（パフューム・フェムル）”!!」

「くッ！　舐めるなァ!!」

「フン！　そなた、その程度でわらわに勝てると思っておるのか？　男など、わらわの前では無力。先の船での出来事を忘れたか？」

七武海の一人、”海賊女帝”ボア・ハンコックの強靭な蹴りが海軍本部中将モモンガへと迫り、モモンガは刀で必死に防ぐ。

あまりの威力に奮起の咆哮を上げたモモンガだったが、力及ばず吹き飛ばされる。

「綺麗な足だのん！　おれもあの蹴り食らいてェな～！」

「ムルンフフフ！　アンタも好きねェ」

「おれを相手に余所見とは余裕だな、”大酒のバスコ・ショット”」

「トプトプトプ！　余裕じゃねェけど、あんな美味そうな足、見ないなんて失礼だのん!!」

「下らんな。貴様らがおれを引き留めたのだ。失望させてくれるな……！」

世界一の美女と称されるハンコックのすらりと長い脚線美に涎を垂らし見惚れるショットと、その様子に笑うデボン。

そんな二人に世界最強の剣士”鷹の目”ジュラキュール・ミホークが呆れた声を出し、黒刀を振る。

放たれる極大の飛ぶ斬撃が呑気に笑う二人に迫り来る。

「本格的に、気を抜いているとマズいわねェ！」

「こっからは、真剣にやらんとな～！」

大気を裂いて迫る斬撃を武装色の覇気で強化した刀”黒刀”で防ぐデボンと、右腕を武装硬化させて防ぐショット。

二人が協力した結果、世界最強の斬撃は一つの傷を与える事もなく霧散することになる。

「トプトプトプ！　酒がねェから本調子じゃないけど、”海賊女帝”

にええとこ見せんとな～。麦わら坊主との約束もあるしな～！　火拳の坊主は奴らに任せとけばええだろ～」
「流石は世界最強の剣士。剣の腕も覇気の強さも凄いわねェ。刀だけじゃとても敵わない」
「我が黒刀にどう抗う……！」
　ショットはまるで酩酊状態のようにフラフラと揺れ出し、体の様々な場所が武装硬化で漆黒に染まっては消え、他の場所に移るかのようにアトランダムに硬化されていく。
　刀を地面に突き立て、他の海兵や海賊達から奪ったありとあらゆる種類の武器を地面に突き立てていく。
　酒を飲む程に戦闘力が上がる”大酒のバスコ・ショット”と古今東西ありとあらゆる武器を操り、多種多様な戦闘を行う”若月狩り”カタリーナ・デボン。
　片や、四皇の一人、”赤髪のシャンクス”と長年ライバル関係にある世界最強の剣士、”鷹の目”ジュラキュール・ミホーク。
　世界最強の斬撃と酩酊する拳、百の武器が衝突する。
　逸れた斬撃が凍り付いた津波を斬り飛ばし、拳による衝撃が遠方で戦っていた海兵と海軍を吹き飛ばす。百種の武器による斬撃、衝撃が海岸線を吹き飛ばし、覇気を纏った弾丸がハンコックへと飛んでいく。
　しかし、ハンコックは覇気を纏った蹴りで簡単に叩き落とす。
「あらァ、流れ弾ねェ。ごめんなさい、狙ったつもりはなかったんだけど、そちらへ行ってしまったみたいねェ……！」
「なんじゃ、そなたは。ぬけぬけと良く言ったものじゃ。大体、そなたルフィとどういう関係なのじゃ!!　親し気に話しておったが!!!」
「うん？　フ、フフ……ムルンフッフッフ!!!　アンタ、麦わらの坊やにお熱なのねェ！　それで、立場を捨ててまで海軍に楯突くなんて、天晴れだわ！」
　白々しくも謝るデボンにルフィとの関係を怒鳴り声で問い正すハンコック。
　そんなハンコックの様子に様々な事情を一瞬で察したデボンは大

笑いし、ハンコックの行動に拍手を送る。
世界一の美女が自分の立場も権力も捨てて、一人の男のために行動する。
デボンは東の海の「恋はいつでもハリケーン」という諺を思い出す。
「わらわの質問に答えるのじゃ！　そなたはルフィと一体どういう関係なのじゃ!!!　よもや……恋仲ではあるまいな!!?!!」
「ムルンフフフ！　安心しなさい、”海賊女帝”――いえ、ハンコック。麦わらの坊や、素敵な男だから心配するのも無理ないけど、私達は共通の目的を持つだけの仲間。アンタが心配しているような関係じゃないわよ」
「そ、そうか！　それなら、よいのじゃが！」
「麦わらの坊やが相手だと苦労しそうねェ。ああいうタイプは無理矢理にでも一線を越えないと、一生上手くいかないわよ」
「ふ、フン。そんなこと分かっておる……！」
ニヤニヤと笑いながら話すデボンと明らかに安心した様子のハンコック。
デボンの助言に分かっている、と返答するハンコックだったが、どこからともなく取り出したメモ帳にいそいそときいた言葉を書き留めていた。
そんな様子を呆然と眺めるモモンガと、滂沱の涙を流すショット。
「……麦わらは女に好かれる男のようだな」
「あのボア・ハンコックが”麦わらのルフィ”を、だと……！」
「うぉぉ～～ん!!!　アピールもしてねェのに、フラれたの～！　麦わらの坊主、ズリィな～～!!!!」
ミホークは単純な感想を。モモンガは冷徹で他者を見下すハンコックが、乙女のような表情をすることに愕然とする。
ショットは失恋による悲しみから涙を流し続け、ルフィを羨ましく思う。
場は混沌。
気分を上げたハンコックは覇王色の覇気を放ち、己の”メロメロの実”の能力を解放する。

己に見惚れた相手を石化させる能力が覇王色と共に吹き荒れ、周囲で戦う海兵や海賊達を次々と石化させていく。
範囲外から離れたデボン、ショットはハンコックの能力の凶悪さに戦慄し、ミホークは無言で驚く。
「防御不能の石化攻撃なんて、恐ろしい能力ねェ……！」
「くッ……」
モモンガは範囲外への移動が間に合わず、先日の船上での出来事と同様に足に刀を突き刺し、痛みで石化を食い止めた。
欠片程のハンコックへの情欲を持っていれば防御不可能なメロメロの能力であるが、それをなんとか耐えたモモンガは激痛に顔を歪めながらハンコックを睨み付ける。
「貴様……！　七武海を辞めてどうなるか分かっているんだろうな！　貴様の国――”アマゾン・リリー”も海賊の島として我々の殲滅対象になるという事だぞ！」
「そなた等が敵になるというならば、それを打ち破るだけのこと。大体、この戦争に負けるそなた等が心配することか？　勝利するのは”麦わらのルフィ”。わらわのお、お……夫じゃ！」
「戯れ言を……！　海賊、ボア・ハンコック！　海軍本部中将モモンガ、政府に仇なす海賊として、貴様を処罰する!!」
自身が言った夫という言葉に照れるハンコックと、こめかみに青筋を浮かび上がらせるモモンガ。
再び激闘を開始したミホークとショット、デボンの気配を感じながら、己も斬りかかろうとしたモモンガだったが、突如近づいてきた”毒”によって行動を取りやめる。
「――話は聞いていたぞ、ボア・ハンコック。インペルダウンに”麦わらのルフィ”を侵入させたのは貴様だな……！」
「インペルダウン署長マゼラン殿!!?」
毒の柱を通って現れたのは世界一の大監獄、インペルダウンの署長マゼランだった。
全身に傷を負い、肩で息をしながらもハンコックを睨み付ける彼からは、凄まじい怒気が感じられる。

「貴様がインペルダウンに来てからだ。あの男が現れたのは……！
貴様等の今の話を聞いて確信した。インペルダウン署長として己の尻拭いはしなければならない！　覚悟する事だ……!!」
「フン。マヌケが何を今更言っておるのじゃ」
インペルダウン署長マゼラン。
”海賊女帝”ボア・ハンコックの手引きにより侵入した”麦わらのルフィ”により、インペルダウンは事実上の壊滅。
誰一人として囚人がいなくなったインペルダウンを残し、脱獄の主犯であるルフィを殺すべくマリンフォードへ乗り込んだマゼランは、ハンコックの話を聞き、全てを理解し、大激怒した。
頂上戦争、マゼラン率いるインペルダウン職員到着。
怒り震えるマゼランは、怒気を放ち、毒を無差別に解放した。
無機物すらも汚染する最強の毒は、地面を汚染し、広がっていく。
汚染された大地に足を残す者は次々と即死していき、範囲はどんどんと広がっていく。
月歩で空へと移動したモモンガは毒の凶悪さに恐怖を抱きながら、しかし、敵であるハンコックを睨み付け、ハンコックもまた、眼前で戦意を激らせる二人を睨み付ける。
”海賊女帝”ハンコック対”海軍本部中将”モモンガ改め、”海賊女帝”ハンコック対”海軍本部中将”モモンガ&”インペルダウン署長”マゼラン。
愛する者を助けるため。
海軍の勝利及び、世界の平和のため。
己の失態を挽回し、インペルダウン壊滅の原因を討つため。
三者三様、それぞれの目的のための戦いが始まる。

第18話”加速する戦争”

海軍本部が消失し、島一帯に広がる限りなく平らな大地。
血で血を洗う悲惨な戦場の中、ルフィ一行はエースを救出するべく走っていた。
そこら中で壮絶な戦いが起き、戦う者達はいずれもが世界中に名前が知られる大物ばかり。
ルフィ達が走る逆方面を見ると、七武海の一人”暴君”くまと海軍の伝説の女海兵つるが白ひげ海賊団の船長達と激しい戦いを繰り広げているのが見えた。
「くま……ッ」
「イワちゃん、あいつ知ってんのか!?」
「ちょっとね……。まァ、場所的にヴァターシ達がやり合う事は無さそうっチャブルから、いいけどね」
思うところがあるのか、顔を伏せるイワンコフ。
走る一行の前に人影が現れる。
「また会ったな、麦わらァ!」
「お前はシャボンディ諸島の時の……!!」
「おめェらのせいで、わいもオジキもボロボロや! おめェは必ずわいがぶっ殺す!!!」
現れたのはルフィがかつて、シャボンディ諸島で戦った鉞を担いだ男、戦桃丸。
その姿はあまりにも悲惨で、黄猿と同じように、満身創痍の状態だった。
「そして、わいがいるという事は、こいつらもいる」
「……ッ!!? く……!! くま!!?」
「また、あのくまみてェ奴か……!」
戦桃丸の背後に控える十人の”くま”。
理解不能な目の前の光景に愕然とするイワンコフと、シャボンディ諸島での記憶を思い出し、顔を顰めるルフィ。
「こいつらは、王下七武海”暴君”くまを元にして”ベガパンク”に

より作られた、人間兵器”パシフィスタ”。どういう繋がりか知らねェが、おめェの知るクマ公とは別物だ」
「人間兵器……!!?　くまは一体、政府で何をしているっチャブル!!?」
「わいは世界一ガードの固い男であり、世界一口の固い男や！　秘密は喋らねェ。――クマ公は政府ととある契約を交わし、ベガパンクの手により人間兵器へと改造手術を受けた。あそこにいるクマ公はもうおめェが知る男じゃねェよ」
「結局喋ってんじゃねェか」
「どういうこと!!?　くまが改造手術!!?」
　一瞬で口を割った戦桃丸に突っ込むルフィを尻目にイワンコフは彼の言葉に困惑する。
”革命軍”の仲間として長い付き合いである彼が何故そのような状況になっているのか。
　会わない数年の間に何があったのかと、混乱するイワンコフ。
「――麦わらボーイ！　ヴァターシはこいつに聞く事が出来タブル。ヴァナタは先に行きなさい!!　ボンボーイも麦わらボーイと一緒に行くのよ!!」
「……任せてい！　友達（ダチ）の願いはオカマの願い！　絶対兄貴助けてくるから、待っててねい!!」
「気を付けろよ！　その”くまみたいな奴”強ェぞ!!」
「心配いらなブル。ヴァナタはエースボーイを助け出す事だけを考えなさい!!」
「分かった!!」
「おれらはパシフィスタの相手をするから安心して行け!!」
「麦ちゃん、行きましょう!!」
「あぁ、行こう!!」
　イワンコフとニューカマー達、ＬＥＶＥＬ６の脱獄囚に送り出され走り出すルフィとボンクレーだが、逃すまいと戦桃丸が動く。
「逃がさねェよ、麦わら!!」
「ヴァナタの相手はヴァターシよ。事情を全て聞くまで逃がさない!!」

鉞を振りかぶり追う戦桃丸を強烈な瞬きで吹き飛ばすイワンコフ。
世界一のガードを自称する戦桃丸だが、覇王によるダメージにより、成す術なく吹き飛ばされてしまった。
「”オカマ王”……!!」
「さァ、洗いざらい吐いてもらおうじゃないの……!!」
「わいは世界一口の固い男。何も喋らねェ……!」
イワンコフ&”ニューカマー”&ＬＥＶＥＬ６の脱獄囚対戦桃丸&パシフィスタ。
各地でどんどんと勢いを増していく戦いの業火。
遥か海上では、超弩級の巨人と漆黒に光り輝く大仏、豪雨のように荒れる剣鬼が天災を起こしながら激しく戦う。
空、凍り付く海を縦横無尽に動き回りながら戦うのは、一撃で山河を海を崩壊させる拳骨の英雄と、漆黒の鎧を自在に変形させる攻撃力、防御力共に規格外の怪物。
氷河を齎す大将は島周辺の海を際限なく凍てつかせ、全てを読み取る”究極の一”は大自然の力を真っ向から打ち砕いている。
地震を司る伝説とマグマ爆ぜる怪物は絶え間なく島を破壊し、その余波で周囲数百キロの環境を変貌させる。
不死鳥が無尽蔵の極糸に切り刻まれては再生し、蘇りながら堕ちた天竜へと強烈な一撃を与える。
汚染された大地では、石化の呪いと即死の毒が吹き荒れ、尋常ならざる覇気が飛び交う。
この世で最も速い男と暴虐なる王が、互いの血溜まりの中、目にも止まらぬ激闘を繰り広げる。
全てを切り裂く斬撃と百の武器が衝突し、理性を失い思考を失い本能のみで動く獣が酩酊する拳を打ち付ける。
砂漠の王が、奇跡の人が、四皇の一味が、暴君が、伝説の女海兵が、白き煙が、地獄を守る鬼達が激しく、島の環境を変貌させ、大地を破壊しながら戦う。
正に地獄。
間違いなく、今この島は世界で最も凄惨な戦争が起きている。

被害は計り知れない。
海軍本部及び建造物は全て消滅し、マリンフォードも最早以後二度と足を踏み入れる事は叶わない。
大地が沈み、消滅し、崩壊し、侵され、異常な環境となっている。
かつて、海賊王の船員だった男、”道化のバギー”の手により、頂上戦争の全てがシャボンディ諸島へと放送されていた。
安全の中に戦争を眺める者達は皆、世界の本当の恐ろしさを確認することとなる。
尋常ならざる化け物達が蔓延る海を世界政府が取り締まる意味を。
天竜人の存在、理解不能の法律、それらを差し置いても守ってもらっている感謝を。
”政府が、海軍がなければ今頃、あんな化け物達に簡単に殺されていた”。
この日、彼らはこの海の恐ろしさを本当の意味で知ることになった。

□??□??□??□??□??□??

エース救出に向かうべく走るルフィとボンクレー。
行く手を阻む海兵を薙ぎ倒し進む二人はとうとうエースの姿を目視する。
手錠を嵌められた状態で地面に座り込むエースの周囲には、各地でぶつかり合う覇王色の覇気により気絶した死刑執行人や海兵の姿が見える。
まだ生きている。
エースを死守或いは、その首を落とすべく集まった者達は、少し強さに欠けていたようで、覇王色の牙に退場されていたらしい。
「エース!!!　来たぞォ!!!」
「ルフィ!!!」
「はぁ、はぁ……、もう少しだ、待ってろよォ!!!」
眼前を阻む海兵は最早少ない。

いずれもが、覇王色の覇気を耐え抜いた強者ではあるが、この極限の戦場により加速度的に見聞色の覇気を成長させるルフィは最小限の動作で倒していく。
「麦ちゃん、凄いわねぃ！　敵の動きが分かってるみたい！」
「”見聞色の覇気”っていうみたいだぞ。なんか、色んな事が分かんだ！」
「ガッハッハ！　麦ちゃんも強くなったし、敵も少ないし、これは勝ったわねェい!!!」
「――好き勝手やってんじゃねェぞ、海賊！」
突如現れた人影が走るルフィを殴り飛ばした。
「ルフィ!!」
「うわァ！　ゴムなのに痛てェ！　これが武装色の覇気か!!?」
「麦ちゃん、大丈夫!!?」
ルフィを殴り飛ばしたのは一人の大男。
紫色の短い髪と鍛え抜かれた筋骨隆々の男が海軍将校のコートを纏い、ルフィとボンクレーを睨み付けていた。
ルフィの見聞色で感じられる強さはこの戦争においても、最上位に位置し、そんな男がルフィ達とエースの間に立っている。
「おれは海軍本部中将ゼファー。よくぞ、あの戦力を抜けてここまで来た。だがァ、それもこれまでだァ！」
ゼファーの両腕が漆黒に染まり上がる。
”黒腕”の異名を持つゼファーは世界的に見ても最上位の武装色の覇気使い。
異名の元になった漆黒の腕を構えたゼファーは、ルフィの背中の麦わら帽子を見てため息を吐き、両拳を打ち付ける。
「ガープの孫だからって容赦しねェぞ。兄貴を救いてェんなら、おれを越えていく事だ、モンキー・D・ルフィ!!!」
「くそッ、ここに来てこんな強ェ奴か……!!　ボンちゃん、おれがこいつ食い止めるから、エースを頼む!!」
「――分かった!!　麦ちゃん、絶対兄貴救い出して、皆揃って逃げるわよぅ!!!!!」

「あぁ、約束だ!!!」
エース救出も目前。
最後に立ちはだかった圧倒的格上を前に、ルフィは覚悟を決めて己の血流を加速させる。
戦争で磨かれた見聞色の覇気を総動員させ、己の寿命を縮める諸刃の剣を抜いてゼファーと向かい合うルフィ。
「おれは、モンキー・D・ルフィ。エースの弟だ!!! お前を越えて、絶対に助け出す!!!」
「フッ! せいぜい気張れやァ!!!」
”火拳のエース”を助け出すため、難攻不落のインペルダウンを完全攻略し、最悪の囚人達を仲間に引き入れ頂上戦争へと乗り込んだ”麦わらのルフィ”は、とうとうここまでやって来た。
たった一人のルーキーが起こした数々の大事件は、記者の手により世界中に知らされ、世界中の海賊達からは関心の的になる。
頂上戦争も後半戦に至る!

第19話”ルフィvs.ゼファー”

「――オラオラァ！　そんなんじゃァ、オールブルーを見つけるなんざ夢のまた夢だぜェ!!」
「くッ……！　くそがァ!!!」
黒き極光が閃き、同時に数千発の黒き拳がサンジへと迫る。
見聞色の覇気を総動員させその全てを避けるサンジの動きは、修行初日と天と地程の差がある。
初日は黒き極光を避けるのに必死だった彼が、数を増やした”火（アータル）”を避け切り、恐ろしい速度の覇王の拳を必死ながらも避け切っている。
冷や汗をかきながら避けるサンジは、見聞色の過剰使用による頭痛を堪えながら赤熱する脚で反撃する。
「”悪魔風脚（ディアブル・ジャンブ）”……!!!」
「武装色は形になってきたがァ、外骨格は未だ覚醒しねェなァ！」
「そろそろ一発蹴らせやがれ!!」
「その程度の武装色じゃ、おれの覇気の上澄みすら貫通出来ねェぞォ」
摩擦による灼熱の脚に武装色の覇気を纏った強烈な一撃は、しかし、ダイナーの掌に吸い込まれ、確かに触れている筈だが、少しの火傷も負わせられない。
ダイナーとの連日に渡る命懸けの修行により、サンジの覇気は猛烈な速度で成長している。
中でも見聞色の覇気の成長は目を見張る程で、毎秒毎分毎時間毎日、休みなく死の危機を感じるために、熟練の覇気使いを凌ぐ程の精度になっている。
掴んだ足を支点にサンジを宙へ放り、容赦なく顔面に拳を突き刺したダイナー。
「だァ!!　くそッ！　この前からなんで全く効かねェんだ!!?　お前マジで人間か!!?」
「どう見ても人間だろうがァ。武装色の覇気を高めれば、ダメージを負う事はねェ。お前の武装色が弱ェだけだ」

「見聞色は成長したけど、武装色は中々強くならねェな……」
「サンジ、何度も教えているが、覇気とは己を疑わない心からくるものだ。最強の己を常に思い浮かべ、己の一撃は全てを破壊するものと考えろ。覇気の成長のための場は、最高の形で用意してあるからなァ」
「〝透過能力〟はまだなのか……！」
「フッ。まだまだ足りねェみたいだな。サンジ覚悟決めて、もっと気張りやがれ。覚悟を決めれば大抵のことは何とかなる……！」
「……よっしゃァ！　ダイナーやるぞ！」
　ボロボロの体に鞭を打って脚に力を込める。
　灼熱に赤く光り輝く脚は武装色を纏い、空気を焼きながら唸りを上げる。
「そうだ覚悟を決めろ。臆せば先に道はねェ。必ず勝つという覚悟を持てば、お前のとこの船長もやれるかもしれねェぜェ」
「何言って――」
「とりあえず今のお前には関係ねェ。そら、覚悟決めて食らいついてこいや！」
　閃く黒き極光。迸る覇王の圧力。
　サンジは確かに地獄にいた。

□??□??□??□??□??□??

「はぁ……はぁ、強ェ!!」
「なんだ小僧、その程度か？　その程度の力で兄を救うとは笑わせてくれる!!　我を通したければ力が必要だ!!!」
　エース救出も目前、立ち塞がった海軍本部中将〝黒腕のゼファー〟を相手にし、手も足も出ずに疲弊するルフィ。
　彼の十八番である強固な武装色の覇気を纏った拳により甚大なダメージを負ったルフィだが、持ち前の根性とエースを救出するという強い意志のみで拳を握る。
「見聞色の覇気でも読みきれねェ……！」
「火事場の年季が違うんだ。お前程度の見聞色の読みなんざ、手に取

るように分かるぜ」
「何とかして時間を稼がねェと……！　ボンちゃんがエースを助けるまでは絶対行かせねェ!!」
「あァ、あのオカマ野郎にもおれの頼もしい部下が向かっている。海軍の威信にかけて、ポートガス・D・エースの救出なんざさせねェ。安心してお前はおれに潰されろ!!!」
「なッ……グゥッ!!」
漆黒に染まった拳がルフィに突き刺さる。
見聞色の覇気で動きを読んで避けても、それを修正するかのように飛んでくるゼファーの拳に顔を打ち抜かれたルフィ。
あまりの衝撃と痛みに鼻血を噴き出しながら膝をつくルフィはこれからの事を考える。
エース救出の頼みの綱であるボンクレーにはゼファーの部下が当たっているという。
友達であるボンクレーの心配と共に、自身はゼファーを相手に時間稼ぎではなく、勝たねばならないという事実、ゼファーと己との実力の圧倒的な差、それら絶望的な状況に頭が熱を帯びる。
エースは絶対に助け出す。
危険な戦場に着いて来てくれた友達は絶対に死なせない。
強敵であるゼファーは絶対に倒さなければならない。
行くも退くも地獄道。
何もかもがままならない状況に頭がとうとう沸騰しようというところで――。
「――ルフィ!!!　お前には勝てねェ!!　逃げろォ!!!!」
マグマのように頭が煮えたぎり、沸騰しようという中で浴びせられたエースの言葉。
弟である己を心配する気持ちと、自分自身を顧みない言葉。
そして、極限の状況の中で浴びせられた「勝てない」という言葉にルフィの中の何かが切れた。
「――うるせェ!!!」
瞬間、ルフィから迸る覇王色の覇気。

痛み、苦しみ、不安、焦り、悲しみ、そして怒りにより、ルフィの中の”覇王”が完全に覚醒する。
マリンフォード一帯に広がる覇王色の覇気。
戦場の各地で衝突する覇王色の余波を耐え抜いた猛者達でさえ気を失いかける程の圧力にゼファーは驚愕の表情を浮かべる。
「は、ハハハ！　やはり持っていたか！　ガープの孫っていうから、そうだとは思っていたが――中々の覇気じゃねェか」
「黙れ。もう決めた。お前は絶対におれが倒す！」
「フン！　覇王色の覇気を覚醒させただけのガキが粋がりやがって。インペルダウン投獄の第一号はお前だ、”麦わらのルフィ!!!”」
ぶつかり合う拳と拳。
全ての迷いを捨ててゼファーを倒すという覚悟を決めたルフィ。
ぶつかり合うも拮抗すらせず弾き飛ばされるルフィだが、受けた武装色の覇気を観察し、見聞色の覇気の精度を更に高めていく。
身体能力も覇気も経験も全てが負けている。
しかし、覚悟は負けていない。
迫る拳を見聞色の覇気で読み、予想される到達点から身を逸らす。
だが、ゼファーの更に高精度の見聞色に読まれ、避けたルフィの顔面に拳が突き刺さる。
観察し受けた武装色を感じ、教えを受けた覇気の原理を元に武装色を試みるが、何も出ずゼファーの拳が突き刺さる。
受けたダメージはとうの昔に限界を迎えている。
しかし、覚悟と根性だけで限界を越えるルフィは、極限の状況の中、加速度的に成長していく。
見聞色の読み合いで負け、ゼファーの未来視により全ての拳を受けていたルフィだが、稀にだが回避に成功する。
ゼファーの漆黒の拳に容易く打ち落とされていた無垢なゴムの拳が漆黒に染まり、僅かながら拮抗する。
”覇王”捕縛を諦め海軍本部大将の座を降り、海兵の育成のため中将へと降りたゼファーをして、規格外の成長速度。
通常、年単位での修行が必要な覇気の習得を、眼前のルーキーは戦

いの中で確実に成し得ている。
ルフィが武装色の覇気を一度出してからは、尚更成長速度が早まる。
拳が打ち合う度に精度と強度が増し、数十合拳を合わせる頃には、最早覇気初心者とは思えぬ程の上達ぶり。
――これが部下であれば、教えがいがあったものを。
ニヤリと笑ったゼファーは今まで以上に拳に力を入れ、強靭強烈な武装色を纏った一撃でルフィを吹き飛ばす。
「中々の才能だ！　その才能をここで終わらせるには勿体無いが、仕方ない。せいぜい地獄で大人しくしていろ!!」
「……おれはこんな所で負けてられねェ。おれは、”海賊王”になる男だ!!!」
再び吹き荒れる覇王色の覇気。
両の腕を漆黒に染め上げるルフィは雄叫びを上げ、己の血流をフルスピードで加速させる。
全身から蒸気をあげ、更に漆黒に染め上がった腕に噛みつき、筋肉に空気を送る。
腕から送られた空気は全身の筋肉を膨らませ、習得したての武装色の覇気により強固に強靭に変化していく。
「今のままじゃお前に勝てねェ。だから、勝てるようにおれは強くなる」
膨れ上がった筋肉。
漆黒に染まる倍以上に伸びた体躯。
天に逆立つ黒髪と全身から吹き荒れる蒸気。
まるで神話に登場する神のような姿。
戦いを司る”闘神”のような姿にゼファーは眉を上げる。
「おいおい、なんだそりゃァ。能力と覇気の融合なんざ、お前にはまだ早ェだろ」
「うるせェ。戦ってる間にモノにする……！」
ゼファーの言葉通り、悪魔の実の能力と覇気の融合は、覇気を覚えたての初心者がすぐに出来る様な簡単な技ではない。

事実、ルフィの変貌した姿も見た目こそ凶悪だが、中身はゼファーの目からすれば穴だらけ。
とても、強化形態とは言えない代物である。
「お前を見ているとあいつの顔を思い出すな……」
かつて”海軍の英雄”ガープや”仏のセンゴク”等と共に激動の時代を駆け抜けた伝説の海兵ゼファー。
恐ろしい敵であり、見所のある面白い男だった海賊の王の顔を思い出しながら、眼前の男を見やる。
異常な速度で成長し続けるルフィと、凄まじい速度で成り上がったロジャーの顔が重なって見えた。
「フン、面白い！　どこまで成長出来るか見せてみろ!!」
「お前を倒してエースを助け出す!!!」
全盛期の力を取り戻した伝説の海兵、”黒腕のゼファー”。
絶えず成長する新たなる王の卵”麦わらのルフィ”。
圧倒的な実力差が少しずつ、だが確実に縮まっていく中、二人の益荒雄は拳をぶつけ合う。
確固たる覚悟を武器に戦うルフィに、ニヤリと笑うゼファーは黒腕に力を込める。
頂上戦争も終盤戦。
各地の戦いも激しさのピークにある中、ルフィとゼファーもまた激しい戦いを繰り広げる。
ルフィ、極限の状況で絶賛成長中！

第２０話”オカマの覚悟”

漆黒の拳と拳がぶつかり合う。
武装色の覇気による強固な拳がぶつかる事により、まるで金属同士がぶつかり合うかの如く硬く重い音が響き、衝突による衝撃により、辺り一面に暴風が吹き荒れる。
「ぐッ……ォあァ!!!」
「こんなものか、小僧ォ!!!」
限界を超えたダメージと覇気の過剰使用により肉体が悲鳴を上げるが、それを覚悟と根性のみで抑え込み、ルフィは全身に力を漲らせる。
ゼファーとの戦いの中で形になってきた武装色の覇気。
その身に受けた武装色を観察し、見よう見まねで行う覇気は、少しずつ本質を捉えていき、その意志の力により確実に精度を増していく。
土壇場で模索する新たな力。
武装色で強化された筋肉に空気を送り、全身を膨張させ強敵にも負けない肉体を作り上げる。
肉体強度を底上げする事だけを考え、ゴムの弾力等を度外視したこれまでのルフィでは考えつかない荒技。
事実、武装色により強靭に固められた筋肉は弾性を落とし、だが、高密度の筋肉は比類なき硬さと力を手にし、高速で流れる血液により、膨大なエネルギーと速さを獲得する。
ルフィ史上最強の敵であるゼファーを倒すための命を削る力。
ゼファーの拳を真っ向から迎え撃つルフィだが、強化されたルフィの拳であっても僅かな拮抗の後に弾き飛ばされる。
続く拳がルフィの顔面を打ち抜き、連続で突き刺さるゼファーの猛攻により意識を飛ばしかけるルフィ。
「こ……こんなところで、諦めて……たまるか……!!」
「素晴らしい根性だ！　敬意に値するぞ”麦わらのルフィ”!!　お前が敵じゃなけりゃァ、部下に引き入れたものだ！」

「ふざんけんな……！　おれは海兵にはならねェ!!」
「何故お前は海賊なんぞになった？　ガープのように海兵になればよかったものを」
「じいちゃんにも散々断ったんだ！　おれは世界一自由な男になるんだ!!」
　どこかで聞いたことのある言葉。
　大口を開けて笑う馬鹿な男の顔が浮かぶが、こちらを睨み付けるルフィの顔を再度殴り飛ばす。
「そのお前等の身勝手な”自由”とやらが、民衆を不安にさせる。罪もない民衆の命を奪う。お前等の自由ってのはクソだ、麦わらァ！」
「”自由”ってのはそんなもんじゃねェ！　悪ィことはダメだ。そんなやつ、おれが全員ぶっ飛ばしてやる!!」
「……海賊の言葉とは思えねェな。ならば、お前は何故インペルダウンの――世界最悪の大犯罪者達を世に放った。あいつらはお前が言う、悪い奴らだぜ」
　海賊とは思えないルフィの言葉に一瞬言葉を失くすゼファー。
　しかし、ルフィが行った事件の数々。中でも、インペルダウンの囚人達を脱獄させた罪は果てしなく重い。
　海軍が勝てど負けれど、ここを脱出した脱獄囚達は必ず罪もない民衆の厄災となるだろう。
　愉快気に意味もなく殺されるかもしれない。
　泣き叫ぶ女を惨たらしく陵辱するかもしれない。
　抵抗する勇気ある民衆を悍ましく拷問するかもしれない。
　このまま行けば必ず訪れる未来だ。
　それだけこの世界では、海賊による犯罪が後を絶たない。
　そのために海軍が存在する。
　ルフィがインペルダウンの囚人達を脱獄させた時点で世界の安全は一気に暴落したのだ。
「お前が行った事は最悪だ。誰が何と言おうと、奴らを脱獄させたお前は、クソみたいな”悪い奴”だ……！　分かっているのか”麦わらのルフィ!!!”」

全身に覇気を漲らせ、ゼファーはルフィを睨み付ける。
そして、ルフィは――。
「……おれはインペルダウンであいつらを解放した時にイワちゃんと約束したんだ。あいつらには、今後絶対に悪い事はさせねェ。おれが責任を持ってあいつらを見る……！　おれは約束を破らねェ!!!!」
覚悟と共に吹き荒れる覇王色に目を細めるゼファーは、ルフィと相対して何度目かのルフィとロジャーの姿が重なって見える。
かつて何度も拳を合わせた強敵。
同僚であるガープが多く当たっていたロジャーだが、ゼファーも当然ぶつかる事もあり、その度に見ていた彼の確固たる意志を内心認めていたゼファーは、眼前でまだまだ未熟な覇気を放つ男の顔を見やり、ニヤリと笑う。
「――そうか……あいつの麦わら帽子は今はお前が被ってるんだな。……フン！　いいだろう！　ならば、お前の覚悟を見せてみろ！　お前がこの戦いの中でどれだけ成長できるか、最後まで見てやろう！　だが、覚えておけ。目の前にいるのは海軍本部中将”黒腕のゼファー”。かつて大将だった男だァ!!!!」
「ッ!!　いよっしゃァ!!　覚悟しろ、ゼファー!!!!」
熱い男達の戦いは加速する。
何もかもを背負う覚悟で拳を握る一人の男と、かつての強敵（とも）のように認め始めた男の覚悟を試す一人の男。
漆黒の拳がぶつかり合い一方的に拳が突き刺さる中、戦場のど真ん中にいて尚、まるで師弟のように、訓練のように殴り合う二人の姿。
化け物達が暴れ回る戦場の中、ルフィもまたその仲間へと一歩一歩近づいていく。

□??□??□??□??□??□

「はぁ……はぁ……！　麦ちゃんの兄貴、今助けるから待っててねェい!!!」
立ち塞がったゼファーの相手を引き受けたルフィにエース救出を

頼まれたボンクレーは、息を荒げながら全速力でエースの元へと走る。
　寒気がする程力の差を感じたゼファーと戦う友の心配をしながら、しかし、友情の名の下に必ずエースを助け出すと決意を固める。
「麦ちゃん、絶対に兄貴たすけるから死なないでねい……!!」
「――ここから先は一歩たりとも行かせん!!」
「ドゥワッ!!?」
　突如巨大な手裏剣が迫り、身を逸らして避けるボンクレー。
「いきなりなァんなのよーう!!?」
「正義の名の下に〝火拳のエース〟を渡さぬぞ、海賊」
「ここまで来といてまだいるの！　まァ、いいわ。アナタを倒して麦ちゃんの兄貴助ける!!」
　ボンクレーの前に立ち塞がったのは忍者のような格好をした男。
　刀を手にして戻ってきた手裏剣を背に収めた男、ゼファーの部下ビンズはボンクレーを睨み付け、一気に駆ける。
　恐ろしい速度でボンクレーへと迫ったビンズは刀を振り、敵を切り払わんと刃が舞うが、ボンクレーはそれを柔軟な体で避け、流れる動作で蹴りを放つ。
　しかしそれを察知していたかのように既に開始終えているビンズ。
「アナタも見聞色の覇気ってやつを使えるのね……！」
「無論だ！〝鬼の跡目〟のおかげで能力は使えぬが、貴様程度モサモサの力を使うまでもない!!」
「がーはっはっ！　舐めてくれるじゃない！　あちしはオカマ。オカマは友達（だち）との約束は違えない！　だから、アンタはあちしに負けるのよ!!!」
「覇気も使えぬ雑魚が何を言っている……！」
「あんまりやりたくないけど、友達の為！　あちしはあちしを超える!!!」
　突如ボンクレーの体が膨れ上がる。
　ボンクレーが食らった悪魔の実は〝マネマネの実〟。他者の顔に触れる事でその相手の顔、体型に変化する事が出来る〝マネマネ人間

”である。
ボンクレーが変装したのは、遥か彼方で海軍本部元帥センゴク、インペルダウン看守長と激闘を繰り広げる規格外の巨人、”巨大戦艦”ウルフ。
ワールドの能力とウルフ自身の能力で巨大化する前の、ウルフ。
１８メートルもの巨体を誇る怪物が突如としてビンズの前に現れた。
「なッ……!!?」
「ガーッハッハッハ!!　あちしの能力はコピーした相手の体格まで再現する！　本当は変装しながら戦いたくなんてなかったけど友達の為！　友情の前にプライドなんてクソくらえ!!　覚悟せいや!!!」
ウルフの恐ろしい巨体から発せられるボンクレーのオカマ口調。
己の拳法に誇りを持ってこれまで戦ってきたボンクレーは、友情の名の下に誇りを捨て、約束を果たす為だけに拳を握る。
ボンクレー自身のしなやかな肉体が要である”オカマ拳法”を捨てざるを得ない故、敬遠していたこの戦法だが、その全てを投げ打ち、ウルフの姿になったボンクレーは眼下で立ちすくむビンズへと渾身の拳を放つ。
素の大きさでも規格外の巨体であるウルフに変貌したボンクレーの拳は、しかし慣れない体の大きさを操りきれずビンズに届かず大地を穿つ。
凄まじい轟音と共に大地に大穴が開き、辺り一面に砂塵が舞う。
「やっぱり慣れないわねーい！　でもあちし負けない！　オカマを封じたあちしは強いわよ!!」
「クッ、馬鹿げている！　任せてくれたゼファー先生のためにも、絶対に負けられん!!」
エース救出も目前。
規格外の巨人に変貌した性別を超越した仁義の人と、能力を封じられど熱き魂を持つ正義の忍者が激突する。
鳴り止まぬ轟音。
吹き荒れる覇王色の覇気。

飛び交う即死の一撃。
戦場各地が気を抜けば一瞬で命を失う最悪の地獄。
次々と崩壊していくマリンフォードの大地と塗り替えられていく気象環境。
人外魔境の大地にて”火拳のエース”は己の命運を天に任せ、静かに決着を待つ。
頂上戦争、決着の時は近い！

第21話”エース奪還”

「――おい、ちゃんと撮れてるか!!?」
「綺麗に撮れています、キャプテン・バギー!!」
「よし！　じゃァ、おれ様がエースの野郎を華麗に助け出すのを全世界に放送してやろうぜ!!!」
『ウォォォォォ!!　キャプテン・バギーの勇姿が世界中に映し出されるなんて感激だ……！』
「ここまで来れたのは奇跡カネ……!!?」
　海軍の映像電伝虫を尽く奪い取り、各地の戦場を放送し、いよいよエース救出に乗り出さんと走るバギー一行。
　奇跡のような巡り合わせで、強靭な海兵達は白ひげ海賊団の面々やインペルダウンの別の脱獄囚達が相手取り、目を疑う程の無傷でエースも目前まで迫ったバギーは、眼前で激闘を繰り広げる忍者風の海兵と、遥か彼方の海上で化け物相手に戦っている筈のウルフを目にし、驚愕する。
「なんであいつがこんな所にいやがんだ!!?」
「ウルフは海上でセンゴクとシリュウ相手に戦っていたガネ……！あいつはウルフじゃないという事だ！」
　各地の戦場を撮影してきたバギー一行はウルフとセンゴク、シリュウの戦いもまた遠距離から見ていた。
　まるで神話の中のような闘争を戦慄しながら見ていたバギーは、ウルフがこんな所にいる訳がないと頭を振る。
　だが、目の前で大地を穿つ蹴りを放つのは、インペルダウン内で見た巨大化する前のウルフと何ら変わりがない。
「どうなってやがんだ……？」
　映像電伝虫で映すように部下に指示しながらバギーは考える。
　そんな時、ウルフから声が発せられる。
「アナタ達無事だったのねェ！　いい所に来たわ!!」
　聞こえてきた声は確かにウルフのもの。
　だがその口調はインペルダウン内で散々聞いてきたものだった。

熱いテンションとオカマ口調。
熱き仁義のオカマ、ボンクレーその人である。
「おめェＭｒ．２か!!?」
「そうよぅ！　あちしよ、あ・ち・し!!」
「そうか……！　マネマネの実の能力でウルフに化けてるんだガネ!!」
「この体に慣れてないから大変だけどねぃ！　そんな事よりアナタ達、こいつはあちしが抑え込んでるから、エースの事を頼むわよ!!」
「行かせるものか……!!」
「アナタの相手はあちしでしょ！」
響く轟音。
少しずつ慣れてきたのか一直線に向かう拳を必死に避けたビンズだが、続く巨大な手による薙ぎ払いに吹き飛ばされる。
「早く行きなさい!!!　これが手錠の鍵よ!!!」
「命令されるのは癪だが、仕方ねェ！　野郎共、今の内にエースを助け出すぞォ!!!」
「よっしゃァ!!　ボン兄ありがとォ!!!」
ボンクレーから投げ渡された手錠の鍵を受け取ったバギーは、ビンズを相手取るボンクレーを背にエースへと一直線に走り出す。
数多の映像電伝虫で運命の瞬間を撮らんと、全力で構えながら走る脱獄囚達は、バギーの来たる勇姿に胸を躍らせながら走る。
「ギャーハッハッハ!!!　エース！　助けに来たぞ!!!」
「バギー!!!」
エースとの距離、残り数十メートル。
バギーであれば体を切り離して飛べば一瞬の距離にまで迫った彼にエースは声を上げる。
かつて共に宴を行った友の姿に笑みを浮かべるエース。
たった一度酒を飲み交わしただけの己を助けに来たバギーに深い感謝を抱きながら運命の瞬間を待つ。
己が食った悪魔の実である”バラバラの実”の能力により、上半身を切り離し、高速でエースの元へと飛び出したバギー。

そして、それは届き、とうとうエースの元へと到着する。
海賊陣営、”道化のバギー”。世界最大の頂上戦争にてその目標に辿り着く。
そして、すぐさまボンクレーから受け取った鍵でエースの手錠を外そうと手を伸ばした瞬間。
「やらせねェ!!!」
「グボァッ!!?」
「キャプテン・バギー!!!?」
バギーのこめかみに白い煙に包まれた拳が突き刺さり吹き飛ぶ。
「なんだガネ!!?」
”道化のバギー”、”元バロックワークス”Ｍｒ．３……！　絶対に”火拳のエース”は奪らせねェ!!」
”白猟のスモーカー”……！　アラバスタではよくもやってくれたガネ……!!!」
現れたのは煙に包まれた葉巻を口に咥える男、自然系悪魔の実”モクモクの実”を食らった”煙人間”である”白猟のスモーカー”。
葉巻を吐き捨て、手に持つ巨大な十手を構える。
そんなスモーカーに殴り飛ばされたバギーが怒り叫ぶ。
「クォルァァッッ!!!　てめェ、おれ様をぶん殴りやがって!!　八つ裂きにして海に捨ててやるァ!!!」
顔を赤くしながら怒鳴り散らかすバギーは血走る目でスモーカーを睨みつける。
しかし、今にも飛び掛かりそうなバギーにＭｒ．３は静止をかける。
「バギー、こいつは私に任せてもらおう。少しばかり借りがあるガネ……！」
「……嫌だね！　おれ様も今借りが出来た！　エースはおれ様に任せろ。あいつをぶっ飛ばしながら手錠を外す!!!」
「フン！　それならば仕方ないガネ……。足を引っ張るなよ!!」
「ギャハハハ！　誰に言ってやがる！　おれ様は”道化のバギー”！いずれ海賊王になる男だぜェ!!!」

「下らねェ。雑魚二人なんざ、一瞬であの世に送ってやる」
『キャプテン・バギーと3兄さんだけじゃねェ！　おれ達もいるぜェ!!!』
スモーカーｖｓ．バギー、Ｍｒ．３、脱獄囚達。
圧倒的物量がスモーカーに次々と突き進む。
バギーの特性の爆弾により吹き飛ばされたスモーカーへと殺到する脱獄囚達だが、自然系（ロギア）の流動する肉体を捉えられずダメージを与えられない。
反対にスモーカーの煙の拳や広がる煙により拘束される脱獄囚達。
「すぐに解放してやるからお前ら許せ！　”キャンドル波（ウェイブ）!!”」
Ｍｒ．３から膨大な量の蝋が巨大な津波のようにスモーカーや脱獄囚達に襲い掛かる。
恐ろしい程の質量が大地を飲み込んでいき、スモーカーを飲み込まんと襲い掛かるが、広げていた煙を戻し宙へと高速で逃げたスモーカー。
「もう一発食らいやがれ！　”特製マギー玉!!!”　消し飛びやがれ！」
「チッ!!　雑魚共が!!!」
爆弾を急遽回避し煙へと全身を変化させ上空へと逃げるスモーカー。
その瞬間、大量に放出した蝋を回収し、上空へとそれを放出するＭｒ．３。
緊急回避したスモーカーが煙から実体を表し、そこへと大量の蝋が襲いかかる。
物理攻撃を受け流す自然系ではあるが、あまりの蝋の質量と面積により、捕まり、更に上空へとそのままに押し上げられる。
「よっしゃ、オラァ！　作戦成功だぜ!!　自然系なんざ、まともに相手してられるか!!!」
「蝋も無限じゃないガネ！　今の内にエースの手錠を外すガネ!!!」
「任せろ!!!」
自然系悪魔の実の能力者は弱点を突くか、或いは武装色の覇気で実態を捉えるしかない。

この場にいる誰もが、そのどちらの条件を満たす事が出来ないために取った作戦。
名付けて『勝てないのなら遠ざければいいじゃない作戦！』
地獄を乗り越えた一行だからこそ出来た無言の連携。
作戦通りスモーカーが打ち上げられている今、エースの身柄は真の意味でフリーとなる。
「エース！　本当にこれが最後だ!!!」
「バギー……！　恩に着る!!!」

エース救出成功！
バギーの手により手錠を外されたエースは、解放された喜びと、目の前で散って行った仲間達への悲しみ、そして、助けに来てくれた全てへ感謝を込め、全力で燃え上がる。
「ウォァァァ!!!　皆、感謝する!!!　こんなおれを、助けに来てくれてありがとう!!!」
マリンフォードの中心で巨大な火柱が上がる。
離れた戦場でも熱量を感じられる程の大炎上に各地から歓喜の雄叫びが上がる。
白ひげはマグマの拳を地震のエネルギーを放つ薙刀で撃ち落としながら笑みを浮かべる。
ガープとバレットは戦いの手を止め、どちらも喜びの笑みを浮かべる。
そして、ルフィは迫る漆黒の拳に己の拳を合わせ、ししし と笑った。
頂上戦争、海賊陣営、最大目的である”エース救出”を成し遂げる。
エース救出の下手人は”道化のバギー”。
そして、その様子は数多の映像電伝虫により世界各地に放送されることになった。
決定的な海軍の敗北の瞬間。
闇の住人達は世界が変わる瞬間に笑みを浮かべ、この世界の頂点達は焦燥に駆られる。
シャボンディ諸島で戦況を見守っていた記者達はあまりの瞬間に

言葉を失い、ペンを地に落とす。

”火拳のエース”はこの瞬間、完全に解放された!!!

第22話”最悪の兄弟”

「”火拳のエース”が!!　解放されたァ～～!!!」
頂上戦争、マリンフォードの中心で巨大な火柱が燃え盛る。
響き渡るエースの感謝の雄叫びと膨大な熱量、そして覇王色の覇気が吹き荒れ、マリンフォード全土でエース解放が観測された。
「やったぞォ～～!!!　エースを奪い返したァ～～!!!」
「エース～～!!!」
各地でエース解放に歓喜の声が上がり、中には涙を流す者まで現れる。
最大の強敵”黒腕のゼファー”と拳を合わせるルフィは、感じる熱とエースの気配に涙を流して喜んだ。
そして、エース救出の下手人であるバギーは、間近で燃え盛る巨大な火柱の熱さに目を細めながら、世界中に映し出されたであろう己の勇姿を想像し、ニヤニヤと笑う。
「エース、ド派手に久しぶりだなァ!　このおれ様が助けに来てやったぜ……!」
「バギー!　たった一度酒を飲んだだけのおれの為に命を懸けやがって……!　ありがとう……!!!」
「なに、いいってことよ。おれ様とお前の仲じゃねェか」
「お前ってやつァ……!」
「ウォォォ!　流石は我らがキャプテン・バギー!　仁義に熱い男だ……!」
努めて真剣な表情をするバギーにエースと脱獄囚達は感動する。
一度宴を共にしただけの短い付き合いの己のために、世界一危険な戦争にまで乗り込み、助けてくれたバギーに深い感謝を覚えるエース。
この世に生まれてきてはならないと言われた鬼の血を引く自分。
そんな己を、こんなにもたくさんの人が助けに来てくれた。
何よりも盃を交わした唯一の弟が命を懸けて戦場に駆けつけてくれた。

弱いままだと思っていた弟は、己が思っていたよりも強くなっており、世界最高峰の強者と渡り合っている。
助けに来てくれた事への感謝。そして、知らぬ間に強くなっていた弟への歓喜と誇らしさ。
様々な感情が折り重なり、身体に覇気が満ち溢れる。
そんな時、振動と共に戦場に巨大な声が響き渡る。
「野郎共、目的は達した!!　各自インペルダウンの船を奪い、新世界へ帰還しろォ!!!」
大恩人でありエースが親父と慕う男の声。
マグマにより火傷を負いながらも、海軍の最高戦力と激闘を繰り広げる白ひげの命令を聞いた”白ひげ海賊団”及び傘下の海賊達は、各自行動を開始する。
海軍の軍艦がなくなった今、残る唯一の帰還手段。インペルダウンの悪鬼達が乗ってきた船を奪うべく動き出した。
「バギー、この恩は必ず返す!　おれはちょいとルフィの所へ行ってくる!」
「……おい、エース!　またド派手に宴をやろうぜ!!」
「……あぁ!!　ルフィも皆で必ずだ!!!」
「ギャハハハ!　あの野郎はいらねェけどな!!」
「お前らも絶対死ぬなよ……!!」
「早く行くガネ……!　麦わらも大変そうだガネ」
「あいつのことァ気に食わねェが、あいつの覚悟は本物だ。早く行ってやれエース!」
「自慢の弟なんだ!　行ってくる!!」
エースは上空へと上昇し、Ｍｒ．３の大量の蝋で打ち上げられ続けるスモーカーを覇気を纏う火炎で遥か先へと吹き飛ばす。
本来火と煙の相性により決着の着かない二人だが、覇気の有無により甚大なダメージを受けたスモーカーは、凄まじい勢いで吹き飛んでいく。
鎧袖一触の強さを見せつけたエースはそのままルフィの元へと駆け出す。

「……あんな化け物が捕まるなんて、この世界は恐ろしいガネ……」
「だが、これであいつに恩を売れたぜェ……！　エースを仲間に入れれりゃァ、おれ様の名も上がるってもんだぜ」
世界の広さに戦慄するＭｒ．３とエースに恩を売れた事にほくそ笑むバギー。
「よし、おれらも行くぞ！　ド派手に脱出だァ!!!　白ひげン所の奴らより先に船を奪いやがれ!!」
バギー一行も島を脱出するべく行動を開始する。
己の勇姿を世界へ発信した今、最早電伝虫は必要ない。
全ての映像電伝虫を放り捨て、凶悪な脱獄囚達は各自武器を取り、戦意を高める。
残すは最悪の戦場から脱出するのみ。
頂上戦争において最大の”誉れ”はバギーのものとなった。
”海賊王”と鎬を削った伝説の大海賊、四皇”白ひげ”。
絶大な”力”でロジャーを継ぐ男と呼ばれた怪物”鬼の跡目”。
個の力で強大な海賊達と渡り合ってきた”赤の伯爵”。
そしてインペルダウンに乗り込み、数多の伝説の海賊達を引き連れ頂上戦争に駆けつけた、前人未到のスーパールーキー、”麦わらのルフィ”。
数え切れない程の怪物が犇めく地獄において、バギーは一等の輝きを見せた！

□??□??□??□??□??□??

「あいつァ、ロジャーんところの赤っ鼻か……！」
「ししし！　バギーに恩が出来ちまった!!」
「こりゃァ、お前と遊んでられねェな。何があっても”火拳のエース”の首は取らねばならない……！　お前がどこまで成長できるか見られねェのは残念だが、そろそろ終わりにさせてもらおう!!」
ゼファーの黒腕が隆起する。
隆々とした筋肉が更に巨大化し、覇気が益々膨れ上がった。

能力の全てを粉砕する一撃必殺の拳。
かつて世界中の海賊を震え上がらせた”黒腕のゼファー”の本気。
絶えず成長し続けるルフィの行き着く最期を見られず残念に思うゼファーだが、己の職務を遂行すべく遊びを止めた。
「――後はお前をぶっ飛ばしてエースを連れていくだけだ！　なんか楽しくなってきた!!」
眼前で拳を構える怪物は、己よりも遥か高みの実力者。
今尚覇気が成長し続けていても、決して届かない世界最高峰の強者を相手に、絶望的であるにも関わらずルフィはニヤリと笑った。
感じる覇気に寒気がする。
感じる圧力に足が折れそうになる。
だが、楽しくて仕方がない。
創意工夫をし、己の限界を飛び越え、新たな力を途方もない程の強者にぶつける。
極限の戦場によるストレスと敬愛する兄の解放を受け、ルフィはハイになっていた。
武装色の覇気により漆黒に染まる拳を握りしめ、ルフィは飛びかかる。
重い金属が衝突したような音と共に飛び出したルフィは、その勢いのままに拳をゼファーへと放つ。
「もう遊んでやれねェよ。目が覚めたらまた地獄だ……！」
迫る尋常ではない威力の拳を簡単に撃ち落としたゼファーは、覇気を全開にその拳をルフィへと打ち下ろす。
覇気を貫き一撃で全てを終わらせるであろう拳がルフィに迫り来る。
半端な体勢と、ゼファーの流れるような反撃により避ける事が不可能な状況。
先程までのルフィであれば犯す事のなかった失態。
そのたった一度の選択ミスにより、決着しようという瞬間、恐ろしいまでの熱量と共に人型の炎がゼファーを殴り飛ばした。
「ルフィ、強くなったと思ったがまだまだだな！」

「――エース!!!」
炎を纏うエースがニヤリと笑いルフィの前へと現れた。
歓喜の表情を浮かべるルフィはエースへと抱きつき、炎の熱で慌てて離れる。
「エース！　良かった!!　エースまでいなくなったら、おれ……！」
歓喜の笑顔を見せ、次の瞬間には滂沱の涙を流すルフィを見たエースは笑い、目の端に涙を浮かべながらルフィの頭に拳を落とす。
「無茶しやがって。お前は昔からそうだ。心配するおれの気持ちを考えねェ」
「だって……だってよ！　おれはエースの弟だから……！　もう、あんな思いはしたくねェ!!!」
「……ありがとよ。よし、ルフィ！　こんな所で話してる暇はねェ。早いとこ逃げるぞ!!」
「――おれが逃すと思うかァ!!!?」
瞬間、高速で迫るゼファーがその剛腕を打ち落とす。
ルフィとエースは後方に下がりその拳を避け、眼前のゼファーを睨み付ける。
「あの赤っ鼻は大誤算だが、ここでお前を始末すれば問題はねェ」
「おいルフィ。あんな化け物の相手なんかしてられねェ。なんとかぶっ飛ばして逃げるぞ！」
「分かった!!」
”麦わらのルフィ”&”火拳のエース”vs.”黒腕のゼファー”。
最悪の兄弟と伝説の海兵が激突する。
頂上戦争も終局。海賊達が脱出すれば全てが終わる今、しかしこれから更に戦場は混沌の様相を呈していく。
エース奪還成功！　後は逃げるのみ!!

第２３話”カイドウ襲来”

闘神の如き強靭な益荒雄が大地を割る程の拳を放つ。
万象を焦がす熱き益荒雄が広範囲に灼熱の炎を放つ。
数多の悪を討伐した正義の益荒雄は一撃必殺の拳を放つ。
”麦わらのルフィ”&”火拳のエース”ｖｓ．”黒腕のゼファー”。
片や尋常ならざる成長率を見せ、今尚成長し続ける恐ろしきルーキー。
片や世界最悪の血を引き、覚悟を決めた事により強靭な覇気を放つ火の化身。
片や全盛期の力を取り戻し、膨大な経験により海賊王時代よりも強くなった伝説の海兵。
間違いなくこの世界の上位に位置する強さのルフィとエースだが、最盛期の戦闘力を取り戻したゼファー相手に劣勢を強いられ、逃げる隙も見出せない二人。
「チッ！　化け物かよこいつ……！」
「お前の親父はもっと強かったぞ!!」
「ッ！　おれの親父は白ひげだけだ!!!」
「エース、落ち着け!!!」
ゼファーの言葉に逆上し殴りかかろうとするエースを、赤い数珠のネックレスを掴んで引き止めるルフィ。
ゼファーを睨み付けながらも思いとどまったエースと、あまりのゼファーの強さに悩み込むルフィ。
「どうするエース。あいつ強すぎるぞ」
「流石は”黒腕のゼファー”。覇気が硬てェな。……ルフィ、どうにか隙を作ってデカイのぶち当てるぞ」
「じゃァ、おれがなんとかするよ！」
「ふっ！　頼もしくなったな、ルフィ」
「ししし！　じゃァ頼むよ！」
ゼファーの覇気を貫く一撃を放つために炎を溜めるエースを背に、

ルフィは覇気を高めゼファーの元へ一直線に駆け出す。
空気により膨張した筋肉が武装色の覇気で強固になり、全身を流れる高速の血潮が膨大なエネルギーを生み出し、規格外の膂力を獲得する。
風を切り裂きながら突き進み、そのままの勢いで拳を放つ。
ハイになっていた先程とは異なり、見聞色の覇気でゼファーの動きを読みながら放った拳は、しかし、ゼファーの黒腕に防がれ、返す拳がルフィへと飛んでくる。
迫り来る一撃必殺の拳を見聞色の覇気で冷静に読み避けながら、再度拳を放つルフィ。
「フハハハ！　凄まじい成長速度だな、麦わらのルフィ！　だが、まだまだだァ!!」
相手の動きを読み、読まれ、壮絶な拳の打ち合いの果てに強烈な一撃を貰ってしまうルフィ。
腹を殴られ打ち上げられるルフィは盛大に吐血し、遥か上空へと吹き飛ばされた。
「ルフィ!!」
「麦わらよりお前の方が優先だ、火拳のエース」
「クソッ！」
ゼファーは壮絶な打ち合いで煙を上げる拳をひらひらと振りながらエースへと歩み進む。
尋常ならざる覇気を放ちながら歩み寄るゼファーの姿が悪魔のように思え、エースは思わず悪態をついてしまう。
「お前の身の上には同情するが、海賊の道を選んだのは許されねェ。海軍に入ってさえいれば、こうはならなかった筈だがなァ」
「うるせェ……！　お前に何が分かる!!」
「分からねェ……だが、ガープの言う通りに生きていれば少なくともここで死ぬ事はなかった」
何度もやり合った強敵の顔を思い出し、長く共に戦ってきた同僚の顔を思い出し、ゼファーはため息を吐く。
”正しい正義”を掲げてきたゼファーすらも認めていたロジャー

の息子。
血筋だけで罪人として処刑しなければならない現実と、ガープの威光でエースを救えていたかもしれない可能性を考え、この世の不条理さを再確認したゼファー。
眼前で怒りの覇王色の覇気を放出するエースを見つめ、ゼファーは拳を振りかぶる。
「おれは海兵だ。気に入らない事でも、平和の為には仕方なし。平和の礎となれ、鬼の子よ……！」
「おれはポートガス・D・エース……！　偉大な母に守られて生まれ、偉大な男に育てられた”白ひげ”の子だ！　そして、世界一の弟の兄でもある!!」
ゼファーはもう言う事はないと黒く染まった拳をエースへと振り下ろす。
これまで以上に練り上げられた武装色の覇気を纏った一撃は、しかし、エースに当たる事はなく、突如空より飛来した巨大な拳にゼファーは大地へと叩き潰される。
ゼファーにより遥か上空へと吹き飛ばされたルフィが、上空を蹴り、恐ろしい速度で巨大化した拳をゼファーへと叩きつけた。
筋肉に空気を送り込み武装色の覇気で強化した最強の鎧。
血流を高速化する事で得られる膨大なエネルギーとスピード。
そして、骨に空気を送り込む事で得られる、規格外の大きさとパワー。
空を蹴り落下する事による速度と、過剰で強化する事で得られた果てしないパワーを持って、ゼファーの強靭な覇気を貫いた。
「よくやった、ルフィ!!!」
「あとは頼む、エース!!!」
圧縮に圧縮を重ね、膨大な炎を拳に宿したエースはそれを一気に解放する。
「”火拳!!!”」
瞬間、拳から迸る極大の炎。
自身の代名詞でもある”火拳”が筆舌し難い威力で起き上がった

ゼファーへと激突した。
爆ぜる炎の拳。
遥か彼方の海上で戦うウルフやセンゴク、シリュウからも目視出来る程の巨大な爆発はゼファーの覇気を貫き、恐ろしい速度で彼を吹き飛ばした。
「ルフィ！　今の内に逃げるぞ!!　今のでもあいつは倒せてねェ!!!」
「分かった！　急ごう!!」
猛スピードで遠ざかっていくゼファーだが、彼の覇気は未だ健在。
ルフィとエースの息のあった超絶的な一撃をもってしても倒しきれていない。
しかし、ルフィとエースの一先ずの目標であるゼファーを遠ざける事には成功した。
爆発の檻からゼファーは暫くの間は出られない。
吹き飛んでいくゼファーを見て、ルフィとエースは脱出の為に急ぎ走り出す。
ルフィとエース、伝説の海兵との戦いに条件付きで勝利！

□??□??□??□??□??

エースが解放された今、戦場は次なる展開へと進んでいた。
エースを救出する為の戦いから、マリンフォードを脱出する為の戦いへ。
真っ向から戦っていた百戦錬磨の海賊達は、勝つ事をやめ脱出する為に武器を握る。
皆は一様にインペルダウンの職員が乗ってきた軍艦を奪うべく強襲をかけ、特級戦力達はそれぞれが戦い続けている。
海賊は奪う立場から逃げる立場に変化し、海軍は守る立場から奪う立場に変化した。
しかし変化はそれだけに留まらず、更なる予想外の展開へと変化していく。
数多の化け物の影響により摩訶不思議、奇天烈で激烈な天候となっ

ているマリンフォードの空。
氷が降り、火が燃え盛り、嵐が吹き荒れ、空間が割れている、そんな空に突如雷鳴が響き渡った。
嵐の中、鳴り響く雷鳴とは明らかに大きさも圧力も異なる、恐ろしい程巨大な雷鳴。
そして、それに伴ってマリンフォード全土に降り注ぐ規格外の覇王色の覇気。
覇王色の覇気が各地で衝突するこの場においても、最上位の覇王色の覇気を感じた海賊、海軍両名は一様に戦いの手を止めた。
「な……ッ！　この覇王色は……!!?」
「何故ヤツがこんな所に……!!?　ヤツは赤髪が抑えている筈では!!?」
再び鳴り響く雷鳴。
奇天烈に混ざり合った上空の様相。
そこに深く濃い雲が覆い尽くした。
鳴り響く雷鳴。
共に降り注ぐ極大の覇王色の覇気。
「グララララ!!　何故お前がこんな所に来やがった、カイドウ!!!」
一際大きい雷鳴と共に雲を突き破り現れたのはあまりにも長大な一体の青龍。
雲を体に纏い、炎を吐きながら浮遊する青龍、四皇の一人”百獣のカイドウ”は楽し気に覇王色を放出しながら口を開く。
「ウォロロロロ!!!　随分と久しぶりだな白ひげのジジイ！　お前らだけでこんな楽しい戦争をやるなんて、ずりィだろォ!!!　おれも交ぜろよ!!!」
「グララララ!!!　おれらはもうここにゃァ用はねェんだ。久しぶりの再会だが、後はお前らだけでやれ、カイドウ！」
「連れねェ事言うんじゃねェよ！　おれァ、今最高に機嫌が良いんだ。なんだこの地獄みてェな戦場……！　どこ見ても凄エメンツだ……！　こんな戦場、ロックスが生きていた頃以来だ……!!!　ウォロロロロ!!!」
上機嫌に長大な体で空を泳ぎ、その余波で竜巻が生まれる。

ただの動作一つが災害に繋がる。
この世界の頂点の一人。
常人では計り知れない程の圧倒的な力。
能力のみならず、単純な身体能力、そして覇気もまた規格外の領域。
あまりの覇王色の覇気の強さに、これまで戦い抜いてきた猛者達でさえ気を失う者が出てきている。
「”赤髪”の野郎のおかげで遅れちまったが、丁度展開も変わったところみてェだし、こっから2回戦目だなァ!! ウォロロロロ!!!」
「とんでもねェ事になってきやがったなァ!!!」
頂上戦争、数多の強敵を退け最大の目標であるエースの救出を成功させた海賊達。
後は脱出するだけというところで突如現れた、世界最強の一人。
マリンフォードに四皇、二名。
頂上戦争は再び、更なる混沌の様相を呈していく！

第２４話”脱出手段”

雷鳴が鳴り響き、陸海空が揺れ動き、万象一切凍てつき、炎と溶岩が吹き荒び、尋常ならざる覇王色の覇気が荒れ狂う。
空では長大な青龍が竜巻や鎌鼬を生み出し、炎を吐き、雷鳴を呼び寄せ暴れ回る。
海では天を突く程の規格外の巨人が凡ゆるものを破壊しながら暴れ回る。
大地では数多の化け物達が環境を変貌させ、尽くを破壊しながら衝突している。
地獄。
間違いなくこの世で最も危険な戦場がそこにあった。
エースの救出に成功し、後は脱出するだけというところで襲来した四皇”百獣のカイドウ”により、戦場は更なる混沌に包まれた。
カイドウから吐き出された破壊光線のような炎を迎撃する白ひげ。
炎と尋常ならざる地震のエネルギーが激突し、空間が捻じ曲がる。
まるで神話の中の出来事のような、恐ろしい光景に海賊も海兵も言葉を失ってしまう。
白ひげとカイドウ、両者の何気ない一撃が恐ろしい程の威力と範囲。
「ウォロロロロ!!!!!　今日はなんて良い日だ!!　最高の戦争じゃねェか!!!!」
「グララララ!!!!　おめェはいつまで経っても変わらねェなァ!!!!」
再び衝突する両者の一撃。
凄まじい熱気が辺りに広がり、恐ろしい程の振動が広がっていく。
「――どうなってんじゃ、こりゃァ!　カイドウの奴は赤髪が抑えとったんじゃなかったのか!!?」
「カハハハ!　こんな凄ェ戦場、あの野郎が来ねェ訳がねェだろ。シャンクスは部下に任せて、あの野郎は一人で飛んできたんだろうよ」
「とんでもない事になったのう……」

「おい、ガープ!!　サボってないで私達も行くぞ!!」
「ん？　なんじゃセンゴク。あいつは良いのか？」
「エースも解放されたんだ！　あんなデカブツ相手にしてられるか!!
とにかく、私達も早く駆けつけねばとんでもない事になるぞ！」
海上でウルフと戦っていたセンゴクがガープとバレットの元へやって来た。
大小様々な傷を作り、焦りの表情を浮かべるセンゴクにガープはこれまでの様々な修羅場を思い出してニヤリと笑う。
「何を笑っている、ガープ!!」
「ぶぁっはっはっは!!　いや、わしらがここまでやるのも随分と久しぶりじゃな、と思ってな。昔はお前とゼファー、おつるちゃんと数々の修羅場を潜ったもんじゃがなァ」
「……ふっ。”火拳のエース”の首は海軍の威信をかけて必ず獲らねばならない。もう貴様に”孫”の首を獲れとは言わん！　だから、貴様はカイドウと白ひげの相手をしろ!!」
「センゴク……。ぶぁっはっは!!　流石は親友じゃのう！　相分かった、任せろ!!」
当初予想していた”海軍本部”及び”王下七武海”と”白ひげ海賊団”の戦争から、見る影もない程に姿を変えた頂上戦争。
数多の作戦を無駄にし、海軍の痴態を世界中に晒してしまったセンゴクは、戦争に勝利したとしても訪れるであろう”変化した世界”を想像し、せめてもの思いで覚悟を決める。
「私は”火拳のエース”及び”麦わらのルフィ”の処刑に行く。私を止めるか、バレット……!!」
止めるならば、お前が先だと言うセンゴクにバレットはニヤリと笑い、しかし首を振る。
「お前とやるのも楽しそうだが、生憎とおれもやる事がある。それに、お前にゃァ、アイツらはやれねェよ！」
カハハハと笑うバレットはそう言うと飛び出し、海上まで駆け抜けていく。
そして、センゴクとガープはバレットの言い残していった言葉に驚

いた。
「あやつがあんな事を言うとはのう……」
「私達の知らない間に、少し丸くなっていたみたいだな……」
二人の知るバレットは強くなることのみに執着した修羅だった。
今でも強くなることへの貪欲な執着は変わっていないみたいだが、しかし、他者への関心がかつてと比べ、あるように見れる。
実際、これまでのバレットであれば、カイドウの姿を見た瞬間、目的も何もかも忘れて飛び掛かっていただろう。
そんなバレットが闘争欲求を抑え、共に戦った仲間と脱出する為の船を己の能力で作っている。
バレットの変化に驚愕しつつ、二人はそれぞれの任務を果たすべく覇気を高める。
「あの酔いどれ小僧に灸を据えてやろう!!」
「私は全力で貴様の孫達の相手をする。何も言わせんぞ、ガープ!」
「今更何も言わないわい! ここで死ぬのならそれが定め。全力で行ってやれ!!」
その言葉を最後に二人は走り出す。
ガープは環境を塗り替え、大規模な戦闘をする白ひげとカイドウの元へ。
センゴクは解放されたエースと、驚天動地の大罪人ルフィの処刑のために。
混沌渦巻く戦場の中、二人の伝説の海兵は動き出した。

□??□??□??□??□??□??

海上に膨大な質量が広がっていく。
鉄や石、果ては海楼石まで。ありとあらゆる無機物が海上に広がり、凄まじい速度で重なり合い変形していく。
「カハハハ! これだけ材料があれば、どんな船でも作れるなァ!!!」
マリンフォード全土の無機物を圧縮した鎧を分解し、船の形にガシャガシャしていくバレットは、島中心部でぶつかり合う白ひげ、カ

イドウ、ガープを眺める。
「はァ……おれもどうかしている。あんな楽しそうな闘争に交ざらねェで、ガキ共のケツ持ちか……」
戦う事だけに喜びを見出し、己が最強になる事だけを唯一の目標としてきたバレットは、自分自身の行動にため息を吐く。
見える三つ巴の戦いは間違いなく世界最高峰のもの。
かつては手も足も出なかった化け物である白ひげと、同時期に同じように腕を競い合ったカイドウ。
そして、己が認めた船長と渡り合っていた化け物であるガープ。
そんな化け物達の戦いに交ざりたいという欲求を抑え、しかし、ルフィ達を逃す為に行動している自分に、思いの外悪くない気分のバレット。
「カハハハハ!!! まァ、いい。ここを脱出してアイツを鍛えてやるのも悪くなさそうだ！ そうすりゃァ、ダイナーを超えるための修行相手になるかもしれねェ」
ふと思い付いた事だが、それも悪くないと考えるバレット。
異常な速度で成長するあの男ならば、覇王を超えるための足がかりになるかもしれない。
ニヤリと笑ったバレットは、島一つ分の膨大な無機物を一気に放出し、船の建造を早める。
凄まじい速度で変形していく船。
インペルダウンから脱獄した全員は優に乗り込め、白ひげ海賊団ですら全員が乗り込めるであろう巨大な無機物の塊は、バレットの能力の制御化の元、船としての能力を獲得する。
「おい、ウルフ！ 全員乗り込んだらお前も乗れ。能力は解除しろよ」
「分かった！ おれあんまり船乗らねぇから不思議な気分だ！ でもあいつら大丈夫か？ さっきの仏像のやつ強かったぞ！」
「フン。ここまで来れねェようじゃ、所詮その程度だったって事だ。だが、地獄を乗り越え兄の救出をやり遂げたんだ。見届けようじゃねェか……！」
比類なき闘争本能を抑え、皆を脱出させる為に戦いをやめたバレッ

ト。
「島を脱出する奴ァ、急いでここまで来い!!! 最後に根性出せ、野郎共オ!!!!」
バレットは島全土に響かせるように叫ぶ。
走るルフィやエースの気配を感じながら、戦艦を破壊しようと迫り来る海兵達を迎撃しながら、バレットは脱出後の未来を想像する。
頂上戦争、海賊側の脱出手段として、バレットの能力による巨大戦艦が待機する!

□??□??□??□??□??□??

「なんだあのドラゴン!!?」
「カイドウ!!? なんでアイツまで来てやがんだ!!?」
「あいつカイドウっていうのか! めちゃくちゃ強エぞ!!?」
ルフィが知る限り最強の存在であるガープと激しい戦いを繰り広げるカイドウと白ひげを見て、ルフィは目を疑う。
戦いのレベルがまるで違う。
この戦争を経て確かな成長を実感するルフィだが、それでも感じるレベルの違い。
ゼファーを撃退出来たのも、ゼファー自身の油断と奇跡があってのものだと理解しているルフィは、彼方で戦う三者の実力に戦々恐々とした。
「アイツは親父と同じ”四皇”の一人、”百獣のカイドウ”。今のおれ達じゃ、逆立ちしても勝てねェような化け物だ……!」
「シャンクスと同じ”四皇”か! じゃぁ、今の内に逃げよう、エース!!」
「……そうだな。今おれが行っても親父の足手まといになっちまうか……!」
エースは白ひげの援護に行くべきか考えるが、あまりのレベルの違いに、足手まといになると悟る。
助けてもらった己の命を守るため、白ひげの海軍への勝利を守るた

め、エースはルフィと共に彼方から聞こえたバレットの声の方向へと走る。
　しかし、突如凄まじい衝撃が迫ってくる。
「”火拳のエース”、”麦わらのルフィ”!!　絶対に逃さんぞ!!」
「センゴクか!!!」
　突如現れた漆黒の大仏。
　衝撃を避けたルフィとエースは眼前に立ち塞がったセンゴクを睨み付ける。
「よくもここまで引っ掻き回してくれた！　だが、貴様等の首、絶対にここで落としてやるぞ!!!」
「また強ェ奴か……!!　やるしかねェ、エース!!!」
「分かってる！　お前達が助けてくれたこの命、こんな所で散らしたりしねェ!!!」
　覚悟を決め、目の前に立ち塞がった強者とぶつかろうという瞬間、上空から凄まじい覇気が落ちてくる。
「――兄貴は無事に助け出したみてェだな”麦わらのルフィ”!　ゼハハハハ!!　おめェだけは許さねェぞ、クソ野郎がァァ!!!!」
　突如空から降ってきた大男達。
　黒いひげを生やした大男、チャンピオンベルトを腰に巻いた大男、片眼鏡をかけた大男、シルクハットを被る大男、病弱な見た目の大男。
　黒いひげの男、七武海の一人、”黒ひげ”マーシャル・D・ティーチはこめかみに青筋を浮かべながら、憤怒の覇気を垂れ流している。
「おめェのせいで、おれの長年の計画は全てパァだ！　おめェは必ずおれの手でぶち殺してやる!!!」
「ティーチ!!!　てめェ!!!」
「お前はジャヤの……！」
「こんな事になるなら、無理をしてでもあの時！　エースの首じゃなくて、お前の首を政府に出すんだった……！　計画していた何もかもが無駄になっちまった！　許さねェ……!!!」
「ッ!!　お前が”黒ひげ”……!?」
　これ以上ない程激怒している黒ひげ。

長年の計画をルフィの手により一瞬で潰された黒ひげは、かつてない程の怒りを抱き、漆黒の”闇”を放出する。
「おめェも、エースも、海軍も、白ひげも……！　全て地獄に落としてやるァ!!!」
「地獄はもう越えた……！　お前なんか何も怖くねェ!!」
「今になって、落とし前を――雪辱を果たすチャンスが来るなんてな……！　覚悟しろよ、ティーチ!!!」
「貴様等だけで話を進めるな！　次から次へと……!!　全員この場で処刑してやる!!!」
因縁の戦い。
かつて同じ船に乗る仲間だったエースと黒ひげ。
エースの身柄を政府に渡し王下七武海になり、インペルダウンへと侵入し、ＬＥＶＥＬ６の凶悪な囚人を仲間にするという黒ひげの計画を潰したルフィ。
海軍として世界中へ醜態を晒し、数々の乱入により、イライラが最大値にまで上っているセンゴク。
凶悪な勢力がまた一つ増え、頂上戦争、終盤戦において、因縁の戦いが勃発する。
頂上戦争。
海賊ｖｓ．海軍＆インペルダウンｖｓ．”黒ひげ”。
また一人、王の器が戦争へと参加した！

第２５話”白ひげの覚悟”

光をも飲み込む闇が広がる。
眼前に広がる闇に言葉に出来ない悍ましさを感じるルフィ。
「その闇に触れるな、ルフィ！　そいつは、悪魔の実の能力を封じる!!」
「能力を封じる……？」
「おれはそれでアイツにやられた……！　おれの”自然系（ロギア）”の能力を封じて、生身に戻されちまう！」
「それって覇気と違うのか？」
「あれは、そんな生易しいモンじゃねェ……！　あの闇に触れられている限り、おれ達は能力自体を使えねェ！」
驚愕の事実。
ルフィはこれまでに幾度も”自然系”の悪魔の実の能力者達と戦ってきた。
能力の相性を突くか、この戦争を通して覚えた”武装色の覇気”でしか触れる事さえ出来ない彼らを、眼前で怒り狂う男は能力そのものを封じるという。
それは、自身はおろか、能力を鍛えてきた強者達にとって最悪の天敵であろう。
ルフィは闇と覇王色の覇気を無尽蔵に放出する黒ひげを睨み付け、拳を握った。
「相手が何であれ、こんな所で死ぬわけにはいかねェ！　折角エースを助け出したのに、こんな所で死んじまったら、ここまで手伝ってくれた皆に合わせる顔がねェ!!」
「ルフィ……。ふっ。おれ達兄弟二人がいりゃァ、あんな奴になんて負けねェ！」
「取り敢えず、アレに触れずに戦えばいいんだな！　行ってくる!!」
「ば、馬鹿、早まるなッ」
間髪入れずルフィはゼファーとの戦いの中で編み出した新たな姿に変化する。

筋肉が膨れ上がり、武装色の覇気で強靭な鎧となる。
全身を高速で流れる血潮が膨大なエネルギーと速度を生み出す。
闘神の如き姿へと変貌したルフィは一足で加速し、黒ひげの目前まで一瞬で到達する。
「〝ゴムゴムの〟〜〜ぶへッ!!?」
「ルフィ!!!?」
「ゼハハハハ！　考えもなしに突っ込むなんざ、馬鹿かてめェ!!!」
一瞬で迫ったルフィを強烈な拳で殴り飛ばす黒ひげ。
拳に纏った闇がゴムの特性を消し去り、生身で受けた埒外の一撃でルフィは大量の鮮血を噴き出しながら地面へと突き刺さる。
「エースが言った通りおれの闇の力は〝悪魔の力〟を封殺する！　無限の引力は何もかもを無に還す!!!」
「あの馬鹿ッ」
「随分とこの戦争で成長したみてェだが、お前とは戦いの年季が違ェ！　エース共々あの世へ送ってやるよ!!!」
「私を忘れるな、黒ひげ!!!」
漆黒の大仏であるセンゴクが武装色と覇王色の覇気を纏った衝撃を放つ。
膨大な闇を放ち迎撃する黒ひげだが、数多の海賊を仕留めてきた伝説の海兵の全盛期の力には敵わず、威力を削る事に成功するものの強烈な一撃を食らってしまう。
「痛ェ!!　クソがッ!!!」
「次から次へと性懲りも無く現れやがって！　私の苛立ちも最高潮だ!!!」
「てめェは何で若返ってやがんだ!!　旧世代のジジイが、大人しく死にやがれ!!」
「おれを放置してんじゃねェよ!!!」
火拳を放つエースと衝撃を放つセンゴク、闇を放つ黒ひげ。
三者の特大の一撃が衝突し強烈な爆発と共に土煙が辺り一面に巻き上がる。
「くそッ、油断した！　もう油断しねェ！」

土煙で何も見えない中、見聞色の覇気で気配を読んだルフィは闘神の姿で黒ひげへと迫る。
ゴムの弾性を落とす事と引き換えに得た強靭な膂力で空気を殴る。
かつてルフィが戦った〝殺戮兵器〟の異名を持つ男の六式の技、〝飛ぶ指銃〟のように、拳大の空気が恐ろしい速度で黒ひげへと飛んでいく。
「なんだこの子供騙しはァ!!」
闇を纏うまでもなく飛ぶ拳を打ち砕いた黒ひげへ、ルフィは続けて足を振り抜く。
強靭な脚力で薙いだ瞬間、巨大な鎌鼬が発生し黒ひげへと飛ぶ。
「くだらねェ!!」
またしても容易く打ち砕く黒ひげ。
黒ひげの元へと走りながら拳を放ち、足を薙ぎ払い、飛ぶ拳と〝嵐脚〟を打ち出すルフィ。
規格外の成長速度で二つの一撃は一気に洗練されていき、覇気が乗る一撃へと変化していく。
「クソッ！　なんだこの成長速度ァ!!　小賢しいッッ!!」
「ルフィばっかりに気を取られんなよ、ティーチ!!」
苛立ち闇を放とうとする黒ひげへ灼熱の炎を放つエース。
立ち昇る炎が土煙を一瞬で蒸発させ、怒りのあまり顔を真っ赤に染め上げる黒ひげが見えた。
「クソが！　クソがァア!!!　許さねェぞクソ共ォォ!!!　〝闇穴道(ブラック・ホール)〟!!!!」
膨大な闇が憤怒の覇王色の覇気と共に凄まじい速度で広がっていく。
地面を伝い広がる闇は、範囲内で戦う海兵、海賊、何もかもを飲み込んでいく。
「気持ち悪ィなこれ!!」
「飲み込まれたら終わりだぞ、ルフィ!!」
「分かってる!!」
ルフィは武装色の覇気を高め、骨格を膨らませ、ゼファーの覇気を

貫いた一撃で闇を吹き飛ばす。
エースは武装色の覇気を纏った炎の陣を周囲に展開し、闇を焼却する。
センゴクは覇王色の覇気を纏った強烈な一撃で闇を跡形もなく消し飛ばす。
全てを消し去るべく放った一撃をも軽々と対応された黒ひげは、ますます怒りで顔を赤くする。
引き連れてきた仲間達は範囲から離れ、それぞれが戦場各地で悪魔の実の能力者を相手に戦っているが、戦況の悪さが黒ひげの見聞色の覇気に察知された。
「おれの長年の計画が……！　何もかもが上手くいかねェ！　全ててめェのせいだ、麦わらァ!!」
「知らねェよ、お前の計画なんか!!」
「苦労して七武海になってまでインペルダウンに侵入した筈が、目当ての囚人達は誰もいねェ……！　どうなってやがる!!」
怒り半分、悲しみ半分の様子で叫ぶ黒ひげ。
全てを理解したルフィとエース、センゴク。
黒ひげは戦力増強の為、己の野心の為に七武海の立場を利用しインペルダウンへと侵入して監獄の凶悪な囚人達を仲間に引き入れる計画をしていたのだろう。
それが、ルフィが頂上戦争へと全ての囚人達を連れ出した為に、計画の全てがお釈迦になってしまったという事が黒ひげの嘆きで理解してしまった。
不憫。
当事者であるルフィは勿論、その行為を許す事の出来ないセンゴクでさえそう思ってしまった。
意気揚々とインペルダウンへ踏み入れたものの、目当ての囚人達がいない状況で呆然と立ちすくむ目の前の男の姿を想像した三人は、掛ける言葉を失う。
「何か言えよ、麦わらァ！　長年温めてきた自慢の計画が、知らねェ間に壊されるおれの気持ちが分かんのか、オイ!!」

「いや、知らねェよ」
思わず叫んでしまう黒ひげにバッサリと切り捨てるルフィ。
「大体、お前がエースをやったのが悪ィんじゃねェか」
正論。
殺された白ひげ海賊団の仲間の事もあり、大きく頷いてしまうエースとあまりの正論に思わず笑ってしまうセンゴク。
ど正論で返された黒ひげは怒りに震える。
「お前が何をしようと知らねェけど、おれはこんな所で止まれねェんだ。悪いけど、先行くぞ」
「ゼ、ゼハハハハハ!!! ここまでコケにされるのも初めてだ!! 分かった! てめェらを殺して、計画を繰り上げてやる!! 絶対ェ、許さねェぞォ!!!!」
「不憫な奴だ……」
「こんな奴におれァ負けたのか……」
ルフィの言葉に怒りの限界を超えた黒ひげは闇を解放し、覇王色の覇気を放出する。
そんな黒ひげを可哀想な目で見るセンゴクと、こんな男に自分は負けたのかとため息を吐くエース。
不憫な男”黒ひげ”マーシャル・D・ティーチ、怒りのあまり我を忘れる!

□??□??□??□??□??

「ぬぅんッ!」
「ウォロロロロ!! 楽しいなァ!! 若ェお前とやれるたァ、夢にも思ってなかったぜ、ガープ!!!」
「ぬかせ、小僧ォ!!!」
「おれを前に余裕じゃねェか、てめェらァ!!!」
覇王色の覇気を纏った強烈な金棒と覇王色の覇気を纏った拳、覇王色の覇気を纏った薙刀が触れずに衝突し、それを中心として大規模な空間の爆発が起きる。

巻き込まれぬ様に離れた海賊、海兵達をも吹き飛ばし、カイドウが呼び寄せた雷雲すらも消滅させた。
長大な青龍の姿から人型の龍に変化した”百獣のカイドウ”は、常人の身の丈以上の大きさの金棒を振り回す。
拳を漆黒に染め上げ、規格外の覇王色の覇気を纏わせるガープ。
巨大な薙刀に覇王色を纏わせる白ひげは、地震のエネルギーを放出し、大災害を起こす。
何百と激突した化け物達の攻撃により、陸も空も海も全てが滅茶苦茶になっている。
「リンリンのババアも不憫だなァ。こんな最高の戦争に来ねェなんてよォ」
「馬鹿な事を言うな、カイドウ。この戦争に貴様等の出る幕はないんじゃ！　貴様も黙って新世界へ帰れ!!」
「お前こそ馬鹿な事を言うんじゃねェよ！　こんな最高に面白ェ戦争は中々ねェ!!　これを逃しちまったら、もうこんな最高の気分にはなれねェだろうがよォ!!!」
「だから、後はてめェらでやれって言ってんだろうが、アホンダラァ!!!」
「お前がいなくなったら楽しさ半減だろォが、ジジイ!!」
最高の戦争に歓喜するカイドウと、余計な場面でやって来たカイドウに帰って欲しいガープ。
己は新世界に帰還して、後はカイドウと海軍で続きをやって欲しい白ひげ。
三者三様に考えが違う中、眼前で覇気を高める二人に我慢ならないと、飛び込むカイドウ。
「ウォロロロロ!!!　こんな全力を出せる機会、中々ねェ!!!」
尋常ならざる覇王色が炸裂し、雷の如き速さで白ひげへと迫るカイドウ。
「昔からてめェは喧嘩っ早ェ!!　少しは大人になりやがれ!!!」
再びぶつかり合う覇王色。
空が割れたのではないかと錯覚する程の衝撃に海が大爆発を起こ

す。
天地海が割れたその瞬間、白ひげが胸を抑えて吐血した。
「ガフッ……！　ぐ、ぐゥ……!!」
「白ひげ……貴様……ッ」
「……てめェでも歳には勝てねェのか、クソジジイ」
かつて”海賊王”と鎬を削った伝説の大海賊。
世界中の海賊からも海兵からも恐れられてきた男は、老いと病に体を蝕まれ、覇気を出すのもやっとの状態にいた。
「舐めるんじゃねェよ……！　おれァ、”白ひげ”だァ!!!」
白ひげが規格外の膂力で腕を振り抜く。
グラグラの実の能力による振動が空間を捻じ曲げ、今まで以上の大規模な破壊エネルギーが島を駆け巡る。
口から血を垂れ流し、心臓の痛みを押し殺し、白ひげは覇気を全力で高める。
「野郎共ォ!!!　残る全ての力を用いて、新世界へ帰還しろ!!!　お前らとおれはここで別れる!!!　全員必ず生きて!!!　必ず新世界へ帰還しろ!!!」
広がる白ひげの覇王色の覇気。
インペルダウンの軍艦を奪い去った”息子達”の気配を感じ、病に蝕まれた体を押して白ひげは咆哮する。
「息子達の命はやらねェぞ、てめェら……！　せいぜい気張りやがれ、アホンダラァ!!!」
”白ひげ”エドワード・ニューゲート。
世界の中心、この世とあの世の中心とも言える地獄で彼は最期の覚悟を決める。
悲鳴を上げる体に鞭を打ち、覇気を絞り出し、王たる器を顕現させる。
伝説の大海賊、地獄にて家族を守る為拳を握る！

第２６話”諸刃の剣”

悍ましい闇が全てを飲み込むべく広がる。
太陽の如き灼熱の炎が吹き荒び、大気と大地を焼き焦がす。
荒ぶる闘神が敵を討つべく破壊の拳を放つ。
荘厳な漆黒の仏による覇王色の衝撃が全てを崩壊させる。
インペルダウンの全囚人の脱獄という未曾有の大事件を引き起こした張本人である”麦わらのルフィ”は、今にも倒れそうになる肉体に鞭を打ち、眼前に迫り来る衝撃波を紙一重で避ける。
「ゼェ……ゼェ……！　危なかった!!」
「気をつけろルフィ！　あれ食らったら終わりだぞ！」
「分かってる！　大丈夫だ！」
強がるルフィだが、実際のところ肉体はとうに限界を越えている。
連戦による連戦。酷使し過ぎた結果による体力の限界。インペルダウンでの瀕死からの回復。
現在までにおける全ての戦いとダメージにより、もはやルフィは精神力でのみ動いていた。
「ゼハハハハ!!!　もう限界なんだろォ!!?　無理しねェで、さっさとくたばれよ麦わらァ!!!」
「うるせェ!!　おれは先に進む!!!」
「この世紀の頂上戦争をここまで荒らしたのは賞賛に値するが、お前に先はねェ!!!」
「おれの限界をお前が決めるなよ!!　お前くらい倒せねェとおれはなれねェ、海賊王に!!!」
その覚悟の言葉と共にルフィから莫大な覇気が溢れ出す。
溢れ出る覇気は紫電を生み出し、黒ひげや、百戦錬磨の海兵センゴクまでをも怯ませた。
「まさかここまでとはな……！　流石はガープの血筋か……」
「あの体でまだこれだけの覇気を……ッ」
「やるなルフィ……!!」
血流を更に加速させ、武装色の覇気により筋肉の密度を更に増大さ

せる。
肉体から膨大な蒸気が噴き荒れ、高速で流れる血潮により熱を発する。
血流が速くなり、更に速くなり、それに比例して上昇していくルフィの体温。
口から漏れる吐息は熱を帯び、次第に漆黒の肉体は赤熱していく。
ジリジリと、まるで金属を熱したかのようなルフィの肉体は加速度的に温度を上げ、やがて白く輝いた。
あまりの熱に、ルフィ周囲の空間はまるで蜃気楼の如く揺らぎ、体表からは時折火炎が立ち上がっている。
「こ、れは……ッ」
「覚醒か……？　いや、違う……」
「まるで太陽みてェだ……」
離れていても感じられる熱と覇気、そして強靭さにセンゴクは息を呑み、黒ひげは悪魔の実の更なるステージ――〝覚醒〟を疑うが、ルフィの様子と、悪魔の実の性質を考え、違うと断ずる。
エースはルフィの姿に太陽を幻視し、心地良い熱に目を閉じる。
「くッ！　全身が痛ェ……！　早く決着をつけねェとッ」
血流を高速で回すことによる肉体への負担。
覇気の過剰使用による肉体、精神への負担。
ここまで数多の試練を乗り越え、幾度も限界を超えてきたルフィ。
全身を絶え間なく突き刺す激痛と疲労に顔を歪ませ、眼前の敵を睨み付ける。
「兄として、弟にばかりいい格好をさせとく訳にもいかねェな！」
エースは周囲を覆っていた灼熱の炎を頭上に集め、巨大な火球を作り出す。
絶え間なく流動する炎の球からは時折火柱が立ち、その光と熱はさながら小型の太陽のよう。
エースの頭上に太陽が出現した瞬間、分厚い雲により夜のように暗くなっていたマリンフォードが一瞬にして明るさを取り戻す。
太陽の出現に近距離にいるセンゴクは目を細め、黒ひげはニヤリと

笑う。
「ゼハハハ!!　兄弟そろって太陽とは面白ェ!!　太陽か闇か！　勝者は一人だ!!!」
「一人じゃねェ、勝つのはおれ達兄弟二人だ……！」
太陽――炎帝から数多の熱線を打ち出すエース。
白く赤熱する一撃必殺級の拳を乱打するルフィ。
無限の引力で全てを無に還す黒ひげ。
全てを破壊する覇王色の一撃を繰り出すセンゴク。
三つ巴の闘争も終盤戦。
二対の太陽。
怒れる闇。
正義の仏。
三者三様の意志の果て、決着の時は近い！

□■□■□■□■□■□■

この世界において最強は誰かと問われた時、間違いなく誰もが”覇王”こそが世界最強だと答える。
事実古来より鍛え抜かれた戦闘能力は、間違いなく彼が世界最強と断言できるものである。
であれば、この海において”覇王”ダイナーを除いて最強と呼べる者は誰か。
その答えは決して一人に絞られる事はないだろう。
しかし、それでも必ず名が挙がる者達がいる。
それこそが、”四皇”。
この海において頂点に座する四人の皇帝の存在だ。
故に、現時刻をもって世界最悪の地獄であるマリンフォードにおいて激突する”四皇”白ひげ”エドワード・ニューゲート、”四皇”百獣のカイドウ”は世界最強の一角である。
互いが何気なく繰り出す一撃全てが一撃必殺級。そこらの海賊を一振りで何百と殺し尽くす一撃が縦横無尽に飛び交っている。

そんな中でなお一等の輝きを放つ巨漢の海兵。
短く切り揃えられた黒い短髪に、筋骨隆々とした規格外の肉体。
そして際限なく溢れ出す覇気。
海軍の英雄にして、最強の海兵、”拳骨のガープ”の全盛期の姿。
白ひげの武装色と覇王色の覇気、そして振動エネルギーを内包した斬撃。
カイドウの武装色と覇王色の覇気を纏った金棒による一撃。
ガープによる武装色と覇王色の覇気を纏った拳による一撃。
間違いなく世界最高峰の戦い。
最早三人の戦場に留まる者はおらず、これまで戦場を生き抜いてきた猛者ですら吹き飛ばされている。
「”拳骨衝突（ギャラクシー・インパクト）!!”」
「グォォォ!!?!!」
可視化出来る程濃密な武装色と覇王色の覇気を纏った拳が人獣形態のカイドウへと突き刺さる。
硬すぎるカイドウの防御を貫いた一撃は、その衝撃で遥か上空の分厚い雲を掻き消す。
血反吐を吐き出すカイドウは、しかし楽しそうに笑いながら金棒を刹那の間にガープへと叩き付ける。
「ぬゥ!!! いい一撃じゃ!!」
「おれを忘れるんじゃねェよ!!!」
宙でぶつかり合うカイドウとガープへ強烈な飛ぶ斬撃を放つ白ひげ。
振動エネルギーが空間を破壊しながら飛来し、二人は紙一重でそれを避ける。
飛来した先を見ると上空の空間に激突しガラスのように破壊している。
「ウォロロロロロ!!! 楽しいなァ!!! ”白ひげ”のジジイもその体でよくやる……!!!」
「グララララ!!! 舐めるんじゃねェよ小僧!!」
上機嫌に笑い、口元の血を拭うカイドウと笑いながらも鋭い目でカ

イドウを睨みつける白ひげ。
かつて同じ船に乗り共に海を荒らした元仲間である二人。
別の道を歩んだ二人の数十の年月に渡る闘争。
「思えばお前との腐れ縁も長くなっちまった。ここらでおれが引導を渡してやるよジジイ！」
「……ハナッタレが一丁前に言いやがる。やれるもんならやってみろォ!!!」
鬩ぎ合う二人の覇王色の覇気。
覇王色の衝突により大地は震え、大気は軋む。
「久しぶりの再会に熱くなるのは分かるが、貴様らはわしがここで息の根を止めてやるわい!!」
「お前もだガープ！　楽しい闘争の果てに、おれが殺してやる」
「ぶぁっはっは!!　楽しみじゃ!!!」
激突する三者。
「”雷鳴八卦!!!”」
「”拳骨衝突（ギャラクシー・インパクト）”!!!」
「”天地海闘!!!”」
化け物達が蔓延るマリンフォードにおいても尚際立つ特級の化け物達。
全てを破壊せんと暴れる三者の闘いも終わりが近い！

□■□■□■□■□■□■

要塞も町も海軍本部も何もかもが無くなったマリンフォードの大地にて激しく繰り広げられる頂上戦争。
”火拳のエース”の処刑を巡る”四皇”白ひげ”との戦争は、エースの弟”麦わらのルフィ”率いる”インペルダウン”脱獄囚達により大きく荒れた。
海軍が誇る智将”仏のセンゴク”の作戦を尽く破壊した末のエースの解放。
そこからの駄目押しの”黒ひげ”と”四皇”百獣のカイドウ”の

来襲。
その全てが映像電伝虫にて世界中へと放送される始末。
改めて今の最悪の状況を考え、猛烈な頭痛を感じるセンゴク。
エースの解放を許してしまったのは勿論、それを世界中に流してしまったのがトドメの一撃だった。
この戦争に勝とうが、負けようが、上から圧力を掛けられるのは間違いない。
「――全く、面倒なことをしてくれたものだ！」
苛立ちを掻き消すように覇王色の覇気を放ち、全ての計画の崩壊の原因である〝麦わらのルフィ〟を吹き飛ばす。
「流石にここまで引っ掻き回されるとは、思いもしなかったぞ……！」
勢いよく吹き飛び地面を転がるルフィへと吐き捨てるように言うセンゴク。
こめかみに青筋を立てるセンゴクは、その怒りに呼応するように覇気が膨れ上がる。
「〝海賊王〟の血筋は確実に断たねばならないッ。〝絶対正義〟の名の下に正義を執行する！」
「おれの親父は〝白ひげ〟ただ一人！　白ひげを海賊王にするために、おれは死なねェ!!」
己の胸の中に渦巻く様々な複雑な感情を押し殺し、悪の火種を摘むべく覚悟を決めているセンゴク。
恩人であり、尊敬する父親である〝白ひげ〟を海賊王へとするために覇気を固めるエース。
そんな二人の様子に黒ひげは冷めた目を向ける。
「――親父、親父と下らねェ。誰が誰から生まれただのと、それに何の意味があるってェんだ!!?　おれらは生まれた瞬間からただの一人の男。夢を追うのに、てめェの血に何の意味がある!!　ガタガタと下らねェこと言ってんじゃねェよ、エース!!」
「ッ！　ティーチ、てめェ！　よく知りもせず――」
「――黒ひげの言う通りだ」
怒鳴るような黒ひげの言葉に激昂するエースだが、続くルフィの声

に言葉を遮られる。
「エースの父ちゃんが誰かなんてどうでもいい。海賊王が父ちゃんでも、白ひげの人が父ちゃんでも、どっちでもいい！　エースはおれの兄ちゃんだ!!」
「ルフィ……ッ」
　苦痛と疲労に朦朧とするルフィの強い言葉に、エースは目の端に涙を浮かべる。
「そうか……。そうだ、そうだよな。おれはルフィの兄で、アイツの家族だよな……！」
「あぁ！　二人はおれの兄ちゃんだ!!」
　センゴクの言葉に過剰反応していた怒りがエースの中から抜けていく。
　幼少の頃からエースの中で強く渦巻いていた実の父、”海賊王”ゴール・D・ロジャーへの憎悪。
　そして、そんな鬼の子であるという自分の血への忌避感。
　その全てがこの極限の状況での弟からの言葉により氷が解けていくかのように無くなっていく。
「――ルフィ、ありがとう。おれは誰でもねェ、おれであり、お前の兄だ」
「ししし！　分かったんならいい！」
「ゼハハハハ!!　親父の次は兄弟ごっこか、エース!!　楽しそうで何よりだなァ!!!」
「ティーチ、お前からあんな言葉をもらうなんてなァ！　おかけで吹っ切れたぜ」
「ゼハハハハ!!　親父、親父と気持ち悪かったから言っただけだ。なァ、麦わら!!」
「うるせェ、お前なんか嫌いだ！」
　嫌われたもんだ、といやらしく笑う黒ひげに笑みを見せたルフィは拳を握り、エースもまた全身に更に強固になった覇気を纏う。
　仕切り直しだとばかりに大きく腕を広げて闇を纏う黒ひげと、もう何も言うまいと覇気を漲らせるセンゴク。

一触即発、その瞬間。
「”――冥狗!!!”」
突如現れた大将”赤犬”のマグマの腕がルフィの背後から腹部を貫いた。
「ガフッ……」
眩く白熱していた体は色を失い、口から尋常ではない血反吐を吐く。
明らかな致命傷。
「ルフィーーーーッッッ!!!」
ルフィの腹部から抜き放たれる赤犬の腕。
支えを失ったルフィの体はドサリと地面へと倒れ伏す。
「――好き勝手やってくれとるのう、ゴミ共が!!!」
全てを焼き尽くすマグマにより、”麦わらのルフィ”、致命傷を負う!

第27話”怨敵赤犬”

”最悪の世代”の一人にして此度の史上最悪の戦争に混沌の渦を齎した海賊、”麦わらのルフィ”は現在、瀕死の状態にあった。

「ルフィ!!!」

ルフィの兄にして此度の戦争の引き金である”火拳のエース”は、マグマの腕に腹部を貫かれている弟を見て叫び声を上げる。

見るからに致命傷。

全てを燃やし尽くすマグマにより腹の血肉は蒸発し、ルフィの口、鼻からはとめどない血が流れている。

既にその目に意思は感じられず、先程まで満ち溢れていた覇気もまた弱々しくなっていた。

「お、おい、嘘だろルフィ!!! お前までおれを置いていくのか……!!」

マグマの腕が抜き放たれ、支えを失い倒れ伏したルフィを呆然と眺め、エースは深い絶望の声を上げる。

「……実に情けない男じゃ”火拳のエース”。無様に捕まり、生き恥を晒し、終いにゃァ、助けに来た弟をも死なす。こんな男が隊長とは、”白ひげ”はやはり先の時代の敗亡者じゃのう!」

「おい、ルフィ……! 返事しろよ……! おい……!!」

「……折れたか。今、貴様も地獄へ送ってやるけぇのォ!!」

見る影もなくなったエースの覇気にもう話はないと、拳をマグマへと変化させ振りかぶる赤犬。

一連の流れに面白くなさそうな黒ひげと無言で事を見守るセンゴクを横に、瞬間極大の覇王色の覇気が吹き荒れた。

「ッ!!? これはガープの……!!」

「……ゼハハハハ!! こりゃァ凄ェ!!」

「ぬゥ!!!」

現時点でまだ立ち戦う歴戦の猛者達、そして今にもエースを殺そうと拳を振り下ろしていた赤犬ですら一瞬意識が飛ぶ程の覇王色の覇気に皆が驚愕する。

そして、覇王色の発生源に目を向けると、そこにはバチバチと稲妻

のように逆る武装色と覇王色の覇気を纏うガープの姿があった。
「――ガープ!!!」
瞬間、センゴクがその場から消え、一瞬の内にガープへと肉薄し拳を叩き付ける。
その拳は既に振り抜いていたガープの拳へと衝突し、極大の覇王色の衝突が発生した。
二人を起点とした大規模な衝撃。見渡す限りの雲が全て消え去り、数多の化け物達による異常気象すらも消滅する。
「何をする気だガープ!!!」
「――ッ!!!」
海兵と海賊という敵の立場でありながら、しかしそれ以上に愛する孫の惨状に我を忘れ、怒りが限界を超え、愛する孫の腹に穴を空けた下手人を討つべく本能のままに動く。
”海軍の英雄”と呼ばれる最強の海兵の覇気と拳を凌ぐセンゴクは、額に冷や汗を浮かべる。
「ガープ！　貴様、流石にこれ以上はおれでも庇いきれんぞ!!!」
「――ッ!!!」
「ッ、もはや聞こえんか……！」
目の焦点は合っておらず、しかしながら尋常ではない戦闘力のガープに舌を鳴らし拳を迎撃するセンゴク。
凄まじいまでの覇気の篭った拳を覇気の衝撃で撃ち落とすセンゴクと、それを欠片も気にせずに拳を乱打するガープ。
立ち塞がるセンゴクを無視して赤犬へと向かおうとするガープの横面を殴り飛ばし、横目で”百獣のカイドウ”と”白ひげ”を見る。
「今、貴様らとやり合う余裕はない。大人しくそこで待っていろッ」
「ウォロロロロロ!!　随分寂しいことを言うじゃねェか!!　おれも混ぜろよ、その闘争によォ!!」
「チッ、面倒な！」
嬉々として二人の化け物の闘いに混ざり込むカイドウに舌を鳴らすセンゴク。
そんな三人を横目に、残る白ひげは能力を用いて声を島中に響き渡

らせる。
「野郎共!! これが最後の船長命令だ!!! エースを必ず生きてこの島から連れ出せ!!!! マルコ!!! 〟麦わらのルフィ〟の命を何としてでも繋ぎ止めろ!!!! おれ達――〟白ひげ海賊団〟の恩人の命を死んでも失わせるな!!!!」
島中に響いた白ひげの声に、白ひげ海賊団の面々は一瞬にして目的地を逃走用の船からエースとルフィの元へと変え、名指しされた1番隊隊長にして〟船医〟である〟不死鳥マルコ〟もまた一直線に向かう。
そして、マリンフォードに今も立つ猛者達は白ひげの言葉に驚愕した。
あの〟白ひげ〟が〟麦わらのルフィ〟を恩人と口にした。
白ひげという歴史に残る大海賊にとって今を生きる海賊達は、彼の口癖である『ハナッタレ』そのものである。
そんな男がたった一人のルーキーを恩人と呼び、そして一人の海賊としてルフィを認めた事への大きな衝撃。
遠い戦場からルフィの惨状を唇を噛みながら見ていたイワンコフや、ルフィの最期に失望していたインペルダウンの脱獄囚達もまた、白ひげの言葉に驚愕し、そしてルフィの復活の未来を見た。
「余計なことをするのォ……! 悪に希望など必要なし!!」
力なく横たわるルフィの前に項垂れるエースへとマグマの拳を振り下ろす赤犬。
しかし、再び邪魔が入る。
どこからともなく飛来した一条の海流がマグマの拳を弾き飛ばした。
マグマにより海水が蒸発し、周囲が水蒸気で煙る。
「うっとうしいのォ……! つまらん時間稼ぎはよせ、ジンベエ。貴様も元七武海、わしの力は充分知っとろうが」
周囲の水蒸気を一瞬にして消し去った赤犬は度重なる邪魔者に怒りを露わにする。
「この身を削って時間稼ぎになるなら本望!! 大恩あるエースさん

も、ここまで連れてきてくれたルフィ君も死なせるわけにはいかん!!!」
「ならば、貴様ごと地獄へ送ってやる……!!」
覚悟を決めるジンベエと、諸共葬るべくマグマを燃やす赤犬。
「おい、エースさん！　いつまでそうやってうだうだしておるつもりじゃ！　お前さんまで死ぬつもりか!!?　オヤジさんをこの戦争の敗北者にするつもりか!!!?」
「ッ!!」
ジンベエの言葉に一瞬反応したエースだったが、すぐに項垂れる。
「ルフィ君がどんな覚悟でここまで来たか分からんのか！　その覚悟を兄のお前さんが無駄にする気か!!」
「無駄な話はもういいじゃろう！　裏切り者への制裁も追加じゃァ!!!」
エースを背に赤犬の前に立ち塞がるジンベエへとマグマの拳を放つ。
火傷を負いながらも防いだジンベエは、エースへと尚も言葉を紡ぐ。
「ここは一先ず生きて逃げ延びるんじゃ！　ルフィ君はマルコが必ず生きながらえさせる!!」
「……ッ」
「――”鳳凰印!!!”」
「くッ……！　マルコか！　ゴミ共が次から次へと頭に来るのォ!!」
「ビスタ！　お前はエースを連れて逃げろ！　お前たちはジンベエの援護を頼むよい！」
「了解！」
現れた白ひげ海賊団の面々。
マルコによる覇気を伴う蹴りが赤犬を怯ませ、続くビスタがエースを強引に肩に担ぎ上げて駆け出す。
「ッ！　ビスタ、下ろせ!!　ルフィがまだ残っている!!」
「冷静になれエース。お前の弟はマルコが救い出す。オヤジ命令だ」
「――ッ！」

「逃すかァ!!!」
エースを抱え逃げ出すビスタへとマグマを放つ赤犬。
しかし飛来した覇気を纏う銃弾がマグマを撃ち抜き、あらぬ方向へと弾き飛ばす。
「お前の相手はおれ達だろう、赤犬……!」
「……どうやら余程死にたいようじゃのう、白ひげ海賊団!!!」
荒れる頂上戦争。
”麦わらのルフィ”の瀕死をもって一段階進んだ戦場において海軍の最大戦力、大将”赤犬”と元王下七武海”海侠のジンベエ”及び白ひげ海賊団の面々がぶつかり合う。
未だ戦争は終局にあらず。
暴れ狂う英雄とぶつかる海軍の仏。
自然の申し子達による環境の侵し合い。
逃げる海賊、追う海兵。
そして――
「絶対に死ぬんじゃねェよい、エースの弟ッ!!」
此度のエース奪還において獅子奮迅の活躍をした男の命を救うため、全身全霊をもって治療に当たる男が一人。

頂上戦争も最終章、皆の体力も限界を超え、しかし闘いの連鎖は止まらず。
両者、勝利を求め足掻き続ける!

第２８話”長年の夢”

”麦わらのルフィ”が海軍大将”赤犬”の手により瀕死状態に陥り”海軍の英雄”ガープが暴走を始めたのと同時刻。
海軍本部中将モモンガは眼前で広がる光景に恐れ慄いていた。
「こ、これは……!!」
悍ましい程の覇王色の覇気。
覇気と共に吹き荒れる石化の力。
王下七武海の一人、”海賊女帝”ボア・ハンコックの痩身から吹き荒れる怒りの覇王色と”メロメロの実”の能力が、避け損ねた海兵、海賊、男、女関係なく石化させていく。
空間を裂くかのような不快な音が辺りに響き渡り、稲妻のような覇王色の黒き光がハンコックの周囲で迸っている。
「る、ルフィ……!!? ルフィ……!! あぁ、ルフィ!!!」
悲しみに飲み込まれたハンコックの瞳は遥か先にて倒れ伏すルフィを捉え、そして下手人である赤犬を視界に入れた瞬間、その美しい顔を歪め、般若の如き憤怒の表情を見せる。
更に高まる覇気。
あまりの覇王色の覇気にモモンガ、インペルダウン署長マゼランは冷や汗を流す。
近くで戦闘を繰り広げていた”大酒のバスコ・ショット”、”若月狩り”カタリーナ・デボン、王下七武海、”鷹の目”ジュラキュール・ミホークはその覇気に一瞬戦いの手を止める。
「ムルンフフフ！ ハンコック、思っていたより強いわねェ」
「心地良い覇気だの～～!!」
「”麦わら”の命、ここまでか、あるいは……」
ルフィの瀕死に失望あるいは残念に思っていたデボンとショットは、それぞれがハンコックの予想以上の強さと覇気に声を上げた。
「ゆ、許さぬ……! よくもわらわの愛おしい人を……!! 許さぬぞ、赤犬!!!」
「待て、”海賊女帝”!! 行かせんぞ!!」

「そう簡単におれから逃げられると思うな”海賊女帝”!!」
憎き赤犬の元へと走り出そうとしたハンコックの前にモモンガとマゼランが立ち塞がる。
「そなた等に用はない!! そこを退くのじゃ!!」
バリバリと覇王色の黒き光を放つハンコックは、一瞬の内に加速。油断なく刀を構えるモモンガと、致死の毒を纏ったマゼランを強靭な脚力で蹴り飛ばして突破した。
「グゥッ……! まだ底を見せていなかったのか……!」
モモンガは刀を折られ吹き飛ばされ、毒を石化され、その上から蹴り飛ばされたマゼランはあまりのダメージに膝を付く。
そんな一瞬の間に凄まじい速度で駆けるハンコックは、撒き散らす石化の覇王色で道中の海兵、海賊を石化させながら更に加速する。
ハンコックの瞳に映るのはマルコの治療を受ける瀕死のルフィと、愛する人を傷付けた憎き赤犬のみ。
「おのれ、赤犬ッ!!!」
「なッ!!? ぐゥッッ!!!?」
「”海賊女帝”!!?」
「生かしてはおかぬ!! よくもわらわの愛しき人を……!! 許さぬ……、許さぬぞ!!!!」
バリバリと悍ましい程の覇気が溢れ出す。
殺意と憎悪と憤怒が混ざり合い、恐ろしい形相のハンコックに白ひげ海賊団の面々は顔を引き攣らせ、あまりの覇気の強さに肌に粟が生じる。
赤犬はハンコックのメロメロの能力を纏った蹴りによってマグマを石化され、凄まじい衝撃で吹き飛ばされた。
蹴り飛ばされた腹部を抑えながら立ち上がった赤犬は、無視できない程のダメージに顔を歪ませながらもハンコックを睨み付ける。
「……ハンコック。貴様、”王下七武海”を辞めるという事でええんじゃろうなァ……!」
「もう、そんな事はどうでもよい……!! そなただけは殺さねばわらわの気がすまぬ!! 惨たらしく死ぬがよい!!!」

「七武海でない海賊に用はなし！　貴様を殺して悪の巣窟、女ケ島も滅ぼしてやるけぇのォ!!!」
己の正義を体現するために怒りとマグマを燃え上がらせる赤犬。
愛する人を傷付けた男を討つために憤怒の覇気を撒き散らすハンコック。
「”不死鳥マルコ”！　ルフィを死なせたらそなたを殺す!!　死んでも助けるのじゃ!!!」
「お～、怖ェよい！　心配しなくても”麦わら”はおれ達の恩人だ。おれの命に代えても治してやるから、お前は赤犬を頼むよい」
「……ふん。頼むぞ」
「お前さんが力になってくれるとは、随分と心強い！　七武海を辞めた者同士、ここはよろしく頼む！」
「男と馴れ合うつもりはない。わらわの足を引っ張るでないぞ、ジンベエ！」
「わっはっは！　こりゃァ、気合いを入れてやらねばならんのう!!」
「裏切り者が纏めて来るとは丁度ええ。手間が省けて楽でええのォ!!」
マリンフォード頂上戦争、最終局面。
逃げる戦いと、追う戦い。
逃げる船は準備万端。
此度の戦争のキーは海賊の手にあり。
しかし、戦火の火は消えず。
次代の王の命を守るため、新たな衝突が始まった！

□■□■□■□■□■□■

世界から消された一つの神話。
今や一握りの者達しか知らぬ、かつて本当にあった遥か太古の男の物語。
消された歴史の遥か昔、神が身勝手に跋扈し、遥か宇宙の彼方から数多の侵略者が襲い来ていた魔の時代。

そんな時代の担い手。
人類史を容易く滅ぼす四つの最終試練を踏破した万夫不当の益荒雄。
”救世の英雄”
”神の天敵”
”龍殺し”
”暗黒の太陽”
数多の名を持つ男は現在、親友と共に女風呂にいた。
「おいおい、あの女最高だな……！　特にあのケツがいい！」
「うるせェぞ、ダイナー！　声でバレちまうだろうが！　いや、おれはあの子の胸がいい！」
「お前の方がうるせェよ。しかも、そんなに鼻血流してお前こそバレちまうだろうか！」
”救世の英雄”こと、”覇王”ダイナーは、親友であるサンジと共に”モモイロ島”近郊にあるとある島の温泉、その女風呂に潜んでいた。
「――んで、どうよ？　長年の夢が叶った心境は？」
「控えめに言って、最高だ！　見渡す限り肌色、肌色、肌色！　そしてピンク！　でも、やっぱり罪悪感が……」
「気にすんな。お前は海賊。その能力がありながら、この絶景を拝まねェ……。その方が美女達に失礼だと思わねェか？」
「――た、確かに!!　そ、その通りかもしれねェ！」
「だろォ？　お前は選ばれた益荒雄だ。ならば、罪悪感など抱くんじゃねェ!!!」
ダイナーの無茶苦茶な理論にサンジは目を輝かせ、その目を充血させながら食い入るように目の前の肌色の楽園を見る。
鼻から興奮による血を流し、しかし流石にそれを女達に見られる訳にはいかないとダイナーが鼻血を消し飛ばす。
目の前に広がるユートピア。
一糸纏わぬ美女達が一切の警戒を抱く事なく、その魅惑的な肉体を晒している。

あどけなさを残す美しい少女が、豊満な肉体の妖艶な美女が、どこかの雑誌で見た事がある美しい少女の裸体がサンジの興奮を高める。
「うぉ～～ん!! ダイナー、お前が親友だった事をおれは嬉しく思う……!! ここまでおれを導いてくれてありがとう!!」
「気にするな、心の友よ。おれの隣に立てる男はお前だけだ、サンジ」
「あぁ! 心の友よ!」
感涙を流すサンジはダイナーと熱い抱擁を交わし、これまでの辛い修行が一瞬で脳裏を流れ、そしてそれを一瞬で忘れ、女風呂の覗きを継続する。
「しかし、覗きのためにここまで早く”外骨格”を発現させるとはな……」
「なんか言ったか、ダイナー?」
「……いや、なんでもねェ」
隣で共に女の裸体を眺める”エロの大魔王”を見やり、驚きと呆れが混ざった声を出すダイナー。
半年はかかると予想していた外骨格の発現及び、透過能力をサンジは己の欲望一つで、その期間を一週間にまで縮めた。
ダイナーをして驚異的と称する程の速度。
本来、サンジの生家であるヴィンスモーク家、ジェルマ王国の類稀なる科学力による”レイドスーツ”がなくては使えない能力を、ダイナーによる肉体、細胞、血統因子改造によって、生身で使えるようにしたが、その影響もあり発現までには長い時間を要するとダイナー自身考えていた。
それを容易く覆したサンジの成長速度。
天元突破の欲望ありきとはいえ、その成長速度に驚いたダイナーは愉快気に笑う。
「おい、サンジ。外骨格の発現祝いだ。この街一番の娼館に連れて行ってやる。お前も男になってこい」
「マジかよ!? !! いよいよか～～! いや～、楽しみだなぁ～!!」
「ハハハハ! 金は気にすんな。美女を好きなだけ、気が済むまで抱いてこい!」

興奮と期待に顔を歪ませるサンジにダイナーは考えを巡らせる。
遥か彼方で起きている頂上戦争とその未来。
隣で期待に胸を膨らませる親友の船長の確定した死の未来。
未来視の見聞色で戦争のこれからの推移が見えている。
”麦わらのルフィ”はよくやった。
大監獄から数多の強者を引き連れ、生まれ持った王の力をもって仲間にし、兄を助け出した。
恐ろしいまでの成長速度で強敵達を打ち破り、しかし逃走一歩手前でその命を落とす。
不死鳥による治療も及ばす、だが、白ひげ含む大多数の海賊達は生き延びる。
頂上戦争において、白ひげ含めインペルダウン脱獄囚達の大勝利。

――しかし、サンジは失意の底に沈むだろう。
知らなかった自身を憎むかもしれない。
教えぬ己を恨むかもしれない。
「なァ、サンジ。俺への三つの願い、何に使う?」
「あん? そうだな……。やっぱり、仲間が大変な時に助けてもらう事かな」
「ハハハハ! そうか、やはりそうだよなァ! よし、分かった! 頼まれちゃァ、仕方がねェ」
「何言ってんだ? それより、早く行こうぜ! おれは今、人生で一番燃えている!!」
「分かった、分かった! 何時間でも好きに楽しんでこい!」
サンジの言葉に大笑いしたダイナーは、その笑い声を女風呂に響かぬように消し去りながらサンジと共にその場を後にする。
ダイナー及びサンジ、街一番の娼館へと繰り出す!

第29話”三人目の四皇”

後の世で『マリンフォード頂上戦争』と呼ばれる事になるこの大戦争。
世界屈指の化け物達が血で血を洗う地獄絵図。
二人の”四皇”と伝説の海兵二人が繰り広げる四つ巴の闘争。
絶対零度の環境下で繰り広げられる氷の海兵と見聞色の頂きの闘争。
世界から消された大犯罪者二人と世界最強の剣士の激しい戦い。
無数の人間兵器と地獄から戻ってきた男達の苛烈な戦い。
文字通り光の速度の男と頂きを目指す求道の王の目にも止まらぬ戦い。
どこを見ても最悪級の恐ろしさ。
至る所で覇王色が衝突し、自然系能力者により環境が塗り替えられては一瞬で消え去り、また破壊の力が吹き荒れる。
最早、弱者は意識を保つ事すら出来ず、覇王色が吹き荒れる度に覚醒しては気絶していく。
それは、近い将来師と同様に”英雄”と呼ばれる事になるコビーも例外ではなかった。
「グッ……、ンがッ!?!! また、意識が……!!」
絶え間無く襲い来る理解不能、正体不明の攻撃により何度気を失い、そして何度それで覚醒しただろうか。
隣を見れば、友人でありライバルでもあるヘルメッポもまた正体不明の攻撃で意識を飛ばしているようだった。
「これは一体……」
気絶と覚醒を何度も繰り返した事による頭痛を堪えながら呟くコビーの頭の中に突如声が流れてくる。
それどころか、今まで漠然と音、風等で感じていた人の気配が不気味な程に強く感じられられる。
未来の英雄、コビーの見聞色の覇気の発現の瞬間である。しかし、またしても覇王色の覇気がコビーを襲った。

一瞬それに抗ったコビーだが、やはり意識を飛ばしてしまう。
「……ンごッ!?!!　ま、またかよ!!　何だよコレェ!!?!!」
コビーの気絶と同時に覚醒した後の英雄の相棒ヘルメッポ。
彼もまた不可避の未知の攻撃に戸惑い、ズキズキと痛む頭を押さえながら恐怖に怯える。
何度気絶と覚醒を繰り返しただろうか。
周囲では壮絶な戦いの轟音が聞こえ、化け物達の衝突による衝撃がここまで届いてくる。
「こ、コビー、起きろ。起きろって！　なんか、分からねェけど、ヤベェぞ!!」
恐怖と友への心配から白目を剥くコビーを揺らすヘルメッポ。
「おい、起きろって！　麦わらのやつもヤベェ事になってるし、こうなったら……！」
起きないコビーに痺れを切らしたヘルメッポは力一杯彼の頭に拳骨を落とす。
「ンばッ!!?!!!?　また、謎の攻撃!!!?!!　ん～～ッ、あ、頭が痛い……！」
「よし、コビー、起きたか！」
「ヘルメッポさん、ご無事でしたか!!」
「あぁ、おれもお前もよく分からねェ攻撃で気絶と覚醒を繰り返してやがる。こんなんじゃ、何にも出来ねェ」
コビーは先程までの頭痛と異なる頭の痛みに首を傾げながらも、ヘルメッポの無事に喜び、彼の言葉に同意する。
「新兵達も似たような状態だし、将校の人達の戦況も芳しくねェ。これからおれ達どうする？」
「……分かりません。ぼくにはこの戦争において何が正しくて、何が正しくないのか。ぼくはこの戦争で何をすればいいのか……。誰よりも強いと思っていたルフィさんが……！　ぼくが海兵としてここまで来るきっかけをくれた恩人であるルフィさんが、あんな事に……!!」
「コビー……」
偶然見てしまった恩人であるルフィの致命傷を負った瞬間。

海兵と海賊という決して交わらない敵同士だが、それを超えて余りあるルフィへの恩。
そんな恩人の瀕死の現状に、コビーは海兵としての心に揺らぎが生じていた。
「海兵として正義を取るか、恩人の窮地に駆けつけるべきか、ぼくには分からない!!」
『徹底的な正義』を掲げる赤犬の耳に入れば即処刑されるであろうコビーの言葉にヘルメッポは顔を歪める。
ヘルメッポもコビーの言葉に少なからず同じ思いを抱いていた。
かつて海軍支部司令官の父の権力を傘に好き勝手をしていた己を真っ当な道に間接的に進めてくれた恩人。
そんなルフィの惨状に心を痛めていたのはヘルメッポも同じ。
そして、この戦争に正義はあるのかと疑問を抱いていたのもまた同じである。
しかしヘルメッポは歯を食いしばり、目の端に涙を浮かべながらも親友へと言葉を投げかける。
「……おれ達は海兵だ。こんなおれ達を鍛えてくれたガープ中将のためにも、おれ達はおれ達のやるべき事をやらねェと……! それに、あの”麦わら”だ! こんなところで死ぬような男じゃねェだろ!!」
「ヘルメッポさん……」
コビーはヘルメッポの強がりに気がついていた。
それでも尚、鼓舞してくれる友の声にコビーは己の心を奮い立たせる。
「そうですね……! あのルフィさんがこんなところで死ぬような人じゃありません! 海賊王になると言ったあの人が! ぼく達は海兵としての責務を果たしましょう……!!」
「そうだ、とにかくおれ達も戦い――」
コビーの力ある言葉に笑みを浮かべ、己もまた戦意を高めようとした瞬間、この戦争が始まって以来最強の威圧感が襲いかかり、一瞬にしてコビー諸共意識を手放した。
コビーは意識を手放すその瞬間、特大の威圧感と共に凄まじい程の

怒りを感じた。
コビー及びヘルメッポ、頂上戦争ここにて退場！

□■□■□■□■□■□■

灼熱の溶岩が触れる全てを溶かし尽くし、石化の呪いが有機物、無機物全てを石へと変え、流れる海が全ての能力を薙ぎ払う。
海軍本部最高戦力、海軍本部大将”赤犬”。
元王下七武海、”海賊女帝”ボア・ハンコック。
元王下七武海、”海侠のジンベエ”。
一人対二人の戦いは激しさを増していた。
「貴様ら二人、揃いも揃って死人の為に死ぬとは、呆れて言葉が出んのォ！」
腕を溶岩へと変化させてハンコックとジンベエへと放出する赤犬。
「言葉を慎まぬか、下郎ッ!!」
「ルフィ君はこんなところで死なん！　わしは彼に未来を見た!!」
迫るマグマの拳を石化の蹴りで叩き起こすハンコックと、海水を纏った拳で迎撃するジンベエ。
赤犬の言葉に怒りの覇気を纏ったハンコックは、マグマの拳を迎撃した体勢そのままに一息で赤犬へと肉薄し、強烈な蹴りを叩き込んだ。
「”海賊女帝”、厄介じゃのォ……！　七武海の権力を捨ててまで、何故あの小僧に力を貸すんじゃァ……！」
「ルフィはわらわの、お……お、夫だからじゃ……！」
「……なに？」
「じゃから！　わらわは、ルフィの妻だからじゃ!!」
辺り一体の空気が石化した。
いや、そう錯覚してしまう程に空気が静止した。
『えぇぇ～～～～!!!?』
海賊、海兵問わずハンコックのその言葉を聞いた者達は驚愕の声を上げた。

「なんと！　ルフィ君とお前さんは夫婦じゃったか！」
「そ、そうじゃ！　わらわとルフィは夫婦、相思相愛の間柄なのじゃ!!」
顔を真っ赤に染め上げるハンコックとその言葉に一切の疑いを持たず驚くジンベエ。
遠くから聞いていたデボンはニヤニヤと笑い、ショットは絶望の涙を流す。
海兵達はハンコックの爆弾発言に驚愕し、〝麦わらのルフィ〟への危険度を繰り上げた。
「……そうか。一体いつの間にそんな関係になってたかは知らんが、ならば直ぐにでも貴様もあの世に送り届けてやるけぇのォ」
「ルフィは死なぬ。わらわも勿論死なぬ。そなたの首をルフィへの土産にしてやろう!!」
戦意は最高潮、怒りも最高潮、漲る覇気も最高潮。
再び三者が激突しようかという瞬間、突如としてマリンフォード全土に特大の覇王色の覇気が吹き荒れた。
大地が軋む程の覇気。
化け物達が跋扈するこの戦場においても間違いなく最強と言える覇王色。
マリンフォードに存在する全生命体は戦いの手を止め、その覇気の発生源に目を向ける。
つい一瞬前まで激しい戦いが繰り広げられていた場所。
海軍大将〝赤犬〟と元七武海の二人、白ひげ海賊団、そして〝麦わらのルフィ〟が瀕死となった場所。
視線を向けた皆が一様に思った。
ここにいる筈がない。
何故ここにいる。
ありえない。
黒き稲妻が迸り、大地が恐怖しているかの如く振動する。
力なく横たわるルフィを見下ろし俯くその赤髪の男――
「あ、〝赤髪のシャンクス〟〜〜!!!!?」

――〝四皇〟赤髪のシャンクス〟が憤怒に顔を染め上げ、戦場へと降り立った。
「……随分とおれの友達に乱暴してくれたようだ」
「おどれェ……、ここに一体何の用じゃ、赤髪ィ!!」
「……赤犬。おれは今、とても気が立っている。そう殺気を向けてくれるな。今のおれは何をするか分からない……!!」
「ぬゥ……!!?」
こめかみに青筋を立てたシャンクスの怒りの覇気に赤犬は気圧される。
そんな様子を見ていたマリンフォードの強者達はシャンクスの言葉と様子に驚く。
〝四皇〟の中では温厚だと知られるあのシャンクスがあそこまで怒り、その原因が此度の戦争において比類なき活躍を見せた超新星〟麦わらのルフィ〟の瀕死に起因しているという。
彼が幼い頃から知る白ひげですら、シャンクスがあそこまで激しい怒りに包まれているのは見た事がなかった。
「……マルコ、ルフィの容体はどうだ?」
「……ッ、なんとか頑張っちゃァいるが、かなり厳しい……! 内蔵の殆どがイカレちまって、治療をやめた瞬間、死んじまうだろうよい……」
シャンクスは静かに目を瞑り、己を落ち着かせる為に一呼吸する。
しかし、酸素を肺に取り込もうともその怒りが収まることもなく、漏れ出す覇王色と共に強い怒気が溢れ出る。
「……約束破っちまったなぁ、ルフィ。一足先に会っちまった」
かつてルフィと交わした約束を思い出し、その約束を破ってしまった事へ苦笑し、改めて眼下で横たわるルフィを悲痛な顔で見る。
シャンクスから見てもルフィの傷が手の施しようのないものだと分かってしまう。
マグマにより溶かし貫かれた腹部。
感じる覇気も風前の灯。
未だに命があるのはルフィの規格外の生命力と、マルコによる不死

鳥の治療があってのもの。
もはや、ルフィの命は時間の問題だった。
それが分かるからこそ、数多の修羅場と、幾多の悲しみを乗り越えてきたシャンクスでも感情が強く揺れ動いていた。
戦争を止めにきただけだった。
エースの処刑を止めにきた訳ではない。
海賊として海軍を滅ぼしにきた訳でもない。
ただ、時代を進めるためにこの戦争を止めにきただけだった。
だが、怒りが抑えきれない。
ルフィも海賊。自己責任という海賊として当たり前の事ですら、憤怒の炎に焼かれ消えてしまった。
「……本当はこの戦争を止めにきた。だが、やめだ……。どうやら、おれの怒りは収まりそうにないらしい」
集まる”赤髪海賊団”の面々も同様に憤怒の表情を浮かべる。
「野郎共、全面戦争だ……!!!!」
マリンフォード頂上戦争、最終局面の更に最終局面にて、”四皇”赤髪のシャンクス”率いる赤髪海賊団が鬼神の如き憤怒を携え、乱入した。
本来の目的を忘却し、怒りの四皇、戦火に加わる！

第３０話”解放のドラム”

偉大なる航路（グランドライン）前半にある最終の島”シャボンディ諸島”。
そこに集まる記者達は、目の前で流れる映像電伝虫の映像を見て言葉を失っていた。
この世界で起きている最大最悪の戦争のライブ映像。
その様子は地獄という言葉ですら生温い。
「な、なんなんだこれは……！」
現時刻、マリンフォードで暴れる猛者達はいずれもが世界に名を馳せる化け物。
かつて”海賊王”の船に乗っていた怪物、王下七武海の強者達、革命軍の幹部、数多の海賊達を屠ってきた歴戦の海兵達、世界最大の監獄を守る地獄の看守達。
そんな化け物達の中でも異次元の存在感を放つ化け物が三人。
かつて”海賊王”ゴールド・ロジャーと鎬を削った伝説の海賊にして、天災なる男、”白ひげ”エドワード・ニューゲート。
比類なき腕力とタフネスを備えた生まれながらの怪物にして、空を駆け暴虐を尽くす魔龍、”百獣のカイドウ”。
”覇王”に次ぐと称される程の覇気の使い手にして、世界最強格の剣士、”赤髪のシャンクス”。
この世界の海において最強格の四大海賊”四皇”が三人も同じ戦場に立っている。
なんだ、これは。
なんなんだ、これは。
ポートガス・Ｄ・エースの処刑ではなかったのか。
”白ひげ”の介入は予想していた。
だが、何故こんな事になっている。
何故、過去の怪物達がそこにいる。
何故、王下七武海が政府を裏切っている。
何故、そこに”百獣のカイドウ”がいる。
何故、海賊の中では穏健派と知られる”赤髪のシャンクス”があそ

こまで怒り狂っている。
――そうだ。あの男だ。全てはあの男だ。
地獄で眠っていた怪物達を引き連れて来たのも。
王下七武海が裏切る原因を作ったのも。
カイドウ襲撃の理由であるこの異常な戦場を作り上げたのも。
そして、シャンクスの怒りの原因もまた。
”モンキー・D・ルフィ”
世界一の大監獄”インペルダウン”から全ての囚人を連れ出し、手綱を握る圧倒的なカリスマと手腕。
王下七武海の内、二人を心酔させ裏切らせる程の異次元の求心力。
歴戦の海兵達を次々と薙ぎ倒し、若返った伝説の海兵達をも打ち倒したその類稀なる戦闘力。
その事実に気がついた瞬間、怖気立つ記者達。
ここで”麦わらのルフィ”の息の根を止めねば大変な事になる。
そんな確信じみた考えが記者達の頭に浮かんだ。
「時代が……!! 時代が変わる!!!」

□■□■□■□■□■□■

「神避(かむさり)!!」
「ぬゥッッヅァァ!!!」
大質量のマグマを一瞬の内に貫き赤犬を切り裂くシャンクスの一撃。
覇王色と武装色の覇気を纏った斬撃は、自然系(ロギア)の肉体を切り裂き、赤犬の体から血飛沫が飛ぶ。
「あ、赤髪ィ……!! 何故お前ほどの男があの小僧に肩入れするんじゃァ!!」
「……ルフィはおれの友達だ。それ以上でも、それ以下でもない!!!」
「戯言をッ! それだけじゃなかろうがァ!!!」
拳を天へと突き上げ流星のようにマグマを降らす。
周囲の環境を侵食し、大地を、空気を燃やす。

火山の如き環境の中、飛来するマグマと共にシャンクスへと踊り掛かる赤犬。
武装色の覇気により黒く染まったマグマの拳をシャンクスへと振り下ろす。
軽々とその一撃を避けたシャンクスは怒りを堪えるかのようにため息を吐く。
「相変わらず、見境がない。仲間も関係なくか……！」
「弱い海兵に未来なし！　戦場で死んでこその海兵じゃァ!!」
「お前のその思想、反吐が出る。若い海兵が苦労しそうだ！」
際限なく降り注ぐマグマと赤犬の猛攻を未来を見ているかのように避け続け、マグマの大地を踏まぬよう空を駆けて赤犬へと斬撃を当てるシャンクス。
「ぬゥ……！　”見聞殺し”か、猪口才なァァ!!」
「お前の攻撃はおれには決して届かない！　”神避”!!」
「グゥッッ!!?」
海軍が誇る最大戦力たる大将がなす術なく傷を増やしていく惨状に、海兵及び海賊達は改めて”赤髪のシャンクス”の強さを再認識し、恐怖を感じる。
「あ、赤犬さんが一方的に……!!?」
「これが”赤髪”か……！」
「気配がまるで感じぬ……！　見聞色の覇気でも読めぬとは、これが噂の”見聞殺し”……！」
見聞色の覇気でも読めぬシャンクスの気配に、冷や汗を浮かべるハンコック。
最高峰の覇気使いであるハンコックはその異常性を即座に理解する。
「出来る事なら相手をしたくないものじゃ。気配を感じぬ者など、戦いづらいことこの上ない」
「あぁ。じゃが、今日のところは仲間のようじゃ。ルフィ君の身を案じてあそこまで怒っておる」
「そ、そうじゃ！　ルフィ！　ルフィは大丈夫か!!」

赤犬とシャンクスの戦いに冷や汗をかいていたハンコックは、ジンベエの言葉に一瞬で視線をルフィへと移し、即座に走り去ってしまった。
「……随分と愛されておるな、ルフィ君」
話しかけたにも関わらず、一切視線を向かられず無視されたままに残されたジンベエは、尋常ならざるシャンクスと赤犬の戦いを目に焼き付け、ハンコックの後を追う。
「わしももっと強くならんといかんのう……」

□■□■□■□■□■□■

「ルフィ、ルフィは大丈夫なのか!!!?」
「騒ぐなよい、”海賊女帝”。集中力が切れちまう」
「マルコ、ルフィはどうなのじゃ!!!! あぁ！ こんなにも血を流して!! ルフィの腹にこんな孔が……!!!!」
「だから、騒ぐなって言ってるよい!! 少しでも気ィ抜いたら、エースの弟は一瞬であの世行きだ」
「ッ!!」
吹き出すような汗と真剣な表情のマルコの荒げる声にハンコックは悔しげに口を噤む。
近くでルフィの容態を見て感じる絶望的なそれ。
腹にポカリと空いた孔。
臓器をまるごと焼き貫いたそれは、医学に素人なハンコックの目から見ても回復は絶望的だと分かってしまう。
絶望感と悲しみと悔しさと怒りが混ざり合い、涙を浮かべるハンコックへと追いついたジンベエが声をかける。
「狼狽えるなハンコック。お前さんがそんな顔をしてどうする。妻であるお前さんがルフィ君の復活を信じず、誰が信じるというのじゃ。絶望する気持ちは分かるが、気を強く持て」
「……そうじゃ、そうじゃな。ルフィがこんなところで死ぬはずがない。わらわのお、夫がこんなちんけな所で死ぬはずなどありはせぬ

！」
「ワハハ！　そうじゃ、それでいい！」
ジンベエのその言葉に妻としての夫を信じる気持ちを持つハンコック。
実際のところ夫婦でもなんでもないが、それを知る由もないジンベエはハンコックの言葉に納得げに頷いた。
「それで、実際のところどうなんじゃ、ルフィ君の容態は？」
「……正直、かなり厳しいよい。臓器は殆どイカれちまって、修復も遅い。”麦わら”の体力もほぼ残ってねェから、あんまり言いたくないが、時間の問題……」
「マルコ!!　そなた、ルフィを死なせたらただじゃおかぬぞ！　生きている事が苦痛になる程に痛ぶってから獣の餌にしてくれる!!!」
「おれも死なせたくねェよいッ!!　こいつァ、おれ達……”白ひげ海賊団”の恩人だ。こいつを絶対に死なせる訳にはいかねェ……!!」
しかし、覚悟に反して状況は絶望的だ。
不死鳥の回復能力をもってしても時間のかかってしまう程の甚大なダメージと、そもそものルフィの体力不足。
そんな現状を理解しているマルコは歯噛みし、吐き捨てるように言葉を呟く。
「くそッ！　都合よく奇跡が起きてくれりゃァ……!!」
そんな泣き言のようなマルコの言葉。
その言葉を呟いた瞬間、正に奇跡が起きた。
グニャリと空間が歪んだ。
まるでそこだけが世界から消え去ったかのようにマルコの眼前の空間が色を失った。
何も感じず、何も見えない。それが何かすら分からず、そして、そこから一人の男が現れた。
白髪に褐色の肌の大男。
その端正な美貌に愉快な表情を浮かべ、歪んだ空間から忽然と現れたその男。
世界中が恐れ慄く、正真正銘、並ぶ者なき世界最強。

”覇王”ルイン・ダイナーが現れた。
「ッ!!? ぅエッ!!? は、”覇王”!!!」
「あァ、この間ぶりだなマルコ”随分と頑張ってるみたいじゃねェか」
ハハハハと愉快げに笑うダイナーへと恨みがましい目を向けるマルコ。
「一体こんな所に何の用だよい！　アンタはこの戦いには手を出さないんじゃなかったのか？」
「まァ、そうだったんだがなァ？　友達からの頼みだから仕方がねェ」
「友達？　アンタに友達が……？　いや、それは今はいい。悪いが、今アンタと話している場合じゃないんだよい！」
そう言うなりルフィの治療に集中するマルコ。
「……この男が”覇王”か。じゃが、ニョン婆の言っていた覇気を感じぬ」
”赤髪のシャンクス”と一緒じゃ。気配を抑えておる」
「分かっている。目の前にいるのに見失ってしまいそうな……、こんな感覚初めてじゃ」
言い聞かせられていた”覇王”の覇気を感じられぬばかりか、見ているのにも関わらず見失ってしまいそうな程の気配の不可思議さに混乱するハンコックとジンベエ。
そんなハンコックを視線に入れたダイナーはヒューッと口笛を鳴らす。
「お前は”海賊女帝”ボア・ハンコックか。想像以上に良い女だ。どうだ、今夜俺と共に熱い夜でも？」
「結構じゃ。わらわはルフィの妻。ルフィ以外の男に一切の興味などないわ」
「アン？　サンジのとこの船長は結婚してやがったのか？　そんな話聞いちゃいなかったが……」
「わらわとルフィは夫婦じゃ！　誰が何と言おうが、夫婦じゃ！」
「ほォ、そうだったのか。まァ、そりゃ残念。仲良くしろやァ」
「そなたに言われずとも、そうする」
強く言い放つハンコックに楽しげに笑うダイナーと、そんな様子に

冷や汗を浮かべるマルコ。
「ハハハハ！　俺にそこまで強く言う女も久しぶりだ！　なァ、ジンベエ？」
「ワハハ！　ハンコックは性格最悪じゃからのう！　それよりもダイナーさん、インペルダウンでは世話になった。改めて礼を言う」
「気にするな。美味い飯と美味い酒、また今度一緒にやろうぜェ」
「あぁ、是非とも！」
インペルダウンでの恩への改めての感謝を述べるジンベエ。
あの食事があったからこそ、ここまでこの戦争を戦い抜く事が出来ている。
あれがなければ今頃体力が底をついていただろう。
ダイナーはシャンクスと赤犬、センゴクと黒ひげの戦いに視線を向け、しかしすぐにルフィへと視線を移した。
「良く頑張ったじゃねェか、麦わら小僧。天晴だ。兄を無事救い出し、この戦争をここまで掻き乱した。充分だ」
ダイナーは膝を折り、ルフィの頭を乱雑に撫でた。
よくやったと、まるで子供を褒める父のような姿にマルコもハンコックも、ジンベエも呆気にとられる。
「――だが、死ぬにはまだ早い。お前の仲間からの頼みだ。特別に助けてやる」
瞬間、ダイナーから膨大な覇気がエネルギーと化してルフィに流れ込む。
天を貫く程の膨大な量の黒き極光がルフィに流れ込み、その傷を瞬く間に修復していく。

ドクンッ!!
腹部に空いた巨大な孔が塞がった。
ドクンッ!!
失った内臓が再生した。
ドクンッ!!
度重なる戦闘で負った大小様々な傷が全て治癒した。

「心は資格充分。力は俺が貸してやる。さァ、数百年振りの神の覚醒だ」

ドンドットット☒　ドンドットット♪

ドラムの音が辺り一帯に鳴り響く。

陽気な聞くだけで元気が出るような力あるリズム。

その音と共に変化を始めるルフィの肉体。

炎の如く逆立つ髪と服は白く染まり、羽衣のような蒸気を纏う。

ドラムの音と共に吹き荒れる覇王色の覇気。

先の”赤髪のシャンクス”と遜色のない程の覇気が絶え間なくルフィの体から迸り、そのあまりの強さに戦場の誰もが視線を向ける。

その場には異常な覇気を撒き散らす姿を大きく変貌させたルフィと、呆気にとられるマルコとハンコック、ジンベエの姿。

ゆらりと立ち上がる白きルフィ。

ドンドットットという不可思議なドラムのような音を心臓から響かせながら立ち上がったルフィは、己が身の異常に戸惑う。

「どうしたんだ？　おれ……。何で？　……まだ立てる」

貫かれたはずの腹部を触り、頭を捻る。

確実な死への感覚があった。

それが今はどうだ、貫かれた腹部に傷はなく、それどころか大小様々に負っていた傷するも何一つなくなっている。

「死んだはずなのに」

己の心臓から響く陽気なドラムの音色。

それと共に湧き上がる陽気な気持ち。

「楽しくなってきた……！　アハハハハハ!!!」

笑えて仕方がない。

大変なはずなのに。

死んでいたかもしれないのに。

大好きな兄が無事かも分からないのに。

とても”楽しい!!!”

「アハハハハハ!!!!　よーし！　皆んなで無事に帰るぞ!!!!」

マリンフォード頂上戦争、最最終局面。
解放の戦士、数百年振りの神の覚醒で戦いは大きく動き出す。
”麦わらのルフィ”覚醒！　解放のドラムを携え、頂上戦争に終止符を打つ!!

第３１話”再会と約束”

大気が震える。
数多の自然系（ロギア）による環境の変化も、分厚い雷雲も、嵐も何もかもが巨大過ぎる覇気により消滅した。
陽気なドラムの音が鳴り響く度に覇王色の黒き雷鳴が迸り、悍ましい程の威圧感に空間が軋み出す。
「アハハハハ!!! 楽しくなってきた!! 力が湧き上がってくる!!!」
大地をまるでトランポリンのように背で跳ねながら、極大の覇気の主が愉快そうに笑う。
髪も服も白く染め上げ、羽衣を纏ったその男。
「良くわかんねェけど、これならまだ戦えそうだ。おれのやりたかった事全部できる……！」
先まで致命傷を負っていたその男。
今世界で最も注目されるその男。
”麦わらのルフィ”が帰ってきた!!!
「ルフィ！ そなたよくぞ無事で!!」
「ん？ ハンコック！ お前も無事で良かった！」
「はぁん……！ こんなにも真っ直ぐな言葉……！ わらわ、幸せ……♡」
ルフィの真っ直ぐな言葉と輝くような笑顔に腰砕けになったハンコックは、「これが夫婦……！」と頬を赤く染め上げる。
「ルフィ君、無事で良かった！ 体は大丈夫か？ その姿は一体なんじゃ……？」
「ジンベエ！ おれもよく分かんねェけど、今までで一番調子いいんだ！」
「そうか。ダイナーさん、ルフィ君に一体何をしたんじゃ？」
「”覇王”ならもういなくなったよい。おれらが呆けている間にな……」
そこでジンベエ及びハンコックもまたダイナーが姿を消した事に

気がつく。
唐突に現れ、嘘のような治療を行った最強の男は、姿を消す時もまた唐突であった。
治療を間近で見ていたマルコはその様子を思い出して、冷や汗を浮かべる。
腹に空いた孔を一瞬で塞ぎ、失った内臓もあらゆる傷をも治癒させたその力。
まるで神だ。
覇王と呼ばれ畏れられる男の力に改めて畏怖を覚えるマルコ。
「ダイナー？　どっかで聞いたような……？」
「死にかけのお前を救ってくれた男の名前だよい、エースの弟。いつか会う事があれば礼をいっておけ」
「分かった。そうする！」
屈託のないルフィの笑顔にマルコは呆れながらも笑みをこぼす。
「それよりも、この戦場にゃもう用はねェんだ。早いとこずらかるよい」
「あぁ、分かってる！　エースはどこに行ったんだ？」
「エースの奴なら、おれの仲間に連れられて船に向かってるところだよい」
「そうか、良かった……！　なら、おれは皆んなが逃げやすいように暴れてくる――って、えええーー!!!　シャンクスー!!!」
戦場を掻き乱すべく覇気を高めたルフィは、ここにいるはずのない憧れの海賊の姿を視界に入れた瞬間、目玉と舌を物理的に飛び出し驚愕した。
憤怒の表情を浮かべる赤犬と向かい合う、気まずげな表情の憧れの男、〝赤髪のシャンクス〟がルフィを見ていた。
「は、ははは……。本格的に約束を破っちまったなルフィ」
「なんでシャンクスがいるんだ!!!」
「ちょっと野暮用でな。まぁ、元気そうでなによりだ……」
十数年振りに会うシャンクスを相手に、愕然としたルフィは口を大きく開きすぎて顎が地面へと落ちる。

そんなルフィに苦笑するシャンクスと静寂に包まれるマリンフォード。
遥か遠方から先程まで暴れ狂っていた”海軍の英雄”の「ルフィーー!!!」という声が聞こえ、更に遠方からもまた、此度の戦争の引き金たる男の「ルフィーー!!!」という声が聞こえてくる。
そんな家族達の声が全く頭に届いていないルフィは、シャンクスと交わした”約束”を思い出してあわあわと混乱する。
「お、おれ、立派な海賊になったら帽子を返しに行くって約束だったのに、破っちまった……!」
「あー……、まァ……。ここまでやれたら立派っちゃ立派ってところも……いや、うーん……。ノーカンだ。ノーカン！　これはナシ!!」
「よし、そうだな！」
『いや、それでいいんかい!!!』
約束を破ってしまったことへの罪悪感と悲壮感を覚えるルフィに対して、悩み唸った末に今回出会ってしまった事はナシにしようというシャンクスと即座に頷くルフィへ、約束の内容を知る”赤髪海賊団”の面々は一斉に突っ込む。
「それでいいのかお頭!!　ナシも何もしっかり会っちまったぞ！」
「ナシだ、ナシ！　こんな再開の仕方なんてナシだ!!!」
「だが、どうするお頭。道理がなけりゃ、格好がつかねェぞ」
「うるせェ、ベック!!　こんなに広い戦場だ。おれ達はここにはいたが、ルフィにゃァ、会ってない！　なァ、ルフィ」
「うん」
「話してんじゃねェよ!!」
海賊として、男としての筋を通そうとする肉を手に持つ大男、ラッキー・ルゥと、ライフル銃を携えた男、ベン・ベックマンに対して駄々をこねるシャンクス。
そんな”赤髪海賊団”の面々に懐かしさを感じるルフィは、ゆっくりと彼らに背を向ける。
「シャンクス、皆……。おれは誰にも会ってねェ……！　約束も破ってねェ！　だから、本当におれが立派な海賊になった時におれの方か

ら会いに行く!!」
　そんなルフィの力ある言葉にシャンクスとベックマン達は笑顔を浮かべた。
「あぁ、おれ達は会ってねェ。約束も破っちゃいねェ。だから、楽しみに待っている！」
　その言葉を聞いたルフィは満足げに笑い、心臓のドラムを大きく鳴らす。
　ルフィの楽しげな気持ちに呼応するかのように力あるリズムは強く、陽気に、自由に轟き鳴り響いた。
　呼応する覇気。
　バリバリと黒き稲妻が迸り、大地が空が海が鳴動する。
「あっひゃっひゃっひゃ!!　最高の気分だ!!　海賊王におれはなる!!」
　高らかに世界に宣言したルフィは、その勢いのままに戦場へと躍り出た。
　行く先々で歴戦の海兵達を打ち倒し、荒れに荒れていた戦場を引っ掻き回していく。
　そんなルフィを眺めるシャンクスは幼少のルフィを思い出してフッと笑った。
「お前は変わらないな、ルフィ」
　優しげな笑みを浮かべたシャンクスは、しかしその表情を真剣なそれに変えて赤犬へと視線を向ける。
「さて、赤犬。おれはこの場を去ることにする。男と男の約束があるんだ」
「行かせると思うか、〝赤髪〟イ!!」
「続けるというならそれで構わない。だが、ここから先はお前のその命――落とす覚悟をしてもらおう!!」
「ぬぅ……ッ！」
　向けられる尋常ならざる覇気に気圧される赤犬。
〝白ひげ〟から受けたダメージと〝赤髪〟から受けたダメージが赤犬の膝を折る。

「……次会う時は覚悟しちょれ、〝赤髪〟イ……！」
「ふっ、楽しみにしている。野郎共、新世界へ帰るぞ！　この場におれ達の出番はもうない!!!」
〝赤髪海賊団〟、怒りのままに海軍戦力に甚大な被害を齎した。
旧友との予期せぬ再開、しかして男と男の約束は反故に非ず。
友の確かな成長を確かめ、〝四皇〟赤髪〟、頂上戦争を離脱する！

□■□■□■□■□■□■

「――あそこにもいたガネ！」
「ほい、きた！　ギャハハハ、手慣れてきたぜ……って、なんでおれ様がこんな事しなけりゃなんねェんだ!!!」
「つべこべ言うんじゃなァいわよーーう!!!　麦ちゃんが皆揃ってここを脱出するって言ったんだから、そうするのよーーう!!」
「うるせェ、Ｍｒ．２!!　そのナリでデケェ声出すんじゃねェよ!!!」
「あら、それはスワンスワン」
ガハハハと大笑いするのは巨大過ぎる巨人の姿をしたボンクレー。
ボンクレーのマネマネの実の能力で〝巨大戦艦〟サンファン・ウルフの肉体を再現し、それを更に巨大な頭の上に立つ大男、バーンディ・ワールドのモアモアの実の能力により１００倍の大きさになった規格外の超大型巨人なった姿である。
そんな彼らはその巨体を活かし、戦場で倒れた仲間達を回収すべくマリンフォードを動いていた。
Ｍｒ．３がボンクレーの背に蝋の巨大な籠を作り出し、発見した仲間達をバギーの切り離した腕で回収して籠に回収する。
その大きな脚による移動速度もあり、この広い戦場の内既に大多数の仲間達を回収した。
覇王色の覇気により敵も味方も気絶している故のこの効率。
「バロロロロ！　このおれが他の奴の手助けなんざ分からねェもんだ」
「ガハハハ！　ここまで早く助けられるのも、アンタのおかげよぅ！

怖い顔してるけど、良いとこあるじゃなァい!!」
「バロロロ！　怖い顔は余計だ。それよりも、早いとこ回収しちまってずらかるぞ」
「そうだぜ！　こんな所、さっさと脱出すんぞ!!」
「同感だガネ。ここは命がいくつあっても足りないガネ……」
嘘偽りのないボンクレーの褒め言葉に口の端を上げて笑うワールドと早く脱出したいと叫ぶバギーとＭｒ．３。
そう言ってる間にも仲間を見つけては回収していく。
もはや驚異的なチームワークだった。
「それにしても麦わらの奴ァ、どうなっちまったんだ……？　シャンクスの野郎も暴れるだけ暴れて帰りやがったしよ」
「死にかけだったのにいきなり元気になったガネ」
「麦ちゃん、とっても楽しそうにしてるわねェーい。とにかく無事でよかったわねィ」
「凄ェ覇気だしやがる。さっきまで覇気初心者だったとは思えねェな」
皆がそれぞれ口を開き、次の倒れる仲間を回収しようとしたその時、突如としてボンクレーの頭上に立つワールドへと気配が迫る。
「おい、決着はついてねェぞワールド!!」
「しつこい奴だ、モリア」
「キシシシシ！　若い肉体と覇気、この能力の練度！　楽しくて仕方がねェ！　見ろ、この肉体！　影１，０００体を入れても力に振り回されねェ!!!」
「あの若造がここまでになるたァ驚きだが、まだ足りねェ。覇気の練度が足りねェぞォ!!!」
投げ放った石飛礫の速度と大きさを１００倍にする。
それを迎え撃つのは鬼神の如き肉体の男、ゲッコー・モリア。
自身の能力である他者から切り取った”影”を１，０００人分入れた事による比類なき強靭な肉体。
迫り来る巨大な石飛礫を拳の一振りで破壊したモリアは大きく、愉快に笑う。

「キシシシシ！　最高だ!!!　お前をぶっ倒した後は、あの憎きカイド――グォェェッ?!!」
「あ、悪ィ！　轢いちまった！」
「……もう意識ねェぞ、麦わら小僧」
「あ、ワールドのおっさん！　悪ィ、戦いに手出しちまった！」
「いや、気にするな。もはや大して興味もねェ奴だ」
　申し訳なさそうにするルフィと気にするなと手を振るワールド。
　そんな二人を他所に、明らかに己よりも強いモリアを一撃で倒したルフィに震え上がるバギーとＭｒ．３。
　そしてルフィを見て目を輝かせるウルフの姿のボンクレー。
「麦ちゃん！　元気そうで良かったわよーう！　七武海を一撃だなんて、とっても強くなったんじゃないのよーう!!」
「お前ボンちゃんか！　それにバギーと3!!　お前らエースをありがとうなァ!!　デカい借りが出来ちまった!!　本当にありがとう!!!」
「き、ききき気にするな！　おれとお前の仲じゃねェか！」
「そ、そそそうだガネ！　共に地獄を乗り越えた仲間。助け合うのは当然だガネ！」
「兄貴助かって良かったわねィ！　兄貴ならもうバレットの船に着いたわよぅ!!」
「皆、本当にありがとう！　この恩は必ず返す!!!　おれはもう少し暴れてくる！　他の皆を頼む！」
　そう言うなり走り去ったルフィにワールドとボンクレーは大笑いし、バギーとＭｒ．３はため息を吐く。
「凄ェ男だ、あの小僧」
「なんか、ロジャー船長を思い出しちまったぜ……」
「さァて、残りの奴らも回収しちゃうわよーう！」
　世界最悪の頂上戦争。
　海軍、海賊、看守達の血で血を洗う地獄の場。
　しかしてそこに咲く友情の花。
　短い付き合い、異なる思想。
　だが、そこには信頼と友情が芽生え出し。

頂上戦争、決着まであと僅か！

第３２話”大き過ぎる失言”

荒れ果てた大地。
まるで隕石が落ちた跡のようなクレーター、地殻変動でも起きたかのような異常なまでの大地の隆起、高熱で溶けたかのような硝子と化した大地。
それら全てが視界の全てに広がっている。
そんな異常な戦地に立つ男が四人。
巨大な金棒を肩に担ぐ人型の龍、”四皇”百獣のカイドウ”
金剛不壊の漆黒の大仏にして、海軍が誇る智将、”仏のセンゴク”
人型の地震、人型の天災たる”四皇”、”白ひげ”エドワード・ニューゲート
そして、山河をも破壊する拳を持つ”海軍の英雄”、モンキー・Ｄ・ガープ
怪物達が犇くマリンフォード頂上戦争の中でも指折りの化け物達が肩で息をしながら立っていた。
「――ガープ、貴様少しは落ち着いたか」
「ぶわっはっは！　すまん!!」
「すまん、ではないわ、馬鹿者ッ!!!」
ガープの全く気持ちの篭っていない謝罪の言葉に、怒りの覇王色がセンゴクから漏れ出る。
鬼のような形相のセンゴクに爆笑するガープと、ため息を吐きながらも笑う白ひげ。
「グララララ!!　お前がそこまでブチ切れてるのを見るなんざ、何十年ぶりだ、ガープ？」
「いやー、すまんすまん！　お前らにも面倒掛けたのう！」
「ウォロロロロロ!!　若ェ頃のお前の全力とやれるなんざ、予想も付かなかったぜ。遥々ここまで来て正解だった!!!」
「ふざけるな貴様等!!　貴様等三人のおかげで状況は最悪だ！”火拳のエース”は既にバレットの戦艦の上！”麦わらのルフィ”は最悪の覚醒！　貴様等に罹りっきりになっている間に……!!　聞い

ているのか、ガープ!!!!」
海軍及び世界政府にとって最悪の状況。
此度の戦争の引き金であり、海軍にとって必ず処刑しなければならない海賊である”火拳のエース”は処刑場から解放され、既に”鬼の跡目”によるマリンフォードの街全てを資材に建造された超巨大戦艦の上に逃げ込み済み。
大将”青雉”と大将”黄猿”が攻略すべく試みているが、大質量の兵器とバレットの覇気、数々の能力者達の攻撃に戦況は芳しくない。
大将”赤犬”の手により瀕死状態に陥っていた”麦わらのルフィ”は奇跡的な回復を遂げ、新たな姿に覚醒し、強大な覇気を放出しながら戦場を縦横無尽に掻き乱している。
中でも、ルフィのあの姿だ。あの姿が問題なのだ。
”麦わらのルフィ”が食らった悪魔の実。
その真実を知るセンゴクは思わず倒れてしまいそうな程の眩暈に手で目を覆った。
「それにしても、あの麦わらを被った小僧は一体どうなってやがんだ？　死にかけだった奴がいきなり回復しやがった」
「それも気にはなるが、あの変身の方が分からねェなァ。エースの話しじゃ、あいつは”超人系（パラミシア）”らしいじゃねェか。ああいう変身は、”動物系（ゾオンけい）”の専売特許だろ」
正しくセンゴクのここ数十年の中で一番の頭痛の種がそれだった。
”麦わらのルフィ”が食らったのは”ゴムゴムの実”という肉体を”ゴム”に変化させる”超人系（パラミシア）”の悪魔の実だ。
そう、そのような実だとこの実は認識されている。
世界も、食らったルフィ自身もまた。
しかし、これは隠された偽りの名前。
数百年覚醒する事のなかったこの実を、絶対に覚醒させないように世界政府が作り出した偽りの名前である。
そして、ルフィのあの姿こそが、世界政府――天竜人の頂天たる五老星達が恐れていたもの。
絶対にここで”麦わらのルフィ”を仕留めねばならない。

あの実を覚醒させた者を生かしておく訳にはいかない。
一般市民にも、海賊達にも、絶対に知られる訳にはいかない。
センゴクは苛立ちと焦燥感、悲壮感を隠しながら努めて冷静に口を開く。
「……確かに気にはなるが、気にする程ではない。だが、貴様等に時間を取られ過ぎた。おれは奴らを――」
「なんじゃ、お前も分かっとるじゃろうが。あれはニカじゃ。ニカ!!」
「貴様、ガープッッ!!!!」
「あっ、これ言ったらダメなんじゃった。今のナシ！」
「ナシに出来るかァァァッッ!!!!　馬鹿か貴様ァッッ!!!!」
ルフィが食らった悪魔の実”ゴムゴムの実”、またの名を”動物系（ゾオンけい）”ヒトヒトの実”幻獣種”モデル　ニカ”。
世界政府がその名を消し、その名が広がる事を恐れる実在した”神”の名前。
それがニカ。
そして、ルフィが食らった悪魔の実こそが、覚醒を条件にこのニカになる事が出来る神の名を冠した悪魔の実である。
口に出す事すら許されぬその名を何の気負いもなく大きい声で喋ったガープは、ナシにしようとしたが、既にその声は眼前の白ひげ、カイドウは勿論、映像電伝虫により全世界に届いてしまっていた。
ブチ切れるセンゴク。
遥か彼方の五人の老人達は最悪過ぎる状況に目を回し、怒りや焦り、ありとあらゆる感情をごちゃ混ぜにしていた。
「き、貴様、ガープ!!　い、いや待て。名前程度ならばまだ、大丈夫か――」
「ニカと言やァ、ロジャーから聞いた事がある。人々を笑わせ、苦悩から解放してくれる”解放の戦士”にして、”太陽の神”。そうか……、その”実”がそうなのか……！」
「”神”とは大仰だな、おい！　ウォロロロロ!!　お前等がそこまで隠すって事は、政府が消した歴史に関係する事だろ!!」
「……貴様が気にする必要はない」

「ウォロロロロロ!!! ニカだのと何の興味はねェが、お前らが困る姿を見るのは面白ェ!! 良い酒が飲めそうだ!!!」
かつて”海賊王”から聞いた話と繋ぎ合わせて結論を出した白ひげと、一気に核心をつきセンゴクの反応に笑い転げるカイドウ。
そんな二人の様子に奥歯を噛み締めながら怒りの覇気を放出するセンゴク。
「そのニカってのが、お前等が消したくて消したくて仕方がねェ”空白の100年”に関係あるんだなァ! ウォロロロロロ!! 面白い、面白ェぞ、センゴク! お前のその面、面白ェ!!!」
「カイドウ、貴様ッ! 只では済まさんぞッ!!」
「ウォロロロロロ!! やってみろよォ!!!」
一触即発。
カイドウの煽りに肉体、精神共に疲れ果てているセンゴクは怒髪天を突いた。
しかし、続く白ひげの言葉に理性を取り戻す。
「そうか……、意志はついにここまで繋がったか。時代がついに来たか。とうとう現れたか……!」
「貴様ッ、なにを――」
「センゴク、お前達世界政府が恐れる世界中を巻き込む程の”巨大な戦い”は近い。数百年分の歴史を背負い、あの男はお前達――いや、この世界に戦いを挑むだろう。”ジョイボーイ”が再来した今これより、時代の流れは早くなる!!」
「なにッ、ジョイボーイだと!!?」
「――ッ!!!」
白ひげの視線の先には、恐ろしいまでの戦闘力で海兵達を蹴散らしていく白きルフィの姿。
その白ひげのジョイボーイという言葉にカイドウは反応し、センゴクもまた言葉を聞き彼を睨み付けていた。
「おい、白ひげのジジイ!! ジョイボーイってどういう事だ!!! あの麦わら小僧がジョイボーイだと?」
「あァ、あいつがジョイボーイで間違いねェ。ジョイボーイってのは

ニカの事だ。かつて”空白の１００年”に実在した人物。間違いなく”麦わらのルフィ”がジョイボーイだ……!!」
「……そんな話、すぐには信じられねェな。帰ってキングの奴に聞いてみるか……」
「なに？　ルフィがジョイボーイじゃと!!　はて、なんじゃったか……」
「ガープ！　貴様はもう黙っていろ!!!」
二人で巨大な爆弾情報を話す白ひげとカイドウと、会話に混ざろうとするガープ。
そんなガープへと怒鳴りつけるセンゴクは痛む頭を抑えながら、白ひげとカイドウを睨み付ける。
「いいか、もうこれ以上お前等も何も口に出すな。私はこれから”麦わらのルフィ”制圧に向かう。いいか、何も口に出すなよ……!!」
「あァ……」
「お、おう……」
血走りギンギンにキマッたセンゴクの目を見た白ひげとカイドウは、素直に頷く。
二人の返事を聞いたセンゴクは一瞬で姿を消す。
数瞬後には白き神と激突していたため、余程焦っているのだろう。
ガープは内心で心より謝罪をした。
「なんか白けちまったぜ。おれはボチボチ帰る事にする」
「相変わらず、勝手な野郎だ。ガープ、お前らにゃ悪ィが、おれも帰らせてもらうぜ。やる事が出来ちまった」
「勝手にせい。どうせ、わしもこの戦争が終わったらクビじゃ、クビ！
クビだけで済むかも分からんのう！」
ぶわっはっは！　と笑うガープを尻目にカイドウは巨大な龍へと姿を変化させ飛び立つ。
「あばよォ！　久々に楽しい戦争だったぜェ!!」
「最後まで五月蝿ェ奴だ」
四皇と伝説の海兵入り乱れる四つ巴の戦いもこれにて終幕。
世界の根幹に関わる爆弾情報が世界に発信され、世界中は困惑と恐

怖を抱え。
世界の運営者たる五老星は怒りと焦燥を抱く。
この戦いにて死者はおらず、しかし被害は尋常でなく。
化け物達、早くお帰りなさい！

□■□■□■□■□■□■

「カイドウとガープは戦線を離れ、白ひげもまた生き残る事を決めた。エースは既にバレットの庇護の下、そして約束の男は全てを背負う覚悟あり」
マリンフォードから遥か彼方、とある島の酒場にて”覇王”ダイナーは一人呟いた。
酒場の店主や客達を畏怖させるダイナーは、酒瓶を呷りその強い酒を一気に嚥下する。
「運命は大きく変わった。これからどうなっていくか楽しみだなァ」
”麦わらのルフィ”の能力を覚醒させた姿を思い出したダイナーは小さく笑い、未来視を使うことなく、来たるであろう近い未来に思いを馳せる。
すると、酒場の入り口から喜び楽しみ興奮が混ざった気配を感じ取った。
「うぉ～い、ダイナー！　次行こうぜ、次ィ!!」
「おいおい、まだ行くつもりかァ？　もう三軒目だろうが」
「いいじゃねぇか！　今のマミちゃんも最高に可愛かったけどよ、まだ見ぬ美女が待ってるんだ。おれはまだまだ足りねェ!!!」
迫力のあるサンジのその声に店内から、女からは嫌悪の声、男からは称賛の声が上り、ダイナーは目を丸くし次の瞬間には爆笑した。
「ハハハハハハ!!!　とんだスケベ野郎だなァ、サンジ。おれの予想を超えてきやがる。ハッ、いいだろう、好きなだけ回ってこい。満足するだけ行ってこい。お前は偉大な男だ」
「ありがとよ、ダイナー！　この恩は必ず返すッ!!」
「これは祝いだ。気にする必要はねェ。楽しんでこいよ」

「すまねェ、ありがとう。おれは幸せ者だ……ッ」
涙を浮かべるサンジに金が入った袋を手渡すダイナー。
一体どれ程入っているのか分からない程に巨大な金袋に周囲の者達は騒めき、サンジはそれを感謝して受け取る。
「うぉぉぉぉ！　まだ見ぬかわい子ちゃんたち」
「おれァ、飲み歩いてるからなァ」
「分かった！　終わったらお前を探す！」
「ったく、どうしようもねェ奴だぜ……」
サンジの立ち去る背中を眺め呆れるダイナーの声は柔らかく、その表情は優しげだ。
出会った当初は生意気な小さいガキだった。
食べられたものではない料理しか作れず、しかし努力を重ねてダイナーを満足させる程の料理人となった。
長い人生を歩んできたダイナーにとっての唯一無二の親友。
そのスケベ加減に、「類は友を呼ぶ」なんて言葉が頭によぎり、笑った。
「今の内に楽しんでおく事だなサンジ。これからは地獄の修行が始まるぜェ」
ケケケと嫌らしく笑うダイナーは世間が知らぬ悪戯小僧のような表情を浮かべる。
”覇王”ダイナー、親友の娼館への旅路を見送った！

第３３話”男二人、交わす想い”

「――ぜハハハハ!!　凄ェ強さだ！　これがニカ……、これが”太陽”か……!!」

黒い髭を蓄えた大柄な男、”黒ひげ”マーシャル・Ｄ・ティーチは、強大な覇気を放つ漆黒の大仏と激しく、自由に戦う白き戦士を見て興奮気味に笑う。

腹に巨大な孔を空けた瀕死の状態からの突然の回復と覚醒。

髪も服も白く染め上げ、楽しげな心臓の音と共に吹き荒れる覇気は怪物の如く。

まるで絵物語のように空想のままに、自由自在に戦う様は、言い伝えられるニカの姿そのもの。

「まさか、あの小僧がニカとはなァ！　情報を操作された悪魔の実があるとは思っちゃいたが、”ゴムゴムの実”がそうだとは思わなかったぜ!!」

眼前で繰り広げられる白き神と黒き大仏の激しい戦い。

拳と拳が激突する度に激しい轟音と衝撃、覇王色の衝突が発生し、大地と天を揺さぶる。

黒き仏の異次元のタフネスと歴戦の戦略により神を攻略せんとする。

白き神の規格外のパワーと自由自在な戦闘により仏を翻弄する。

まるで神話だ。

神話の中で語られる神の闘争を見ているかのようだ。

「凄ェなおい!!!　これが本物の太陽か!!!　これが歴史の闇に葬られた”ニカ”の力ッ!!!　こんな絵物語みてェな光景見たことがねェ!!!!!　そう思わねェか親父ィ!!!」

「そいつには同意するが、お前はもうおれの息子じゃねェ。おれを親父と呼ぶんじゃねェよ、ティーチ」

「ぜハハハ!!　寂しいこと言うんじゃねェよ！　久々の親子の再会だ！　もう一度息子と呼んでくれよ、親父ィ!!!」

「グララララ!!!　ふざけたこと抜かすんじゃねェよ、ティーチ!!!」

莫大な振動エネルギーが白ひげの裏拳より放たれ、愉快に笑う黒ひげの横面に激突する。
咄嗟に闇を纏い防御に徹したが、振動を放つ拳は闇を霧散させ、大気を破壊し、空間をも崩壊させた。
強烈な一撃を受けた黒ひげは地面へと叩きつけられ、あまりのダメージに血反吐を吐く。
「ゴワァァァ!!!? 痛ェ!!!!」
「家族殺しの大罪、おれがお前をここで殺してサッチへの手向けにしてやる」
「ぜ、ぜハハハハ……!! 計画は狂っちまったが、おれの目的は最初から一つだぜ、白ひげェ!!!!」
白ひげと黒ひげの因縁。
黒ひげが犯した船員を息子と呼び家族と愛する白ひげへの最大の裏切り。
仲間殺しの大罪を裁くべく、病魔に蝕まれ体力も限界寸前の白ひげが力を溜める。
際限なき欲望と曇りなき狂気による長年の計画のため、覇気を高める黒ひげ。
しかし、突如として巨大な黒き拳が黒ひげへと激突した。
「ウグボァァァ!!!!」
「あ、悪ィ!!」
突如として黒ひげへと飛来した巨拳。
尋常ならざる覇気により黒く硬くそして膨れ上がった神の拳は、黒ひげを一瞬で遥か彼方へと吹き飛ばした。
遠ざかる野太い悲鳴。
肉眼で捉えられなくなる程に遠ざかっていき、次第に声も聞こえなくなる。
「……」
「あちゃ～！ 誰かぶっ飛ばしちまった！」
「……エースの弟か」
巨拳を納め、遠ざかる黒ひげを見て頭を抱えるルフィを視界に入れ

た白ひげは、突如として討つべき敵を薙ぎ倒されてしまった事で言葉を失ってしまう。
その背後では油断なくルフィを睨み付けるセンゴクの姿。
大方、ルフィの放った特大の一撃をセンゴクが避けた事で、不幸にも黒ひげへと直撃してしまったのだろう。
直近を穿った一撃は、”四皇”である白ひげをもってしても一定の脅威を感じる程だった。
「あ、エースが慕ってるでけェおっさんか！　もしかして、今のぶっ飛ばしちまった奴、おっさんの相手だったのか!!?　いや～、ごめん！」
「……グララララ!!　ジジイにそっくりだな、”麦わらのルフィ”！」
「そりゃ、おれはじいちゃんの孫だからな！」
「その適当なところもそっくりだ」
先の強烈な拳打に加え、とぼけた顔で謝るルフィの姿がガープと重なって見えた白ひげ。
「――今お前がぶっ飛ばした奴ァ、おれの獲物だ。お前にゃ分からねェだろうが、海賊の掟を破ったあいつを裁くのはおれがやらねェといけねェ。そいつをお前が横から掻っ攫っていきやがった。どう落とし前つけてくれる、麦わら小僧……!!」
手に持つ薙刀を地面へと叩き付け、能力と覇王色を解放してルフィを睨み付ける白ひげ。
「……本当にごめん！　これは、おれが悪ィ。おれはやっちゃならねェことをした!!」
「一丁前な口ききやがる。なら、覚悟はできてんだろうなァ……！」
「あァ、思いっきりやってくれ」
海賊の世界は面子と掟が重要だ。
面子にも掟にも一切縛られないルフィと異なり、”四皇”とまで呼ばれ長い間この海に君臨してきた海賊である”白ひげ”はそうもいかない。
何より、”黒ひげ”は家族を殺した。
白ひげが何よりも大切にする家族を殺した黒ひげを裁く機会、それを横取りしたルフィへと覇気を高め、薙刀を握る手に力を溜め、そし

てそれを霧散させた。
「――お前はおれの家族を救ってくれた。これで貸し借りはねェ」
「おっさん……。ありがとう!!!」
「グララララ！　真っ直ぐな男だ。どっかの誰かを思い出しちまう」
ルフィの曇りなき笑顔につられ笑みを浮かべる白ひげ。
かつて鎬を削ったライバルであり友でもあった男の顔を思い出し、ふと一つの質問を投げかけた。
「おい、〝麦わらのルフィ〟。お前は〝海賊王〟になりてェみてェだが、お前にとって、〝海賊王〟ってのは何だ？」
「ししし！　そんなの決まってる。〝海賊王〟ってのはこの海で一番自由な奴のことだ!!」
「――グララララララ!!!!　その言葉をまた聞くことになるとはな!!!!　お前にそれが出来るか、〝麦わらのルフィ〟!!　この海で自由やるにゃァ簡単なことじゃねェ。世界にはまだまだ化け物がたくさんいやがる。その中で頂点に立てるか!!」
「出来なければ死ぬだけだ！　それに、おれには頼りになる仲間達がいる！　おれは、〝海賊王〟になる男だ!!!!」
「グララララ!!!!　いい覚悟だ。ならばその生き様を見せてみろ……！」
「あァ、〝海賊王〟になるのはおっさんでも、〝四皇〟の奴らでも、エースでもねェ！　おれだ!!」
高らかに宣言したルフィにニヤリと笑う白ひげと、それを憎々しげに見るセンゴク。
映像電々虫により世界に放送されたルフィの言葉は記者達により、更に広められ世界中の強者達へと伝わり世界に、時代に大きな唸りを作り出す。
そして、続く白ひげの言葉に更なる時代の唸りが発生する。
「〝新時代〟はすぐそこに来ている。それを作るのはお前ら若ェ奴らだ。古い奴らはもう必要ねェ」
一拍置いて宣言する。
「――海賊〟白ひげ〟はここらで引退する!!」

マリンフォード中が静まり返った。
激しく剣を打ち合っていた者も、強烈な覇王色をぶつけ合っていた者も、暴力的に環境を侵し合っていた者も、皆が白ひげの言葉に耳を疑い、次の瞬間に驚愕の声がそこらで上がった。
『えええ～～～～!!!!』
”四皇”白ひげ”!!”の突然の引退宣言。
世界中を混乱させるにはあまりあるそのニュースに、マリンフォード全土は勿論、映像を見た世界中の者達からも驚愕の声が上がり、そして一足先にバレット謹製巨大戦艦に乗り込むエースもまた驚愕していた。
「おっさん、海賊辞めんのか？　エースはおっさんを”海賊王”にするって言ってたぞ」
「エースにも息子達にも悪いが、おれも一人の人間。歳にゃ勝てねェ。この戦争の中で死ぬつもりだったが、見てェものが出来ちまった。そいつを見てからでも地獄に行くには遅くねェ」
「ししし、そうか！　エースにはおれも一緒に謝ってやるよ!!」
「グララララ！　それは頼もしいなァ……！」
二人で笑い合う二人の姿は、年も背丈も異なれど、まるで友のよう。
在りし日に友と酒を飲み交わしたあの情景。
そんな輝く記憶を思い出し、白ひげは笑う。
既に時代は進み出した。
ここから先、”白ひげ”(壁)が君臨する必要はなく、待っていた男は現れた。
まるで重い荷物を下ろしたかのように清々しい顔を浮かべる白ひげは、いずれ来る未来に思いを寄せる。
世界がひっくり返る時は近い！

第３４話”伝説の始まり”

「次から次へと余計なことをしてくれる。貴様らのおかげで、これからの海は大荒れだ……！」

”麦わらのルフィ”と”白ひげ”の宣言を聞いたセンゴクは、拳を握りしめて怒りに震える。

ルフィの”海賊王”になるという挑発とも取れる宣言に、世界中の海賊達は怒り活発になるだろう。

”四皇”白ひげ”の引退宣言に世界中の海賊達はその跡を取るため過激になるだろう。

この二人の宣言により、世界の情勢は必ず荒れる。

それも大嵐のように荒れるだろう。

そんな確定した未来を考えてセンゴクはため息を吐く。

「生きてここを出られると思っているのか貴様等!!」

「おれはこんな所で死なねェ！　全員揃って脱出するんだ！」

「私がそれを許すと思うか！」

「グララララ！　お前が許さずとも、決めるのはおれらだ。自由にやるのが海賊。そうだろう、センゴク？」

「貴様まで”麦わら”に侵されたか……！」

白ひげの言葉にルフィは大きく笑い、センゴクは奥歯をギリッと噛み鳴らす。

「おれの息子達も、”麦わら”が連れてきた仲間達も既に船に乗り込んだ」

つまり、マリンフォードの大地に立つのは”白ひげ”と”麦わらのルフィ”、そして敵である海兵達だけ。

「昔からの馴染みだ、センゴク。これから上に散々言われるだろうお前には同情しかねェが、おれもこんな所で死ぬわけにはいかなくなった。この島を壊してでも行かせてもらうぜ」

「貴様ッ!!!」

「ぬぅッッん!!!」

白ひげは腕に力を、覇気を、能力を溜めて一気に解放した。

瞬間、天地が傾く。
膨大なエネルギーが空間を激しく爆発させ、彼らが立つマリンフォードの大地を９０度傾かせた。
天が割れる音がする。
海に柱のような津波が発生する。
大地が壁と化す。
この世の出来事とは思えない。
重力に従い荒れる海へと落ちていく海兵達はそう思う。
月歩を使う事が出来る者は空に逃げ、使えない者は大地にしがみつくか、あるいは海へと落ちていく。
荒れる海では、小さな街程もある大きさの超巨大戦艦の圧倒的な防御力と、高威力かつ絶え間ない砲撃により、押し寄せる巨大津波を迎撃している。
直角に傾いた大地に白ひげは仁王立ちをし、ルフィはゴムのように変化させた大地を掴んで耐える。
「おっさん、凄ェな!!　島が傾いたぞ!!!」
「グララララ!!　仲間を気にしなけりゃ、こんなもんどうって事はねェ。それより、この程度でどうにかなるアイツじゃねェ」
「相変わらずの馬鹿げた能力……!　老いてなお健在か!」
空を駆ける黒き大仏は、目の前の異常な状況に舌を鳴らし、拳に能力と覇気を溜めていく。
世界を破壊すると称される”白ひげ”の能力。
文字通り島をも簡単に破壊し尽くす能力を長年見てきたセンゴクもまた、そんな白ひげと渡り合ってきた力を解放する。
「ハァッッ!!!!」
黒き拳に尋常ならざる覇王色が集う。
黒い稲光が迸り、悍ましい程の圧力が周囲を覆う。
拳に空間を崩壊させる程の力が集う。
耳障りの悪い音が周囲に響き渡る。
裂帛の気合いと共に拳を直角に傾いたマリンフォードの大地へと叩き付けた。

瞬間、爆発。
膨大なエネルギーが暴れ狂い、傾いた大地が轟音と共に元に戻る。
想像すらつかない程の質量をもつ島がただの拳の一撃で動いた。
その事実に白ひげはニヤリと笑い、ルフィは目を輝かせて楽しそうに笑う。
海兵達は頼もしいセンゴクの姿に表情を綻ばせ、インペルダウンの面々はあまりの光景に目を丸くする。
「あっひゃっひゃ!! お前、凄ェな!!」
「小僧が、舐めるなよ……!」
「流石……と、言いてェところだが、そろそろお前も限界みてェだな。センゴク」
「ハァ……ハァ……ッ。貴様等を殺すまでは私も倒れられんッ」
「悪ィけど、おれ達もそろそろ船に行かねェと! 楽しかった、大仏のおっさん!」
「ふざけやがって、ガープの奴を見ているようだ!」
激闘の連続。
戦争が始まってから前線にて最も激しく戦ってきたセンゴクに限界が来ていた。
体力は既に限界に来ており、覇気の底も見えている。
それが、先の一撃でとうとう限界を迎えていた。
対するルフィは赤犬による傷とそれまでの激闘が嘘だったかのように覇気が漲っている。
そんな状態のルフィの言葉にセンゴクは青筋を浮かべ、吐き捨てる。
「それじゃァな、大仏のおっさん!」
「くそ……ッ」
ルフィの強烈な一撃がセンゴクの顔面に突き刺さる。
大仏の姿から人間大まで戻り、地面へと倒れ伏すセンゴクから感じる覇気は弱々しく、完全に意識を失っている。
「よし! 早いとこ行こう、おっさん!」
「あァ、分かった」

”麦わらのルフィ”、様々な要因あれど伝説の海兵にして、海軍のトップである智将”仏のセンゴク”を討ち倒す！

□■□■□■□■□■□■

「お、おい、あいつセンゴクの野郎を倒しやがったぜ……！」
「驚きだガネ……。インペルダウンじゃ、あそこまで強くなかったはずだガネ」
「ハッ、大した成長速度だ。この戦争の間に覇気を使いこなしやがった」
「ムルンフッフフ！　やはり王の器！　素晴らしいわねェ……！」
センゴクを殴り飛ばしたルフィを見るバレット謹製巨大戦艦上の海賊達はその強さに驚愕する。
もはや恐ろしい程のルフィの強さに震え上がるバギーとＭｒ．３。
素直に驚くクロコダイルとデボン。
「ルフィ……♡　流石はわらわの夫……♡」
「お前、本当に”麦わら”と結婚してんのかよい。そんな話聞いたことねェよい」
「なんじゃ、そなたは！　切り刻んで犬の餌にしてくれるか！」
「お～、怖い怖い。分かったから、そんな覇王色向けんなよい……」
ルフィの姿にうっとりと顔を赤らめるハンコックと夫婦という話に疑問を浮かべるマルコ。
「ヒーハー!!!　流石はドラゴンの息子！　あの成長力には驚きタブル!!!」
「流石ね麦ちゃん！　無事全員回収出来たし、あとは麦ちゃんと白ひげだけねい！」
「お前、おれになるなんて考えたな～」
「麦ちゃんの兄貴を救えたのも、全員回収出来たのも、全部アナタのお陰でよ～う！　ありがとねい!!」
「気にすんな！　おれと同じ体で頑張ったのはお前だからな！　お前

の大手柄だな～！」
「ガッハッハ！　じゃあ、あちし達皆凄いんじゃな～い？　あちし達が凄くてスワン、スワン!!」
　ルフィの成長力に驚くイワンコフと、二人で盛り上がるウルフとボンクレー。
「親父……！　引退ってどういう事だ……。おれはアンタを”海賊王”に……！」
「……あいつも所詮人の子って事だろう。押し寄せる年並みにゃ勝てねェ」
「お前……！　親父をバカにしやがって……!!」
「勘違いするんじゃねェ!!!」
　親父と慕う白ひげの引退宣言に心を乱すエースとそんな彼に言葉を投げかけるバレット。
　吐き捨てるような言葉に激情するエースだが、続くバレットの怒声に口を噤む。
「海賊”白ひげ”は確かに凄ェ男だ。ロジャーと長年渡り合ってきた本物の化け物。だが、所詮ただの人だ。歳を取りゃァ、肉体が衰える。病魔に侵されりゃァ、技も錆びる。勘違いするな”火拳のエース”……！　人間、いつかは終わりがあるんだ」
「ッ！」
「本来ならお前を救ってこの戦争で死ぬつもりだったんだろうが、あのジジイは見届けようとしてやがんだ。お前らの新時代を」
「それなら、海賊をやりながらでも――」
「甘ったれんじゃねェ。お前は親離れも出来ねェガキか？　引退ってのも一つの覚悟だ。男なら、一人の男が決めた覚悟に口を出すんじゃねェよ」
　バレットの言葉に拳を強く握り締め、しかし出る言葉はない。
「いいから、海兵共の迎撃をやれ。お前の親父も弟もまだこれからデケェ事をやるつもりだぜ」
「……分かったッ」
「フンッ。ガキの子守りも楽じゃねェ……」

巨大戦艦の上、乗り込んだ海賊達は数万。
残る仲間は”麦わらのルフィ”と”白ひげ”のみ。
船の主、ダグラス・バレットは気落ちするエースを眺めてため息を吐く。
頂上戦争、最終局面。
泣くも笑うも、これからの数分間が世界の未来を決める！

□■□■□■□■□■□■

「おい、”麦わら”。お前はあとどれだけ動ける？」
「ハァ……ッ、もってあと数分だ！　これ、凄ェ消耗する……！」
「だろうなァ……」
「でも、あとは船に乗り込むだけだ！　それまでは何とかする！」
「……そうもいかねェみてェだ」
バレット謹製の巨大戦艦目掛けて走るルフィと白ひげ。
立ち塞がる海兵達を鎧袖一触で薙ぎ倒しながら走る二人だが、どちらも体力の限界だった。
片や、急激な覚醒で借り受けた体力、覇気共に大量消費するルフィ。
片や、病魔に侵された老齢の肉体に鞭を打ち、激闘を繰り広げる白ひげ。
互いに気力で保っているだけだけの状態だが、そこに悪夢のように追手が襲い来る。
突如飛来した光線を間一髪で避けるルフィ。
「危ねェ!!?」
「お～、よく避けたねェ、麦わら～！」
「黄猿!!　え、お前なんでそんなに包帯ぐるぐる巻きなんだ？」
「頭に来るねェ、君たちのおかげで出来た傷だよ～」
「おれ、お前に何もやってねェぞ」
「君が気にする事はないよ～……！」
明らかに今回の戦争で出来た傷ではない黄猿の体の傷を見てルフィは疑問を浮かべる。

そんなルフィに憎々しげな様子の黄猿。
「このまま君たちを帰す訳にはいかないからねェ。ここでわっしが君たちを殺してあげるよ～！」
「もうあの時のおれじゃねェ。もうおれは誰にも負けねェ！」
「お～、怖いねェ～～。でも、君はここで終わりだよォ」
文字通り光の速度でルフィへ迫る黄猿。
奇しくもシャボンディ諸島の一件と同じ構図だが、そこに割って入る者がいる。
「おれを忘れてちゃァ、いねェかァ！」
「グゥッ!?!!」
白ひげが振動と覇気を乗せた拳で黄猿を叩き落とす。
続けてもう一撃。
命を奪うべく振り下ろされた薙刀は、しかし黄猿に触れる間際に凍り付いた。
「青雉……！」
「あらら、その傷で無理しちゃダメでしょうに。お前はもう休んでいろ、ボルサリーノ」
「そうもいかんでしょうがァ……」
「そうじゃクザン。このゴミ共も、海にいるゴミ共も消し炭にせにゃァ、わしらは朝日を見ることは出来んぞォ……！」
「仕事熱心な奴らだ……。ま、そういう事でお前たちにはここで死んでもらうよ」
ルフィと白ひげの前に集まったのは海軍が誇る最大戦力、三大将。
それぞれが相当なダメージを負いながらも、海賊を許さぬという強い意志を持ち二人の前に立ち塞がっていた。
「げ、またあのマグマの奴！」
「どうやって生き返ったかは分からんが、奇跡は二度も起こらんぞ”麦わらのルフィ”！」
「うるせェ！　もうお前にやられねェぞ!!」
「あの時からかなり強くなったみてェだが、これ以上好き勝手はさせねェよ”麦わら”……！」

「グララララ！　揃いも揃ってルーキー一人に情けねェな、海軍！」
あとは船に乗り帰還するのみ。
そのタイミングで現れた海軍の最大戦力が三人。
ルフィも白ひげも限界を超え、しかし相手も相当な手負い。
「おっさん、おれに良い考えがある……！」
「なに？」
白ひげの肩に乗り耳元で作戦を伝えるルフィ。
そして、それを聞いた瞬間笑い出す白ひげ。
「グララララ!!!　そりゃァ、いい！　ふざけた作戦だが、やる価値はある……！　任せろ、”麦わら”。段取りは組んでやる」
「ししし、頼む！」
突如笑い出した白ひげとルフィに怪訝な目を向ける三大将だが、覇王色の覇気を放出した白ひげに警戒する。
「覚悟しろ、ハナッタレ共ォ!!!」

伝説の大海賊にして、生きる災害、”白ひげ”エドワード・ニューゲートと、新たなる伝説にして覚醒した神、”麦わらのルフィ”が海軍大将達と衝突する。
頂上戦争最後の戦い、勃発！

第35話”幕引きの一撃”

「グララララ!!　おれがこんな小僧と肩を並べる事になるたァ、分からねェもんだ……」
「小僧じゃねェ！　おれはモンキー・D・ルフィだ！」
「フッ、そうだな。ルフィ、仕上げは任せたぞ」
「あァ、任せろ！」
　振動により氷漬けにされた腕と薙刀を解かした白ひげはルフィの言葉にニヤリと笑う。
「あらら、随分仲が良いんじゃないの。この目で見てなければ信じられねェな」
「海のゴミが馴れ合っちゃるのォ……！」
「わっしらも早いとここの戦争を終わらせたいんでねェ。先手は貰うよォ～！　八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)!!!」
　大量の光の弾を発射する黄猿。
　簡単に人を殺す光弾が視界一杯に広がりルフィと白ひげに襲い掛かる。
「軽いなァ!!」
「ただの目眩しじゃァ！　犬噛紅蓮!!!」
「フンッ!!」
　光弾を腕の一振りで掻き消した白ひげへと背後から犬の形状をしたマグマで食らいつくべく襲い掛かるが、それもまた振動エネルギーを纏う拳で叩き落とされる。
　迎撃した勢いで薙刀を無防備な赤犬へと振り下ろすが、それを青雉が氷の雉で防ぐ。
「氷河時代(アイスエイジ)！」
　青雉が視界全てを凍てつかせる。
　極寒の環境へと塗り替えられ、白ひげの足と大地を凍結させ縫い付ける。
　そこへ光の速度で蹴りかかる黄猿。
「させねェ！」

「グゥッ!?　本当にシャボンディの時とは大違いだねェ……！」
空を駆け光速の蹴りを迎撃するルフィ。
思わず片膝をついた黄猿は吐血し、肩で息をする。
シャボンディ諸島で相対した時とはまるで別人だ。
腕力も、能力も、覚悟も、覇気も、何もかもが違う。
戦争が始まった時に感じていた〝麦わらのルフィ〟の強さともまるで異なる。
黄猿はルフィの恐ろしいまでの成長速度に冷や汗を流した。
「君は確実にここで殺さないとダメみたいだ。生かしておいたら恐ろしい事になりそうだねェ」
「何でそんな怪我をしてんのか知らねェけど、邪魔すんならぶっ飛ばす!!」
「本当に頭に来るねェ!!!」
ぶつかり合う光と太陽。
この戦争で急激に熟練した見聞色の覇気で光の挙動を予測し、的確に迎撃するルフィ。
自然系の流動する肉体を武装色の覇気により捉え、確実にダメージを与えていく。
対する黄猿も光速の連打で迎撃を穿ち、光の分身による質量攻撃によりルフィに甚大なダメージを与えていく。
「流星火山!!!」
「おいおい、無茶するなァ……！」
「お前なら合わせられるだろうが、クザン！」
「全く、仕方ねェな……！」
巨大な拳の形をした火山弾が上空から無数に降り注ぐ。
自身もろともの赤犬による大規模な破壊攻撃に青雉はため息を吐き、白ひげをその場に留めるため、極寒の環境により威力を底上げした氷の矛を四方八方から放つ。
大地に足を氷漬けにされ、四方八方からは氷の矛が飛来。頭上からは一撃必殺級の火山弾が無数に降り注ぐ。
そんな絶望的な状況を前に白ひげはニヤリと笑う。

「舐めるんじゃねェぞ、小僧共!!」
白ひげを中心として発生する覇王色と振動の爆発。
空間そのものを破壊する音が鳴り響き、氷も、溶岩も、全てが掻き消える。
振動エネルギーの暴力はそれだけに収まらず、ダメージに片膝をつく赤犬と青雉の肉体で暴れ回った。
「ごガァッッ!!?」
「うグゥッッ!!!」
「ダメージでろくに力が出てねェぞ、小僧共！」
「ま、マジで化け物だぜ……！　限界寸前だとは思えねェ」
「これは気合を入れんとのォ。手負いの獣程、面倒なものもない……！」
老いてなお、病魔に侵されてなお、甚大なダメージを負ってなお、ここまでの強さを持つ白ひげへと畏敬の念を覚える赤犬と青雉。
タフネスだけで言えば、白ひげは自分達よりも遥かに上かもしれない。
「このまま戦争に負けりゃァ、海軍は世界に赤っ恥晒す事になる……ッ！　それだけは避けにゃァならんぞ、クザン!!」
「分かってるよ。ったく、おれァ、面倒くせェのは嫌いだってのによォ。だが、そうも言ってられねェか……！」
「お前と共闘するとは、何年振りかのォ！」
「さァな。だが、同期同士仲良くいくとしましょうや!!」
「グララララ！　お前らに新時代が止められるかァ！」
ぶつかる三人の男達。
万象を焼き焦がすマグマが降り注ぎ、一切合切を凍て付かせる氷河が環境を支配する。
世界を滅ぼす振動が全てを破壊する。
降り注ぐ火山弾を掻い潜り青雉へと強烈な拳を叩き込む白ひげ。
吹き飛ばされながらも氷の道を作り出し、その上をマグマと化した赤犬が滑り白ひげへと拳を叩き込む。
振動で灼熱を相殺し、薙刀の一撃を赤犬へと振り下ろすも肉体を流

動させいなされる。
そして、無防備な体勢を晒した白ひげへとマグマの拳を振り下ろそうとした赤犬だが、突如飛来した気配にマグマ化を解く。
「グゥッ!!」
「チッ！　ボルサリーノ!!」
「お～、ごめんよ～。〟麦わら〟が随分と強くてねェ～！」
吹き飛んできたのは全身に大小様々な傷を負う黄猿だった。
頬は赤く腫れ、口の端からは血が見えている。
「よし！　おっさん、そろそろ頼む!!」
「あァ、行ってこい！　フンッ、ヌゥッッン!!!!」
「な、なん――」
突如上空へとルフィを放り投げた白ひげ。
それもただ腕力で放り投げただけに非ず。
能力を使い、覇気を使い、力を溜める事による強烈な打ち上げ。
遥か上空へと一瞬の内に上っていったルフィは、分厚い雷雲の中へと消え去った。
「グララララ！　ここからはおれがお前らの相手をしてやろう……！」
「何を企んどるのかは分からんが、お前を殺してから〟麦わらのルフィ〟を殺そうが同じことじゃ」
「ん～、でも何か嫌な予感がするねェ……」
「あァ、〟麦わら〟はともかく、白ひげは無駄な事はやらねェはず。何企んでやがる……」
ルフィを上空へと打ち上げ、楽しげに笑う白ひげに警戒する大将達。
しかし、いくら考えても答えは見つからず、更に遥か上空へルフィを追うだけの体力も既にない。
故に、大将達の取る行動は一つしかなかった。
即ち、白ひげの即座の討伐。
頭によぎる嫌な予感を無視して三人は白ひげへと襲い掛かる。
光の剣で白ひげへと光の速度で斬りかかる。

氷の矛が白ひげと斬り結ぶ黄猿を援護する。
マグマの犬が一瞬の隙を狙う。
その全てをダメージを負いながらも打ち崩し、反撃する白ひげ。
肉体のあらゆる場所に火傷、凍傷、刺し傷を負いながらも一歩も引かず渡り合う姿は正に伝説。
光の剣を避け、氷の雉をも避けた先に待ち構えたマグマの拳を振り抜く赤犬の一撃を裏拳で弾き飛ばし、体勢を崩した赤犬の顔面を掴み宙に持ち上げる。
「グゥッ、白ひげッ！　ガァッッ?!!」
赤犬の顔面に直接破壊エネルギーが流される。
血反吐を吐いて崩れ落ちる赤犬を蹴り飛ばし、白ひげは地面を大きく揺らす。
振動から宙へ逃げた黄猿は無数の光弾を放ち、それを目眩しに青雉は白ひげの周囲に氷で出来た鏡を無数に作り出す。
「八咫鏡！」
白ひげを囲む氷鏡を光と化した黄猿が縦横無尽に反射し光速で飛び回る。
まるで氷と光の牢獄の中、ありとあらゆる方向から光線を射出し、隙を見て光の速度で蹴りを放つ。
避けた光線が氷鏡を反射し、再度向かってくる。
避ける度に光線は増加し、牢獄の中に安全圏を加速度的に減らしていく。
牢獄を破壊すべく振動エネルギーを溜めても、察知した黄猿が強烈な蹴りで妨害をし、氷鏡を殴ろうが全力を尽くす青雉による氷の強化により破壊することが出来ない。
「いい連携だ……！　だが、その程度でおれをヤレると思うなよォ!!」
白ひげが力を薙刀を持つ腕に溜める。
無数の光線が白ひげの肉体を貫き、黄猿の強烈な蹴りが突き刺さり、口から血反吐を吐いてなお笑う。
「まずいッ！」
「オオアアアッッ!!!!」

振り抜いた覇王色を纏った薙刀により空間がずれる。
氷と光の牢獄が一刀両断され、直線上の大地を二つに別たれ、凄まじい爆風が吹き荒れた。
瞬間、頭上に濃密な覇王色が雷鳴の如く降り注ぐ。
「おいおい、こりゃヤベェぞ……」
白ひげの一撃により消えた分厚い雲から現れたのは巨大な拳。
視界全てに広がり、空を埋め尽くす程の超巨大な拳。
何もかもを破壊する黒き拳を振りかぶる白き神が姿を現した。
「お～、あんなのを落とされたら、この島ごと潰されちゃうよォ……!!」
「グッ、あん時の選択が間違いじゃったか……!」
「言ってる場合じゃねェぞ、ありゃァ……。何とかして防がねェと、文字通り島ごと海の藻屑だ……!」
あんなものをまともに食らえば島ごと一溜りもないだろう。
感じる圧力も覇気も、満身創痍の大将達にとって恐ろしいものに見えた。
あの規格外の大きさゆえに逃げ場もない。
即ち、迎撃する他に道はない。
即座に大将達は動いた。
三者三様、己の体力の全てを消費し力を行使する。
灼熱の地獄へと環境を侵し、武装色の防御膜と共にマグマを活性化させる。
致死の極寒へと環境を侵し、武装色の防御膜と共に氷河を活性化させる。
目を焼く眩い光で環境を侵し、武装色の防御膜と共に極光を活性化させる。
体力、覇気共に限界寸前の大将達が今出せる、全力全開。
「準備出来たぞ、おっさん！　頼んだ!!」
「久方ぶりの覚醒だ。後はお前に任せたぞ、ルフィ……!!!!」
腕を大きく広げた白ひげが覚醒した”グラグラの実”の能力を解放した。

マリンフォードの上空に振動が発生する。
始まりは小さな振動が、白ひげの覇王色の覇気に呼応して加速度的に膨れ上がる。
「大将達は手が離せないんだ！　あんた達、白ひげを止めないと大変な事になるよ!!」
「は、ハッ!!」
「白ひげの覚醒技なんて久しぶりだね……！」
息も絶え絶えな中将達が白ひげへと突撃していく。
倒れそうな肉体に鞭を打ち、刀を、拳を、武器を叩き付けていく中将達。
海軍中将にして、大海賊時代以前から活躍する伝説の女海兵、”大参謀”つるもまた能力と共に白ひげへと蹴りを叩き付けた。
悪人の心をも改心させる洗濯の力が突き刺さり、うめき声を上げる白ひげ。
「グララララ……!!　おれの覇気を超えてから出直してこい、洗濯ババァ!!!」
「ババアとは失礼だねェ!!」
中将達による怒涛の攻撃により全身に数多の傷を負う白ひげは、それらを意志のみで耐え、覇王色を全開で放出する。
物理的な圧力を伴った覇気に吹き飛ばされる中将達。
「これで仕上げだ……！　”振迦天堕!!!”」
空が堕ちた。
そう錯覚する程の現象が地上に降りかかった。
「がァッッ!!!」
マリンフォードの大地全てに等しく降り注ぐ振動の嵐。
振動の壁が大将、中将関係なく大地へと縫い付ける。
恐ろしいまでの質量が押し潰さんと、抗い難い振動エネルギーと共に堕ちてくる。
「や、ヤベェ……！　こりゃァ、マジでヤベェぞ！」
「ガタガタ喧しい……！　死んでも力入れろ、クザンッ!!!」
「これを防いで、上のアレも防がないとダメなんてねェ……！　全く、

”麦わら”には嫌になる……!!!」
武装色の防御膜と全力全開の大将達による質量攻撃が振動の壁を迎え撃つ。
「バレットのおっさん!!! 白ひげのおっさんを頼む!!!」
天上から伸びた手が、能力と覇気の過剰行使により限界を迎え気絶した白ひげを掴む。
白ひげの頭上に空いた振動の壁の穴から掴み出し、その勢いのままに戦艦へと放り投げるルフィ。
「この戦争を終わらせる!!! バレットのおっさん、船を出せェ!!!」
「白ひげは受け取った! ぶちかませ!!!」
天上には神の拳。
地上には振動の檻に囚われ抗う海軍達。
大将も中将も、インペルダウンの看守達も、皆が青ざめた顔で天を見上げる。
「”ゴムゴムの”ォ……!!!」
兄を助け出すために地獄を越えてここまで来た。
己の弱さを知り、己の未熟さを知り、己の情けなさを知った。
それを乗り越えて今がある!
兄を救うため、極悪非道な海賊達を解放した。
兄を救うため、正しい覚悟を決めた男を殴り飛ばした。
全てを背負う覚悟は出来た。
もう、誰も失わない!!!
「ふわっはっはっは!!! 強くなったのう、ルフィ!」
「”猿神銃(バジュランガン)!!!」
幕引きの一”撃が落とされる。
天から堕ちる拳はまるで神の怒り。
空を裂く一条の黒き神撃は灼熱のマグマを、極寒の氷河を、眩い極光を打ち砕き、大地へと突き刺さった。
響き渡る轟音。
莫大な覇王色の雷鳴が響き渡り、全てを破壊する。
力を使い果たし、神から人へと戻り落下するルフィ。

意識を落とす間際に見た眼下には最早何もなく。
島も、海すらもなくなった真っ暗闇へとルフィは落ちていった。
「”シャンブルズ”」
忽然と消えたルフィ。
後に残るは大海にポカリと空いた大穴のみ。
何も聞こえず、何の気配もない。

天下に轟く怪物達が集まった此度の頂上戦争。
短くも長い、濃密な戦争はこれにて終幕。
海軍、海賊、互いの正義。
幕を下ろしたのは神の一撃。
此度の戦争、海賊側の完全勝利で終わりを迎える!!!

第３６話”伝説の再来”

「ルフィは本当に無事なのか!!?　もう三日も目覚めぬぞ!!!」
「何度言えば分かる女帝屋。もう峠は越えた。安静にしていれば目も覚める」
「見ていた限り、ローの腕は確かだよい。妻なら旦那の事を信じてやれよい」
「旦那……。そ、そうじゃな！　妻ならば、旦那の事を信じねばならぬな!!」
「扱い方が分かってきたよい……」
　バレット謹製巨大戦艦のベッド上に眠るルフィを囲み騒ぐ三人。
　マリンフォード頂上戦争によって負った甚大なダメージと疲労による眠りから目覚めないルフィを想い、焦りと苛立ちを爆発させるハンコック。
　そんな彼女を落ち着かせるべく言葉をかけるマルコと、頂上戦争の最後、大海の穴に落ちていくルフィを救い出した男、トラファルガー・ロー。
「しかし、あの時は助かったよい。お前がいなけりゃ、恩人を海の底にやるところだった」
「助ける義理もねェが、悪縁も縁。あんな所で死なれるのも面白くねェ」
「ははは、素直じゃない男だよい」
「チッ」
　マリンフォードの大地ごと海軍戦力を海の底に沈めた後、全ての覇気と体力を使い果たし大海の大穴へと落ちるルフィを助けたのがローだった。
　ルフィと同じく”最悪の世代”の一人であるローが突如潜水艦と共に戦艦へと現れ、能力によってルフィを救い出した。
　ハンコックの発言により彼女の統治する”女ヶ島”へと船を進める間も、到着した今もマルコと共にローはルフィのみならず、戦争で傷付いた海賊達の治療を行っていた。

二人の優秀な医者の力もあり、相当なダメージを負っていた白ひげも既に目を覚まし、しかしルフィだけが目覚めないままだった。
インペルダウンから始まる連戦による連戦。
己の限界を超えた力まで使い果たしたルフィのダメージと疲労は相当なもの。
常識外に急成長した覇気の過剰使用もまた目覚めの妨げになっているとは、マルコの言葉だった。
「そろそろ、あいつらも宴を我慢できなくなってきてやがるよい。大体、あいつらがここまで大人しくしているのが驚きだよい」
「……あァ。世界から存在を消された大監獄の囚人共が逃げ出さねェのが信じられねェ。……いや、なんか肉を焼く匂いが――」
「――肉ウウウ!!!!」
「うぉッ!!!?」
どこからともなく漂ってきた肉を焼く芳しい香り。
その瞬間、ピクリとも動かずベッドの上で寝ていたルフィが起き上がり、目を輝かせ、涎を垂れ流し、一瞬の内に走り去ってしまった。
あまりにも突然のことに固まってしまう三人。
そして、次の瞬間には喜び一色の叫び声と共に後を追うハンコックの姿。
「ルフィ～～!!!　そなたの好きな肉ならたくさん用意しておるぞ～～♡」
「……まァ、無事起きてよかったよい」
「……くだらねェ」
「主役が起きたんだ。宴の始まりだよい」
「おれはいらねェ。起きたんならおれは船に戻る」
「んな事言ってねェで、お前も来るよい！　お前がいなかったら親父の顔も潰れてたんだ。引きずってでも連れて行くよい！　勿論、お前の仲間達もな!!」
「チッ……」
甲板上から聞こえてくる歓声と悲鳴、驚愕の声。
その声が聞こえる方へ歩いていくマルコとロー。

二人の医者により、未来の”海賊王”麦わらのルフィ”は完全回復を遂げる。
「悪運の強ェ男だ……」

□■□■□■□■□■□■

「んん！　んんッ!!　うんめェ～～!!!!」
「相変わらずいい食べっぷりね～い、麦ちゃん!!」
「汚ねェ食い方しやがる……」
「カハハハ！　そういう所は兄貴そっくりじゃねェか、麦わら小僧！」
「豪快なルフィも素敵……♡」
突如現れ肉を貪る”麦わらのルフィ”。
頂上戦争の立役者であるルフィの回復を待ち、勝利を祝す宴を我慢していた海賊一同だが、その我慢の限界を迎えたバギーが肉を焼き始めた瞬間現れたルフィに皆が驚愕の声と歓声を上げた。
口から涎を垂れ流し、目を輝かせて生焼けの肉に食らい付いたルフィの姿を見てから皆の行動は早かった。
数万人の海賊達による超巨大戦艦の甲板上での大宴会の始まり。
海獣の肉が焼かれ、女ヶ島産の美食が広い甲板に並ぶ。
獲れたての新鮮な魚介類が男らしく捌かれ並び、大量の酒や飲み物がそこら中に積まれる。
”白ひげ海賊団”の面々が、世界に名を消された大悪党達が、革命家達が、立場も何もなく食らい、飲み、踊り、騒いでいる。
次から次へと料理を口に運び、恐ろしい勢いで貪るルフィにボンクレーは回復への安心感を覚え、クロコダイルは下品だと顔を歪める。
インペルダウンでのエースと同じ食べ方にバレットが笑い、ハンコックが男らしいルフィにうっとりとする。
「うんめェな～～！　すげェ腹減ってるし、おれどれだけ寝てたんだ？」
「あれから三日が経っておるぞ、ルフィ。全く目覚めぬから心配したぞ……！」

「三日も寝てたのか〜〜!?　慣れねェ覇気使ったからかな」
「それもあるが、それ程疲労していたという事じゃな。あ、この”海王類入りペンネゴルゴンゾーラ”も美味しいぞ♡」
「おう、ありがとう。ま、いいや！　エースも助けられたし!!　確かに美味ェなこれ！」
「女ヶ島名物なのじゃ……！　口に合ってよかった……♡」
　ゴムの体を活かし手を伸ばして様々な場所から食べ物を取っては、恐ろしい速度で食らい尽くすルフィの顔を見て頬を赤らめるハンコック。
　マリンフォードでハンコックの恐ろしい強さと容赦のなさを見ていた海賊達は、そんな彼女の様子に口を引き攣らせる。
　そんな彼らの様子も知らず、ルフィへと次々と女ヶ島明産の料理を手渡し、そんな夫婦のようなやり取りに一人興奮するハンコック。
　そんな二人の元に近づく人影。
「おい、ルフィ。お前、結婚したんなら、なんで兄のおれに言わねェ」
「エース！　無事で良かった!!」
「おう、お前のおかげで助かった。でけェ借りが出来ちまったな。それは、それとして、結婚なんて大事な事はおれにもきちんと報告しやがれ。嫁さんを紹介しろよ」
「結婚？　何言ってんだ、エース？」
「る、ルフィ、その話しは……」
「あん？　だから、お前と”海賊女帝”ボア・ハンコックは結婚して夫婦なんだろ？」
「ん？」
　ルフィとハンコックの前に現れたエースは頭を下げて感謝をした。
　エースの無事に喜び抱きつくルフィと、エースの言葉に狼狽するハンコック。
　共に戦った仲間達どころか、世界中に己とルフィは結婚していると勢い任せに嘘を口にしたハンコックだが、その話を知らないルフィの困惑で丸くなった目を見てますます慌てふためく。
「おれ、結婚なんかしてねェぞ」

「なに？　お前と結婚しているって”海賊女帝”が皆に言ってたぞ？」
お互いの反応に目を丸くして頭を傾げる二人。
頭上には疑問符が浮かんでいるように見える。
そんな二人に慌てるのはハンコックの姿。
周囲ではバレットやクロコダイルが修羅場だとニヤニヤと笑っている。
「ち、違うのじゃ！　違うのじゃ！　ルフィ、わらわは……」
「お前、おれと結婚してるって言ったのか？」
「ゆ、許してくれルフィ……！　嘘を吐くつもりはなかったのじゃ！
そうなればいいなと思っていたのが、ここまでの話に……!!」
おろおろと狼狽しながら早口で宣うハンコックを見るルフィ。
そんな状況に周囲の海賊達も聞き耳を立て、バレットとクロコダイルの笑みがますます深くなる。
「なぁ、ハンコック。マリンフォードで言ってたお願いって何なんだ？」
「そ、それは……！」
「お前にはたくさん助けられた。お前がいなかったらおれはインペルダウンに行く事も出来なかったし、エースを助ける事も出来なかった。ハンコックには返しきれねェ恩が出来た。だから、今度はおれが返す番だ！」
「ルフィ……」
ルフィの屈託のない笑顔にハンコックは目に涙を浮かべる。
マリンフォード頂上戦争の時に交わした約束を覚えていた事と、こんなつまらない嘘を吹聴していた己に対する優しさに、今すぐにでも抱きつきたくなる衝動を抑え、ハンコックは話し出した。
「わらわは此度の戦争で”王下七武海”の権利を失った。七武海の名の下に女ヶ島――アマゾンリリーを守ってきたが、それがない以上、ここはただの海賊の国じゃ。そうなれば、再起した海軍達が押し寄せる。わらわの名前のみで守り続けるのも難しい」
現実だった。

王下七武海という世界政府の公認があってこそ守られてきた”女ヶ島”アマゾンリリー”の存在。
住まう住人皆が高い戦闘力を持てど、海軍の強者達が乗り込んできてしまえばひとたまりもないだろう。
「本当は……！　本当は、わらわと、け、け……結婚してこの国を治めてほしい……！　じゃが、そなたがそういうものに縛られるような男ではないと知っておる。じゃから、せめてこの国が海軍からも海賊からも攻められぬよう、そなたの名を貸してほしい！」
傲慢で唯我独尊なあのボア・ハンコックが頭を下げた。
始め、ハンコックの印象は最悪だった。
ルフィが気に入らない、嫌いなタイプの人間だった。
それが、短い間ではあるが、このエース奪還において大きな恩を受け、またその人間性にも好意を抱く程になった。
「……おれは冒険がしてェ。”ひとつなぎの大秘宝（ワンピース）”を見つけて”海賊王”になりてェ。おれは世界で一番自由に生きてェ。」
「そう、か……。分かった、すまぬな！　こんな話をして――」
「――でも、おれは全部背負うって決めたんだ……！　結婚ってのは好きなやつ同士がするもんなんだろ？　おれ、そういうのはあんまりよく分からねェけど、それでもいいなら結婚しようハンコック！　おれ、お前のこと結構好きだし！」
「る、ルフィ……!!」
「あ、でも冒険はするぞ！」
「よ、よいのじゃ、よいのじゃ！　そなたは好きなようにするといい……！」
「じゃぁ、これからよろしくなハンコック！」
瞬間湧き上がる大歓声。
甲板上で騒いでいた海賊達がますます盛り上がり、祝福のどんちゃん騒ぎ。
「いつの間にか立派になったな、ルフィ……！　サボのやつにも見せてやりたかったぜ……」
「ムルンフフフ！　よくやったわね、ハンコック！　あの鈍感な子を

落とすなんてやるじゃない！」
「ギャハハハハ!! こんな所でプロポーズなんざ、面白ェ！ 今日は無礼講だ！ ド派手に盛り上がれ!!!」
「飲めや、踊れや！ 海軍のクソ野郎共への勝利と結婚祝いだ!!!」
様々な感情が押し寄せ涙を浮かべるエースと笑い騒ぐ海賊達。
「でも、名前貸すのおれでいいのか？ 白ひげのおっさんの方がいいんじゃねェのか？」
「そうか、そなたはまだ知らぬのじゃったな」
「グララララ！ おれァもう引退だって言っただろう、ルフィ。おいマルコ、昨日届いた新聞読んでやれ」
「任せろよい」
今世界中を騒がせるニュース。
”火拳のエース”の処刑決定を発端とする海軍対白ひげ海賊団の頂上戦争。
”新聞王”と呼ばれる男により世界中にばらまかれたニュースの内容はこうだ。
『”火拳のエース”を巡る天下分け目の頂上戦争は突如乱入した”麦わらのルフィ”の完全勝利である』
『世界最高の海底監獄から数多の大悪党を引き連れ、完璧に従えた常ならぬ人望と統率力』
『”四皇”白ひげ海賊団”をも味方につけ、見事兄を救い出した事実』
『計算され尽くした作戦で、海軍の作戦の全てを凌駕した頭脳』
『歴史に名を残す伝説の海兵達を倒し、島諸共海軍戦力を壊滅させた強さ』
そう読むと新聞の一面をルフィへと見せつけるマルコ。
「新たな”四皇”の誕生、祝福するよい」

”麦わらのルフィ”
懸賞金
３０億ベリー
白き神と化し目に手を当てて大きく笑っているルフィが印刷され

た新たな手配書。
新聞の一面の上部には新たなる”四皇”の文字と、”白ひげ”エドワード・ニューゲート引退の文字。
「えええ～～!!!?　おれが”四皇”～～!!!?」
「グララララ！！！　随分若ェ”四皇”だ!!!」
「ただのルーキーだと思っていたが、最後の一撃には痺れたよい！」
新たな手配書を見て驚愕の声を上げるルフィ。
３０億ベリーというそれまでの十倍の懸賞金額。
そして、何より”四皇”という新聞の文字。
大躍進という言葉では足りない程の急激な躍進にルフィは驚いた。
「どうじゃ、わらわの夫は凄いじゃろう！」
「グララララ！　惚気が随分と早ェな！」
「そうか、おれシャンクスと同じ”四皇”になったのか……！」
尊敬し、憧れる、先日思いもよらず出会ってしまった恩人の顔を思い浮かべるルフィ。
「そうか！　それならハンコックの国を守れるくらいに”四皇”として強くならねェとな！」
「ルフィ♡　愛しております♡」
「あ、そうだ！　白ひげのおっさんと一緒にエースに謝らねェと！」
「あァ、それならもういいんだ。おれは親父の覚悟を尊重する。これからは、親父と本当の親父を超える事を夢にする」
「エース、お前……！」
「お前が寝ている間に色々あったんだ。まァ、そういう事だから、これからもよろしく頼むよ」
「ししし！　分かった！」
今までのエースと異なる晴れ晴れとした表情にルフィは笑顔を浮かべる。
「まァ、そういう事だ。お前にも心配かけちまったなルフィ。あと、おれのことはニューゲートと呼べ」
「分かった、ニューゲート！　解決したんなら良かった！」
「グララララ！　今日のところは面倒臭ェことは考えねェで、宴を楽

しめ！」
「おう！」
そう言うなり甲板上にある砲塔の上に飛び上がったルフィ。
そして、威圧感を感じぬ覇王色の覇気を放ち、皆の注目を集める。
「皆助けてくれてありがとう！　お前らがいなかったらエースを助けられなかった！　この恩は絶対に返す！」
だから。
「お前ら、皆おれの仲間になれ!!!!」
飲んで、食って、踊って、歌って!!、どんちゃん騒ぎをしていた彼らに静寂が訪れた。
突然の仲間へと誘うルフィの言葉に皆が言葉を失っていた。
かつてルフィに計画を潰された仇敵であるクロコダイルも。
何かと縁がありながら、敵対し続けるバギーも。
今しがたルフィと夫婦の契りを結んだハンコックも。
大監獄に囚われていた大悪党達も、ルフィと縁ある者達も、皆が言葉を失い、呆然とルフィを眺める。
「インペルダウンの奴らが今まで、どれだけ悪ィことをしていたのかは分からねェけど、これからはおれがもうさせねェ！　皆、おれと一緒に冒険して、楽しもう!!!!」
「グララララ！　じゃァ、息子達も頼まれちゃくれねェか。なァ、マルコ？」
「あぁ、〝麦わら〟となら楽しい旅が出来そうだ。昨日他の奴らもそう言っていたよい。エースはどうする？」
「弟の船に乗るってのもどうかとは思ったが、ルフィの夢の果てを側で見るってのも悪くねェ。おれはなるぜ、お前の仲間に！」
仲間になると口々に言う白ひげ海賊団の面々にルフィは笑い、他の海賊達に目を向ける。
「カハハハ！　ならば、おれがこの人数を乗せる船を造り動かしてやろう」
「わちしは、最初から麦ちゃんに着いて行きたかったわよーう！」
「この人数で毎日酒を飲めれば楽しいだろうのんな～！」

「ムルンフフフ！　まぁ、美女の首は諦めるしかないわねェ。でも、麦わら坊やに着いていたらダイナーに会えそうな気がするわ！」
　次々と名乗り出る海賊達。
　その勢いは加速度的に増し、そして。
「どこかの誰かと組むよりはマシか……。いいだろう、だが、少しでも情けねェ姿を見せればおれが殺すぜ、〝麦わら〟……！」
「クロコダイル……！　分かった、それでいい！」
「マジかよ、クロコダイルまで仲間になんのかよ……!?　……よっしゃァ、おれ様もなってやるぜ、お前の仲間によォ！　だが、宝は早いもの勝ちだぜ、〝麦わら〟ァ!!!」
「おれは宝はいらねェ！　欲しいやつが貰えばいい！」
　かつてルフィと敵対した者達までもがついに同意した。
「わらわはルフィに着いて行きます♡」
　最強の夫婦がここに誕生した。
「よし!!　皆で〝ひとつなぎ（ワン）の大秘宝（ピース）〟を目指すぞォ!!!　これからおれ達は仲間だ!!!　乾杯!!!」
『うオオオオ!!!!』
〝凪の帯（カームベルト）〟に存在する〝女ヶ島〟近郊の海上にて、一つの大海賊団が誕生した。
　かつて存在した『世界最強の海賊団』のような海賊団に世界はこれより大いに荒れる事になる。
〝ロックス海賊団〟再来。海軍が震え上がる伝説が蘇った。
　しかし、かつての〝ロックス海賊団〟と異なり罪なき民衆に悪事をする事はないだろう。
　ここに未来の〝海賊王〟が率いる最強の一味、〝麦わらの一味〟が新生した！
「懐かしいなァ。お前たちは負けるんじゃねェぞ……！」

第３７話”３Ｄ２Ｙ”

「ハハハハ!!! 娼館に行っていた時の元気はどうした、サンジ!!! 力が入ってねェぞ!!!」
「ち、くしょうがッ!!」
「おらおら、まだまだ足りねェぞォ!!!」
”偉大なる航路（グランドライン）”前半の海に存在する”モモイロ島”の浜辺にて二人の男が激しい戦いを繰り広げていた。
金色の髪の男、サンジが燃え盛る脚で強靭な蹴りをもう一人の大男、ダイナーへと繰り出し、しかしそれが命中することなく反撃の蹴りで吹き飛ばされる。
そんな一方的な光景が長く続いていた。
「はぁ、はぁ……ッ。限界だ、一回休憩ッ！ マジで死ぬ！」
「おいおい、情けねェな。体が壊れりゃ直して、覇気が尽きても補充してやってんだ。死ぬこたァねェだろうが」
「夜も寝ねェで永遠とやってれば、こうもなるだろうが!!!」
「睡眠も取らなくて済むように能力を使ってやってんだ。足りてねェのは根性だけだろうが」
ダイナーと共に別の島の街で娼館巡りをした翌日からサンジは拷問が可愛く思えるようなしごきを受けていた。
朝昼夜の三食の時間を除き、睡眠時間も摂らずの地獄の修行から何日が経っただろうか。
どれだけ疲れ果てようとも眠気を感じぬ己の体に気味の悪さを感じながら、ダイナーを睨み付けるサンジ。
「まァ、仕方ねェ。そろそろ昼時だ。飯にするか」
「ぶはァァッ！ やっと休憩だ……」
暫しの間の地獄からの解放に倒れ込み喜ぶサンジ。
それを横目に物質化した覇気で巨大なテーブルと二つの椅子を作り出すダイナー。
「おら、キャンディちゃん達が作った”攻めの料理”だ。体は食事から。残さず食えよ？」

「分かってる。おれは出されたものは残さねェ」
ダイナーが漆黒の覇気の箱から取り出し、テーブルの上に並べた多すぎる料理の数々を見たサンジは、口元を引き攣らせながらもそう言い切る。
まるで出来立てのようにほかほかと湯気をあげる料理にサンジは何度目か分からない程の感嘆の声を上げる。
「やっぱり、あいつらの作る飯は凄ェ。香りを嗅いでいるだけで力が漲ってくるようだ。〝９９のバイタルレシピ〟だったか？　教えてもらえねェかな」
「それはあいつらに聞くことだな。この修行にはあいつらの作る〝攻めの料理〟が必要不可欠。感謝しておけよ？」
「あぁ、そこは感謝しねェとなんねェな。だが、おれを女にしようとしたのはクソ許せねェ……!!!」
「ハハハハ！　ありゃァ、中々面白かったぜ！」
愉快そうに笑うダイナーに苛立ちながらも、食材と作ってくれた者に感謝し食事を始める。
〝攻めの料理〟〟９９のバイタルレシピ〟とは食事によって強靭で美しい体と優しい心を作り出す正しく攻めの料理である。
この修行を始めてからサンジはこの料理の凄さを実感していた。
味がいいだけでなく、食べるだけで力が漲る。
肉体に目を向ければ、修行初日と比べても、筋肉量、筋肉の質、骨格、様々なものが強靭になっているのが見てとれた。
「料理で体を作るなんて考えたこともなかった……。毎日のメシであいつらの体作りの補助が出来るのか……！　教えてもらって、ナミさんやロビンちゃんをもっとセクシャルなＢＯＤＹにしてあげよ～♡♡♡」
「気持ち悪ィな、こいつ」
テーブルの上に並べられた料理を凄まじい速度で食べていくサンジ。
みるみる内に全て平らげたサンジは、食後の一服を、美味しそうに楽しみだした。

「よく食った。そんなお前に面白ェニュースだ。今朝と先日の新聞だ。見てみろ」
「あん？　なんだ――」
サンジの目の前に広げられた二つの新聞。
その数日前の新聞の一面に、新たな”四皇”の文字とその下に描かれた己の船長であるルフィの新たな手配書があった。
「な、なに～～!!!?　ルフィ!!!?」
「ハハハハ！　やり切ったな!!!　お前のところの船長は!!!　愉快、愉快」
「お、お、お、おい、ダイナー、こりゃァ、一体どういうことだ……!!!?」
「落ち着け、サンジ。他のページも見てみろ」
慌てて新聞に目を通すサンジはその内容に驚愕した。
海軍に捕らえられ処刑が決定した兄であるエースを奪還するために、インペルダウンに乗り込み、そのままマリンフォードでの頂上戦争に乱入したこと。
インペルダウンの囚人達を仲間に引き入れ、”白ひげ海賊団”と共に完璧なる作戦で海軍を打ち倒した事。
伝説の海兵達をも倒す脅威的な戦闘能力について。
そのどれもが初耳だった。
ましてや、新たな手配書。
見たこともない白い姿のルフィの写真。
懸賞金３０億ベリーという考えられない数字。
そして、何よりも”四皇”というこの海で恐れられる最悪の称号。
「あいつは何やってんだ～～!!!?」
「ハハハハ!!!!　最後の一撃は痛快だったぜ？」
「あん？　お前、ダイナー！　知ってやがったな！　何でおれに教えねェんだ!!」
「教えてどうするんだ？　お前が行ってもゴミのように殺されちまうだろう戦場だぜ？　親友をそんな場所に送ることはおれには出来ねェな」
「うッ。だが、ルフィがそんな大変なことになってんのに、おれは何も知らなかった……！」

「ちなみに、お前の船長が大変だった時に、お前は娼館に行ってたぜ？」
「ダイナー!!!! てめェ!!!!」
「ハハハハ!!!!! そう怒るんじゃねェよ。お前の代わりにおれが少し横槍入れてきたから、それで勘弁してくれ」
　顔の前で手を合わせ謝るダイナーを未だ睨み付けるサンジだが、もう一つの新聞に目を通した瞬間、その怒りは別のものに変わった。
『頂上戦争の勝者にして新たなる〝四皇〟麦わらのルフィ〝結婚！〟』
『お相手は元〝王下七武海〟〝海賊女帝〟ボア・ハンコック！』
　その大きな見出しの下には白いタキシードを着たルフィと白いドレスを着た見たこともない程の美女、ボア・ハンコックが見つめ合う写真。
　教会のような場所で撮られた写真に写るハンコックは大層幸せそうな表情を浮かべている。
　世界一の美女で知られるハンコックとの写真と、結婚という衝撃的な文字を着火剤として、花束の前半の二文字にバツが書かれた『３Ｄ２Ｙ』の文字にも気づかずサンジは烈火の怒りに包まれた。
「あの野郎、おれはこんな地獄にいるのに、何してやがる!!!!!」
「ハハハハ!!!! 全く面白ェ男だな!!!」
　嫉妬と憤怒を糧にサンジは炎を燃やす。
〝四皇〟麦わらの一味〝コック〟、〝黒足のサンジ〟。
　桃色の美しい島にて、終わりの見えない地獄に抗う！

□■□■□■□■□■□■

「ルフィが〝四皇〟!!!?」
「あぁ。〝四皇〟〝白ひげ〟が引退を宣言し、その空席に此度の戦争で類稀な活躍をした〝麦わら〟が座ることになった」
「……!!!?」
　古びた洋館の一室で二人の男が言葉を交わしていた。

世界最強の剣士にして、”王下七武海”の一人である”鷹の目”ジュラキュール・ミホーク。
”最悪の世代”にして、シャボンディ諸島にて前代未聞の大事件を起こした海賊の船員、”海賊狩り”ロロノア・ゾロ。
ミホークから伝えられた特大の知らせにゾロは驚愕する。
顎が外れてしまうのではないかという程に愕然とするゾロに言葉を続ける。
「”白ひげ海賊団”2番隊隊長”火拳のエース”の公開処刑を巡る、”四皇”と海軍との此度の戦争。結果は誰も予想すらしていなかった、乱入した”麦わらのルフィ”の勝利……」
「……!!?」
ミホークが語るこの数日の間に起きていた大事件と、世界の動きにゾロは驚愕のあまり言葉を失っていた。
”麦わらの一味”の他の仲間達も新聞で同時期に知った事だが、ルフィの兄である”火拳のエース”を巡る戦争があったこと。
ルフィが最悪の犯罪者達を仲間にし、戦争の場に乱入し、エースを救い、海軍戦力を壊滅させたこと。
その危険性と実績で席の空いた”四皇”の座についたこと。
そんな嘘のような情報の数々に、普段冷静なゾロですら呆気に取られていた。
「”麦わら”の最後の一撃は賞賛に値するものだった。事前に島を出ていなければ、おれでも危なかったやもしれん」
「”鷹の目”でもか……!!?」
「”白ひげ”の覚醒した能力が一切の行動を阻害し、”麦わら”による島諸共穿つ不可避の一撃。対処のしようはあるが、少々面倒だろうな」
「ルフィがそんなに強くなってんのか……?」
かつて己が手も足も出ずに負けた、”剣士”の頂である目の前の男の言葉に、ゾロは疑問と困惑に目を丸くする。
そんなゾロの様子に小さく笑いながらミホークは言葉を続ける。
「凄まじい成長速度だった。悪魔の実の能力の練度、覇気、戦闘技術、

あらゆる要素があの戦争の中で進化していた」
「お前が言う程か……！」
「未だ実力は荒削りではあるが、それでも”麦わら”は既に”新世界”でも指折りの実力者になっただろう。……随分と離されてしまったな、ロロノア」
「……フン。うちの船長はいずれ”海賊王”になる男だ。”四皇”程度、驚くことじゃねェ。そして、おれもお前を越えて”世界最強の剣豪”になる男。この程度の距離はあってないようなもんだ……!!」
「フッ、相変わらずの男だな」
聞いたルフィの現在の実力に驚愕していたゾロだったが、ミホークの煽るような言葉に目をギラギラと輝かせながら言い放つ。
今までルフィの底知れない力と、逆境を乗り越える様を見てきた。シャボンディ諸島で仲間達が散り散りになってから数日だが、その己が知らぬ間にもルフィの身に様々な事が起きたのだろう。
ゾロはルフィの屈託のない笑顔を思い出して笑みをこぼす。
そんなゾロへ一部の新聞を渡すミホーク。その顔はニヤニヤとしており、ミホークへと怪訝な目を向けるゾロ。
「今日仕入れた新聞だ。お前の船長はまた愉快な事をしているぞ」
「なに？」
手渡された新聞。
その最初の一面には純白のタキシードを着たルフィと、ウェディングドレスを着た見覚えのない美しい女性が見つめ合った写真が印刷されていた。
そして写真の上に大きく書かれた『結婚』の見出し。
それを見た瞬間、ゾロも、遥か遠くの地にいる”麦わらの一味”の仲間達も同様に叫んだ。
「えええ～～!!!?ルフィが結婚～～!!!!?」
異なる場所にいながらのシンクロ。
驚愕に叫びながらも、その後に理解した花束のルフィからの暗号を元に”麦わらの一味”は力を蓄える期間を迎える事になる。
最初の二文字にバツ印が記された『３Ｄ２Ｙ』の意味。

即ち、『3D(三日後)』ではなく、『2Y(二年後)』のシャボンディ諸島への集合まで。
新たなる海の覇者、〝四皇〟麦わらの一味〟はその名に相応しい実力をつけるため、修行の時を迎える！

□■□■□■□■□■□■

「そっかぁ、ルフィ結婚しちゃったんだね……」
とある島で一人の少女が新聞の一面を見ながらそう呟いた。
その瞳に暗い光を灯しながら。
魔王が復活する時は近い。
最も新しい魔王の復活が！

第３８話”五老星の受難”

「わはははは!!　ルフィ君とハンコックがまさか結婚とはな！　めでたいな！」
「あぁ、おれ達夫婦だ。レイリーに教えてもらった結婚式も、美味いもんたくさん食えて良かったな～～！」
「ルフィの口から夫婦と……！　わらわ、幸せ……！」
「わはははは!!　最初に聞いた時は驚いたぞ！」
数万人が乗り込める程の超巨大戦艦の甲板にて一人の男が笑う。
白い髪に白い顎髭の男、かつて”海賊王”の船に乗っていた伝説の大海賊、”冥王”シルバーズ・レイリーが酒瓶を片手に笑っていた。
眼前で話す二人の男女。
片や、先日シャボンディ諸島で親交を深め、しかしながら海軍による一味の離散を救えなかった相手である”麦わらのルフィ”。
片や、古き知人であり、己が妻の同胞であり、娘のように思う女性、”海賊女帝”ボア・ハンコック。
マリンフォード頂上戦争に勝利したルフィ一行を追ってやって来た数日前に聞いた、二人の結婚の報告を思い出し、ルフィとハンコックの反応に益々腹を抱えて笑うレイリー。
「あのハンコックが結婚とは……。歳は取ってみるものだな」
「ふんッ、ジジ臭いことを言うでないわ。シャッキーにも報告したかったのじゃがな……」
「そう長く店を閉めるわけにもいくまい。シャッキーには後日盛大に祝ってもらうといい。それに、今回私は目的があってきたのだからな」
感慨深く呟くレイリーと、そんな彼に照れ臭そうにしながらも言葉を返すハンコック。
かつて己を救ってくれた恩人であるレイリーへ結婚を報告した時は、不覚にも涙を流してしまった。
そんなことを思い出し顔を赤く染めるハンコックは、母親のように慕うもう一人の恩人であるシャッキーへと結婚報告を出来ない事に

落胆していた。
　そんなハンコックを慰めるレイリーは、巨大な海獣のステーキを貪るルフィに話を切り出す。
「ルフィ君、先日の結婚式の記事は既に世界中に出回った頃だろう。そして、君の仲間たちがあの写真の本当の意味にも既に気がつく頃か」
「ちゃんと届くかな、あいつらに……」
「記事を見れば必ず伝わるはずだ。君らしくないあの写真こそが鍵。いや、あまりの報告に皆怒り狂っているかもな！」
「え!!?」
　大きく笑うレイリーに声を上げて驚くルフィ。
「わはは！　いや、だからこそ、君たちならば必ず伝わるはずだ」
「そうか。いや、そうだな！　あいつらなら分かってくれる！」
「早く仲間たちに会いたいだろうが、再会は二年後だ。それまで私達が君を鍛えてやろう。容赦しない故、覚悟をすることだな！」
「望むところだ！　よろしく頼む、レイリー！　みんな!!」
　ルフィの気合いの声にレイリーは笑みを浮かべ、離れた場所で酒を飲み、食事するバレットや白ひげ、レッドフィールドや数多の強者達が手をひらひらと揺らして返事をする。
「次イワちゃんに会う時までにうんと強くなって驚かせてやらねェと！」
「ふふ、これだけの面子と共に誰かを鍛えるなんて初めてだ。老骨ながら、腕が鳴るな……！」
　マリンフォードへの三日後の集合改め、二年後の集合までの期間、ルフィは数多の強者達に鍛えられる事になる。
　戦争による急激な成長により、三色の覇気の基本は既に修得した。
　異次元の強さの仲間と規格外の強さの敵の覇気の技術を盗み取り、絶体絶命の極限の中で昇華させた。
　基本の覇気を修得した。
　悪魔の実の覚醒も経験した。
　力も、技術も、能力も、覚悟も成長途上。

歴史に名を残す伝説達によって、成長力の怪物は想像を遥かに超える成長を遂げることになる。
新たな”四皇”麦わらのルフィ”、研鑽の時！

□■□■□■□■□■□■

「――由々しき事態だ。何から手を付ければいいものか……」
「ニカの覚醒。海軍の敗北。終いにはロックスの再来と言ってもいいだろう海賊団の誕生……」
「ガープの馬鹿のせいで、ニカの存在が世界中に知られてしまった。奴の沙汰も決めねばなるまい」
「いや、その前に力をつける前に”麦わらのルフィ”を消すべきじゃないか。手配書の”D”も消されず終いだ。これ以上野放しにしていれば、何が起こるか分からぬ」
「いや……」
「だが……」
豪華絢爛な広い部屋にて五人の老人達か話し合っていた。
焦りと苛立ちが入り混じったような表情を浮かべる彼らは、この世界の頂点に立つ男たちだ。
この世界の全てを支配する”世界政府”の頂点に立つ五人の老人である”五老星”は、先の戦争の結果に頭を悩ませていた。
彼らが歴史の闇に葬り、長い間隠してきた忌まわしき神である”ニカ”が覚醒し、その存在と正体が世界中に知れ渡ったこと。
”海賊王”ゴールド・ロジャーの息子である”火拳のエース”の処刑を失敗し、海賊の完全勝利という形で海軍が大敗を喫したこと。
”四皇”白ひげ”が引退し、その残党とインペルダウンに捕らえられていた囚人達が新たな”四皇”である”麦わらのルフィ”の一味に加入したことで、かつての悪夢、ロックス海賊団の再来と政府内で震え上がっている海賊団の誕生。
それ以外にも、”白ひげ”の言葉と、海軍の壊滅状態を原因とする世界情勢の大きな唸り。

対処すべき事柄の多さに五老星達は頭を抱えていた。
「実際問題、”麦わらのルフィ”及びその一味をどうする」
「確実に消さねばなるまい。”ニカ”というだけではない。あの男は、我々にとって、巨大な障害になりえる……！」
「だが、奴らの行方が既に分からん。先日の記事を元に”女ヶ島”を捜索したが、その”女ヶ島”自体がなかった……」
「大方、白ひげとバレットによる島諸共の移動だろう。最早、どこにいるのかも分からん……！」
「見つけようとも、あれだけの戦力だ。策もなしに叩くことも出来ないだろう」
”麦わらの一味”に新たに加入した海賊達は数万名。
それぞれが粒揃いの強者であり、凶悪な悪魔の実の能力者や、強靭な覇気使いも少なくない。
中でも、伝説級の怪物達や世界でも指折りの化け物達が相手では流石に分が悪いと五老星達は唸る。
「……やはり、海軍の立て直しが急務か」
「それしかあるまい。幸い、大将にも、目立った海兵達にも命に別状はない。マリンフォードに代わる新たな本部を築けば、立て直しにそこまで時間はかかるまい」
「まさかマリンフォードが消滅するとは……。やはり、力をつける前に”麦わら”への対処も考えねば」
「では、一先ずは海軍の立て直しだ。”麦わら”への対処は適宜考えるとしよう。捜索は継続だ」
五老星達が結論を出す。
”四皇”麦わらのルフィ”への対応を後回しにするという愚行を犯しながら。
五老星自身にとって、更には彼らが”王”と崇める者にとって最大最悪の敵へ黄金の時を与える。
一つの愚行が彼らの未来を決定付けた。
”偽りの神”、数多のヒトに涙を齎した罪を償う時は近い！

□■□■□■□■□■□■

”海賊王”ゴールド・ロジャーの死に際の一言による”大海賊時代”幕開け以来の激しい動きを見せる世界情勢。

海賊の最大の敵である海軍の壊滅と大海賊、元”四皇”白ひげ”による”ひとつなぎの大秘宝(ワンピース)”の実在を保証した言葉に世界中の海賊が活発化していた。

”偉大なる航路(グランドライン)”には新たな挑戦者達が列をなし、既に名を上げる強者は更に獰猛化した。

そんな中、世界で今最も騒がれる海賊にして、最も恐れられる海賊の一人となった男、”四皇”麦わらのルフィ”の一味はそれぞれが研鑽の時にいた。

島一つを合体させた超巨大戦艦の上で、数多の伝説の海賊、怪物達から鍛えられるルフィ。

桃色の島にて、世界最強の男から地獄のようなシゴキを受け、半死半生のままに修行を続けるサンジ。

暗く陰気な島にて、新たな”四皇”の一撃に昂っている世界最強の剣士により、限界以上の鍛錬を受けるゾロ。

気候科学が発展した人口の空島にて、魔法のような気候科学と世界中の特異な気象を学ぶナミ。

巨大な怪鳥が蔓延る島にて、島に残された書物により太古の特殊な薬学を学ぶチョッパー。

食人植物と凶暴な昆虫達が支配する島の極限の環境にて、特異な植物の種を用いた戦闘術を磨くウソップ。

”革命軍”の元でより深い知識と、悪魔の実の練度の底上げ、身体能力の向上に励むロビン。

天才科学者”Ｄｒ．ベガパンク”の故郷にて、自己の改造と兵器の製造、保管されていた未知の物質の研究に汗を流すフランキー。

世界的大スター”ソウルキング”として音楽の力を磨き、黄泉の国と深く繋がる事でその力を磨くブルック。

歴史が動く転換期。
世界が激流のように動き出す激動の時代、九つの星々がその輝きを増すべく歴史から姿を消した。
新たなる海の皇帝”四皇”麦わらのルフィ”。
常識外れの偉業の数々。
世界最高の海底監獄を完全攻略し、世界中で恐れられる怪物達を仲間に引き入れた類稀なるカリスマ。
ルーキーでありながら世界最大最高最悪の頂上戦争に乱入し、その場の全てを凌駕し活躍して見せた豪運と能力。
異常なまでの成長能力で伝説の海兵、王下七武海を打倒し、島諸共に破壊し尽くした戦闘力。
世界を震撼させた彼の懸賞金額、３０億ベリー。
史上類を見ない程の速度での”四皇”への到達に世界中の海賊達は色めき立った。
「ルーキーを倒せば、己が新たな”四皇”だ。」
そんな欲に満ちた捜索が続けられど新たな”四皇”が見つかる事はなく、その仲間の姿も見られない。

次に彼らが表舞台に上がるのはこれから二年後。
九つの星々が力を蓄え、”四皇”の称号に恥じない姿になった時、歴史がまた紡がれる。
”麦わらの一味”、”四皇”の称号獲得と共に表舞台から暫し姿を消す！